

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所年報 2014年度

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001225

国立国語研究所

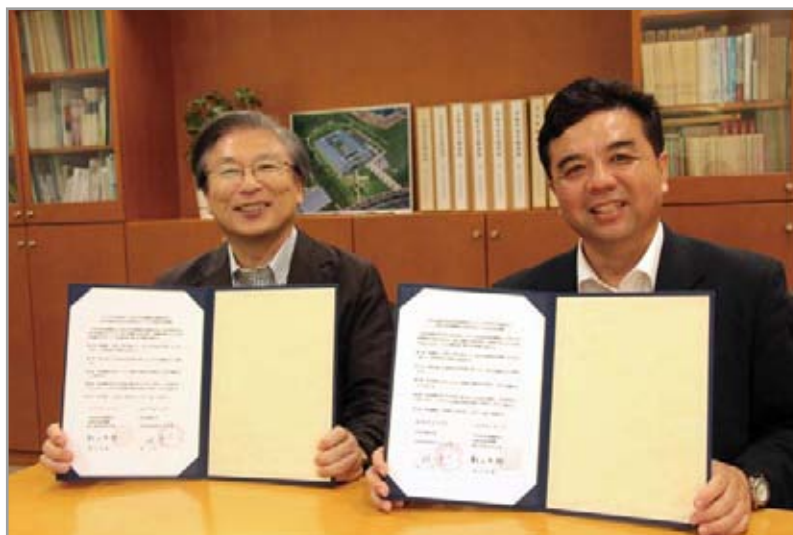
年報

2014 *NINJAL YEARBOOK*

国立国語研究所の活動（2014年度）



「国立国語研究所研究成果発表会 2015」
(2015年1月31日：於一橋大学一橋講堂)



北京日本学研究中心との
学術交流合意書締結
(2014年7月30日：於国語研)



タイ王立学士院一行訪問
(2014年12月2日：於国語研)



国際学会
 "Formal Approaches to
 Japanese Linguistics 7 (FAJL7)"
 (2014年6月27日～29日
 ：於国語研・国際基督教大学)



国際学会
 "The 14th Conference on Laboratory
 Phonology (LabPhon14)"
 (2014年7月25日～27日：於国語研)



第16回NINJALチュートリアル
 「言語類型論的に見たアイヌ語の文法」
 (2015年3月21日～22日：於京都大学)



「出雲方言のつどい
—出雲ことば再発見—」
(2014年8月20日：於出雲市)

出雲方言公開講座 / 国立国語研究所セミナー

出雲方言のつどい

— 出雲ことば再発見 —

参加費 無料

日時 8月20日(水) 19時-21時

場所 出雲市役所 1F「くにびき大ホール」
定員 200名

主催
国立国語研究所「鳥取方言プロジェクト」、
鳥取県教育委員会、出雲市

応募方法
電話・FAX・E-Mailにて
◆事前申し込み◆
◆定員になり次第締め切り◆
申し込み期限：8月8日(金)
問い合わせ・申し込み先
出雲市文化財課
電話：0853-21-6893
FAX：0853-21-6617
E-Mail：sunkazai@city.izumo.shimane.jp

国立国語研究所が行う出雲方言の現地調査に合わせ、公開講座を行います。

～ 講座プログラム ～

「出雲方言の特徴」 — アクセントを中心に — 平子達也 (国立国語研究所 特別研究員)	「出雲井の息づかい」 友定賢治 (鳥取県立美術館 学芸員)	「出雲井のある暮らし」 藤岡大祐 (鳥取県教育委員会)
---	-------------------------------------	-----------------------------------



第8回 NINJAL フォーラム
「世界の漢字教育—日本語漢字をまなぶ—」
(2014年9月21日：於一橋大学一橋講堂)





「ニホンゴ探検 2014 ―1 日研究員になろう!」
(2014 年 7 月 19 日：於国語研)



立川市歴史民俗資料館
共同企画講演会「立川の方言」
(2014 年 11 月 16 日
：於立川市女性総合センター・アイム)

目 次

2014 年度年報の発刊にあたって	5
I. 概要	7
1. 国立国語研究所のめざすもの	8
2. 組織	10
(1) 組織構成図	10
(2) 運営組織	11
運営会議	11
外部評価委員会	11
所内委員会組織	12
(3) 構成員	13
専任教員・特任教員	13
客員教員	14
名誉教授	15
プロジェクト PD フェロー	15
外来研究員	15
II. 共同研究と共同利用	17
1. 国語研の共同研究プロジェクト	18
基幹型	19
領域指定型	36
独創・発展型	38
フィージビリティスタディ型	39
2. 人間文化研究機構の連携研究等	44
連携研究	44
アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明	44
大規模災害と人間文化研究	44
日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散	44
日本関連在外資料の調査研究	45
研究資源の共有化	45
3. 外部資金による研究	46
4. 刊行物	48
『国語研プロジェクトレビュー』	48
『国立国語研究所論集』	49
NINJAL フォーラムシリーズ	51
5. 2014 年度公開中のコーパス・データベース	52
6. 研究成果の発信と普及	55
A. 国際シンポジウム	55
B. 研究系の合同発表会	63
C. プロジェクトの発表会	73

D. NINJAL コロキウム	82
E. NINJAL サロン	83
F. その他.....	85
7. センター・研究図書室の活動.....	86
研究情報資料センター.....	86
コーパス開発センター.....	86
研究図書室.....	87
Ⅲ. 国際的研究協力と社会貢献	89
1. 国際的研究協力.....	90
オックスフォード大学との提携.....	90
台湾・中央研究院語言學研究所との研究連携.....	90
北京日本学研究中心との提携.....	90
国際シンポジウム・国際会議の開催.....	90
日本語研究英文ハンドブック刊行計画.....	90
海外の研究者の招聘.....	91
各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化.....	92
2. 社会貢献.....	92
消滅危機方言の調査・保存・分析.....	92
日本語コーパスの拡充.....	92
多文化共生社会における日本語教育研究.....	92
地方自治体との連携.....	92
訪問者の受入等.....	93
学会等の後援.....	93
一般向けイベント.....	93
NINJAL フォーラム	93
NINJAL セミナー	94
「ことば」展示	94
児童・生徒向けイベント.....	94
職業発見プログラム.....	94
ジュニアプログラム.....	95
ニホンゴ探検.....	95
3. 大学院教育と若手研究者育成.....	95
(1) 連携大学院.....	95
(2) 特別共同利用研究員制度.....	95
(3) NINJAL チュートリアル	96
(4) 優れたポストドクターの登用.....	96
Ⅳ. 教員の研究活動と成果	97
略歴, 所属学会, 役員・委員, 受賞歴, 2014 年度の研究成果の概要, 研究業績 (著書・編書, 論文・	
ブックチャプター, データベース類, その他の出版物・記事), 講演・口頭発表, 研究調査, 学	
会等の企画運営, その他の学術的・社会的活動, 大学院教育・若手研究者育成	

V. 資料	185
1. 運営会議.....	186
2014 年度の開催状況	186
運営会議の下に置かれる専門委員会.....	187
(1) 所長候補者選考委員会.....	187
(2) 人事委員会.....	188
(3) 名誉教授候補者選考委員会.....	188
2. 評価体制.....	189
自己点検・評価委員会.....	189
外部評価委員会.....	189
共同研究プロジェクトの評価.....	190
3. 広報.....	190
4. 所長賞.....	190
5. 研究教育職員の異動.....	192
VI. 外部評価報告書	193
平成 26 年度業務の実績に関する外部評価報告書	195
1. 評価結果報告書.....	199
平成 26 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果	200
平成 26 年度「組織・運営」, 「管理業務」に関する評価結果	233
2. 資料.....	247

2014 年度年報の発刊にあたって

国立国語研究所（略称「国語研」）は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として国内外の大学・研究機関と広範な共同研究プロジェクトを実施し、言語研究の観点から人間文化について理解と洞察を深めることを研究目的としています。研究所の日本語名称は「国立国語研究所」ですが、英語名称は National Institute for Japanese Language and Linguistics（すなわち、日本語と言語学の国立研究所）となっています。これら日英語の名称は研究対象である日本語（国語）に対する観点を表現しています。すなわち、日本語名称は日本社会におけるコミュニケーションの手段としての「国語」の観点を反映し、英語名称は生物の中でも人類だけに備わった高度な資質としての言語（日本語）の観点を反映しています。前者はいわば「ウチ（国民）」から日本語を見る観点、後者は「ソト（世界）」から見る観点です。国語研の特徴は、ウチとソトの両方の観点から日本語というものを捉え、日本語の全体像を多角的・総合的に解明することです。このような複合的観点をとることにより初めて、大学共同利用機関にふさわしい学術的・学際的研究を行うとともに、国内の日本語研究と世界の言語研究を結ぶ国際研究拠点としての機能を果たすことが可能になります。

国語研は古くから、膨大な量の言語データを収集し大型電子計算機で統計的・数理的に処理する研究手法を先駆的に開拓してきました。この研究方法は現在では、主として〈時空間変異研究系〉における消滅危機言語や全国諸方言の詳細な調査研究と、〈言語資源研究系〉における現代及び過去の日本語資源をコーパス化する研究へと発展しました。これらは日本語の具体的な運用・使用の実態を明らかにし、日本語の多様な姿を示すことを主眼とした、「ウチ」の観点に基づく研究です。他方、国語研の歴史の中で新しい観点は「ソト」の観点です。これは、主として〈理論・構造研究系〉における一般言語学を背景とする日本語の仕組みに関する研究と〈言語対照研究系〉における世界諸言語と日本語との比較研究で、これらは日本語話者が脳内に持っている抽象的な言語能力の解明と結びつきます。〈日本語教育研究・情報センター〉は、4 研究系と連携しながら、国語研の伝統的な日本語教育研究と新しいコミュニケーション研究を融合し、外国人への日本語教育の振興に資する基礎研究を行っています。このように、創設からの長い伝統の中で培ってきた研究と、大学共同利用機関としての新しいアプローチを織り合わせることによって、従来にはない幅広い研究プログラムを展開し、新たな成果を生み出すことが可能になりました。

共同研究と表裏一体をなすのは共同利用です。これは、大規模な共同研究から得られた研究成果や、関連する研究文献情報を研究者コミュニティ及び一般社会に広く発信・提供し、研究を促進させることです。そのため、各種の刊行物やコーパス・データベースをオンラインで公開するとともに、一般講演会や地方自治体でのセミナーなどのイベントを開催しています。この年報では 2014 年度の活動と成果をご報告いたします。この年報を通じ、国語研への幅広いご支援をお願いする次第です。

2015 年 12 月

国立国語研究所長

影 山 太 郎



概要

1 国立国語研究所のめざすもの

沿革

国立国語研究所は、国語に関する総合的研究機関として1948（昭和23）年に誕生した。幕末・明治以来、国語国字問題は国にとって重要な課題であり、様々な立場からの議論が行われてきた。第二次世界大戦の敗戦とその後の占領期は大きな転機となり、戦後、我が国が新しい国家として再生するに当たって、国語に関する科学的、総合的な研究を行う機関の設置が強く望まれるようになった。各方面の要望を受けて「国立国語研究所設置法」が1948年12月20日に公布施行され、国家的な国語研究機関である国立国語研究所の設置が実現したのである。その後、明治時代から大正、昭和初期にかけての日本語の混乱（漢字の激増や、文語と口語の違いなど）を收拾し日本語の安定化に資するという当初の設置目的が薄れるとともに旧国語研は廃止され、2009（平成21）年10月1日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構の下に設置された。現在、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館に次ぐ6番目の研究機関として再発足し、日本語および関連する領域の学術研究機関として活発な活動を展開している。

ミッション

国語研は、日本語学・言語学・日本語教育の国際的研究拠点として、国内外の大学・研究機関と連携することによって大規模な共同研究を全国的・国際的に推進し、共同研究から得られた各種の成果や学術情報を研究者コミュニティと一般社会に提供することで、日本語と人間文化の新しい研究領域を開拓することを実質的なミッションとしている。そのため、大学共同利用機関への移行にあたっては研究所の英語名称に“linguistics”（言語学）という言葉を加え、National Institute for Japanese Language and Linguistics（「日本語と日本語言語学の国立研究所」、略称NINJAL（ニンジャル））とした。言語学・日本語学とは、日本語を人間言語のひとつとして捉え、ことばの研究をとおして人間文化に関する理解と洞察を深めることを意図した学問であり、そこには、当然のことながら、「国語及び国民の言語生活、並びに外国人に対する日本語教育」（設置目的）に関する研究が含まれる。

とりわけ、第2期中期目標期間においては、「日本語研究の国際化」と「社会連携・社会貢献」を大きな目標として種々の活動を展開している。日本語の研究を深めることは、究極的には日本という国を発展させることにつながる。私たちの財産である日本語を将来に引き継ぎ、発展させていくことが国語研の役割である。

2014年度の活動の概略

国語研では、国内外の諸大学・研究機関と連携して、個別の大学ではできないような研究プロジェクトを全国的・国際的規模で展開しているが、それらの土台となるのは「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」という研究所全体の研究目標である。この目標の達成に向けて、各研究系・センターで研究テーマを定め、数々の共同研究プロジェクトを実施した。

日本語研究の国際化に向けては、外国人研究者を専任教員、客員教員、共同研究員として招聘するとともに、オックスフォード大学日本語・日本語学研究センター、マックスプランク進化人類学研究所、台湾・中央研究院語言學研究所、北京日本学研究中心との研究協力を進め、また、ドイツ・De Gruyter Mouton社との学術協定により日本語研究英文ハンドブックシリーズ（全12巻）のうち、3巻（琉球語、音韻論、心理言語学）を刊行した。

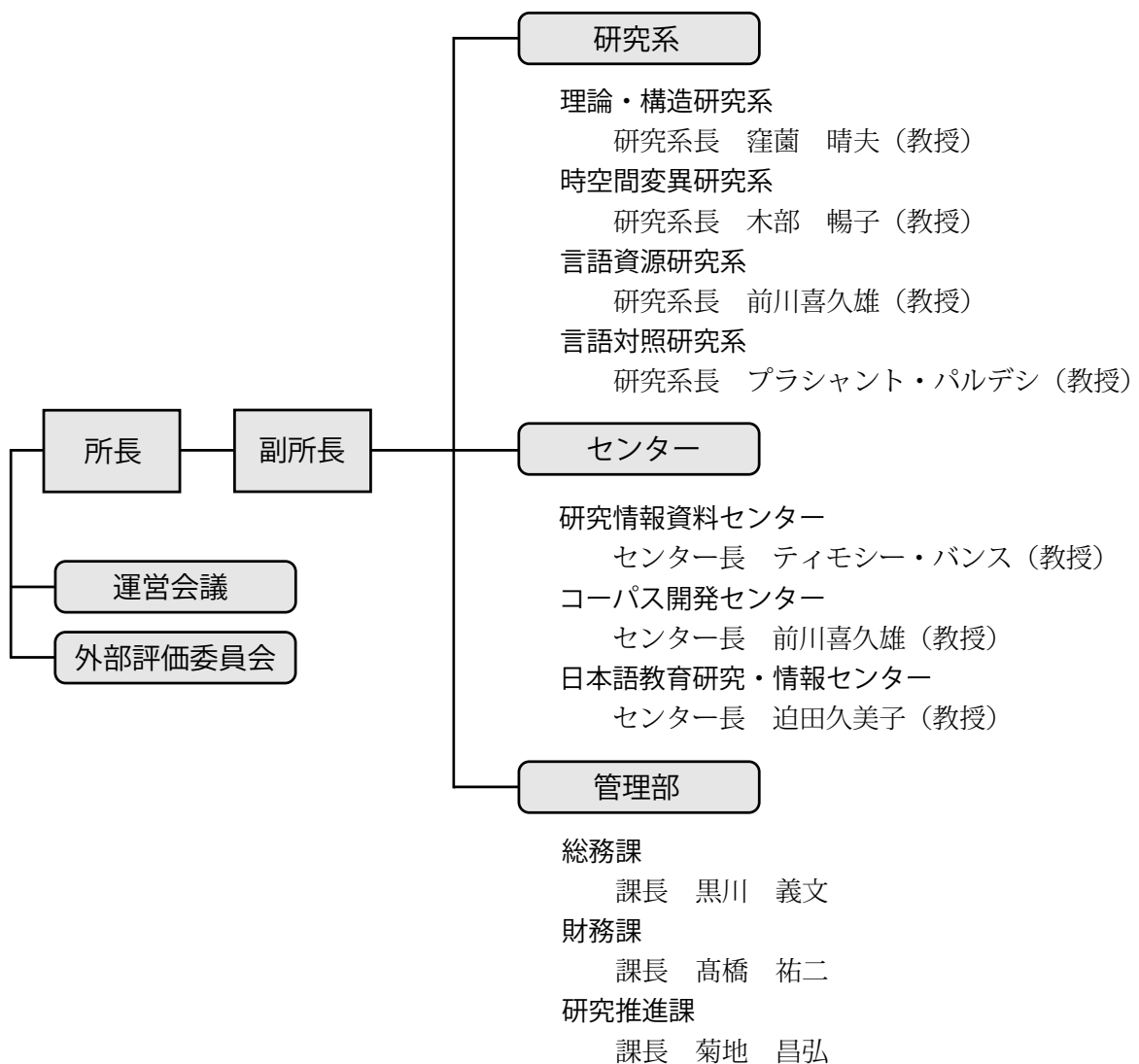
学術研究の成果は専門家の枠を超えて広く一般社会の様々な方面で利用・応用されるべきであるから、多くの成果物を電子化し、ウェブサイト上で無償提供している。専門家向けに『国語研プロジェクトレビュー』、『国立国語研究所論集』、『国立国語研究所共同研究報告』などの刊行物、一般向けに『NINJAL フォーラムシリーズ』、『こくごけん・こどもパンフレット』などの冊子、研究資料・研究材料として『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『日本語歴史コーパス』などのコーパス群、あるいは日本語教育者・学習者向けには『日本語学習者発話コーパス』、『寺村誤用例集データベース』、『複合動詞レキシコン（国際版）』などのデータベース類と、多岐にわたる。さらに対象者別に、国際シンポジウム、コロキウム、チュートリアル、フォーラム、セミナー、ニホンゴ探検など、種類の異なるイベントを多数開催した。また、消滅の危機に瀕している琉球諸語の調査を加速させ、地方自治体との連携の一環として「危機言語・方言サミット in 八丈島」（2014 年 12 月 12 日～14 日）を八丈町及び文化庁との共催で開催した。

活動・成果の詳細は各項目をご覧ください。

(1) 組織構成図

2014 年度

所長 影山 太郎
 副所長 前川喜久雄
 木部 暢子
 管理部長 山本日出夫



(2) 運営組織

運営会議

(外部委員)

梶 茂樹	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科長 / 教授
工藤眞由美	大阪大学大学院文学研究科教授
斎藤 衛	南山大学人文学部教授
砂川有里子	筑波大学大学院人文社会系教授
月本 雅幸	東京大学大学院人文社会系研究科教授
仁田 義雄	関西外国語大学外国語学部教授
日比谷潤子	国際基督教大学学長 / 教授
山本 誠一	同志社大学大学院理工学研究科博士後期課程教授

(内部委員)

木部 暢子	副所長 / 時空間変異研究系長 / 教授
窪田 晴夫	理論・構造研究系長 / 教授
迫田久美子	日本語教育研究・情報センター長 / 教授
プラシャント・パルデシ	言語対照研究系長 / 教授
前川喜久雄	副所長 / 言語資源研究系長 / 教授 / コーパス開発センター長
ティモシー・バンス	理論・構造研究系教授 / 研究情報資料センター長

任期：2013 年 10 月 1 日～2015 年 9 月 30 日（2 年間）

外部評価委員会

樺山 紘一	印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長
林 史典	聖徳大学言語文化研究所長 / 教授，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長
仁科喜久子	東京工業大学名誉教授
門倉 正美	横浜国立大学名誉教授，日本語教育学会副会長
後藤 齊	東北大学大学院文学研究科教授
渋谷 勝己	大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員
早津恵美子	東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授
峰岸 真琴	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

任期：2012 年 10 月 1 日～2014 年 9 月 30 日（2 年間）

任期：2014 年 10 月 1 日～2016 年 9 月 30 日（2 年間）

所内委員会組織

連絡調整会議（所長，副所長，研究系長，センター長，専任教授，管理部長，専門委員会委員長）
連絡調整会議のもとに，各種専門委員会を設置

<管理運営関係>

- 自己点検・評価委員会
- 情報セキュリティ委員会
- 知的財産委員会
- 情報公開・個人情報保護委員会
- ハラスメント防止委員会
- 研究倫理委員会
- 施設・防災委員会
- 将来計画委員会

<学術関係>

- 共同研究展開委員会
- 成果刊行物編集委員会
 - ・プロジェクトレビュー編集部会
 - ・論集編集部会
 - ・英文ハンドブック編集部会
- 研究図書室運営委員会
 - ・選書部会

<発信・普及関係>

- 広報委員会
- 研究情報資料センター運営委員会
- NINJAL プログラム委員会
 - ・NINJAL 国際シンポジウム
 - ・NINJAL コロキウム
 - ・NINJAL サロン
 - ・NINJAL チュートリアル
 - ・NINJAL フォーラム
 - ・人間文化研究機構公開シンポジウム
 - ・大学共同利用機関協議会関連事業

●安全衛生管理委員会

(3) 構成員

所長

影山 太郎 言語学, 形態論, 語彙意味論, 統語論

専任教員・特任教員

○理論・構造研究系

教授

窪蘭 晴夫 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

ティモシー・バンス (Timothy Vance) 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

横山 詔一 認知科学, 心理統計, 日本語学

准教授

小磯 花絵 コーパス言語学, 談話分析, 認知科学

高田 智和 日本語学, 国語学, 文献学, 文字・表記, 漢字情報処理

助教

三井 はるみ 日本語学, 社会言語学, 方言文法

○時空間変異研究系

教授

木部 暢子 日本語学, 方言学, 音声学, 音韻論

相澤 正夫 社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

大西 拓一郎 言語学, 日本語学

准教授

朝日 祥之 社会言語学, 言語学, 日本語学

井上 文子 言語学, 日本語学, 方言学, 社会言語学

熊谷 康雄 言語学, 日本語学

新野 直哉 言語学, 日本語学

特任助教

竹田 晃子 日本語学, 方言学, 社会方言学

○言語資源研究系

教授

前川 喜久雄 音声学, 言語資源学

准教授

浅原 正幸 自然言語処理, 計算言語学, コーパス言語学, 心理言語学

小木曾 智信 日本語学, 自然言語処理

柏野 和佳子 日本語学

丸山 岳彦 言語学, 日本語学, コーパス日本語学

山口 昌也 情報学, 知能情報学, 科学教育・教育工学, 言語学, 日本語学

山崎 誠 言語学, 日本語学, 計量日本語学, 計量語彙論, コーパス, シソーラス

○言語対照研究系

教授

ブラシャント・パルデシ (Prashant Pardeshi) 言語学, 言語類型論, 対照言語学

ジョン・ホイットマン (John Whitman) 言語学, 歴史比較言語学, 言語類型論

特任准教授

アンナ・ブガエワ (Anna Bugaeva) 言語学, アイス語学, 言語類型論

○研究情報資料センター

教授 (兼任)

ティモシー・バンス (Timothy Vance)

特任助教

石本 祐一 音響音声学, 音声工学

籠宮 隆之 音声科学

○コーパス開発センター

教授 (兼任)

前川 喜久雄

○日本語教育研究・情報センター

教授

迫田 久美子 日本語教育学, 第二言語習得研究

野田 尚史 日本語学, 日本語教育学

准教授

宇佐美 洋 日本語教育, 評価論, 言語能力論

野山 広 日本語教育, 社会言語学, 多文化・異文化間教育

研究員

福永 由佳 日本語教育学, 社会言語学, リテラシー, マルチリンガリズム

客員教員 (2014 年度在籍者)

客員教授

[理論・構造研究系]

伊藤 順子 カリフォルニア大学教授

上野 善道 東京大学名誉教授

岸本 秀樹 神戸大学教授

中山 峰治 オハイオ州立大学教授

宮川 繁 マサチューセッツ工科大学教授

[時空間変異研究系]

井上 史雄 東京外国語大学名誉教授

狩俣 繁久 琉球大学教授

金水 敏 大阪大学教授

田窪 行則 京都大学教授

[言語資源研究系]

田中 牧郎 明治大学教授

伝 康晴 千葉大学教授

ビャーケ・フレレスビグ (Bjarke Frellesvig) オックスフォード大学教授

[言語対照研究系]

柴谷 方良 ライス大学教授

ピーター・フック (Peter Hook) ミシガン大学名誉教授

堀江 薫 名古屋大学教授

松本 曜 神戸大学教授

[日本語教育研究・情報センター]

白井 恭弘 ピッツバーグ大学教授

田中 真理 名古屋外国語大学教授

鳥飼 玖美子 立教大学特任教授

南 雅彦 サンフランシスコ州立大学教授

客員准教授

[時空間変異研究系]

青木 博史 九州大学准教授

下地 理則 九州大学准教授

[言語対照研究系]

エディス・オルドリッジ (Edith Aldridge) ワシントン大学准教授

ハイコ・ナロック (Heiko Narrog) 東北大学准教授

[日本語教育研究・情報センター]

石黒 圭 一橋大学教授

名誉教授

角田 太作 2012.4.1 称号授与

プロジェクト PD フェロー (2014 年度在籍者)

滝口 いずみ 理論・構造研究系

黄 賢暲 理論・構造研究系

乙武 香里 時空間変異研究系

今村 泰也 言語対照研究系

長崎 郁 言語対照研究系

加藤 祥 コーパス開発センター

中北 美千子 日本語教育研究・情報センター

外来研究員

John Phan (日本学術振興会外国人特別研究員) 受入教員: ジョン・ホイットマン

「ベト・ムオン語派の歴史比較研究」(2012.11 ~ 2014.7)

津田 智史 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員: 木部 暢子

「新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究」(2013.4 ~ 2015.9)

儀利古 幹雄 (日本学術振興会特別研究員 (PD)) 受入教員: 木部 暢子

- 「アクセントの平板化現象から見た日本語の韻律的特性の解明」(2013.4～2015.3)
- 李 炫雨(国立昌原大学(韓国)教授) 受入教員:野田 尚史
- 「「から」と「ので」の異同に関する研究」(2013.7～2014.4)
- Patrizia Zotti(ナポリ東洋大学(イタリア)エディターアシスタント) 受入教員:浅原 正幸
- 「コーパスに基づく日本語事象表現の意味論的研究」(2013.9～2014.8)
- Razaul Karim Faquire(ダッカ大学 現代言語研究所(バングラデシュ)准教授) 受入教員:ジョン・ホイットマン
- 「日本語とベンガル語における関係節の対照的研究:形態統合論的分析」(2013.10～2014.9)
- 東 照二(ユタ大学(アメリカ)教授) 受入教員:相澤 正夫
- 「グローバル化は、日本語コミュニケーションのスタイルを変えているのか?:日本における政治・ビジネスリーダーたちのスピーチ・スタイルの分析」(2013.10～2014.8)
- Elga Laura Strafella(日本学術振興会外国人特別研究員) 受入教員:前川 喜久雄
- 「日伊辞典のための「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からのコロケーション抽出」(2013.11～2015.3)
- 青井 隼人(日本学術振興会特別研究員(PD)) 受入教員:木部 暢子
- 「関係性に着目した宮古語音韻構造の探求」(2014.4～2017.3)
- 柴谷 方良(ライス大学(アメリカ)教授) 受入教員:影山 太郎
- 「日本語複合動詞の総合的研究とその理論的意義づけ」(2014.5～2014.8)
- Armin Mester(カリフォルニア大学サンタクルーズ校(アメリカ)教授) 受入教員:窪田 晴夫
- 「Sino-Japanese Phonology(日本語漢語の音韻特性)」(2014.5～2014.8)
- 平田 由香里(コルゲート大学(アメリカ)准教授) 受入教員:窪田 晴夫
- 「日本語の母音長対立と子音長対立の知覚」(2014.7～2014.7)
- 張 元哉(啓明大学校(韓国)副教授) 受入教員:高田 智和
- 「近代における日韓対訳コーパス設計のための対訳文献調査」(2014.8～2014.11)
- 大野 剛(アルバータ大学(カナダ)教授) 受入教員:ティモシー・バンス
- 「日常会話における定型表現の体系的研究」(2014.9～2015.8)
- 尹 鎬淑(サイバー韓国外国語大学校(韓国)教授) 受入教員:迫田 久美子
- 「e-learning 教育における日本語の習得研究」(2014.9～2015.8)
- 平山 真奈美(立命館大学准教授) 受入教員:窪田 晴夫
- 「日本語における母音の無声音化および不完全中和に関する研究」(2014.10～2015.3)

II

共同研究と共同利用

本章では、共同研究活動として、(1) 各種の共同研究プロジェクト、(2) 人間文化研究機構の連携研究等、および(3) 外部資金による研究をまとめるとともに、共同利用のための成果として(4) 研究所からの刊行物、(5) 2014 年度公開中の各種コーパス・データベース、および(6) 研究成果の発信・普及のための国際シンポジウム、研究系の合同発表会、プロジェクトの発表会、コロキウム、サロンなどの催しを掲げる。

1 国語研の共同研究プロジェクト

第2期中期計画における国語研全体の研究課題は「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」である。これを達成するため、4 研究系と日本語教育研究・情報センターは、それぞれの総合研究テーマを定め、各種規模の共同研究プロジェクトを展開している。共同研究プロジェクトは、プロジェクトリーダーを中心とし、国内外の共同研究員の参画によって成り立っており、研究系・センター間、プロジェクト間で連携しながら研究を進めている。

研究課題「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」

各研究系・センターの総合研究テーマ

理論・構造研究系	日本語レキシコンの総合的研究
時空間変異研究系	日本語の地理的・社会的変異及び歴史的変化
言語資源研究系	現代語および歴史コーパスの構築と応用
言語対照研究系	世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明
日本語教育研究・情報センター	日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

共同研究プロジェクトの類別と主要な成果

共同研究プロジェクトとして、基幹型（16 件）、領域指定型（2 件）、独創・発展型（1 件）、フィージビリティスタディ型（5 件）の4 タイプを実施した。

【基幹型】 16 件

基幹型プロジェクトは、国語研における研究活動の根幹となる大規模なプロジェクトで、日本語の全体像の総合的解明という学術的目標に向けて研究所が総力を結集して取り組むものである。4 研究系の専任教授および客員教員のリーダーシップのもと、国内外の研究者・研究機関との協業により全国的、国際的レベルで展開している。

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	所長	影山 太郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトは、語彙の仕組みを、辞書における静的な項目列挙としてではなく、意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え、日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目指す。そのため、理論的分析だけでなく、外国語との比較、心理実験、歴史的変化、方言、コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチを採る。具体的には、ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れるような現象として、(1) 動詞の自他交替と項の変化、(2) 動詞＋動詞型の複合動詞の意味的・統語的特性、(3) 事象表現と属性表現の対比における語彙と文法の係わり、(4) 複雑な語における意味と形のミスマッチや統語構造における語形成など形態論と意味論・統語論の相互関係、という 4 つの事項に着目し、これらを解明することで、日本語から世界に発信できるような一般理論を開発する。</p> <p>・国語研の事業として提案されている De Gruyter Mouton 社の Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズの一巻として、共同研究メンバーを主要な執筆者とする Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) <i>Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation</i> を企画し、同社と出版契約を結んだ (2012 年 4 月)。この書物を 2013 年度以降に出版する。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>2014 年度は研究成果の国際出版に向けて編集作業に集中した。主要な成果は次の通り。</p> <p>①日本語研究英文ハンドブックシリーズの Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) <i>Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation</i> (De Gruyter Mouton) の計 19 篇の論文について審査・編集を進め、2015 年上半期に入稿できる見通しとなった。</p> <p>②2012 年 8 月に開催した NINJAL 国際シンポジウムに基づく論文集 Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) <i>Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond</i> (De Gruyter Mouton) の計 15 篇の論文について審査・編集・英文校閲を進め、2015 年上半期に入稿できる見通しとなった。</p> <p>③英文ハンドブック M. Shibatani and T. Kageyama (Series editors) Handbooks of Japanese Language and Linguistics のシリーズ編者として、Preface と Introduction (日本語文法素描) を執筆した。最初の 3 巻 (琉球諸語、音声学・音韻論、心理言語学) が 2015 年初頭に刊行された。</p> <p>④英文ハンドブックシリーズの Prashant Pardeshi and Taro Kageyama (eds.) <i>Handbook of Japanese Contrastive Linguistics</i> の原稿審査・編集を進めた。</p>			

- ⑤2013年12月に言語対照研究系と共同で開催したNINJAL国際シンポジウム *Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages* を発展させた論文集 *Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (ed. by Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi) の出版計画(論文19篇)がピアレビューを経てOxford University Pressに承認され、執筆に着手した。
- ⑥2014年3月に公開したオンラインデータベース「複合動詞レキシコン (Compound Verb Lexicon) 国際版」(英語, 2種類の中国語, 韓国語の対訳付き)が *The Japan Times* (2014年11月26日, 紙版およびオンライン版)に紹介され, 世界各地からのアクセスが急増した。
- ⑦HPで公開している「動詞+動詞型複合動詞の研究文献一覧」に増補を行った。
- ⑧Andrej Malchukov and Bernard Comrie (eds.) *Valency Classes in the World's Languages* (マックスプランク進化人類学研究所との研究協力により, 本共同研究からはKishimoto, Kageyama, and Sasaki “Valency classes in Japanese”を寄稿)が2015年6月にDe Gruyter Moutonから出版される。
- ⑨Oxford Bibliographies OnlineにTaro Kageyama “Word Formation in Japanese”が掲載された。
- ⑩Valency Patterns Leipzig Online Database (ValPal) が2014年12月に正式公開された(本共同研究からは標準日本語のデータを提供)。

参加機関名	茨城大学, 愛媛大学, 岡山大学, 九州大学, 群馬大学, 慶応義塾大学, 甲南大学, 神戸市外国語大学, 神戸大学, 大阪大学, 筑波大学, 東京大学, 東北大学, 同志社大学, 富山大学, 名古屋大学, 北海道大学, 北京外国語大学, インディアナ大学, ハーバード大学, ウォーリック大学
共同研究員数	32名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語レキシコンの音韻特性	理論・構造 研究系教授	窪 蘭 晴夫	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し, 世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究者として参画してもらうことにより, 通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で, 時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し, また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが, 本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより, 日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを, 音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域(音声学, 音韻論, 国語史, 言語獲得, 日本語教育)の専門家を集め共同研究を推進する。</p> <p>アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより, (i) 日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究, 類型論研究にどのような知見を与えるか, (ii) 逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。</p>			

《2014 年度の主要な成果》

1. 今年度は第2期中期計画の研究成果取りまとめの1年目と位置付け、もっぱら研究成果の刊行事業を進めた。この結果、これまでの2つの成果（2012年の *Lingua* 特集号, 2013年の *Journal of East Asian Linguistics* 特集号）に加え、次の成果を得た。
 - Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（全19章、既に編集作業が終了し、2015年2月に Mouton 社より刊行）
 - Tonal Change and Neutralization*（全13編、2014年6月に Mouton 社に企画が採択され、既に外部査読が終了。引き続き編集作業を進め、2015年度中には刊行される予定）
 - Aspects of Geminate Consonants*（全14編、2014年秋に Oxford University Press に企画書を提出、現在審査中。採択されると2015年度中には刊行される見通し）
 - 4年に一度開催される国際会議 ICPHS 2015（2015年8月、イギリス）に促音関係のワークショップ企画（Geminate Consonants across the World; GemCon 2015）を提案し、11月に採択された。既に専用 HP を開設し発表募集案内等を公開した。
2. 実験音韻論の国際会議 (LabPhon 14) を他のプロジェクトの協力を得て7/25-7/27の3日間誘致・開催し、またその前後にサテライト講演会・ワークショップ（7/24, 7/28）を開催した。本会議には世界20カ国から合計264名（延べ792名）の参加を得た。研究発表総数147件（国内発表者11件、海外136件）であった。
3. 年度初めに今年度の重点テーマを「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」と定め、この重点テーマについて日本言語学会第149回大会ワークショップ等でプロジェクトの成果として多数の研究発表を行った。
4. 計3回（4日間）の研究成果発表会を神戸、東京、松山の各地で開催した。すべてを公開とした結果、4日間で合計220名（うち共同研究員以外138名、62.7%）の参加を得た。また発表も公募した結果、合計13件の研究発表のうち2件が共同研究員以外（若手研究者）の発表であった。若手発表者へは旅費の支援も行った。
5. 日本語アクセントの研究を行っている若手研究者（大学院生）に対して調査旅費支援の募集（公募）を行い、延べ3名の大学院生に対して調査旅費と成果発表旅費の支援を行った。

参加機関名	愛知学院大学, 青山学院大学, 大妻女子大学, 大阪大学, 大阪保健医療大学, 金沢大学, 京都産業大学, 京都大学, 九州大学, 熊本県立大学, 慶応義塾大学, 神戸市外国語大学, 神戸大学, 上智大学, 筑波大学, 東京大学, 同志社大学, 日本女子大学, 広島大学, 別府大学, 北海道大学, 北星学園大学, 松山大学, 室蘭工業大学, 法政大学, 立命館大学, 早稲田大学, 情報通信研究機構, 理化学研究所, カリフォルニア大学, 中央大学高校
共同研究員数	43名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語レキシコン ―連濁事典の編纂	理論・構造 研究系教授	Timothy J.VANCE	2010.11-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトの最終目的は、連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は、(1) 連濁の由来と史的变化、(2) ライマンの法則、(3) 右枝条件、(4) 連濁と形態・意味構造、(5) 連濁と語彙層、(6) 他の音韻交替と連濁の相互作用、(7) アクセントと連濁の相互作用、(8) 連濁と表記法、(9) 連濁に関する心理言語学研究、(10) 方言の連濁、(11) 連濁と日本語学習、(12) 連濁研究史、等々である。事典には、包括的な参考文献一覧も含める。</p> <p>本共同研究は、定期的を開催する研究発表会と国際シンポジウムを中心に推進する。研究発表の内容をそのまま事典に取り入れるわけではなく、スタイルの統一性を保証するために、プロジェクト・リーダーは各寄稿者と協力する。なるべく多くの言語学者に本プロジェクトの成果が利用できるように、日本語版と英語版に分割し、別々に出版する。ドイツの Mouton 社から英語版を出版する予備的合意書を取った。「Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds」と仮称されている。日本語版は後に出版する。</p> <p>連濁研究に役立つ2つの複合語データベース（現代語および上代語）も作成し、公開する。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>2つのデータベース（「連濁データベース」および「上代語連濁データベース」）はほぼ計画どおり完成したが、プロジェクト全体の成果を報告する出版物を制限時間内に公刊するために、英語版の「事典」を諦め、論文集を編纂することに決めた。</p>			
参加機関名	大同大学、千葉大学、山形大学、名古屋大学、神戸市外国語大学、山口大学、金沢大学、文京学院大学、神田外国語大学、国際教養大学、千葉大学、会津大学、京都外国語大学、慶応義塾大学、愛知淑徳大学、常葉大学、カリフォルニア大学、シェフィールド大学、ボルドー第3大学、モンタナ大学、マカオ大学		
共同研究員数	26 名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	理論・構造 研究系教授	横山 詔一	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>日本語の文字表記について、文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には、(1) 新聞・雑誌・書籍、市販辞書、文字コード規格、各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること、(2) 文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること、の双方向のアプローチが必須である。そこでは、文字政策、歴史的背景、出現頻度、接触意識、なじみ、好み、文字使用など、さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば、人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって、その文字に対する「接触意識」が生じ、それが「なじみ」、ひいては「好み」</p>			

を形成し、社会的な「出現頻度」に影響を与えられとされる。さらに、それらの要素以外に、未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか、文字の規範意識によっても文字生活に影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は、日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか、日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また、言語行動・意識のデータを解析するための理論等について、統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り、言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

このような学術的挑戦は、文字論だけではなく、社会言語科学や計量言語学にも新たな発展をもたらし、既存の分野の枠を超えた学際領域の創出につながる。

《2014 年度の主要な成果》

【共同研究の推進】

(1) 書籍の刊行

国内と海外で以下の3冊の書籍を刊行した。

- ・徳弘康代（監修・著）『語彙マップで覚える漢字と語彙 初級 1400』，Jリサーチ出版，192 頁，2015 年 1 月
- ・徳弘康代（編著）『日本語学習のためのよく使う順 漢字 2200』，三省堂，511 頁，2014 年 8 月
- ・徳弘康代（編著），車小平（訳）『日语学习常用汉字 2100』，四川大学出版，776 頁，2014 年 8 月

(2) 査読付き学会誌への論文掲載

『日本語の研究』（日本語学会）と『計量国語学』（計量国語学会）に以下の査読付き論文が掲載された。

- ・銭谷真人「『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い ―明治期の新聞における字体の統一について―」，『日本語の研究』，日本語学会，pp.48-66，査読あり，2014 年 10 月
- ・横山詔一，中村 隆，阿部貴人，前田忠彦，米田正人「成人の同一話者を 41 年間追跡した共通語化研究」，『計量国語学』，計量国語学会，pp.241-250，査読あり，2014 年 12 月

(3) 海外の研究集会における招待講演

海外の大学・研究機関に招待されて以下の講演をおこなった。

- ・Tomokazu Takada, “Language issues in Japanese academia”, World Script Symposia 2014, Sejong Center (Seoul), 25 Oct 2014, 招待講演
- ・高田智和「古典籍の翻刻と文字コード」，東アジア史料研究編纂機関協議会国際学術会議，韓国国史編纂委員会，2014 年 10 月 11 日，招待講演
- ・横山詔一「電子メディアの漢字と東アジアの文字生活」，第 4 回日台アジア未来フォーラム，国立台湾大学（台湾），2014 年 6 月 13 日，基調講演，招待あり

【研究成果の発信と社会貢献】

(1) NINJAL フォーラム

一般向けの NINJAL フォーラムを国際交流基金日本語国際センターと共催で 9 月 21 日に一橋大学一橋講堂において開催した。テーマは「世界の漢字教育」で，招待講演者は台湾，フィリピン，キルギス共和国，イタリアの研究者であった。そこに国立国語研究所のインド人研究者と日本人研究者，筑波大学の日本人研究者，国際交流基金日本語国際センターの講師が登壇者として加わった。一般参加者の内訳は，日本人のほか，外国人も数十名が参加した。参加人数は 450 名を超え，NINJAL フォーラムの最高記録となった。

(2) NINJAL セミナー

また、一般向けの NINJAL セミナーを JSL 漢字学習研究会（日本語教育学会の研究部会）と共催で 9 月 20 日に国際交流基金日本語国際センター講堂において開催した。テーマは「漢文を日本語で読む」。海外からアルド＝トリニ教授（ヴェネツィア大学，イタリア）が参加し，「古代歌謡と和歌に見える漢文の影響」について講演をおこなった。	
参加機関名	愛知教育大学, 愛媛大学, 帝塚山大学, 法政大学, 東京大学, 立命館大学, 富山大学, 専修大学, 大阪大学, 名古屋大学, 名古屋外国語大学, 統計数理研究所, 岐阜工業高等専門学校, 国際交流基金日本語国際センター, キルギス国立民族大学, 国立台湾大学, ペンシルバニア大学, ヴィクトリア大学, 韓国聖潔大学校
共同研究員数	27 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	時空間変異研究系教授	木部 暢子	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のはば全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。</p> <p>本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>2014 年度は，(1) 本土の危機方言の調査，(2) 研究成果の一般公開，(3) 音声データの整備・公開，(4) 「方言コーパス」の試作，の 4 つを中心にプロジェクトを実施した。</p> <p>(1) については，島根県出雲方言調査（2014 年 8 月 17～21 日），宮崎県椎葉村方言調査（2014 年 9 月 1～6 日，2015 年 3 月 9～13 日）を実施した。(2) については，一般向けの催しとして，「出雲方言公開講座／国立国語研究所セミナー 出雲方言のつどい」（2014 年 8 月 20 日，出雲市くびきホール，出雲市との共催），「危機方言サミット in 八丈島」（2014 年 12 月 12 日～14 日，八丈町おじゃれホール，八丈町，文化庁との共催），研究者向けの催しとして，合同研究発表会「形容詞の記述と問題点」（2014 年 9 月 13～14 日，国立国語研究所講堂，科研 A「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語」との共催），合同研究発表会「コーパスに見る日本語のバリエーション－会話・方言・学習者・歴史コーパスから－」（2014 年 12 月 6 日～7 日，国立国語研究所講堂，「多文化共生社会における日本語教育研究」プロジェクト，科研 B「方言コーパスの構築」との共催）を開催した。(3) については，「沖縄県本部方言の自然談話」，鹿児島県喜界島方言の基礎語彙の音声データを公開した（http://kikigengo.sakura.ne.jp/）。2015 年 3 月までに「鹿児島県徳之島浅間方言の自</p>			

然談話」，東京都八丈方言の基礎語彙の音声データを公開する。(4) については，青森県弘前市，東京都台東区，石川県能登羽咋，大阪市，広島市，福岡県北九州市の6地点のデータによる方言コーパスの試作版を作成し，これを元にして，国語研合同研究発表会「コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから―」，及び第39回九州方言研究会で研究発表を行った。

参加機関名	岡山大学，金沢大学，九州大学，京都大学，首都大学東京，千葉大学，一橋大学，広島大学，別府大学，日本女子大学，琉球大学，東北大学，関西大学，大分大学，広島経済大学，安田女子大学，熊本県立大学，北星学園大学，オークランド大学，フランス国立科学研究所
共同研究員数	33名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	時空間変異研究系教授	相澤 正夫	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>【目的】20世紀前半から21世紀初頭（昭和戦前期から現在まで）の「現代日本語」，特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して，そこに見られる変異の実態，変化の方向性，すなわち「動態」を，従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明することを目的とする。あわせて，現代日本語の的確な動態把握に基づき，言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。</p> <p>【特色】時空間変異研究系の基幹プロジェクトの一つとして，「時間的変異」と「社会的変異（空間的変異も含む）」の双方の観点からサブテーマを設定し，変化して止まない現代日本語の研究に，従来の枠組みを超えた融合的な新領域を開拓することを最終目標として進める。そのため，近接領域で類似の言語現象を研究していながら，従来は一堂に会して議論をする機会の少なかった国語学，日本語学，言語学，社会言語学など様々な背景を持つ所内外の研究者に，情報交換や相互啓発のための「場」を提供する。</p>			
<p>《2014年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2014年度は，全体としてほぼ順調にプロジェクトを実施することができた。 次の①に示すとおり，研究期間終了（2015年度）までの2年間における成果物の刊行計画を固めるとともに，②に示すように，そのための準備活動を順調に行うことができた。 ①「SP 盤貴重音源資料」を対象とするサブ・プロジェクトの成果物として，論文集と資料集を出版社から公刊する。論文集は笠間書院，資料集は日外アソシエーツとの間で2015年度内に公刊することで，基本的な合意が得られた。 ②多様な研究背景をもつメンバーにより，昭和戦前期の演説等に見られる言語特徴の多角的な分析を進め，3回開催した研究発表会では6件の成果発表があった。 ・研究成果の公表については，論文22件，図書3件，発表・講演23件（海外での発表9件を含む）があり，活発であった。 			

参加機関名	日本大学, 大阪大学, 神戸松蔭女子学院大学, ノートルダム清心女子大学, 横浜国立大学, 立命館大学, 東京外国語大学, 明治大学, 愛知教育大学, 広島大学, 千葉大学, 愛知学院大学, 統計数理研究所, NHK 放送文化研究所, ユタ大学
共同研究員数	17 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
方言の形成過程解明のための全国方言調査	時空間変異研究系教授	大西拓一郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究は、日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に、全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては、言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を 50 年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方、大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は、中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり、現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する、世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。</p> <p>本研究においては、調査結果ならびに先行研究言語地図（書誌と項目）のデータベースを作成する。これらは、分布変動をとらえるための基盤データであるとともに 21 世紀初頭の日本全国の方言分布情報として、また、20 世紀後半に世界的にも類を見ない大きな展開を示した日本の言語地理学の足跡の記録として大きな意義を有する。</p> <p>分布を分析した研究成果は論文集として出版する。このことで、伝統を礎としたかつ新たな言語地理学の展開をリードすることになる。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>プロジェクトの方向性について、日本語学会 2014 年度秋季大会（北海道大学：札幌市）での発表を通して明確化し、リーダーシップの改善をはかるとともに、web ページのプロジェクトの目的・内容、またデータのありかがわかりやすくなるように改善を図り、逐次、活動・成果を発信した。</p>			
参加機関名	岩手県立大学, 岡山大学, 金沢大学, 関西大学, 共愛学園前橋国際大学, 岐阜大学, 熊本大学, 群馬県立女子大学, 県立広島大学, 呉工業高等専門学校, 実践女子大学, 広島大学, 弘前学院大学, 甲南大学, 高知大学, 滋賀大学, 鹿児島大学, 秋田大学, 松山東雲女子大学, 信州大学, 新潟県立大学, 神戸女子大学, 神田外国語大学, 椙山女学園大学, 千葉大学, 大阪大学, 東北大学, 徳島大学, 日本大学, 尾道市立大学, 富山大学, 福岡教育大学, 福岡女学院大学, 福島大学, 文教大学, 琉球大学, 別府大学, 仙台高等専門学校		
共同研究員数	48 名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	時空間変異 研究系客員教授	井上 史雄	2012.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>【概要】国語研では半世紀以上にわたり、山形県鶴岡市、愛知県岡崎市、北海道富良野市において、共通語・敬語の使用に関する追跡調査（経年調査）を行ってきた。同一の調査内容を用いて同一の対象地域・対象者を長期間にわたって調査する、世界に類のないオリジナルな調査研究である。これにより、話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができ、実時間（調査年）と見かけの時間（年齢）の変化や、同一人物の加齢による変化なども知ることができる。ここから得られた共通語化や敬語変化の動向についての豊かな知見に基づき、言語変化一般についても有意義な理論的貢献を行うことができる。本研究は、これらの大規模経年調査の多様なデータを総合的に分析することにより、実証的データに基づいて日本語の変化と日本語の将来を統計的に予測することのできる理論の構築を目指している。</p> <p>【研究目的】鶴岡第4回調査は、2012年春に終了し、その電子化とデータベース化も、着実に進展している。一方国立国語研究所の以前の鶴岡・岡崎・富良野などの定点・経年調査による結果も、データベース化する必要がある。本研究の目的は、これらのデータベース・各種言語資料を高度学術利用することにより、現代日本の地域社会における言語使用・言語意識の実態を記述するとともに、言語の変化と将来予測に関する実証的な研究を行うことにある。また国際的発信、国内一般人への啓発にも配慮する。</p> <p>【研究の意義】鶴岡・岡崎・富良野の経年調査は、同一の調査内容で、同一の対象地域・対象者に対する大規模な調査であり、世界に誇るべき成果である。話者の生年の幅でいうと百数十年にわたる言語変化を知ることができる。言語部門ではギネスブックものの、世界にまれな貴重な大規模データである。社会言語学研究史からいうと、欧米より早く、確実な統計手法を用いた大規模調査として位置付けられている。ことに鶴岡調査の価値は統計数理研究所でも認知されており、文系理系をつなぐ共同研究として、高く評価されており、社会言語学の国際的概説書にも引用されている。これらのデータの分析には長期間にわたる大勢の協力を必要とするため、未分析のまま保存されている貴重な資料も少なくない。これら未分析資料を公開して、研究の進展に寄与できる体制を、整える。また各地の調査項目には共通項目があるにも関わらず、これまで相互に結果を参照して比較することがなかった。これらの多様な調査を相互に関連づけて、報告書で扱われた以外の観点からの分析を行う必要がある。</p> <p>以上のような観点から、本研究では大規模経年調査のデータの整理、分析を行い、関連研究と結びつけ、その成果や国語研の所有するデータの価値について、国際的に公表、発信する。</p>			
<p>《2014年度の主要な成果》</p> <p>①鶴岡班</p> <p>ワークショップで成果を公表した。NINJAL セミナーを開催し、所内外の若手研究者および大学院生に対して講義を実施した。また、年度末にプレスリリースを行うとともに、報告書2分冊を刊行した。</p> <p>②岡崎班</p> <p>3回の調査の生年絶対年代グラフによるグラフで、これまで読み取れなかった新たな傾向「成人後採用」の典型例が見つかった。データを狭義の敬語だけでなく、一連の談話行動としてとらえることにより、ポライトネス理論との接点ができ、新たな広い視野が開けた。着手の当初予想してい</p>			

なかった成果である。毎週新しいグラフを出力して解説を書き、毎月1冊のペースで『大規模経年調査資料集』を刊行した。プロジェクト非常勤研究員の分業による流れ作業の形をとり、効率的に運営した。途中の成果はインターネットで共同研究員および関係者に配布した。学会で個人発表やワークショップ・シンポジウム開催により、成果を公開した。国際会議での講演と研究発表などを行った。また若手の研究討論の場を多く設け、学会で発表できるように補助した。

③データベース班

個人が更新・修正しやすいHPを作り、内容を逐次更新している。成果公開に関しては、国語研究所の公式サイト (<http://www2.ninjal.ac.jp/keinen/>) のアップデートのほか、所外の特設サイト (<http://keinen.info/>) を2014年6月に開設し、資料集やデータ分析支援ツールの公開を継続して行っている。<http://innowayf.net/>、国内外の学会やジャーナル等で広く情報発信をした。

参加機関名	宇都宮共和大学、滋賀大学、神戸松蔭女子大学、大阪府立大学、日本大学、福島大学、ノートルダム清心女子大学、神戸学院大学、立命館大学、京都工芸繊維大学、徳島大学、統計数理研究所
共同研究員数	17名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	時空間変異 研究系客員教授	金水 敏	2013.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>時空間変異研究系では、空間的変異の研究は進んでいるが、時間的変化の研究は未だ十分でなかった。この点に鑑み、本研究では日本語を中心として時間的変異と空間的変化の両方をつなぐような研究プロジェクトの構築を目指す。そのために、疑問文という日本語研究の中でも必ずしもバランスのとれた研究が進んでいない領域を取り上げ、歴史的研究の充実を目指すとともに、空間的変異研究との連携の活性化をめざすものである。また疑問文にとって関連の深い名詞節の研究を取り上げている、言語対照研究系の「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」との連携も深めていく。</p> <p>具体的成果物としては、テーマに関わる論文集の刊行を目指す。</p>			
<p>《2014年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・用例収集を継続して行った。 ・先行研究文献の収集を継続して行った。 ・研究会の実施（他プロジェクトとの連携）：研究会を3回、合同会議を1回開催した。 ・ウェブサイトを随時更新し、英語化も準備中である。 ・「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究報告書（2）を刊行した 			
参加機関名	福井大学、お茶の水女子大学、愛知教育大学、大阪大学、琉球大学、大阪府立大学、青山学院大学、麗澤大学、鶴見大学、大阪樟蔭女子大学、龍谷大学、関西大学、福岡大学、神戸松蔭女子学院大学、九州国際大学、南山大学、オックスフォード大学、デラウェア大学、韓国啓明大学校、ハワイ大学		
共同研究員数	23名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
コーパスアノテーションの基礎研究	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>共同利用研国立国語研究所においては、コーパスの開発作業はコーパス開発センターにおいて実施するが、そのための基礎研究とコーパスを利用した応用研究は言語資源研究系において実施する。本研究では、コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行う。</p> <p>先に述べたようにコーパスの価値は代表性とアノテーションの積として定まるが、日本語コーパスの場合、形態素よりも上位の階層に属するアノテーションに関する研究を進展させる必要がある。アノテーションは基本的には言語学の範疇に属する知識に立脚した作業であるが、我が国ではこれまで言語学者（日本語研究者）がコーパスのアノテーションに関与することが少なく、主に自然言語処理研究者の手によってアノテーションの研究が進められてきた。そのため、言語学の観点からすると、仕様に一貫性が欠けていたり、単位の斉一性に問題が生じていたりすることがあった。一方、言語学者の考案する「理論」は品詞分類のような具体的な問題まで含めて、現実の用例をどの程度まで説明しうるかが不明であることが多かった。</p> <p>本研究の目的は、自然言語処理研究者と言語学者とが協力して、現代日本語を対象とする各種アノテーションの仕様を考案し、検討することにある。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>一昨年の外部評価において、国際会議予稿集論文だけでなく、査読論文を増やすようにとの意見をいただいた。これに応じて、昨年度来『自然言語処理』特集号の企画を進めるなどの対策をとってきたが、今年度は、その効果が具体的に表れて、内外の学会誌に 8 編の査読論文を掲載することができた。また査読付の紀要論文も 2 編公開している。</p>			
参加機関名	東北大学、奈良先端科学技術大学院大学、東京工業大学、筑波大学、岡山大学、立命館大学、慶應義塾大学、京都大学、山梨大学、静岡大学、統計数理研究所、情報通信研究機構、グーグル（株）、文部科学省		
共同研究員数	20 名		

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
コーパス日本語学の創成	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>日本語を対象としたコーパス言語学（コーパス日本語学）は、『日本語話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の構築によって研究インフラが整いつつあるが、一連のコーパスを徹底的に解析して、コーパス日本語学ならではの研究成果を挙げることは今後に残された課題である。本研究の目的は、各種コーパスを利用した定量的かつ実証的な日本語研究を幅広く推進して先進的な成果を得、それを学界に周知させることによって、日本の言語関連学界にコーパスを利用した研究を定着させることである。この点で本研究は科研費特定領域研究「日本語コーパス」の活動を戦略的に継承するものであり、一種の学会に相当する機能を提供することを目指している。</p>			

<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「講座日本語コーパス」を新規に 3 冊（通算で 4 冊）刊行した。 ・内外の専門学会誌（「音声研究」, 「自然言語処理」, 「計量国語学」, 「知能と情報」, <i>Language Resources and Evaluation</i>, <i>Acoustical Science and Technology</i>）に合計 13 編の査読論文が掲載された。 ・九州大学と京都大学の言語学研究室が刊行する査読付紀要にも 2 編の査読付論文が掲載された。 	
参加機関名	愛知学院大学, 愛知淑徳大学, 大阪大学, 千葉大学, 上智大学, 広島大学, 山形大学, 神戸大学, 早稲田大学, 明治大学, 大東文化大学, 筑波大学, 東京学芸大学, 東京女子大学, 同志社女子大学, 同志社大学, 日本大学, 法政大学, 熊本大学, 立正大学, 立命館大学, お茶の水女子大学, 湘南工科大学, 名古屋大学, 埼玉大学, 北海道教育大学, 東京外国語大学, 甲南大学, 理化学研究所, 統計数理研究所, 天津大学, リュブリャーナ大学
共同研究員数	47 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
通時コーパスの設計	言語資源研究系 客員教授	田中 牧郎	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>(1) 日本語の歴史の全体像をコーパスという形で公開することで、国立国語研究所の作成した従来のコーパスをさらに充実する。これにより、日本語に関心を持つ研究者・一般人にとって、欠かすことのできない公共的な言語資源とすることができる。</p> <p>(2) 2013 年度までに、中間的なまとめとして、研究成果論集を出版する。また、日本語歴史コーパス平安時代和文篇（2013 年度版）を公開する。これらの成果物により、通時型コーパスの基本構想、コーパス利用による日本語史研究の方法を広く開示し、学界に歴史コーパスを利用した研究方法を提案するという意義がある。なお、2014 年以降も、研究雑誌に歴史コーパス特集号を編纂すること、また、コーパスの対象も鎌倉時代、室町時代に拡張すること等を計画している。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究およびコーパスの試作は順調に進んでおり、計画は十分に達成された。 ・年度当初は構想に止まっていた、雑誌『日本語学』臨時増刊号に通時コーパス設計についての理論と実際をまとめることが、実現した。 ・国内外の学会、学会誌、書籍など、多様な場で研究成果を発信できている。特に、上記の『日本語学』臨時増刊号と、昨年度来編集を進めてきた論文集『コーパスと日本語史研究』の刊行は、通時コーパスに関する研究成果を、広く学界と社会に還元できるものと考えられる。 ・試作中のコーパスは、昨年度の平安時代編に引き続き、室町時代の狂言編の公開が実現する。また、近代の『国民之友コーパス』の公開は、近代語のコーパスを通時コーパスの中に位置付ける方向を、より明確化するものとなった。 ・コーパス開発に従事するプロジェクト研究員は、通時コーパスの構築とこれを用いた日本語史研究の分野の一線を開拓しており、次世代を担う人材として育ってきている。 			

総じて、通時コーパスの設計は順調に進んでおり、次期プロジェクトにおいて、本格的な構築に進む準備が整ってきた。	
参加機関名	岩手大学、群馬大学、恵泉女学園大学、埼玉大学、名古屋大学、千葉大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京大学、静岡大学、福井大学、奈良先端科学技術大学院大学、成城大学、青山学院大学、明治大学、東洋大学、実践女子大学、情報通信研究機構、国立情報学研究所、首都大学東京、オックスフォード大学、中国華僑大学、(株)はてな
共同研究員数	31 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究	言語対照研究系教授	John WHITMAN	2012.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究の目的は日本語とその周辺の言語を主な対象とし、その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を、言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって、東北アジアを一つの「言語地域」として位置づけることである。統語形態論の観点からは「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て、日本語に見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら、その機能と形と歴史的变化を究明する。歴史音韻論の観点からは、日本語周辺諸言語の歴史的再建を試み、東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。2013 年からは、アンナ・ブガエワ准教授が中心となる「アイヌ語班」を加え、日本列島において唯一日本語族と共存するアイヌ語族の言語類型論的研究を積極的に行う。</p> <p>上記の3つのテーマに沿って、プロジェクトを「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」に分ける。このプロジェクトの大きな特徴は（1）類型論的観点と通時的言語学観点を組み合わせること、（2）言語類型論、国語学（日本語学）、言語学理論（統語理論・音韻理論）、記述言語学にわたる、幅広い理論・方法論的観点を代表する研究者を共同研究に取り入れることにある。</p> <p>当然のことながら、研究成果の公表もプロジェクトの目的である。各班別に、年に1回ずつの共同研究発表会（アイヌ語班の場合には2回）、3つの国際ワークショップ・シンポジウムと、言語対照研究系の合同研究発表会を行う。そのほか、「形態・統語論班」「音韻再建班」「アイヌ語班」のメンバーはそれぞれ主に下記の4点の海外出版企画で研究成果を公表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <i>Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar</i> (John Benjamins 社に提出する予定) 形態・統語論班のメンバー ・ <i>Handbook of Japanese Historical Linguistics</i> (Mouton 社と契約済) 形態・統語論班、音韻再建班のメンバー ・ 雑誌 <i>Korean Linguistics</i> (Brill 社) の特集号 音韻再建班のメンバー ・ <i>Handbook of the Ainu Language</i> (Mouton 社に提出する予定) アイヌ語班のメンバー <p>《2014 年度の主要な成果》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 論文集 <i>Nominalizations as a Source of Main Clause Grammar</i> の編集作業を行った。 ・ <i>Proceedings of the 9th Workshop on Formal Altaic Linguistics</i> は予定通り編集作業を終えた。 ・ ヘルシンキ大学と共催でシンポジウム “Crosslinguistics and Linguistic Crossings in Northeast Asia” (「環北太平洋地域における対照言語学的・言語横断的研究」) を開催した。 			

<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ語の音声資料データベース『アイヌ語会話辞典』を作成・公開した。 ・アイヌ語班の研究論文を収めた論集『アイヌ語研究の諸問題』を出版した。 ・音韻再建班のメンバー4名の研究論文を収めた論文集『琉球諸語と古代日本語』を編集した。 ・「名詞化」に関する文献リストをプロジェクトHPに掲載した。 ・研究成果を論文集の形で3件、海外で英語とフランス語で出版した（MITWPL, HEL）。 	
参加機関名	茨城大学、岡山大学、九州大学、甲南女子大学、札幌学院大学、新潟大学、千葉大学、北海道大学、神戸大学、青山学院大学、静岡県立大学、早稲田大学、大阪大学、筑波大学、東京外国語大学、東京大学、東北大学、富山大学、福井大学、明治学院大学、琉球大学、和歌山大学、和光大学、札幌学院大学、北海学園大学、オックスフォード大学、オハイオ州立大学、ハワイ大学、フランス国立科学研究所、啓明大学校、ワシントン大学、マインツ大学
共同研究員数	52名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏名	
述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	言語対照研究系 教授	Prashant PARDESHI	2009.10-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>述語構造の意味範疇に関わる重要な言語現象の一つに「他動性」がある。本プロジェクトは意味的他動性が出来事の認識およびその言語表現にどのように反映されているのかを解明することを目標とする。日本語とアジアの諸言語を含む世界の約30言語を詳細に比較・検討し、それを通して、日本語などの個別言語の様相の解明だけでなく、言語の多様性と普遍性についての研究に貢献することを目指す。</p> <p>また、理論的な研究の知見を日本語教育へ還元することを目標に、他動性に関する言語学、日本語学、日本語教育、対照言語学、第二言語習得研究、辞書編纂学、認知言語学、コーパス言語学などといった様々な研究分野の最新の研究成果を取り入れ、日本語の自動詞・他動詞の体系的且つ効率的な学習に役立つネット版「日本語学習者用基本動詞用法ハンドブック」を作成する。この試みを通じて、市販の教科書、辞書、文法書、参考書などと異なった新たな教材・資料を提供することにより、世界各国の日本語教育への寄与を目指す。</p>			
<p>《2014年度の主要な成果》</p> <p>《著書・編書》</p> <p>パルデシ・プラシャント、ナロック・ハイコ、桐生和幸（編）『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』（東京：くろしお出版）の編集を進めた。</p> <p>《データベース類》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. The World Atlas of Transitivity Pairs（使役交替言語地図）（2014年6月6日に48言語のデータを公開（2015年1月現在、54言語）。2015年3月～6月にかけて、さらに約25言語追加する予定）。 2. NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) ver.1.30 公開：類義語などを比較するための2語比較機能を追加（2014年8月）。 <p>《辞書・辞典類》</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」のハンドブック作成班の研究成果：基本動詞ハンドブックを2014年4月29日に公開（2014年度末時点で53見出し）。http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/ 			

参加機関名	愛知教育大学, 筑波大学, 大阪大学, 岡山大学, 小樽商科大学, 神戸夙川学院大学, 青山学院大学, 東京大学, 北海道大学, 札幌学院大学, 京都大学, 新潟大学, 金沢大学, 神戸大学, 神田外語大学, 東京外国語大学, 熊本大学, 岐阜大学, 拓殖大学, 慶応義塾大学, 美作大学, 滋賀大学, 東北大学, 学習院大学, 関西国際大学, 同志社大学, 龍谷大学, 防衛大学校, 早稲田大学, 名古屋大学, 麗澤大学, 東洋大学, 国立民族学博物館, 神戸市立工業高等専門学校, 大阪女学院大学, 三重大学, 東亜大学, 東京海洋大学, 山口大学, 武庫川女子大学, 東北学院大学, 九州大学, 亜細亜大学, サンフランシスコ州立大学, ピッツバーグ大学
共同研究員数	84 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
多文化共生社会における日本語教育研究	日本語教育研究 ・情報センター 教授	迫田久美子	2010.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本プロジェクトでは、第二言語習得研究、対照言語学、社会言語学、心理言語学、コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により、多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について、実証的な研究を行う。</p> <p>現在、海外には 398 万人の日本語学習者が第二言語としての日本語を学んでいる。また、国内に在住する日本語非母語話者は、200 万人であり、労働力確保、高度人材の登用も含め、日本は確実に多文化共生の社会に向かっている。このプロジェクトには、このような現状で問われるべき課題として、2つの柱となる研究がある。それぞれの目的は以下のとおりである。</p> <p>【非母語話者の日本語の第二言語習得研究】</p> <p>…日本語非母語話者の日本語習得を自然環境か教室環境か、日本国内か海外か、などの環境要因および彼らの母語の違いが習得にどのように影響を与えるのかについて、学習者の会話コーパス・作文コーパスに基づいて明らかにする。</p> <p>【定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究】</p> <p>…多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者や研究が進んでいない少数派の外国人の言語習得、複数の言語使用の実態をよりの確に捉え、どのような日本語を必要とするのかを明らかにし、言語使用と言語生活の関係を明らかにする。</p> <p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>【非母語話者の日本語の第二言語習得研究】</p> <p>2014 年度は、以下の 3 点を研究計画の中心として研究を進めた。</p> <p>[1] 多言語母語の学習者コーパスのための海外のデータ収集調査を完了する。</p> <p>2014 年度の調査は、すべて予定通りに実施し（3 月実施を除き）、データ収集を完了できた。文字化段階へのスムーズな移行を図るために、次年度予定の国内調査（国内の日本語学習者と母語話者）も一部実施した。</p> <p>[2] コーパス構築のための文字化規定を作成し、文字化作業の研修とパイロットテストを行う。</p> <p>海外のデータ収集調査した対話データの文字化作業に着手した。複数の共同研究者との 3 回の会議を経て、文字化規定を作成、研究目的の明確化と作業の効率化を検討した。昨年秋から会話分析</p>			

や習得研究に興味のある院生を募集し、20 数名の文字化アシスタントを選出、研修やパイロットテストを実施して核となる人材を育てた。

【3】 学習者コーパスの分析の成果を発表する。

これまで、海外のデータ収集に注意が向けられていたが、2014 年度はデータの一部を利用して成果を早い段階から発表していくことを心がけ、国際大会やシンポジウム等でデータ収集のプロセスや留意点、さらに一部のデータを活用して、海外の研究協力者と共に、習得研究の発表を行った。

【定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究】

【4】 量的・質的データ収集の実施と調査協力地における公開研究会の開催。

言語使用と意識に関する調査、およびフィールド調査を継続し、一般市民向けの公開講演会も計画実施している（第5 回移民コミュニティの言語生活研究会 2015 年 3 月 22 日開催）。

【5】 これまでのデータ結果をふまえ、国際大会や国際シンポジウムで成果を発表する。

これまでの調査結果は、日本語教育国際研究大会（ICJLE2014）、国際シンポジウム AAS（AAS-IN-ASIA CONFERENCE）、日本語教育学会秋季大会、言語管理研究会第 24 回研究会で発表した。

【6】 フィールド調査を継続し、データの文字化、整備化を図り、これまでのデータの分析、成果を論文にまとめる。

フィールド調査は予定通り実施し、整備した文字化データは 2014 年 4 月に縦断調査のデータベースとして公開した。また、データの分析結果にもとづいて、論文にまとめた。

参加機関名	首都大学東京、大阪大学、横浜国立大学、広島修道大学、広島市立大学、学習院大学、実践女子大学、上智大学、名古屋外国語大学、日本女子大学、広島国際学院大学、麗澤大学、筑波大学、サンフランシスコ州立大学、タマサート大学、ピッツバーグ大学
共同研究員数	22 名

基幹型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
コミュニケーションのための言語と教育の研究	日本語教育研究・情報センター 教授	野田 尚史	2013.4-2016.3
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>日本語能力は現実のコミュニケーションの観点から「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 つの能力に分けられる。しかし、非母語話者の日本語能力についての研究は、これまではこの 4 つを明確に分けず、語彙に関する能力や文法に関する能力というように伝統的な言語学の分類に従って進められることが多かった。</p> <p>この共同研究プロジェクトでは、「聞く」「話す」という話しことばに関する能力と、「読む」「書く」という書きことばに関する能力を分け、また、「聞く」「読む」という理解能力と、「話す」「書く」という使用能力を分けて非母語話者の日本語能力を研究する。特に研究方法の開発が遅れていて、これまで研究が盛んではなかった「聞く」「読む」という理解能力に焦点を当て、非母語話者の理解過程や理解困難点を解明することを目的とする。</p> <p>日本語教育研究・情報センターでは日本語非母語話者のコミュニケーション能力を明らかにすることを大きな課題の一つとしているが、この研究は現実のコミュニケーションの中での非母語話者の日本語能力を解明するという新しい方向性を持ったものになっている。</p>			

《2014 年度の主要な成果》

計画どおり，日本国内だけではなく，ヨーロッパを中心に海外でも日本語非母語話者の読解過程についての調査を行った。従来の日本語非母語話者に対する調査は，「発話」や「作文」を使ったものが大半で，非母語話者の日本語産出能力を解明するものであった。このプロジェクトでは，産出能力ではなく理解能力を解明するために，非母語話者に日本語を読んでもらいながら，理解した意味や理解できなかった点などを母語で話してもらい，理解内容を確認する質問にも答えてもらう調査を行った。読解では日本語を学習する前から個々の漢字が表す意味をどれだけ知っていたかによって大きく異なるため，もともと漢字についての知識が豊富な中国語話者と，もともと漢字についての知識がないヨーロッパ諸語の話者などを分けて調査を行った。調査結果を分析して論文にまとめ，『ヨーロッパ日本語教育』や『専門日本語教育研究』などに掲載した。

※コミュニケーションのための言語と教育の研究に関するさまざまな成果を『日本語教育』『計量国語学』などの学会誌に発表し，『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』『日本語教師のための実践・作文指導』『専門日本語ライティング教育—論文スキーマ形成に着目して—』などの著書として出版した。また，日本語教育国際研究大会，ヨーロッパ日本研究協会国際会議，国際日本語教育・日本研究シンポジウム，タイ国日本研究国際シンポジウム，日本語教育学会，日本語文法学会，関西言語学会などで講演や研究発表を行った。さらに，ボランティア日本語教師などに向けて，横浜市国際交流協会，ひょうご日本語教師連絡会議などで講演や研修を行った。

参加機関名	福井大学，大阪大学，京都教育大学，東京大学，一橋大学，群馬大学，金沢大学，津田塾大学，名古屋外国語大学，神戸大学，関西学院大学，熊本県立大学，大東文化大学，麗澤大学，群馬大学，人間環境大学，跡見学園女子大学，いわき明星大学，帝塚山大学，ミュンヘン大学，プリンストン大学，オックスフォード・ブルックス大学，国立政治大学，チェラーロンコーン大学，パリディドロ第7大学，バルセロナ自治大学，グーグル（株）
共同研究員数	33 名

【領域指定型】 2 件

国語研が指定した特定のテーマを扱うプロジェクトで、外部の研究者をリーダーとする公募型の共同研究。

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究	北星学園大学 教授	柳町 智治	2011.10-2014.9
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>人々の実際の会話には数多くの、発話の繰り返し、言いさし、言いよどみ、重なり、ポーズといった現象が見られる。こうした現象は、本来完全であるはずの発話が不完全な形で産出された際の「ノイズ」などではない。むしろこれらは、近年の相互行為、会話分析の研究が明らかにしているように、「参加者間の会話への参加が微妙に調整されながら組織されていること」を強い形で示している。本プロジェクトの目的は、以上の視点から、人々がどのように他者と協働的に個々の相互行為に参加し、社会的実践を行っているのかを明らかにすることにある。</p> <p>さらに、近年では、人々の相互行為を発話以外のリソースも含め捉えることの重要性も議論されている。「言語、非言語、人工物は、並列しお互いに意味を与え合いながら人間の行動をかたち作っている」(C.Goodwin 2000) という「マルチモダリティ」の分析視点である。本プロジェクト研究においても、文脈中の諸リソースがどのように母語話者および第二言語話者による相互行為の組織化に関わっているのかを日本語のデータをもとに解明していく。</p> <p>本プロジェクトでは、以上のような視点から母語話者や第二言語話者のコミュニケーションを分析考察し、その成果を学会発表、公開研究会、論文発表等を通して、コミュニケーション研究者や日本語教育関係者に対して発信していく。これにより、日本語によるコミュニケーションの実態の実証的な解明につなげていくとともに、第二言語としての日本語の教育・学習に関する具体的方策の提言を行っていく。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>本プロジェクトでは、人々がどのように他者と協働的に相互行為に参加し社会的実践を行っているのかを、実際の活動場面のデータを収集し分析していった。11 名の共同研究員が分析の対象としたデータは、日常会話、理系実験室、在宅医療場面、学会発表、第二言語の教室、SNS サービスの LINE 等、多岐にわたったが、どの場面においても、参加者によるインタラクションへの参加が微妙に調整されながら組織されている点、そして、発話だけでなく文脈中の諸リソースが相互行為の組織化に深く関わっている様子を明らかにすることができた。</p>			
参加機関名	大阪大学、名古屋大学、政策研究大学院大学、関西学院大学、関西大学、近畿大学、東京国際大学、北星学園大学、北海道大学、早稲田大学		
共同研究員数	14 名		

領域指定型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築	実践女子大学 教授	山内 博之	2011.10-2014.9
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>現在の日本語教育における文法シラバスでは、初級で助詞や活用などの日本語の基本的な文型に関わる要素をひと通り教え、中級以降では複合辞や機能語を教えるという文法観があると言われている。この文法観の影響が大きいのは、現時点でもっとも普及している『みんなの日本語』（スリーエーネットワーク）や、世界で50万人以上が受験する日本語能力定試験の文法観でもあるからである。ただ、この文法観は必ずしも客観的なデータに基づいて導かれたものとは言えないのが実情である。また、一部の研究者からは、受身形などは初級の文法項目では難しすぎるという批判も出ている。データの整備が進み、比較的規模の大きい学習者コーパスが利用できるようになった今、学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスを構築する意義は大きい。さらには、BCCWJなど日本語母語話者コーパスも援用して、日本語母語話者の使用実態も考慮に入れた語彙・文法シラバスの構築を目指す。その具体的な成果として、新たな語彙・文法シラバスの提案を含む「(仮)現場に役立つ日本語教育研究シリーズ」を出版する。</p> <p>学習者コーパスは、第二言語習得分野ではよく用いられているが、使用者が限られており、日本語文法研究や実際の日本語教育に役立つところまでの広がりとは言いえない。学習者コーパスによって見出された日本語習得の難易度は、現実の日本語教育に貢献されるべきであり、また、貢献してこそ「日本語学習者会話データベース」など学習者コーパスの意義が広く認知されると言える。本共同研究では、日本語教育文法、第二言語習得、日本語教育方法論、学習ストラテジー、学習ビリーフなど、日本語教育における幅広い分野の研究者が共同で学習者コーパスを用いて研究を行う。目標は、日本語習得の難易度を考慮した語彙・文法を収集し、それらを基に日本語教育における初級・中級・上級シラバスを構築することである。</p>			
<p>《2014年度の主要な成果》</p> <p>①データに基づいた日本語教育のための語彙・文法研究会（代表：山内博之）と共催で共同研究会を3回開催した。</p> <p>②2015年2月22日に、公開シンポジウム「シラバス作成を科学にする ―日本語教育に役立つ多面的な語彙シラバスの作成―」を国立国語研究所にて開催した。</p> <p>③共同研究会での発表をもとに、学習者コーパスを中心としたデータに基づいた日本語教育研究による出版物の執筆を進めた（くろしお出版より2015年刊行予定）。</p>			
参加機関名	埼玉大学、関西学院大学、北見工業大学、首都大学東京、一橋大学、東洋大学、岡山大学、金沢大学、群馬大学、広島市立大学、広島大学、山口大学、実践女子大学、神戸女学院大学、相模女子大学、筑波大学、帝塚山大学、福岡女子大学、名古屋外国語大学、明海大学、鳴門教育大学、京都教育大学、横浜国立大学、香港中文大学、チューラーロンコーン大学		
共同研究員数	36名		

【独創・発展型】 1 件

独創性に富む斬新なテーマを扱う中小規模プロジェクト。

独創・発展型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化	言語資源研究系 客員教授	伝 康晴	2011.11-2014.10
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>近年の電子化文書の普及により、書き言葉コーパスの構築は飛躍的な発展を見せている。言語資源研究系・コーパス開発センターでは、1 億語を超える規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を開発し、さらに 100 億語を超える規模の Web コーパスの開発を目指している。これに対して、話し言葉コーパスは、音声収録・転記など開発の初期段階での負担が大きく、学会講演や模擬講演などの独話を中心とする『日本語話し言葉コーパス』を除いて、大規模なものは存在しない。とくに我々の日常の言語行動の中心である会話に関しては、個々の研究プロジェクトごとに小規模なデータを独自に収集・利用している状態を脱していない。</p> <p>本研究では、これに対する一つの解決策として、既存の会話コーパスの共有化という方式に着目する。小規模データを所有する研究プロジェクトは多くあり、それらは音声収録・転記の段階を終え、負担の大きい初期のハードルをクリアしている。しかし、転記基準は不統一であり、韻律情報や発話機能など会話研究に必要な基本情報は必ずしも完備していない。そこで、これらの基本情報に関する共通のアノテーションを施し、相互利用可能な形でデータを共有することを目的とする。</p> <p>将来的には、より大規模な会話コーパスの開発を目指し、言語資源研究系・コーパス開発センターが推進している Kotonoha 計画の「対話・雑談」コーパスの構築へとつなげたい。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>本研究では、様々な種類の既存の会話コーパスを対象に、共通の基本情報を付与し、共有するための方法論を探索した。</p> <p>(1) 共同研究者が所有する 13 種の会話コーパスから短い断片を収集し、転記基準や付加情報などを調査した。</p> <p>(2) 『日本語話し言葉コーパス』方式と会話分析方式の転記仕様を整備し、3 つのコーパスに施行するとともに、2 方式間の自動変換手法について検討した。また、発話連鎖・遡及的連鎖の仕様を策定し、コーパスの一部に施行した。</p> <p>(3) 多種のアノテーションからデータベースを自動作成するツールを開発した。</p> <p>(4) (2) で整理した共有コーパスを用いて、会話の諸現象に関する基礎的分析を行なった。</p>			
参加機関名	宇都宮大学、関西学院大学、追手門学院大学、慶應義塾大学、広島国際大学、昭和女子大学、三重大学、早稲田大学、千葉大学		
共同研究員数	10 名		

【フィージビリティスタディ型】 5 件

第3期に本格的に稼働できるかどうかの実行可能性をみるための予備的共同研究プロジェクト。

フィージビリティスタディ型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備	理論・構造 研究系准教授	小磯 花絵	2014.7-2015.8
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本課題の目的は、将来的に国語研究所が主体となって大規模日本語会話コーパスを構築することを視野に、その基盤整備として、以下の三つを策定することである：</p> <p>①均衡性を考慮した会話コーパスの設計</p> <p>②種々の日常会話を収録するための方法論</p> <p>③日常会話を適切・効率的に転記するための方法論</p> <p>日常会話は社会生活の基盤であり、日常生活を円滑にするためのコミュニケーションのあり様を総合的に解明することは急務である。こうした研究を支えるものとして、実際の日常会話場面を対象とした大規模な会話コーパスの構築が求められている。言語生活の本質を解明するには、日常の言語生活を反映したコーパス設計が不可欠である（①）。また、屋外での会話や携帯電話を介した会話など、日常の会話を収録するための技術的・倫理的な問題を整理・解決し、日常会話を収録するための方法論を具体的に策定する必要もある（②）。更には大量に収録した会話を適切かつ効率的に転記するための方策を確定する必要もある（③）。</p> <p>本課題では、コーパス構築に欠かすことのできない上記3点を具体的に検討・策定することで、将来的な大規模日本語会話コーパス構築のための道筋をつける。特に①は世界的に見ても新しい試みであり、フィージビリティスタディにふさわしい挑戦的課題である。</p> <p>本課題が第3期中期計画に継続した場合、策定した設計・方法論にもとづき均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパスを構築・公開する。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <p>本課題の目的は、大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備として、①均衡性を考慮した会話コーパスの設計、②種々の日常会話を収録するための方法論、③日常会話を適切かつ効率的に転記するための方法論の三つを策定することである。今年度はそれぞれ次のことを実施した。</p> <p>①均衡性を考慮した会話コーパスの設計</p> <ul style="list-style-type: none"> ・首都圏在住の成人約 240 人を対象に、一日の会話行動に関する調査を実施 ・結果に基づきコーパス設計の方針を検討 <p>②種々の日常会話を収録するための方法論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・福井健作弁護士を招いてセミナーを開催し、日常会話収録に伴う倫理的理問題を具体的に検討 ・収録機材としてカメラやレコーダーなどの機種選定を実施 <p>③日常会話を適切かつ効率的に転記するための方法論</p> <p>主要な転記方式を調査・整理した上で、大規模会話コーパス用の転記基準マニュアル案を策定</p>			
参加機関名	千葉大学、九州大学、筑波大学、早稲田大学、国立情報学研究所		
共同研究員数	8 名		

フィージビリティスタディ型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
所蔵資料の活用による共同利用基盤の構築	理論・構造 研究系准教授	高田 智和	2014.7-2015.8
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>資産は資産であることを主張しなければ資産たり得ない。国立国語研究所の研究図書室及び研究資料室には、言語研究のための研究資産が保存・蓄積されている。本提案課題は、所蔵資料を共同利用基盤とし、所蔵資料の利活用による共同研究への展開を図ることを目的とした準備研究を行うものである。</p> <p>所蔵資料を共同利用基盤とするためには、個別資料の学術的価値を各領域の研究者によって吟味することが必要不可欠である。しかし、現在の成員だけで所蔵資料すべてを検討することはできないため、日本語史・日本語研究史などの研究者の参画を得て、資料検討のための組織基盤を構築する。</p> <p>また、近時のデジタルアーカイブズは研究環境の向上に大きく貢献しているが、日本語研究者を主たるユーザとしたデータ公開は存外に少ない。現在研究情報資料センターを中心に実施している所蔵資料（和本類）の電子化事業について、着手資料の優先順位を策定するとともに、人文情報学研究者との協働により、電子画像と電子化テキスト併用のデジタルアーカイブズのプロトタイプを制作・公開し、日本語研究（特に表記・語彙の史的研究）のデジタル環境の向上に寄与することを目指す。</p>			
<p>《2014 年度の主要な成果》</p> <ol style="list-style-type: none"> 『易林本節用集（平井別版）』（慶長 2 [1597] 年以降刊、全 2 巻、近世古辞書）の見出し語データを作成した。 『蜆縮涼鼓集』（元禄 8 [1695] 年刊、全 2 巻、四つ仮名資料）の全文テキストを作成した。 『和字正濫鈔』（元文 4 [1739] 年刊、全 5 巻、仮名遣書）のうち、巻 1・巻 2 の全文テキストを作成した。 研究図書室蔵書（和本類）を資料論的見地から実査し、2015 年度にデジタル撮影を行う書目リストを検討した。 研究資料室収蔵資料のうち「林大氏寄贈資料」について精査を行い、「橋本進吉博士講義資料」や「JIS 漢字選定資料」を検討した。 			
参加機関名	北海道大学、大阪大学、専修大学、人文情報学研究所		
共同研究員数	5 名		

フィージビリティスタディ型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本関連在外音声資料の学際共同利用に向けた言語研究資源化	時空間変異 研究系准教授	朝日 祥之	2014.7-2015.8
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究の最終的な目標は、在外日本語音声資料をデータベース化し、言語学、歴史学、文化人類学、民俗学、音楽学などの研究者に提供することにある。データベースの範囲は、資料のアノテーション（書誌情報）、音声ファイル（映像も含む）、書き起こし資料とする。この目標を実現させるためには、中長期的な研究計画と研究態勢が必須である。第 3 期中期計画でこの研究計画を遂行させるためには、実際の作業内容を策定する必要がある。</p>			

本研究プロジェクトは、2013 年度に実施されたフィージビリティスタディ（「在外音声資料の学際共同利用に向けた情報化」代表者：朝日祥之）の継続課題として計画するものである。前回のフィージビリティスタディでは、主にアナログ音声のデジタル変換の方法、アノテーションとして取り込む項目の作成を検討した。

本研究では（1）実際にアナログ音声のデジタル化を行い、デジタル変換の方法が適切に設定されていることを確認し、（2）音声資料の書き起こしとアノテーションを行う。本プロジェクトで対象とする資料は、2013 年度フィージビリティで扱った資料と同じもの（全米日系人博物館（米国・ロサンゼルス）と国立国会図書館憲政資料室所蔵の在外日本語音声資料）とする。

《2014 年度の主要な成果》

本プロジェクトでは、2014 年度中に以下の 4 点を行った。

- （1）国立国会図書館憲政資料室所蔵の移民関連資料のうち、録音資料（カセットテープ 107 本）の複製許可を、政治史料課占領期資料係との打ち合わせの結果、得ることができ、当該資料デジタル化作業を終了させることができた。
- （2）全米日系人博物館所蔵の二つのコレクション（Barbara Kawakami コレクションと Nancy Araki コレクション）について、Barbara Kawakami コレクションについては、全米日系人博物館のメディアセンターとの打ち合わせを行った上で、本人から許諾をとることができた。また Nancy Araki コレクションについては、カリフォルニア州 San Mateo にある本人宅を訪ね、本人から許諾を得ることができた。Nancy Araki コレクションのデジタル化作業は 2013 年度における人間文化研究機構の事業として実施しているので、2014 年度においては、このコレクションのアノテーション、ならびに書き起こしに着手した。
- （3）国立国会図書館ならびに全米日系人博物館所蔵の当該資料に関する権利関係についての確認を行い、本プロジェクトで対応する事項を整理した。
- （4）本プロジェクトにおけるデジタル化作業で主たる資料となるカセットテープのアナログ音声のデジタル変換の方法を共同研究員とともに開発し、国立国会図書館におけるデジタル化作業で用いた。

参加機関名	早稲田大学、国立歴史民俗博物館
共同研究員数	4 名

フィージビリティスタディ型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語における標準的な言語単位の設計	言語資源研究系 教授	前川喜久雄	2014.7-2015.8
<h4>《研究目的及び特色》</h4> <p>近年、日本語についても高品質・大規模なコーパスが容易に入手可能となってきた。しかし、コーパスデータは内省や実験データに比べると個人差・レジスタ差などの面で多様性に富んでいるため、従来の統計モデルが適合しないケースが少なくない。その場合、適合性のない手法を無理矢理に使うのは論外だが、手法に合うデータのみを分析していたのでは、コーパスを分析する意味が薄れてしまう。必要なのは、データに合わせて柔軟に統計モデルを構築して利用する姿勢と能力である。しかし、残念なことに現在の日本語学の研究者にそのような姿勢があまり認められず、できあいの分析手法を紋切型に適用するにとどまっている。</p>			

今回提案する研究の最終目標（次期中期計画まで含めての目標）は、コーパスデータを正しく、また有効に分析するために必要となる現代的な統計モデリングの諸手法を言語研究に適用してその有効性を立証し、コーパス言語学において「今どきのデータ解析ならば、少なくともこれぐらいのことは考えよう」という標準（スタンダード）を示すことにある。具体的には、GLMM（一般化線形混合モデル）に始まり、その拡張として、種々のベイズ統計モデルを対象とする。

《2014 年度の主要な成果》

本年度は基礎知識を固めるための勉強期間と位置付けて、ベイズ統計を中心に近年の統計理論の習得に努め、あわせて R 言語、JAGS ライブラリのスキル習得に努めた。

ベイズ統計の言語・音声研究への応用をテーマにした勉強会を 2 回開催し、3 月末に 3 回目を開催予定である。この勉強会には共同研究者にくわえて、大学院生・ポスドクも数名参加して、活気のある研究会となった。

具体的な応用事例としては、以下のような試みを行った。いずれも現在進行中である。

- ① 有声阻害音の調音様式の変動についての既発表論文で未解決の問題となっていた個人差の問題について、GLMM（一般化線形混合モデル）の適用を試みた。
- ② 自発音声における final lowering 現象に関する既発表データを、伝康晴教授（千葉大学）と共同でベイズ統計の手法によってモデリングした。
- ③ 日本語フィラー中の母音のフォルマント周波数の正規化に、Albin Aaron 氏（Indiana 大学大学院）が考案したベイズ統計による母音正規化手法を適用した。
- ④（参考）科研費で和歌山大学の河原英紀教授と進めている、軋み発声や息漏れ発声の音声にも対応可能な音声基本周波数抽出アルゴリズムの研究のなかでもベイズ統計の応用を試みた。

参加機関名	千葉大学、鎌倉女子大学、統計数理研究所、インディアナ大学
共同研究員数	9 名

フィージビリティスタディ型プロジェクト	プロジェクトリーダー		研究期間
	所属・職名	氏 名	
日本語テキストのツリーバンクアノテーション法の開発	言語対照研究系 教授	Prashant PARDESHI	2014.7-2015.8
<p>《研究目的及び特色》</p> <p>本研究は日本語テキストに正確な統辞・意味解析情報を付加した日本語ツリーバンク（treebank）の構築に必要なアノテーション法を開発することを目標とする。</p> <p>ツリーバンクとはコーパスの一種であり、各々の文に句構造等の統辞解析情報をタグ付けした言語データベースである。言語学的分析等の目的で利用するコーパスとしては、形態素情報だけを付加したものよりもツリーバンクのほうが精密な情報を提供できるのでより適している。統辞解析情報のアノテーションを伴う日本語コーパスとしては京都大学テキストコーパスが既に存在し、自然言語処理に研究に広く利用されている。しかし、これは文を文節に分解した上で文節間の係り受け関係をタグ付けしただけのものである。文が表す意味の理解には文の埋め込み等複雑な構文に関する正確な統辞論的情報が不可欠だが、京都大学コーパスからそれを抽出することは事実上不可能である。近年、日本語の統語論研究が著しく進んでいるが、この研究の成果は京都大学コーパスにはまったく反映されていない。</p> <p>第 3 期中期計画ではアノテーション作業量を現実的な範囲内に抑えながら、複雑な構文等に関する十分な統辞論・意味情報を持つ日本語ツリーバンクの構築を目指す。本プロジェクトではその基</p>			

礎となるアノテーション方法を開発する。

研究期間内にはタグ付け基準の客観性・一貫性、日本語使用の実情、および意味表示からの要請、という条件を最大限満たし、バランスの取れたツリーバンクの構築法を確立する。また同時に、研究補助員をまじえたチームによる共同開発を適切に行うために必要な規則の客観化および明確化を図る。

《2014 年度の主要な成果》

日本語のテキストに対して正確な統辞・意味解析情報を付加したツリーバンク（コーパス）の構築を目的として、多様な文法項目にもとづく検索使用を可能とし、客観的でしかも一貫したタグ付け基準を満たすアノテーション法の開発を行った。まず、2013 年度末までに行った「櫟ツリーバンク プロトタイプ」の構築で残された問題について検討を行った。特に、セグメンテーション、形態素解析、助詞や助動詞に相当する連語のタグ付け、関係節による名詞修飾の扱い、ゼロ代名詞の扱い等について新しいタグ付け基準を作った。その結果を、基本的構文を網羅した『基礎日本語文法』（益岡・田窪著、くろしお出版）の全例文に適用してアノテーションを行い、今後の作業のための基礎資料とした。また、東北地方のブロック紙『河北新報』を発行する河北新報社と覚書を交わし、同紙の記事を統辞・意味解析情報とともに公開する権利を得て、記事のアノテーションを開始した。さらに、アノテーション作業を通じて蓄積された規則やノウハウをまとめ、マニュアルの執筆を開始した。また、アノテーション結果をフィードバックさせて文自動統辞解析の一層の効率化を行った。

参加機関名	東北大学，神戸大学
共同研究員数	4 名

人間文化研究機構では、人間文化研究の新たな領域を従来の枠組を超えて創出し、先端的・国際的研究を展開するために、機構に所属する諸機関の間での連携研究など各種の事業を実施し、国立国語研究所もそれらの事業に参画している。

連携研究

人間文化研究機構を構成する個々の機関が培ってきた研究基盤と成果を、機関の枠を超えてつなぎ、補完的、有機的に結合させることで、新たな視座を開拓し、より高次なものに発展させようと企画、実施してきたのが連携研究である。東日本大震災を契機として、2012年度から「大規模災害と人間文化研究」というテーマの研究を、国語研を拠点としてスタートさせている。

アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明

日本を含むアジア地域には、歴史的に形成された多様な文明と文化が存在する。とくに、文化はいわゆる自然とのかかわりのなかから生まれてきた。人間は自然からどのような恩恵を受け、あるいは災害や自然の脅威にどのように対処してきたのか。この問いに、国語研では言語世界から見た自然への認識と思想、言語表現の多様性と普遍性という側面から研究を推進している。

研究課題：言語分析による自然観・自然思想の研究

研究期間：2010～2014

- ・昔がたりにみる自然観・自然思想の解明（木部暢子、時空間変異研究系教授）
- ・河川流域の自然・人間社会と方言の分布（大西拓一郎、時空間変異研究系教授）
- ・鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危惧方言のアクセント調査（窪蘭晴夫、理論・構造研究系教授）
- ・Rendaku across Dialects（Timothy J. Vance、理論・構造研究系教授）

大規模災害と人間文化研究

国語研が総括班となって、「大規模災害と人間文化研究」と題する連携研究を2012年度に開始した。これは、東日本大震災以降、人間文化研究機構内で各機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき、それぞれのグループの連携・協力を図ることにより、人間文化という大きな視点から地域の復興を支援するとともに、今後、起きると予想される大規模災害に対して人間文化研究の立場からどう向き合うかについて検討することを目的とする研究で、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」、「B. 大規模災害とミュージアムの連携、活用の研究」、「C. 大規模災害と資料保存・活用の研究」に分かれる。このうち、「A. 地域文化・環境と復興・再生の研究」の下に下記を実施している。

・方言をとおした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究

研究代表者：木部暢子（時空間変異研究系教授）

研究期間：2012～2014

1. 医療活動や自治体活動に必要な言語情報の整備、2. 多言語社会における地域言語、3. 地域社会の基盤としての方言の保存に関して研究を進めた。

日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散

研究代表者：John Whitman（言語対照研究系教授）

研究期間：2012～2014

「農耕言語拡散仮説」(Farming/Language Dispersal Hypothesis)に焦点をあて、人間文化研究機構諸機関における言語学・植物遺伝子学・考古学・人類学・歴史学の人材と知的資源を結集して、アジアにおける諸言語族の分布と農耕の伝播の相関関係を調べることを目的とする。International Symposium “Crosslinguistics and Linguistic Crossings in Northeast Asia”を開催した(2014.11.28-29)。

日本関連在外資料の調査研究

日本関連在外資料の国際共同研究は、欧米などにおける日本文化研究の比重低下の打開と、日本文化の世界史的意義を明らかにすることをめざしている。本研究はオーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料のデジタル化、ならびにその資料の書き起しを行った上でアノテーションを作成すると同時に、その資料を所蔵する機関との合意のもとに資料を公開することを目的としている。

・近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究

音声資料チーム「ハワイと北米へ渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」(朝日祥之, 時空間変異研究系准教授)

研究資源の共有化

人間文化研究機構を構成する6研究機関のデータベースを横断検索が可能な統合検索システムに次のデータベースを提供している。また、統合検索システムでの検索をより行いやすくするために人名一覧基盤システムの作成に協力している。

- ・ことばに関する新聞記事見出しデータベース
- ・蔵書目録(図書)データベース
- ・蔵書目録(雑誌)データベース
- ・日本語研究・日本語教育文献データベース
- ・『日本言語地図』画像データベース
- ・『方言文法全国地図』画像データベース
- ・米国議会図書館本源氏物語翻字本文データベース

○科学研究費補助金

研究種目	研究代表者	研 究 課 題 名	交付額 (千円) (直接経費)
基盤研究 (A) 一般	大西拓一郎	方言分布変化の詳細解明 ―変動実態の把握と理論の検証・構築―	5,300
基盤研究 (A) 一般	窪 蘭 晴夫	日本語諸方言のプロソディーとプロソディー体系の類型	8,700
基盤研究 (A) 海外	迫田久美子	海外連携による日本語学習者コーパスの構築 ―研究と構築の有機的な繋がりに基づいて―	9,700
基盤研究 (B) 一般	野田 尚史	実践的な読解教育実現のための日本語学習者の読解困難点・読解技術の実証的研究	1,600
基盤研究 (B) 一般	長崎 郁	北東ユーラシア少数言語の電子アーカイブ環境構築とドキュメンテーション研究	3,600
基盤研究 (B) 一般	浅原 正幸	言語コーパスに対する読文時間付与とその利用	3,500
基盤研究 (B) 一般	木部 暢子	方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究	4,800
基盤研究 (B) 一般	宇佐美 洋	言語運用に対する個人の評価価値観の形成とその変容に関する研究	2,200
基盤研究 (B) 一般	前川喜久雄	自発音声コーパスの分析による filled pause の音声学的特徴の解明	3,200
基盤研究 (B) 一般	高田 智和	字体記述のデジタル化に基づく文字規範史の定位	3,200
基盤研究 (C) 一般	籠宮 隆之	聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能を評価するための尺度の構築	1,300
基盤研究 (C) 一般	渡辺美知子	日英語話し言葉コーパスにおける言い淀み分類の精緻化と機能の対照分析	800
基盤研究 (C) 一般	山崎 誠	語彙分類の理論的整備に基づくシソーラスの改良に関する研究	1,200
基盤研究 (C) 一般	小木曾智信	近世口語文を対象とした形態素解析辞書の開発	1,400
基盤研究 (C) 一般	丸山 岳彦	自発的な話し言葉に見られる節連鎖構造の研究	1,500
基盤研究 (C) 一般	上野 善道	日本語危機方言アクセントの再調査による研究の深化	1,200
基盤研究 (C) 一般	小磯 花絵	自発音声における発話の継続・終了の予測に関わる韻律情報の解明	1,300
基盤研究 (C) 一般	井上 史雄	公用語の地域差に関する社会言語学的総合研究	1,200
基盤研究 (C) 一般	鏈水 兼貴	多様な方言資料の横断的分析による新たな方言分布研究	1,000
基盤研究 (C) 一般	井上 文子	方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究	1,200

基盤研究 (C) 一般	福永 由佳	多言語環境にある外国人の日本語観と言語選択に関する研究 ―在日パキスタン人を中心に	1,100
基盤研究 (C) 一般	柏野和佳子	「書き言葉的」と「話し言葉的」という文体差のある語の分析	1,000
基盤研究 (C) 一般	熊谷 康雄	大規模方言分布データの計量的分析方法の開発	1,500
挑戦的萌芽 研究	窪蘭 晴夫	「呼びかけイントネーション」に関する萌芽的研究	900
挑戦的萌芽 研究	三井はるみ	新規言語事象の集中的多角的調査による首都圏の言語状況の把握	1,200
挑戦的萌芽 研究	山口 昌也	即時性と教育効果を考慮した協調学習過程の構造化手法に関する研究	1,200
挑戦的萌芽 研究	野山 広	多言語社会に対応した言語サービスとサービス評価の在り方に関する萌芽的研究	1,500
若手研究 (B)	小西 光	近代口語文翻訳小説コーパスの構築と計量的文体研究	1,700
若手研究 (B)	南部 智史	文章と発話の自発性からみた主語標示の助詞「が・の」の計量的研究	1,100
若手研究 (B)	保田 祥	コーパスから取得しやすい情報と取得しにくい情報の研究	1,200
若手研究 (B)	ホワン ヒョン ギョン	韓国語サイソリにおける意味構造とプロソディの方言・言語対照研究	600
研究成果公開 促進費	木部 暢子	日本語危機方言データベース	4,400
特別研究員 奨励費	ジョン・ホイッ トマン (PHAN,J.D.)	ベト・ムオン語派の歴史比較研究	187
特別研究員 奨励費	前川喜久雄 (STRAFELLA.E.L.)	日伊辞典のための「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からのコロケーション抽出	1,000
特別研究員 奨励費	儀利古幹雄	アクセントの平板化現象から見た日本語の韻律的特性の解明	800
特別研究員 奨励費	津田 智史	新たな視点と調査法に基づく日本語諸方言アスペクトの研究	1,000
特別研究員 奨励費	青井 隼人	関係性に着目した宮古語音韻構造の探究	1,200

○受託事業

「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究」(木部暢子)
文化庁 2,484 千円

『国語研プロジェクトレビュー』(NINJAL Project Review)

個々の共同研究プロジェクトの研究活動の総体を展望することによって国語研全体の動向を展望する。年3回程度、オンラインで刊行し、まとめたものを冊子体で発行している。オンライン版は国語研ウェブサイトで公開し、冊子体は全国の大学図書館等で利用できる。

○第5巻第1号(2014年6月)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

窪蘭晴夫

「ピッチアクセント体系」の多様性」 pp.1-7.

影山太郎

「日本語複合動詞の言語類型論的意義」 pp.8-18.

横山詔一

「文字環境と単純接触効果」 pp.19-31.

ティモシー・J・バンス

「連濁とオノマトペの畳語」 pp.32-38.

〈受賞紹介〉

保田 祥

「同じ話を繰り返すとどうなるか」 pp.39-42.

〈著書紹介〉

窪蘭晴夫

Guest Editor: Haruo Kubozono, *Journal of East Asian Linguistics* Volume 22, Issue 4, Special issue on Japanese Geminate Obstruents, Springer, pp.43-44.

木部暢子

『じゃっで方言なおもしろとか』, 岩波書店, pp.45-46.

影山太郎

影山太郎 編『複合動詞研究の最先端 一謎の解明に向けて—』, ひつじ書房, pp.47-48.

丸山岳彦

益岡隆志, 大島資生, 橋本 修, 堀江 薫, 前田直子, 丸山岳彦 編『日本語複文構文の研究』, ひつじ書房, pp.49-51.

高田智和, 横山詔一

高田智和, 横山詔一 編『日本語文字・表記の難しさとおもしろさ』, 彩流社, pp.52-53.

小西 光

小西 光, 浅原正幸, 前川喜久雄「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報アノテーション」, 言語処理学会誌『自然言語処理』20 (2), pp.54-56.

○第5巻第2号(2014年10月)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

木部暢子

「奄美喜界島方言の親族語彙 —お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん—」 pp.57-67.

大西拓一郎

「方言分布の変化をとらえた！」 pp.68-77.

相澤正夫

「言語動態を多角的にとらえる ―コーパス調査と全国調査の複合活用―」 pp.78-88.

〈著書紹介〉

木部暢子

木部暢子, 小松和彦, 佐藤洋一郎 編『アジアの人びとの自然観をたどる』, 勉誠出版, pp.89-91.

宇佐美洋

宇佐美洋 著『「非母語話者の日本語」は, どのように評価されているか ―評価プロセスの多様性をとらえることの意義』, ココ出版, pp.92-93.

三樹陽介

三樹陽介 著『首都圏方言アクセントの基礎的研究』, おうふう, pp.94-95.

野田尚史

野田尚史, 高山善行, 小林 隆 編『日本語の配慮表現の多様性 ―歴史的変化と地理的・社会的変異―』, くろしお出版, pp.96-97.

○第5巻第3号 (2015年2月)

〈共同研究プロジェクト紹介〉

井上史雄

「敬語の成人後採用 ―岡崎敬語調査の「川」の字変化―」 pp.98-107.

金水 敏

「日本語の疑問文の歴史素描」 pp.108-121.

〈客員教員の研究紹介〉

エディス・オールドリッジ (Edith Aldridge)

「上代日本語における疑問詞の位置について」 pp.122-134.

〈受賞紹介〉

河瀬彰宏

「近世口語資料を構造化するときに生じる問題点」 pp.135-138.

〈著書紹介〉

ハイコ・ナロック

Edited by Silvia Luraghi and Heiko Narrog, *Perspectives on Semantic Roles*, John Benjamins, pp.139-140.

加藤 祥

保田 祥, 小西 光, 浅原正幸, 今田水穂, 前川喜久雄「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」, 言語処理学会誌『自然言語処理』20 (5), pp.141-142.

『国立国語研究所論集』(NINJAL Research Papers)

国立国語研究所における研究活動の活性化と成果の発表及び所内若手研究者の育成を目的として, 各年度に2回 (5月と11月), オンラインと冊子体の両形態で発刊している。

○第7号 (2014年5月)

浅原正幸, 今田水穂, 保田 祥, 小西 光, 前川喜久雄

「Web を母集団とした超大規模コーパスの開発 ―収集と組織化―」 pp.1-26.

浅井 淳

「連濁生起の傾向と定着化」 pp.27-44.

平野宏子

「『総合日本語』の授業で行うゼロ初級からの音声教育の実践 ―アクセント、イントネーションの自然性を重視した視覚化補助教材の使用―」 pp.45-71.

Stephen Wright Horn

“Projections of subordinate clauses in old Japanese: Corpus-based groundwork on inflectional types”, pp.73-91.

Mark Irwin

“Rendaku Across Duplicate Moras”, pp.93-109.

Kawahara Shigeto and Sano Shin-ichiro

“Testing Rosen's rule and strong Lyman's law”, pp.111-120.

河瀬彰宏

「日本民謡の大規模音楽コーパスを用いた旋律の構造抽出」 pp.121-120.

松田謙次郎

「形態素解析の大規模言語調査データへの応用 ―岡崎敬語調査パネルデータにおける名詞・代名詞・動詞の相対頻度数に対する話者性別効果の検証―」 pp.151-165.

南部智史, 朝日祥之, 相澤正夫

「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について ―札幌と富良野の言語調査データを利用して―」 pp.167-185.

小山内優子

「中期朝鮮語における2つの補文節について」 pp.187-198.

大滝靖司

「日本語と諸言語における借用語の重子音化」 pp.199-225.

下地賀代子

「南琉球・多良間島方言の格再考 ―ni: 格, Nka 格を中心に―」 pp.227-249.

塩田雄大

「終戦前の辞典に示された複合動詞のアクセントをめぐって ―帰納的記述と演繹的規範―」 pp.251-264.

辻加代子

「岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長 ―継続サンプルの分析より―」 pp.265-287.

上野善道

「喜界島方言のアクセント資料 (3)」 pp.289-310.

張 守祥

「黒龍江省方正県における日本語を中心とする言語景観」 pp.311-322.

○第8号 (2014年11月)

阿部 新

「世界各地の日本語学習者の文法学習・語彙学習についてのビリーフ ―ノンネイティブ日本語教師・日本人大学生・日本人教師と比較して―」 pp.1-13.

Razaul Karim Faquire

“Revisiting relative clauses in Japanese, with reference to Bangla”, pp.15-31.

福永由佳

「在日外国人の多言語使用に対する Ethnolinguistic Vitality Theory の適応可能性 —在日パキスタン人の事例—」 pp.33-50.

今田水穂

「日本語名詞述語文への意味情報付与」 pp.51-76.

金澤裕之

「『大学生生活を充実にご過ごすために…』—新用法発生の契機に関する一考察—」 pp.77-83.

加藤 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「語りかける書きことばの表現」 pp.85-108.

桑原陽子, 山口美佳

「中国語系初級日本語学習者がホテル検索サイトを読むときの困難点」 pp.109-127.

高田智和, 小助川貞次

「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビューアの作成と教育利用事例」 pp.129-140.

上野善道

「徳之島浅間方言のアクセント資料 (1)」 pp.141-175.

柳村 裕

「ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因 —岡崎敬語調査から—」 pp.177-196.

鎌水兼貴

「『首都圏の言語』をめぐる概念と用語に関して」 pp.197-222.

NINJAL フォーラムシリーズ

一般の方向けの講演会として「NINJAL フォーラム」を年に数回開催し, その内容を「NINJAL フォーラムシリーズ」として公開している。

○NINJAL フォーラムシリーズ5『近代の日本語はこうしてできた』(2014年7月31日)

(2014年3月30日に開催された国立国語研究所第7回 NINJAL フォーラムでの講演を文字化したもの)

日本社会の近代化が進む明治時代から昭和時代初期は, 新しい日本語への変革と変化の時代でもあった。このフォーラムでは, 社会の近代化において言語に何が求められたのか, 社会の変化とともに日本語はどう変わっていったのか, について考える。標準語制定や言文一致を求める言語改革はどのように進められたのか, 新しい語彙や表現法はどのように作り出され定着したのか, それらの重要な手段であった教育やメディアはどのような役割を果たしたのかなど, 様々な角度から近代の日本語を見つめる。

《目次》

あいさつ 影山太郎 p.1

講演1 清水康行 (日本女子大学)

「『標準語』制定を求めた時代の動き」 pp.4-12.

講演2 小林千草 (東海大学)

「『新しい女』の誕生とことば」 pp.13-22.

講演3 田中牧郎 (国立国語研究所)

「漢語が日本語に溶け込むとき」 pp.23-38.

講演 4 齋藤希史（東京大学）

「新しい世界のことばとしての漢字表現」 pp.39-47.

講演 5 土屋礼子（早稲田大学）

「近代日本語における識字とメディア」 pp.48-56.

パネルディスカッション

（司会：小木曾智信，パネル：清水康行，小林千草，田中牧郎，齋藤希史，土屋礼子） pp.57-65.

5 2014 年度公開中のコーパス・データベース

Web サイトにおいて、共同研究の成果としてのコーパスおよびデータベースを公開しているが、2014 年度は下記資料の公開（ないし公開の継続）を行った。

データベース

- Web データに基づく複合動詞データベース（開発版）

動詞連用形＋動詞型の複合動詞の使用例を Web から収集し、共起する格関係などが分かるようにしたデータベース。

- Web データに基づくサ変動詞用例データベース

- Web データに基づく形容詞用例データベース

- トピック別アイヌ語会話辞典（2015.1）

『音声付きアイヌ語辞典 一新編 金澤版アイヌ語会話辞典』にトピック検索（日本語・英語）、見出し語（アイヌ語・日本語・英語）検索機能などを追加したもの。

- 複合動詞レキシコン（国際版）

日本語研究者および外国人日本語学習者を対象として、約 2700 語の動詞連用形＋動詞型複合動詞の言語学的な分析に基づいて内部構造、格パターン、意味・用例などの情報を付与したもの。

- 使役交替言語地図（2014.6）

世界の 60 言語について形態的関連のある有対動詞の形式的な関係を可視化したもの。

- 基本動詞ハンドブック（2014.4）

日本語学習者・日本語教師が基本動詞の理解を深めることができるように、基本動詞の多義的な意味の広がりについて図解などを用いて分かりやすく解説したもの。

- 寺村誤用例集データベース

寺村秀夫『外国人学習者の日本語誤用例集』（1990 年，科研費研究報告，大阪大学）を電子化し、各種の検索ができるようにしたもの。

- ことばに関する新聞記事見出しデータベース

1949 年から 2009 年 3 月までの新聞記事の切り抜きを電子化し、検索できるようにしたもの。

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文

米国議会図書館アジア部日本課との研究協力により、同図書館が所蔵する『源氏物語』（全 54 冊）の翻字本文を電子化したもの。

国立国語研究所の研究図書室が所蔵する資料の画像公開・研究文献情報等

- 米国議会図書館蔵『源氏物語』画像

米国議会図書館アジア部日本課が所蔵する『源氏物語』のうち、「桐壺」、「須磨」、「柏木」の原本

画像を閲覧できる。

- ・『金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教王經』 画像
- ・『古今文字譜』 画像
- ・『聖遊郭（雪月花）』『傾城買二筋道』『河東方言箱枕』『潮来婦誌』 画像
- ・『しちすつ仮名文字使蜆縮涼鼓集』『牛店雑談安愚楽鍋』『国民之友』 画像（2014.7）
- ・『易林本節用集』『和字正濫鈔』『諸国方言物類称呼』『玉菊全伝花街鑑』 画像（2015.1）
- ・『明六雑誌』 画像
- ・国立国語研究所 刊行物データベース

過去に国立国語研究所から発行された各種資料・書誌情報等を電子化したもの。

- ・日本語研究・日本語教育文献データベース

2009 年以前に刊行された『国語年鑑』と『日本語教育年鑑』の中から研究論文文献の情報を抜き出してデータベース化するとともに、2009 年以降の学術雑誌、大学紀要、論文集などに掲載された日本語学・日本語教育に関する論文情報を毎年追加し、年 3 回程度更新している。

- ・雑誌『国語学』全文データベース

国語学会（現在、日本語学会）の機関誌『国語学』全巻（第 1 輯（1948 年）～終刊第 219 号（2004 年））の全文テキストデータベース

- ・国立国語研究所蔵書目録データベース

日本で唯一、日本語及び日本語教育に関する研究文献をほぼ網羅的に収集している本研究所の研究図書室に所蔵された全図書が検索できるデータベース。

KOTONOHA 計画によるコーパス等

日本語の書き言葉や話し言葉を、その実態を調べることができるように電子化したコーパス（言葉のデータベース）。豊富な情報を付加し、検索ツールとともに提供している。

- ・現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）

現代の書き言葉の縮図となるように設計された 1 億語をおさめる。次の検索方法を提供している。

- ・少納言（オンライン利用。登録不要）

文字列検索で、簡単な検索ができる。例文や出典情報は、500 件まで表示。

- ・中納言（オンライン利用。要登録）

本文を単語に区切り見出し語や品詞などの情報が付与されたコーパスが検索できる。前後の単語や品詞などを指定した高度な検索も可能。

- ・DVD 版（要申し込み。アカデミック利用または一般利用）

コーパスのすべてのデータを収録。プログラムを組んで分析する専門家向き。

- ・NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）

レキシカルプロファイリングという手法を用いたコーパス用検索ツール。

- ・日本語話し言葉コーパス（CSJ）

講演やスピーチなどの独話について、音声、転記テキスト、それらへの豊富な付加情報を収める。

- ・日本語歴史コーパス（平安時代編、室町時代編 I 狂言（2015.3））

平安時代を中心とする古典作品に、単語の情報を付けたもの。『中納言』によるオンライン公開。今後も増補の予定。

- ・近代語のコーパス

- ・太陽コーパス

明治後期から大正期によく読まれた総合雑誌『太陽』を対象としたコーパス。CD-ROM による

市販。『ひまわり』による検索。

- ・近代女性雑誌コーパス

太陽コーパスと同じ時代の、女性を読者とする雑誌3誌を対象としたコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。

- ・明六雑誌コーパス

明治初期の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』全文に、単語の情報を付与したコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。原本画像参照機能付き。

- ・国民之友コーパス（2014.9）

明治中期の雑誌『国民之友』の1～36号（1887～1888年刊）全文に、単語の情報を付与したコーパス。ダウンロード公開。『ひまわり』による検索。原本画像参照機能付き。

- ・形態素解析辞書 UniDic

コーパスに形態論情報（単語の情報）を付与するための、コンピュータ用の辞書。解析器とともに用いることで、電子テキストに自動的に単語情報を付与することができる。対象とするコーパスの時代別に3種を公開。

UniDic-MeCab（現代語用）、中古和文 UniDic、近代文語 UniDic

- ・コーパス検索ツール

- ・全文検索システム『ひまわり』

コーパスを高速に検索し、前後の文脈や出典の情報とともに、閲覧できるシステム。パソコンにインストールして利用。

- ・『ひまわり』支援ツール

既存の電子テキストや自作のコーパスを、『ひまわり』で検索できるようにするツール。

- ・『たんぽぽ』、『プリズム』

構造化された電子テキストから情報を抽出し検索するツール。

- ・作文支援システム TEeachOtherS

学習者と教師が教え合いながら作文するのを支援する、添削システム。

- ・『分類語彙表増補改訂版』（研究用データ）

語を意味によって分類した『分類語彙表』の電子データ。見出し語や分類番号などを、データベースソフトに取り込める CSV 形式で公開。

方言・言語生活の調査研究

- ・日本言語地図

1966年～1974年にかけて刊行した『日本言語地図』に掲載された全地図の画像を PDF 形式で公開したもの。

- ・方言文法全国地図

1989年～2006年に刊行した『方言文法全国地図』所載の全地図の画像を PDF で公開したもの。

- ・方言研究の部屋

- ・全国方言談話データベース「日本のふるさとことば集成」

日本語教育に関する研究・資料等

- ・日本語学習者発話コーパス『C-JAS』

日本で日本語を第二言語として学んでいる学習者の発話コーパス（要会員登録）

- ・研究用データ（要会員登録）

- ・日本語学習者会話データベース
- ・日本語学習者会話ストラテジーデータ
- ・言語行動意識調査
- ・日本語自然会話書き起こしコーパス（旧名大会話コーパス）
- ・日本語学習者会話データベース 縦断調査編

その他

- ・外来語言い換え提案
- ・「病院の言葉」を分かりやすくする提案
- ・現代雑誌 200 万字言語調査語彙表
- ・「学校の中の敬語」調査（アンケート調査）のデータ公開
- ・国際社会における日本語についての総合的研究（新プロ「日本語」）

6 研究成果の発信と普及

国語研では、研究成果を社会に発信・還元するために、各種のシンポジウムや研究会を開催している。ここでは専門家向けのものを挙げる。

A. 国際シンポジウム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた研究成果のうち、時宜を得た課題を取り上げ、海外からの専門家も交えて、論旨を深めながら学術界に公表するため、国際シンポジウムの開催や国際学会の共催をしている。

I. NINJAL 国際シンポジウム

○FAJL 7 - Formal Approaches to Japanese Linguistics 7

2014 年 6 月 27 日（国立国語研究所）、28 日～29 日（国際基督教大学）

6 月 27 日

Opening remarks

Junko Ito (UCSC)

Taro Kageyama (NINJAL)

General Session 1 [Chair: Masao Ochi (Osaka U.)]

Masahiro Akiyama (Ehime University)

“The syntax of focus-doubling in Japanese”

Toru Ishii (Meiji University)

“On coordinated multiple wh-questions”

Poster Session 1

General Session 2 [Chair: Haruo Kubozono (NINJAL)]

Miwako Hisagi (MIT), Valerie Shafer (CUNY), Shigeru Miyagawa (MIT), Hadas Kotek (MIT), Ayaka Sugawara (MIT), and Dimitrios Pantazis (MIT)

“Perception of Japanese vowel duration contrasts by L1 and L2 learners of Japanese: An

EEG study”

Ryan Bennett (Yale University)

“Foot structure and cognitive bias: An artificial grammar investigation”

Poster Session 2

General Session 3 [Chair: John Whitman (NINJAL)]

-Invited Talk-

Liliane Haegeman (Ghent University)

“How movement restricts the encoding of information structure”

6 月 28 日

General Session 4 [Chair: Tomoyuki Yoshida (ICU)]

-Invited Talk-

Satoshi Tomioka (University of Delaware)

“Remarks on argument ellipsis and related matters”

Uli Sauerland (ZAS), and Kazuko Yatsuhiro (ZAS)

“Japanese reported speech within the emerging typology of speech reports”

General Session 5 [Chair: Yurie Hara (City U of Hong Kong)]

Daisuke Bekki (Ochanomizu University), Eric McCready (Aoyama Gakuin University), and Narumi Watanabe (Ochanomizu University)

“Japanese honorification: Compositionality and expressivity”

Megumi Ishikawa (University of Tokyo), Manabu Arai (University of Tokyo), and Yuki Hirose (University of Tokyo)

“Shared structural representations for short and full passives in Japanese children and adults”

Poster Session 3

General Session 6 [Chair: Haruka Fukazawa (Keio U.)]

Alexei Kochetov (University of Toronto)

“Japanese in the typology of nasal assimilation: Electropalatographic evidence”

Akiko Takemura (Kobe University), Itsue Kawagoe (Kyoto Sangyo University), and Shigeto Kawahara (Keio University)

“The perception of gemination in English word-internal clusters by Japanese listeners”

General Session 7 [Chair: Yoshi Kitagawa (Indiana University)]

Miyoko Yasui (Dokkyo University)

“Innocuousness of {XP, YP} as a root clause in Japanese and English”

Hajime Ikawa (Aoyama Gakuin University)

“Scrambling as an operation affecting only elements with phonetic content”

General Session 8 [Chair: Shigeru Miyagawa (MIT)]

-Invited talk-

Kazuo Okanoya (University of Tokyo)

“Birdsong for biolinguists”

6 月 29 日

General Session 9 [Chair: Armin Mester (UCSC)]

-Invited talk-

Shinichiro Ishihara (Goethe University Frankfurt am Main)

“On match constraints”

Shinichiro Sano (Okayama Prefectural University)

“Examining lexical and phonological factors on rendaku in spontaneous speech”

General Session 10 [Chair: Hajime Ono (Tsuda College)]

Satoshi Nambu (NINJAL), and Kentaro Nakatani (Konan University)

“An experimental study on adjacency and nominative/genitive alternation in Japanese”

Ayaka Sugawara (MIT), and Ken Wexler (MIT)

“Children do not accept unambiguous inverse-scope readings: experimental evidence from prosody and scrambling in Japanese”

Yuta Sakamoto (University of Connecticut)

“Phases, argument ellipsis, and “antecedent-contained deletion” in Japanese”

○LabPhon14 (The 14th Conference on Laboratory Phonology)

2014 年 7 月 25 日～27 日（国立国語研究所）

7 月 25 日

SESSION 1 [Chair: Shigeto Kawahara (Keio University)]

Reiko Mazuka (RIKEN Brain Science Institute)

[Invited] “Infant-directed speech as a window into the dynamic nature of phonology”

Comments and Discussion: Catherine T. Best (University of Western Sydney)

SESSION 2 [Chair: Emiko Kaneko (University of Aizu)]

Felicitas Kleber (Ludwig-Maximilians-University), and Sandra Peters (Ludwig-Maximilians-University)

“Children’s imitation of coarticulatory patterns in different prosodic contexts”

Eleanor Lawson (Queen Margaret University), James M. Scobbie (Queen Margaret University), and Jane Stuart-Smith (University of Glasgow)

“An investigation into articulatory adaptation during acoustic mimicry of postvocalic /r/”

Jacqui Nokes (University of Canterbury)

“Dolls are prissy: Preschoolers’ toy preferences predict medial /t/ production”

SESSION 3 [Chair: Mariko Kondo (Waseda University)]

Melissa A. Redford (University of Oregon), Zahra Foroughifar (University of Oregon), and Laura C. Dilley (Michigan State University)

“Constraints on prosodic phrasing in children’s speech”

Georgia Zellou (University of Pennsylvania), Rebecca Scarborough (University of Colorado), and Eric Doty (University of Pennsylvania)

“The role of lexical age-of-acquisition on phonetic variation in natural infant-directed speech”

Matthew Masapollo (McGill University), Linda Polka (McGill University), and Lucie Ménard (Université du Québec à Montréal)

“Pre-babbling infants prefer listening to infant speech: A launch pad for the perception-production loop?”

Catherine T. Best (University of Western Sydney), Christian H. Kroos (University of Western Sydney), Sophie Gates (University of Western Sydney), and Julia Irwin (University of Western

Sydney)

“Baby steps in perceiving articulatory foundations of phonological contrasts: infants detect audio → video congruency in native and nonnative consonants”

POSTER SESSION 1

SESSION 4 [Chair: Keiichi Tajima(Hosei University)]

Eleanor Chodroff (Johns Hopkins University), and Colin Wilson (Johns Hopkins University)

“Phonetic vs. phonological factors in coronal-to-dorsal perceptual assimilation”

Elizabeth Casserly (Indiana University), and David B. Pisoni (Indiana University)

“The usefulness of chaos: Lab versus non-lab speech for perceptual learning”

Yu-an Lu (National Chiao Tung University), and Jiwon Hwang (Stony Brook University)

“The effect of perceptual similarity in second language learning: Positional asymmetry in Phoneme substitution”

Ellen Aalders (Radboud University Nijmegen), and Mirjam Ernestus (Max Planck Institute Nijmegen)

“Sensitivity to fine acoustic detail affects comprehension of reduced speech in L2”

James Kirby (University of Edinburgh), and D. Robert Ladd (University of Edinburgh)

“Voicing, F0, and phonological enhancement”

ALP GENERAL MEETING

7月26日

SESSION 5 [Chair: Takayuki Arai(Sophia University)]

Mark Hasegawa-Johnson (University of Illinois at Urbana-Champaign)

[Invited] “Labeling in the wild: Crowdsourcing versus categorical perception”

Comments and Discussion: Natasha Warner (University of Arizona)

SESSION 6 [Chair: Ian Wilson(University of Aizu)]

Jane Stuart-Smith (University of Glasgow), Morgan Sonderegger (McGill University), Rachel Macdonald (University of Glasgow), Thea Knowles (McGill University), and Tamara Rathcke (University of Kent)

“The private life of stops: VOT in a real-time corpus of spontaneous Glaswegian”

Satsuki Nakai (University of Glasgow), and James M. Scobbie (Queen Margaret University)

“Articulation rate and VOT in spontaneous speech”

Rebecca L. Starr (National University of Singapore), and Stephanie S. Shih (University of California, Berkeley)

“The syllable as a prosodic unit in Japanese lexical strata: Evidence from text-setting”

Yoonjung Kang (University of Toronto Scarborough), Tae-Jin Yoon (Cheongju University), and Sungwoo Han (Inha University)

“Lexical diffusion of vowel length merger in Seoul Korean: A corpus-based study”

SESSION 7 [Chair: Kiyoko Yoneyama (Daito Bunka University)]

Alan C. L. Yu (University of Chicago), Daniel Chen (ETH Zurich), Katie Franich (University of Chicago), Jacob Phillips (University of Chicago), Betsy Pillion (University of Chicago), Yiding Hao (University of Chicago), and Zhigang Yin (University of Chicago)

“The peril of sounding manly: A look at vocal characteristics of lawyers before the United States Supreme Court”

Grant McGuire (University of California, Santa Cruz), and Molly Babel (University of British Columbia)

“Stereotypes predict memory effects for voices”

Annika Nijveld (Radboud University Nijmegen), Martijn Bentum (Radboud University Nijmegen), and Louis ten Bosch (Radboud University Nijmegen)

“The role of exemplars in speech comprehension”

Yao Yao (Hong Kong Polytechnic University), and Christine Meunier (Aix Marseille Université)

“Effects of phonological neighborhood density on phonetic variation: The curious case of French”

POSTER SESSION 2

SESSION 8 [Chair: Shin-Ichiro Sano (Okayama Prefectural University)]

Yasuharu Den (Chiba University)

[Invited] “Some cognitive factors behind vowel lengthening in spontaneous Japanese: A corpus-based study”

Comments and Discussion: Shu-Chuan Tseng (Institute of Linguistics, Academia Sinica)

7 月 27 日

SESSION 9 [Chair: Shigeko Shinohara (Sophia University)]

Carlos Gussenhoven (Radboud University Nijmegen)

[Invited] “On establishing the existence of word stress”

Comments and Discussion: Aditi Lahiri (University of Oxford)

SESSION 10 [Chair: Shinichiro Ishihara (Goethe University Frankfurt am Main)]

Oliver Niebuhr (Kiel University), and Jarich Hoekstra (Kiel University)

“Pointed and plateau-shaped pitch accents in North Frisian dialects”

Nora Fangel-Gustavson (CNRS/Sorbonne Nouvelle), and Bruce Morén-Duolljá (University of Tromsø)

“Quantity contrast in Lule Saami: A three-way system”

Janet Fletcher (University of Melbourne), Ruth Singer (University of Melbourne), and Debbie Loakes (University of Melbourne)

“Prominence, phrasing, and information structure in Mawng (Australian)”

Rikke Bundgaard-Nielsen (La Trobe University), and Brett Baker (University of Melbourne)

“No VOT perception without native VOT experience”

POSTER SESSION 3

SESSION 11 [Chair: Mafuyu Kitahara (Waseda University)]

Kathleen Currie Hall (University of British Columbia), Hanna Smith (University of British Columbia), Kevin McMullin (University of British Columbia), Noriko Yamane (University of British Columbia), Blake Allen (University of British Columbia), and Joash Gambarage (University of British Columbia)

“Articulatory correlates of phonological relationships”

Leonardo Lancia (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology)

“Invariant coupling relations at the core of variable speech trajectories”

Lisa Davidson (New York University), Sean Martin (New York University), and Colin Wilson (Johns Hopkins University)

“Acoustic variability aids the interpretation of phonetic detail in cross-language speech Production”

General Discussion

7 月 28 日

Satellite Workshop

Theme: Gestural coordination within and between speakers in first language phonological acquisition

Organizers: Felicitas Kleber (Ludwig-Maximilian-Universität München), Mary E. Beckman (Ohio State University)

○「移動事象の言語化における類型と認知」

2015 年 1 月 24 日～ 25 日（国立国語研究所）

1 月 24 日

招待講演 1

Iraide Ibarretxe-Antuñano

“Beyond motion event typology: Minority languages, linguistic resources and variation”

発表 1 [Chair: Takahiro Morita]

Efstathia Soroli and Annemarie Verkerk

“Motion events and synchronic variation in Greek: Theoretical and methodological issues”

Claudio Iacobini

“The typology of motion expression between system and usage: A corpus-based variationist analysis of the Latin language”

発表 2 [Chair: Kimi Akita]

Laure Sarda

“Structural asymmetry in the expression of Source and Goal in French: From lexical semantics to discourse strategies”

Kyosuke Yamamoto

“The degree of clause integration in motion expressions in Ilocano”

Yo Matsumoto, Fabiana Andreani, Anna Bordilovskaya, Monica Kahumburu, Naonori Nagaya, Ryosuke Takahashi, Yuki-Shige Tamura, and Yuko Yoshinari

“Path coding with or without manner specification: A cross linguistic study”

発表 3 [Chair: Naonori Nagaya]

Kazuhiro Kawachi

“Typological properties and construction choices in video descriptions of motion events in Kusapiny (Nilotic, Uganda) and Sidaama (Cushitic, Ethiopia)”

Ryosuke Takahashi

“Path coding in German: A case study focusing on the notion 'INTO'”

発表 4 [Chair: Miho Mano]

Hiroaki Koga

“Deictic information in the linguistic expression of motion events: A cross-linguistic comparison”

Ikuko Matsuse

“Motion expressions in Newar: Prominence of deictic causative verbs”

Naonori Nagaya

“Expressing motion events without deictic motion verbs: The case of Tagalog”

1 月 25 日

招待講演 2

Teresa Cadierno

“Motion event descriptions in a second language: Where are we now?”

発表 1 [Chair: Hiroaki Koga]

Miho Mano and Yuko Yoshinari

“Expressing call-induced motion events in English and Japanese as second languages”

Hiroshi Yoshino

“Expressions of motion events in 'Alle (East Cushitic)”

ポスター発表

Anna Bordilovskaya

“The description of motion events in contemporary spoken Russian: Data analysis of experimental study”

Kazuhiro Kawachi

“Fictive motion of the line of sight and the use of the verbs for turning in Sidaama (Cushitic, Ethiopia)”

Kazuhiro Kawachi, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino

“Motion expression patterns in African languages”

発表 2 [Chair: Prashant Pardeshi]

Efstathia Soroli, Maya Hickmann, Henriëtte Hendriks, Helen Engemann, and Coralie Vincent

“Language effects on spatial cognition? Cross-linguistic evidence and eye-tracking”

Johan Blomberg

“Non-actual motion in Swedish, French and Thai”

Kiyoko Takahashi

“On idiomatically combining expressions containing the inward/outward motion verb in Thai”

招待講演 3

Asifa Majid

“Categorising human locomotion in language and thought”

発表 3 [Chair: Kazuhiro Kawachi]

Takahiro Morita, Kazuhiro Kawachi, Yuko Yoshinari, Fabiana Andreani, Ikuko Matsuse, and Badema

“An enigma of manner expressions: Saliency, frequency, and degree of integration”

Kimi Akita and Yo Matsumoto

“Frequencies of manner specifications and manner types: A finer-grained analysis in English and Japanese”

II. その他の国際会議

○International Symposium “Crosslinguistics and Linguistic Crossings in Northeast Asia”

2014 年 11 月 28 ～ 29 日（ヘルシンキ大学）

11 月 28 日

Opening of HALS Field Seminar 2

Ekaterina Gruzdeva and Juha Janhunen (University of Helsinki)

Session 1: Field observations from Sakhalin [Chair: Ksenia Shagal]

Andrew Logie (University of Helsinki)

“Untold Tales: two lesser known personal and social-linguistic histories of Sakhalin Koreans”

Eeva-Maria Heinonen and Suvi Valsta (University of Helsinki)

“Sakhalin Japanese – an overview of the linguistic situation with special focus on Japanese pitch accents”

Merja Pikkarainen (University of Helsinki)

“Linguistic biographies of the indigenous peoples on Sakhalin”

Juha Luukkonen (University of Helsinki)

“Attrition of consonant mutation in Nivkh”

Erika Sandman (University of Helsinki)

“Observations on the use of Nivkh numeral classifiers”

Arttu Anttonen, Saana Santalahti, and Turo Ylitalo (University of Helsinki)

“The traditional Nivkh kinship terminology and its use amongst modern Nivkh”

Merja Salo (University of Helsinki)

“Meteorological expressions in Nivkh”

Session 2: Comparative issues of Sakhalin (Karafuto) and Hokkaido [Chair: Hiroshi Nakagawa]

Yoshiyuki Asahi (NINJAL)

“Sociolinguistics of Karafuto and Sakhalin Japanese”

Riikka Länsisalmi (University of Helsinki)

“Northern Voices: Comparing language attitudes in recent surveys on Ainu and Sámi”

Janne Saarikivi (University of Helsinki)

“Some observations on social history of the Nivkh (on the basis of toponymic and sociolinguistic material)”

Itsuji Tangiku (Hokkaido University)

“Loan words among Nivkh, Uilta and Sakhalin Ainu”

Juha Janhunen (University of Helsinki)

“Reconstructio externa linguae ghiliacorum”

11 月 29 日（土）

Session 3: Nominalization in the languages of Northeast Asia [Chair: Janne Saarikivi]

Ksenia Shagal (University of Helsinki)

“Participial relative clauses in Sakhalin languages”

Iku Nagasaki (NINJAL)

“Nominalization and related functions in Kolyma Yukaghir”

Yukari Nagayama (Hokkaido University)

“Nominalization in Alutor”

Anna Bugaeva (NINJAL)

“The development of nominalization strategies in Ainu”

John Whitman (Cornell University)

“Nominalization to main clause in Northeast Asia”

Session 4: History and synchrony in the Northeast Asian linguistic area [Chair: John Whitman]

Shinjiro Kazama (Tokyo University of Foreign Studies)

“On the similarity between Mongolic, Tungusic and Eskimo-Aleut languages”

Tomomi Sato (Hokkaido University)

“A classification of Ainu noun incorporation and its implications for typology in word formation”

Hiroshi Nakagawa (Chiba University)

“Verbal Number in Ainu”

Ekaterina Gruzdeva (University of Helsinki)

“Epistemic modality and related categories in Nivkh”

Discussion about future cooperation

Closing of HALS Field Seminar 2

Ekaterina Gruzdeva and Juha Janhunen (University of Helsinki)

B. 研究系の合同発表会

○NINJAL 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから―」

2014 年 12 月 6 日～7 日（国立国語研究所）

12 月 6 日

発表

小磯花絵

「会話コーパスの構築と日本語研究」

木部暢子

「方言コーパスの構築と日本語研究」

ブース展示

「学習者コーパス (C-JAS)」, 「方言コーパス」, 「LAJ データベース」 他

発表

迫田久美子

「学習者コーパスの構築と日本語研究」

小木曾智信

「歴史コーパスの構築と日本語研究」

12 月 7 日

パネルディスカッション

小磯花絵, 木部暢子, 迫田久美子, 小木曾智信

講演

前川喜久雄

「コーパスがもたらすものと要請するもの」

分科会

会話コーパス：コーディネーター 小磯花絵

方言コーパス：コーディネーター 木部暢子

学習者コーパス：コーディネーター 迫田久美子

歴史コーパス：コーディネーター 小木曾智信

○研究成果発表会 2015

国語研の柱である基幹型共同研究プロジェクトの中からいくつかを選び、その学術的成果（何を発見したか、何を作ったか）の概要を披露する発表会を開催した。

2015年1月31日（土）一橋大学一橋講堂（学術総合センター2階）

開会の辞：国語研の現在（所長 影山太郎）

[口頭発表]

理論・構造研究系の基幹型研究

横山詔一

「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用 一言語意識・行動の変化予測を中心に―」

ティモシー・バンス

「上代語連濁データベース ―オックスフォード大学上代日本語コーパスとの連携―」

時空間変異研究系の基幹型共同研究

相澤正夫

「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 ―研究成果の概要―」

大西拓一郎

「方言の形成過程解明のための全国方言調査 ―方言分布の実時間経年比較により何が明らかになったか―」

[共同研究プロジェクトのポスター展示とデモンストレーション]

理論・構造研究系

窪蘭晴夫

「日本語レキシコンの音韻特性」

影山太郎，神崎享子

「オンライン辞書『複合動詞レキシコン（国際版）』」

時空間変異研究系

木部暢子

「消滅危機方言の音声データベース」

井上史雄

「大規模経年調査から」

金水 敏

「日本語疑問文の歴史素描」

言語資源研究系

浅原正幸

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する統語意味論情報アノテーション」

小木曾智信，市村太郎

「日本語歴史コーパス・虎明本狂言集の公開」

言語対照研究系

アンナ・ブガエワ

「トピック別アイヌ語オンライン辞典の公開へ向けて」

日本語教育研究・情報センター

福永由佳

「グローバリゼーションにおける言語生活研究 ―移動性と言語レパートリーを中心に―」

宇佐美洋

「『4 技能分断』という常識を疑う ―協働の要としての評価研究―」

コーパス開発センター

加藤 祥

「大規模言語資源からの情報取得の可能性と問題点」

[口頭発表]

言語資源研究系

田中牧郎

「『日本語歴史コーパス』―設計から構築へ―」

浅原正幸

「超大規模コーパスの収集・組織化技術」

言語対照研究系

ブラシャント・パルデン

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性 ―理論的および応用的な成果―」

日本語教育研究・情報センター

迫田久美子

「学習者コーパスと日本語の第二言語習得研究」

野田尚史

「日本語学習者の読解調査から「読む」ための文法へ」

理論・構造研究系

○レキシコン・フェスタ

2015 年 2 月 1 日（国立国語研究所）

窪菌晴夫

「アクセントと音節・モーラ」

小磯花絵

「日常会話コーパスの構築に向けて」

三井はるみ

「九州西部方言における条件表現の体系と多様性」

高田智和，銭谷真人，矢田勉，斎藤達哉，小助川貞次，當山日出夫

「情報交換用変体仮名の選字」

由本陽子，伊藤たかね，杉岡洋子

「「ひとつまみ」と「ひと刷毛」：モノとコトを測る「ひと」の機能」

宮川 繁

「複合語と言語進化論」

ポスターセッション A

儀利古幹雄，竹安 大

「町名における平板型アクセントの生起要因について」

Donna Erickson, Jeff Moore, Atsuo Suemitsu, and Yoshiho Shibuya

“The jaw keeps the beat: Speech rhythm in English, Japanese and Mandarin”

松浦年男, 五十嵐陽介

「天草諸方言における複合語と外来語のアクセント」

松井理直

「摩擦音に後続する狭母音の性質と母音無声化について」

難波えみ, 玉岡賀津雄

「副詞と動詞の共起表現の多様性に関するコーパス研究」

梁 敏鎬

「ローマ字表記の外来語化－潜在的な外来語をめぐって－」

中澤信幸, ティモシー・J・バンス, マーク・アーウィン

「台湾人日本語学習者の連濁意識について —銘傳大学学生を対象として—」

Hyun Kyung Hwang and Satoshi Ito

“Correlations between prosody and epistemic bias in negative polar interrogatives in Japanese”

Takayo Sugimoto

“On the preschooler-specific Rendaku strategy: A longitudinal study of an English-Japanese simultaneous bilingual”

ポスターセッション B

Manami Hirayama

“Complete or incomplete? Neutralization between "true" and derived geminates in Japanese”

田川拓海, 松浦年男

「複合動詞の連用形名詞データベースの構築」

中村明裕

「長野県木曾町開田高原方言のアクセント」

瀧口いずみ

「日本語学習者の母音長対立知覚における母語・発話速度・ピッチ型の影響」

熊 可欣, 玉岡賀津雄

「中国人日本語学習者による日中同形語の統語情報への非選択的アクセス」

金 剣峰, 野崎造成, 江島徹郎, 梅田恭子

「情報分野の日中専門用語辞書の開発とその授業実践的研究」

浅井 淳

「連濁における典型形への参照性」

Kohei Nishimura

“Prosodic division in Japanese compounding and morphological correspondence”

時空間変異研究系

○Japanese Language Variation and Change Conference 2015

2015年3月7日（国立国語研究所）

ワークショップ セッション1「調査票データの整備と活用」

松丸真大

「方言分布調査におけるデータの整備と活用」

阿部貴人

「社会調査データの整備・公開・活用」

指定討論者：荻野綱男，司会：大西拓一郎

ポスター発表

平塚雄亮

「甌島里方言の domo」

椎名渉子

「育児語の全国分布 ―全国方言分布調査より―」

塩川奈々美

「福岡県飯塚市と福岡県田川市における待遇表現 ―アスペクト（進行態）の疑問文を例に一」

峪口有香子，岸江信介

「瀬戸内海地域における言語変化 ―小豆島をフィールドとして―」

中澤光平

「項目間の分布の違いに基づく伝播過程の推定 ―淡路方言を例として―」

ワークショップ セッション2「録音資料・文献資料の整備と活用」

井上文子

「方言談話資料の場合 ―方言コーパスを事例に一」

金澤裕之

「SP 盤貴重音源資料の場合 ―岡田コレクションを事例に一」

志波彩子，金水 敏

「古典語・現代語資料の場合 ―コーパスからデータへ―」

指定討論者：石田基広，司会：朝日祥之

ワークショップ 全体討論

言語資源研究系

○第6回コーパス日本語学ワークショップ

2014年9月9日～10日（国立国語研究所）

9月9日

口頭発表（1）

孟 会君

「事象の構造から見る二重デ格構文の発生」

浅原正幸，加藤 祥，立花幸子，柏野和佳子

「文体指標と語彙の対応分析」

富士池優美

「平安初期歌合和歌の品詞比率」

庵 功雄，宮部真由美，永谷直子

「複数のコーパスを用いた新しい文法シラバス策定の試み」

口頭発表（2）

赤瀬川史朗，Prashant Pardeshi，今井新悟

「NINJAL-LWP の類義語比較機能」

竹内孔一

「述語項構造を意識した名詞の意味構造アノテーションのための名詞意味構造の検討」

狩野芳伸, 増田勝也

「テキストとアノテーションの汎用同時検索システム」

9月10日

ポスター発表 グループ A

森 秀明

「均衡性と代表性に配慮した『太陽コーパス』の分析法試論」

高丸圭一, 内田ゆず, 乙武北斗, 木村泰知

「地方議会会議録コーパスを用いたオノマトペの分析」

吉本秋水

「現代日本語の類義表現に関するテキスト言語学的研究 —「焦点を当てる」と「焦点を置く」に着目して—」

高橋圭子, 東泉裕子

「近代語コーパスにみる「結果」の用法」

小椋秀樹

「BCCWJにおける複合動詞後項の表記の実態」

森 大毅, 森本郁代, 大場美和子, 吉田悦子, 伝 康晴

「多様な会話コーパスを対象とした発話連鎖ラベリングの試み」

河瀬彰宏, 野田高広

「和文体および漢文体をもつ資料の構造化 —法華百座聞書抄の事例研究—」

渡辺由貴

「『虎明本狂言集』における「思ふ」と「存ず」—『虎明本狂言集』のコーパスデータを利用して—」

中野真樹

「日本語点字資料の語種的特徴」

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』を用いた既存言語資料の活用方法の検討」

服部 匡

「ハ／ガ使用の計量的研究 —有無・量的大小の述語の場合—」

ポスター発表 グループ B

李 楓

「漢語サ変動詞の卓立性の再考 —動詞形・構文形比率を手掛かりとして—」

難波えみ, 玉岡賀津雄

「コーパス検索による副詞の文中における基本生起位置の検討」

田邊和子

「BCCWJと日英パラレル新聞コーパスに基づいた格外連体修飾形の研究」

山崎 誠

「テキストにおける多義語の意味の集中度」

今田水穂

「拡張固有表現階層から SUMO への対応表」

田中牧郎

「明治後期における漢語の基本語化」

木田真理, Khommapat Prawang, 生田 守

「『勉強する』と『rian』の対象語の分析 —BCCWJ と TNC (Thai National Corpus) を用いて—」
Patrizia Zotti, Riccardo Apolloni, 松本裕治

「『バイリンガルコーパス・ナビゲーター』 オンライン日伊並列コンコーダンスの構築と活用」
水本智也

「語学学習 SNS の添削ログからの母語訳付き学習者コーパスの構築に向けて」
土屋智行, 伝 康晴, 小磯花絵

「韻律情報にもとづいた機能表現の抽出」
八木 豊, Bor Hodošček, 阿辺川武, 仁科喜久子

「日本語作文推敲支援システム「ナツメグ」における学習者評価実験から見られる課題」
太田真理, 太田 聡

「連濁に前部要素の音韻的特徴が与える影響：連濁データベースを利用した研究」
指定討論, 全体討論

○第7回コーパス日本語学ワークショップ

2015年3月10日～11日（国立国語研究所）

3月10日

チュートリアル・デモ

「全文検索システム『ひまわり』を用いた既存資料の活用」

口頭発表

ラニガン・マシュー

「コーパスシステム『Co-Chu』の開発 —MeCab 拡張データ処理機能について—」

浅原正幸, 加藤 祥, 立花幸子, 柏野和佳子

「文体指標と語彙系列の対応分析」

中川奈津子

「日本語話し言葉における情報構造と語順」

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する調査 —中間報告—」

ポスター発表 A グループ

加藤 祥

「象は鼻が長い —テキストから取得される対象物情報—」

浅原正幸, 加藤 祥

「文書間距離尺度の特性」

市原正陽, 山崎舞子, 古宮嘉那子

「BCCWJ における固有表現抽出のエラー分析」

山田祐実, 大村舞, 岡照晃, Kevin Duh, 松本裕治

「機械翻訳を用いた中古和文の現代語訳 —分析と課題—」

エルガ・ラウラ・ストラフェッラ, 前川喜久雄

「日本語教育とコロケーション：連語の形で用法を学ぶ重要性」

飯島采永, 佐藤果穂, 田中リベカ, 戸次大介

「MCN コーパスにおける条件表現「たら」「れば」「ならば」のアノテーション」

浅尾仁彦

「代名詞・疑問詞を含む複合語の調査」

ポスター発表 B グループ

佐藤理史, 夏目和子

「新しい日本語辞書定義文型の策定に向けて (第二報)」

浅原正幸, 森田敏生

「コーパスコンコーダンス『ChaKi.NET』のプロジェクト機能」

河内昭浩

「国語教育のための「常用漢字表」語例の検討」

中島道幸, 古宮嘉那子

「商品カテゴリの階層構造を用いた商品分類」

小林優稀, 古宮嘉那子, 佐々木稔, 新納浩幸, 奥村 学

「領域適応のためのサポートベクトルを用いた訓練事例の反復的選択」

天谷晴香

「会話における話者のうなずきと発話音声のプロミネンスの時間関係」

竹内孔一, 宮田 周, 河村一希

「述語項構造を意識した名詞データの構築」

3月11日

口頭発表

郭 敏

「コーパスに基づく日中副詞「絶対」と「绝对」の対照研究」

富士池優美

「中古歌合日記の品詞比率」

田邊和子

「BCCWJ に拠る名詞別格外連体修飾形の形成傾向の分析」

森 秀明

「代表性に配慮した『太陽コーパス』の分析法再考」

ポスター発表 A グループ

馬場俊臣

「BCCWJ の接続詞の品詞情報の解析精度について」

高橋雄太

「『太陽コーパス』における語彙素「あう」の用字法」

近藤明日子

「『国民之友コーパス』に現れる一人称代名詞の計量的分析」

久屋愛実

「『日本語話し言葉コーパス (CSJ)』の異なる講演タイプにおける外来語の質的分析 ―言語外的および言語内的指標を用いた外来語分類の試み―」

宮城 信, 今田水穂

「『児童・生徒作文コーパス』の設計」

渡辺由貴, 市村太郎, 鴻野知暁

「『虎明本狂言集』のコーパスデータにおける短単位認定の諸問題」

加藤恵梨

「否定の意志を表す「～まいとする」について」

ポスター発表 B グループ

栗田奈美

「BCCWJ」に見る類義表現「～きる」「～ぬく」「～とおす」の使い分け」

小西 光

「翻訳小説を資料とした品詞比率と文書間類似度による明治中期口語文体分析」

池上 尚

「中古語複合形容詞の一語性 ―[名詞+形容詞]とそれに類する複合形容詞的表現を中心に―」

間淵洋子

「二字漢語名詞サ変用法の変化 ―『太陽コーパス』『BCCWJ』を用いて―」

浅原正幸, 杉 真緒, 柳野祥子

「BCCWJ-SUMM:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を元文書とした要約文書コーパス」

趙 海城

「上級～超級日本語学習者の作文から見た言語産出実態」

山崎 誠, 相良かおる

「医療経過記録における名詞連続の計量的特徴」

指定討論

柏野和佳子, 馬場俊臣, 小磯花絵, 富士池優美, 古宮嘉那子, 佐藤理史

全体討論

言語対照研究系

○合同研究発表会 NINJAL Typology Festa 3

2014 年 12 月 13 日 (国立国語研究所)

Hidetoshi Shiraishi (Sapporo Gakuin University)

“Stress-dependent harmony in Ainu and Nivkh”

John Whitman (NINJAL)

“Tongue root harmony as an areal feature in Northeast Asia”

小林美紀 (千葉大学, 国立国語研究所)

「アイヌ語の自他同形動詞」

砂川有里子 (筑波大学)

「多義動詞の語義分類と語釈の辞書記述 ―「かぶる」の事例から―」

榎山洋介 (名古屋大学)

「多義語分析の課題と方法」

今井新悟 (筑波大学)

「辞書項目記述におけるコーパス検索ツール (NLB, NLT) の利用の提言」

プラシャント・パルデシ (国立国語研究所), 今村泰也 (国立国語研究所)

「基本動詞ハンドブックの現状と例文データバンク構築の構想」

招待講演

飯間浩明 (『三省堂国語辞典』編集委員)

「辞書を作りながら悩むこと」

日本語教育研究・情報センター

○多文化共生社会における日本語教育研究 ―言語習得・コミュニケーション・社会参加―

2015 年 1 月 11 日 (国立国語研究所)

講演

尾辻恵美（シドニー工科大学）

「「多」言語共生の時代における言語教育とは？ —トランスリンガルの時代にむけて—」

ポスター発表（第1部）

砂川有里子（筑波大学）

「縦断的な学習者コーパスを活用した接続詞と談話構成の習得研究」

須賀和香子（国立国語研究所），迫田久美子（国立国語研究所）

「海外の対人調査における個人情報・倫理に関する諸問題 —日本語学習者の海外コーパスの調査から—」

奥野由紀子（首都大学東京）

「「話す」課題と「書く」課題にみられる中間言語変異性 —ストーリー描写課題における「食べられてしまった」部を対象に—」

フォード丹羽順子（佐賀大学），加藤陽子（学習院女子大学），野田尚史（国立国語研究所）

「中級日本語学習者の読解における主語の特定」

藤原未雪（国立国語研究所），花田敦子（久留米大学），野田尚史（国立国語研究所）

「上級日本語学習者の学術論文の読み誤り」

中北美千子（国立国語研究所）

「母語話者との雑談における日本語学習者の聴解困難点 —ビデオ撮影した雑談を振り返ってもらうインタビュー調査—」

宇佐美洋（国立国語研究所）

「「言語習得の先にあるもの」を見据える —『評価を持って街に出よう』刊行計画について—」

李 婷（早稲田大学大学院生），宇佐美洋（国立国語研究所）

「ラジオ番組におけるメタ言語表現の使用意識と，聞き手によるその解釈・評価 —パーソナリティ・ゲスト・リスナーの語りから—」

西尾広美（国立国語研究所），野山 広（国立国語研究所）

「学生が指摘した幼稚園配布文書の難しさは，NNS 保護者の難しさと一致したか —幼稚園における『やさしい日本語』の学部授業導入を通して—」

野山 広（国立国語研究所）

「集住地域における OPI の枠組みを活用した縦断調査からみえてきたこと —日本語学習者の「バイリンガリズム」に焦点を当てながら—」

ポスター発表（第2部）

小西 円（国立国語研究所），迫田久美子（国立国語研究所）

「学習者発話の形態素解析を目指した文字化の問題点と対策」

尹 鎬淑（サイバー韓国外国語大学），川崎千枝見（広島国際学院大学），迫田久美子（国立国語研究所）

「e-learning を利用した日本語文法の誤用への自己訂正フィードバック」

今村泰也（国立国語研究所）

「「基本動詞ハンドブック」の視聴覚コンテンツの開発 —例文音声録音作業を中心に—」

阪上彩子（大阪大学），野田尚史（国立国語研究所），島津浩美（神戸大学）

「日本語学習者の飲食店における聴解困難点 —実地調査による分析—」

野田尚史（国立国語研究所），桑原陽子（福井大学），穴井宰子（オックスフォード・ブルックス大学），白石 実（バルセロナ自治大学），中島晶子（パリ・ディドロ大学），村田裕美子（ミュン

ヘン大学)

「ヨーロッパの上級日本語学習者は日本語のウェブサイトのクチコミをどう解釈するか? —クチコミのスタイルの相違による解釈の違い—」

李 奎台 (国立国語研究所, 東京外国語大学大学院生)

「日本における成人学習者はいかに「学生」から「社会人」になるか —4人の韓国人成人学習者の自己評価を中心に—」

當銘美菜 (早稲田大学大学院生), 宇佐美洋 (国立国語研究所)

「子どもの言葉の発達を捉えるための評価はどうあるべきか —保育の現場で考える日本語教育と保育を結ぶ可能性—」

福永由佳 (国立国語研究所)

「移民としての在日外国人の言語レパトリー」

今村圭介 (長崎大学), 野山 広 (国立国語研究所)

「散在地域における OPI の枠組みを活用した縦断調査からみえてきたこと —日本語学習者の「スタイル」に焦点を当てながら—」

姚 一佳 (北京日本学研究中心), 迫田久美子 (国立国語研究所)

「学習者コーパスに基づく日本語のアスペクト習得の研究」

パネルトーク

迫田久美子, 野田尚史, 野山 広, 福永由佳, 尾辻恵美 他 (司会: 宇佐美洋)

「多文化共生社会における日本語教育研究について考える」

C. プロジェクトの発表会

共同研究プロジェクト等の主催で、公開研究発表会や学術シンポジウム等を、日本各地を会場として多数開催している。

I. 共同研究プロジェクト主催のシンポジウム・ワークショップ

シンポジウム

○「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会 言語地理学フォーラム

2014年11月29日～30日 (富山大学)

11月29日

鎌水兼貴 (国立国語研究所)

「全国方言分布調査」データベースの分析支援」

太田有多子 (椙山女学園大学)

「大井川流域言語」経年調査からの中間報告」

11月30日

福嶋秩子 (新潟県立大学)

「新潟県における準体助詞の分布と変化 —GAJ と FPJD を比較して」

岩田 礼 (金沢大学)

「中国における河川と方言」

澤木幹栄 (信州大学)

「伊那諏訪地方の同音衝突回避」

○シラバス作成を科学にする ―日本語教育に役立つ多面的な語彙シラバスの作成―

2015 年 2 月 22 日（国立国語研究所）

基調講演

石黒 圭（一橋大学）

「語彙シラバスと文章理解」

パネル発表

佐野大樹（グーグル株式会社）

「語彙密度から見た語彙シラバス」

中石ゆうこ（広島市立大学）、建石 始（神戸女学院大学）

「外国につながる子どもたちのための語彙シラバス」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「子どもを持つ外国人のための語彙シラバス」

劉 志偉（首都大学東京）

「日本語学習者から見た語彙シラバス」

○「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会 言語地理学フォーラム

2015 年 3 月 8 日（国立国語研究所）

鳥谷善史（天理大学）

「方言形式の発生・分布とその背後 ―全国方言分布調査の「彼岸花」・「ものもらい」・「じょうぎ」・「こくばんふき」―」

半沢 康（福島大学）

「グロットグラム調査データの実時間比較」

大西宏治（富山大学）

「地域の概念からみた庄川流域」

木川行央（神田外語大学）

「大井川流域における語の分布域の変化」

○ことば・認知・インタラクション 3

2015 年 3 月 20 日（国立情報学研究所）

講演 1

増田将伸（甲子園大）

「応答の前置きとして現れる「どう＋コピュラ」型質問の相互行為的特徴」

招待講演

林誠（イリノイ大）

「Collateral effects（付随効果）と相互行為言語学の展望」

講演 2

大場美和子（昭和女子大）

「外国人介護従事者の介護の談話の特徴と問題の分析」

講演 3

小磯花絵（国立国語研究所）

「均衡性を考慮した大規模日常会話コーパスの構築に向けて」

総合討論

Ⅱ. 各プロジェクトの研究発表会

理論・構造研究系

○日本語レキシコンの音韻特性

プロジェクトリーダー 窪蘭晴夫

2014年6月22日（神戸大学）

李 美姫

「韓国語と日本語における略語の語形成の対照研究」

松森晶子, 五十嵐陽介

「多良間島アクセントの仕組みとその類型論的意義」

窪蘭晴夫

「語のプロソディーと文のプロソディー」

2014年9月28日（東京農工大学）

ワークショップ「有声促音の音声学的諸問題：地域変異と発話スタイルを中心に」

松浦年男（北星学園大学）

「天草諸方言における有声促音の形態論的分布と音響音声学的実現」

高田三枝子（愛知学院大学）

「有声促音の音声的有声性に見られる地域差」

松井理直（大阪保健医療大学）

「破裂音における声門制御の基準点と有声促音」

川原繁人（慶應義塾大学）

「強調形に現れる促音と有声性」

2014年11月14日（松山大学）

松川孝祐（国立民族学博物館）

「メキシコのトリキ語の声調研究とその言語学における貢献」

三村竜之（室蘭工業大学）

「アイスランド語の副次強勢とリズムに関する覚え書き」

松森晶子（日本女子大学）

「八重山諸島の3型アクセント —その韻律単位は何か—」

○文字環境のモデル化と社会言語科学への応用

プロジェクトリーダー 横山詔一

2014年4月20日（国立国語研究所）

Vorobeva Galina（国際日本文化研究センター 外来研究員）

「構造分解とコード化を利用した計量的分析に基づく漢字学習の体系化と効率化」

高田智和（国立国語研究所）

「文字符号の標準化 —国内標準と国際標準—」

○日本語レキシコン—連濁事典の編纂

プロジェクトリーダー Timothy J. Vance

2014年6月14日（国立国語研究所）

Leon A. Serafim (University of Hawaii, retired)

"Shuri-Okinawan Rendaku"

時空間変異研究系

○消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究

プロジェクトリーダー 木部暢子

2014年9月13日～14日（国立国語研究所）

テーマ「形容詞の記述と問題点」

9月13日

金田章宏

「八丈語の形容詞について」

かりまた しげひさ

「形容詞と名詞のあいだ 一琉球語はいかに形容詞を発達させたか」

下地理則

「驚異の万能語根 一宮古諸方言における形容詞語根の特徴一」

衣畑智秀

「形容詞の複合をめぐって 一古典語・宮古語の対照一」

八亀裕美

「日本語の形容詞研究が目指すもの」

シンポジウム形式での全体討論

9月14日

白田理人

「喜界島上嘉鉄方言の形容詞について」

又吉里美

「津堅方言と大山方言における形容詞の形態および機能の比較」

當山奈那

「沖縄語首里方言の授受動詞」

萩野千砂子

「八重山石垣方言の敬語の仕組み」

新永悠人, 青井隼人

「北琉球沖縄語久高島方言の音韻スケッチ」

全体討論

○方言の形成過程解明のための全国方言調査

プロジェクトリーダー 大西拓一郎

2014年7月6日（国立国語研究所）

大西拓一郎（国立国語研究所）

「時間と空間の中でのことばの動き」

岸江信介（徳島大学）

「方言分布にみる経年変化 一実時間比較と見かけ時間比較一」

○多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明

プロジェクトリーダー 相澤正夫

2015年1月24日（国立国語研究所）

朝日祥之（国立国語研究所），尾崎喜光（ノートルダム清心女子大学）

「北海道における言語動態 ―札幌・釧路・富良野における実時間調査等を手掛かりに―」
新野直哉（国立国語研究所）
「新資料「語学者ばかりの座談会」（『文藝春秋』1936年6月号掲載）について」

○日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

プロジェクトリーダー 井上史雄

2014年12月20日（岡崎市図書館交流プラザりぶら）

彦坂佳宣（立命館大学）

「東海地方の敬語の歴史と地理」

鏈水兼貴（国立国語研究所）

「岡崎敬語データの利用法」

西尾純二（大阪府立大学）

「岡崎市の変容と配慮言語行動」

井上史雄（国立国語研究所）

「岡崎敬語の成人後採用」

2015年3月8日（国立国語研究所）

テーマ：鶴岡・岡崎調査の分析と展望

司会：鏈水兼貴

阿部貴人（国立国語研究所）

「第5回鶴岡調査に向けて ―新たな調査モードの開発のために―」

辻加代子（神戸学院大学）、井上史雄（国立国語研究所）

「岡崎における第三者敬語の位置づけ」

丁 美貞（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査の荷物預け場面における機能的要素」

鏈水兼貴（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査漢字仮名交じりデータの利用について」

柳村 裕（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査資料の基礎集計グラフ作成について」

井上史雄（国立国語研究所）

「岡崎敬語調査パネルサンプルの生年順表示」

○日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究

プロジェクトリーダー 金水 敏

2014年6月21日～22日（国立国語研究所）

6月21日

小山内優子（国立国語研究所）

〈レクチャー〉「韓国語の歴史入門」

外池滋生（青山学院大学）

「日英語における多重 WH 構文の扱いと島の制約」

金水 敏（国立国語研究所、大阪大学）

「疑問文の意味と構造」

6月22日

志波彩子（国立国語研究所）

「スペイン語の疑問表現」

張 麟声（大阪府立大学）

「SOV 型言語における文末疑問マーカーの 2 種類の振舞い方について」

高山善行（福井大学）

「疑問文とモダリティの関係をどう捉えるか」

2014 年 12 月 6 日～7 日（大阪大学）

12 月 6 日

日高俊夫（九州国際大学）

「佐賀方言と北九州方言における間接疑問文 —補文性とイントネーション」

江口 正（福岡大学）

「潜伏疑問名詞句の諸相」

衣畑智秀（福岡大学）

「宮古伊良部方言の疑問系係り結び」

村杉恵子（南山大学）

「WH 疑問文の獲得：国立国語研究所の 20 世紀後半の獲得研究成果から得られる知見」

吉村大樹（龍谷大学）

「アゼルバイジャン語の yes-no 疑問文における疑問接語のふるまいについて」

12 月 7 日

有田節子（大阪樟蔭女子大学）

「日本語疑問文の応答における助詞の残留現象について」

三宅知宏（鶴見大学）

「否定疑問文と確認要求的表現」

全体討論

2015 年 3 月 15 日（国立国語研究所）

志波彩子

「日本語の間接疑問文の発達をめぐって —近代から現代へ」

矢島正浩

「疑問文の用法から見た近世語」

金水 敏

「歴史から見た現代共通語の疑問標識分布」

西垣内泰介

「「非飽和名詞」を含む構文の構造と派生」

全体討論

○コーパス日本語学の創成

プロジェクトリーダー 前川喜久雄

2014 年 12 月 13 日（国立国語研究所）

金 明哲（同志社大学）

「コーパス統計学における最新の成果とツール MTMineR について」

内山清子（湘南工科大学）

「ウェブ実験に基づいた研究活動における読解行動に関する分析」

真田治子（立正大学）

「文法的要素と構造が語の頻度に与える影響について —Menzerath-Altmann の法則と結合価との関係に関する調査—」

○通時コーパスの設計

プロジェクトリーダー 田中牧郎

2014 年 11 月 9 日（国立国語研究所）

田中牧郎（国立国語研究所，明治大学）

「『日本語歴史コーパス』の設計と構築の現状」

河瀬彰宏（国立国語研究所）

「「通時コーパス」を用いた名詞の計量分析 —日本語テキストに内在する特徴の抽出と可視化について—」

岡部嘉幸（千葉大学）

「洒落本における格助詞「に」と「へ」について —洒落本コーパスを資料として—」

○日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究

プロジェクトリーダー ジョン・ホイットマン

音韻再建班

2014 年 6 月 27 日（国立国語研究所）

高橋靖以（北海道大学）

「アイヌ語十勝方言における疑問表現のイントネーションについて」

佐藤知己（北海道大学）

「アイヌ語の合成語のアクセントとその歴史的解釈」

Elisabeth de Boer（ライデン大学）

“Reversing the tonal value of the Middle Japanese tone dots: From the viewpoint of the modern dialects and the Middle Japanese tone descriptions”

一般討論

平子達也（日本学術振興会，九州大学）

「能登島諸方言におけるアクセント変化 —「東西両アクセントの違いができるまで」再論—」

上野善道（国立国語研究所）

「奄美諸方言の複合名詞アクセント」

伊藤智ゆき（東京外国語大学）

“The accent and phonological system of Proto-Korean”（朝鮮語祖語におけるアクセントと音韻体系）

一般討論

アイヌ語班

2014 年 5 月 31 日（北海道大学）

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

「本年度のアイヌ語班の活動について」

小野洋平（総合研究大学院大学大学院）

「アイヌ語の語彙による分類 —統計解析からの一視点」

佐藤知己（北海道大学）

「アイヌ語の合成語のアクセントとその歴史的解釈」

高橋靖以（北海道大学）

「アイヌ語十勝方言のイントネーションについて」

深澤美香（千葉大学大学院）

「アイヌ語の東と西の方言差：特に /ca/ と /pa/ の地理的分布と「口」の意味拡張から」

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

「複雑述語の形成プロセスとしての節の融合 —アイヌ語と日本語の場合—」

全体討論

2014 年 1 月 10 日～11 日（国立国語研究所）

1 月 10 日

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

「ハンドブックのプロポーザルについて」

中川 裕（千葉大学）

「複数性」

丹菊逸治（北海道大学）

「アイヌ語と北方言語の接触 —アイヌ語樺太方言の交易品・動植物名における借用語彙」

高橋靖以（北海道大学）

「アイヌ語のアスペクトと証拠性」

アンナ・ブガエワ（国立国語研究所）

「ハンドブックのグロスについて」

全体討論

1 月 11 日

佐藤知己（北海道大学）

「抱合 —アイヌ語とタケルマ語，南パイユート語との対照」

岸本宜久（北海道大学大学院）

「アイヌ語沙流方言の補助動詞構文における共起制約 —他動詞の補助動詞を中心に—」

白石英才（札幌学院大学）

「音韻と音声 —母音共起制限を中心に—」

全体討論

○コミュニケーションのための言語と教育の研究

プロジェクトリーダー 野田尚史

2014 年 8 月 7 日（国立国語研究所）

阿部 新，田中真理（名古屋外国語大学）

「ライティング評価ワークショップにおけるグループ点統一のプロセス」

山口昌也（国立国語研究所），大塚裕子（公立はこだて未来大学），北村雅則（南山大学）

「学習者によるアノテーションを用いた，協調学習過程の即時的構造化手法の設計」

文野峯子（人間環境大学）

「『よい話し合い』のイメージ形成に関わる要因」

2014 年 11 月 2 日（国立国語研究所）

道端輝子（金沢大学）

「学習者が日本語を意味づける過程から見えること」

崔 文姫（熊本県立大学）

「母語話者の評価の多様性 ―評価者グルーピングを通してわかること―」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「小学生のクラス全体での話し合い活動に対する小学校教員志望者の評価表現」

林さと子（津田塾大学）、八木公子（津田塾大学）

「模擬授業における相互評価の観点の多様性とその拡がり」

2015 年 2 月 28 日（キャンパスプラザ京都）

野田尚史（国立国語研究所）

「日本語学習者の聴解困難点の調査方法」

末繁美和（北見工業大学）

「買い物における日本語学習者の聴解困難点」

中山英治（いわき明星大学）

「雑談における日本語学習者の聴解困難点」

阪上彩子（大阪大学）

「講義における日本語学習者の聴解困難点」

○学習者コーパスから見た日本語習得の難易度に基づく語彙・文法シラバスの構築

プロジェクトリーダー 山内博之（実践女子大学）

2014 年 4 月 19 日（国立国語研究所）

建石 始（神戸女学院大学）

「類義表現から見た文法シラバス」

松下達彦（東京大学）

「効率的な語彙学習順序とは？ ―コーパスに基づくアプローチ―」

橋本直幸（福岡女子大学）

「学習者の言語活動に基づいたコーパスの構築 ―『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』の紹介」

2014 年 6 月 28 日（国立国語研究所）

渡部倫子（広島大学）

「日本語母語話者の主観判定による初級文法項目の必要度 ―教師経験の有無による相違―」

佐野大樹（NICT ユニバーサルコミュニケーション研究所）

「語彙密度から見た語彙シラバス構築に向けて」

田中祐輔（東洋大学）

「既存教科書から見た語彙シラバス」

橋本直幸（福岡女子大学）

「話題別語彙シラバス作成のための基礎研究 ―「話題」の定義について―」

2014 年 8 月 30 日（国立国語研究所）

建石 始（神戸女学院大学）

「類義表現から見た文法シラバス」

森 篤嗣（帝塚山大学）

「子どもを持つ外国人のための語彙シラバスの提案に向けて」

松田真希子（金沢大学）

「理工系語彙シラバスの構築に向けて」

太田陽子（相模女子大学）

「様子・予想・傾向を表す表現のコンテキストとコロケーション ―例文づくりに役立つ文法記述のための基礎研究」

○日本語を母語あるいは第二言語とする者による相互行為に関する総合的研究

プロジェクトリーダー 柳町智治（北星学園大学）

2014 年 9 月 21 日（北星学園大学）

高木智世（筑波大学）、森田 笑（シンガポール国立大学）

「反応の発話冒頭に用いられる「ええと」」

早野 薫（お茶の水女子大学）

「日本語会話における客観的評価と主観的評価」

D. NINJAL コロキウム

日本語・言語学・日本語教育のさまざまな分野における最先端の研究をテーマとした国内外の優れた研究者による講演会。研究者・大学院生のみならず一般にも公開。原則として月 1 回、国立国語研究所で開催している。2014 年度は下記 11 件を開催した。

○第 46 回 2014 年 4 月 8 日

岸本秀樹（神戸大学教授、国語研客員教授）

「統語的複合論」

○第 47 回 2014 年 5 月 20 日

小泉政利（東北大学教授）

「言語と思考の順序」

○第 48 回 2014 年 6 月 24 日

伊藤順子（米国 カリフォルニア大学サンタクルーズ校教授、国語研客員教授）

“Exploring Japanese accent in OT workplace”

○第 49 回 2014 年 7 月 24 日

Anne Cutler（オーストラリア ウェスタンシドニー大学教授、ドイツ マックスプランク心理言語学研究所元所長）

“DADDY, EDDY, NINNY, NANNY and BALDEY: Big Data for speech perception”

○第 50 回 2014 年 7 月 29 日

John Hale（米国 コーネル大学准教授）

“Entropy reduction and the subject advantage in relative clause processing across East Asian languages”

○第 51 回 2014 年 9 月 30 日

青木博史（九州大学准教授、国語研客員准教授）

「準体助詞「の」の歴史と言語変化」

○第 52 回 2014 年 10 月 28 日

今井新悟（筑波大学教授）

「言語教育における ICT テクノロジーの進展と教師の将来」

○第 53 回 2014 年 12 月 2 日

井上史雄（東京外国語大学名誉教授，国語研客員教授）

「鶴岡と郊外の言語差」

○第 54 回 2015 年 1 月 20 日

益岡隆志（神戸市外国語大学教授）

「日本語の連用接続形式 ―テ形とその関連形式―」

○第 55 回 2015 年 1 月 23 日

Asifa Majid（オランダ ラットバウト大学教授）

“Semantic categories: The joint product of biology and culture”

○第 56 回 2015 年 2 月 17 日

石黒 圭（一橋大学教授，国語研客員准教授）

「母語話者・学習者の作文執筆プロセスにおける修正の諸相」

E. NINJAL サロン

国語研の研究者（共同研究員を含む）を中心として，各々の研究内容を紹介することによって情報交換を行う場である。外部からの聴講も歓迎している。2014 年度は第 107 回から第 124 回までを開催した。

○第 107 回 2014 年 4 月 1 日

志波彩子（時空間変異研究系非常勤研究員）

「テキストジャンル別，受身構文タイプの分布 ―小説の会話文，地の文の場合」

○第 108 回 2014 年 4 月 22 日

黄 賢暲（理論・構造研究系 PD フェロー）

「日本語の否定疑問文におけるプロソディと認知的偏りの相関関係」

○第 109 回 2014 年 5 月 13 日

柳村 裕（時空間変異研究系非常勤研究員）

「ことばの丁寧さを変化させる社会的要因 ―岡崎敬語調査から―」

○第 110 回 2014 年 6 月 10 日

パトリツィア・ゾッティ（外来研究員，ナポリ東洋大学）

“Building a Japanese-Italian online parallel concordancer: paragraph and word alignment of a Japanese-Italian Corpus (JAICO)”

○第 111 回 2014 年 6 月 17 日

プラシャント・バルデシ（言語対照研究系）

「自他動詞対の派生方向に関する定説の定性的・定量的検証」

○第 112 回 2014 年 7 月 1 日

中北美千子（日本語教育研究・情報センター PD フェロー）

「外国の人にもわかりやすい文書への書き換え ―日本語教師とテクニカルライターの違い―」

○第 113 回 2014 年 7 月 15 日

ジョン・ホイットマン（言語対照研究系）

「現代ビルマ語における主格標示の焦点（フォーカス）機能 ―日本語，東・東南アジア諸言語との比較的観点から」

○第 114 回 2014 年 7 月 22 日

エディス・オールドリッジ（言語対照研究系客員，ワシントン大学）

「上代日本語における疑問詞疑問文の語順について」

○第 115 回 2014 年 9 月 2 日

レザウル・カリム・フォキル（外来研究員，ダッカ大学）

「日本語関係節の再検討 ―ベンガル語を参照しながら」

○第 116 回 2014 年 10 月 14 日

浅原正幸（言語資源研究系）

「共同研究「コーパスアノテーションの基礎研究」の現況 ―BCCWJ-DepPara から BCCWJ-Treebank―」

○第 117 回 2014 年 10 月 21 日

加藤 祥（コーパス開発センター PD フェロー）

「テキストからの対象物認識に有用な記述内容 ―動物を例に一」

○第 118 回 2014 年 11 月 11 日

志波彩子（時空間変異研究系非常勤研究員）

「日本語とスペイン語の 1 人称主語受身文」

○第 119 回 2014 年 11 月 25 日

瀧口いずみ（理論・構造研究系 PD フェロー）

「日本語学習者による母音長対立知覚：母語における母音持続時間・ピッチの役割と第二言語での使用」

○第 120 回 2014 年 12 月 16 日

小西 光（非常勤研究員），中村壮範，田中弥生，浅原正幸，立花幸子，加藤 祥，今田水穂，山口昌也，前川喜久雄，小木曾智信，山崎 誠，丸山岳彦（コーパス開発センター）

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正」

○第 121 回 2015 年 1 月 27 日

寺島宏貴（研究情報資料センター非常勤研究員）

「日本語研究データ利活用のための資料整備」

星野雅英（研究情報資料センター非常勤研究員）

「研究資料室データベース（仮称）と検索システムの試作版 ―全体像がもっと簡単に分かるように―」

○第 122 回 2015 年 2 月 10 日

ハイコ・ナロック（言語対照研究系客員，東北大学准教授）

「文法化の地域性と日本語における文法化」

○第 123 回 2015 年 2 月 24 日

小磯花絵（理論・構造研究系），土屋智行（言語資源研究系非常勤研究員），渡部涼子（コーパス開発センター非常勤研究員），相澤正夫（時空間変異研究系），伝 康晴（言語資源研究系客員）

「均衡性を考慮した日常会話コーパスの構築に向けた取り組み」

○第 124 回 2015 年 3 月 17 日

李 奎台（日本語教育研究・情報センター非常勤研究員）

「日本滞在中のある成人韓国人の価値観の多様化に関する質的分析 ―価値観を通じた自己評価を中心に―」

F. その他

○オックスフォード大学上代日本語コーパスプロジェクト研究発表会

2014 年 5 月 18 日 (国立国語研究所)

Stephen Wright Horn, Yuko Yanagida, and Bjarke Frellesvig

“Differential object marking in OJ” (上代日本語の "differential object marking")

Kerri L Russell, and Peter Sells

“The syntax of mood constructions in OJ” (上代日本語におけるムード構造のシンタクス)

Stephen Wright Horn, Kerri L Russell, Peter Sells, and Bjarke Frellesvig

“Null pronouns in certain clause types in OJ” (上代日本語のある節タイプにおけるゼロ代名詞)

John Whitman

“Premodern Japanese Corpus investigations from the NINJAL Tutorial” (NINJAL チューリアルによる上代・中古日本語コーパスに基づいた調査研究について)

○LabPhon14 Pre-Conference Colloquium

2014 年 7 月 24 日 (国立国語研究所)

Bob Ladd (University of Edinburgh)

“Leaky phonology and the design of language”

Anne Cutler (University of Western Sydney)

“DADDY, EDDY, NINNY, NANNY and BALDEY: Big Data for speech perception”

○「日本語レキシコンの音韻特性」研究発表会 兼 日本言語学会第 149 回大会ワークショップ「文のプロソディーと語のプロソディー」

2014 年 11 月 16 日 (愛媛大学)

窪蘭晴夫 (国立国語研究所)

「鹿児島方言における文のプロソディーから見た語のアクセント」

五十嵐陽介 (広島大学)

「南琉球宮古語池間方言の語アクセントの中和と文レベルでの実現」

米田信子 (大阪大学)

「ヘレロ語 (バントゥ R31) における語のプロソディと文レベルの現象」

研究情報資料センター

研究者の共同利用に供するため、日本語学・言語学・日本語教育学に関する国内外の各種研究情報・研究資料を調査・収集している。

- ・Web サイトのリニューアルを行った。
- ・「日本語研究・日本語教育研究文献データベース」に文献情報を定期的に追加するとともに（4月・7月・10月・1月の年度内3回合計3,994件）、「雑誌『国語学』全文データベース」及び国立大学の学術リポジトリとのリンクを開始した。
- ・研究図書室所蔵の日本語史研究資料のデジタル画像を公開した（『易林本節用集』、『和字正濫鈔』、『諸国方言物類称呼』、『玉菊全伝花街鑑』）の4点。
- ・データベース7件（「日本語学習者による言語運用とその評価をめぐる調査研究」「日本語学習者会話データベース」「日本語学習者会話ストラジーデータ」「言語行動意識調査」「基礎日本語活用辞典（インドネシア語版）」「日本語教育ネットワーク「簡約日本語」に関する研究」「日本語教育ネットワーク 研究用データ」）の受け入れを行った。
- ・「よくある「ことば」の質問」にQ & Aを追加，補記した。
- ・『国立国語研究所論集』第7号（5月）・第8号（11月），『国語研プロジェクトレビュー』第5巻第1号（6月）・第5巻第2号（10月）・第5巻3号（2月）を刊行した。
- ・研究資料室収蔵資料データベースの構築の検討を開始した。

コーパス開発センター

コーパス開発センターでは、日本語言語資源の整備計画である KOTONOHA 計画に従って、国内外の研究者の共同利用に供するため、各種言語資源の開発，整備，公開を進めている。開発に際しては言語資源研究系との間に密接な協力関係を維持しているが，センター独自で「超大規模コーパスプロジェクト」も実施している。

- ・2014年10月『国民之友コーパス』を公開した。（Ver.1.0）。
- ・2015年3月『日本語歴史コーパス 平安時代編』（完成版）を公開した。
- ・『中納言』による『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索は新規契約（2014年4月から2015年3月まで）が742件あり，通算で3,000件を超えた。同じく『中納言』による『日本語歴史コーパス』平安時代編（短単位・長単位）の新規契約数は173件。
- ・『中納言』の検索機能改善を図った。新たにログイン用サーバーを設置し，1回のログインで複数のコーパスを利用できる環境を構築した。
- ・『中納言』ユーザの増加に対応するため，ユーザ数・検索の負荷等に応じて，複数のサーバーにジョブを適宜配置するソフトウェア（ロードバランサー）を導入した。
- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD版の新規契約数は51件（通算287件）。『日本語話し言葉コーパス』DVD版の新規契約数は65件。
- ・第6回コーパス日本語学ワークショップ（2014年9月），第6回コーパス日本語学ワークショップ（2015年3月）を開催した。
- ・コーパス利用技術の普及を目標とした講習会を開催した。ChaKi.NET 講習会（2014年7月）。
- ・来年度の公開を目指して，『日本語話し言葉コーパス』の形態論情報の整備（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における新しい短単位規定への対応など）を進めた。

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 関連ホームページの英訳を進めた。

研究図書室

全国で唯一の日本語に関する専門図書館で、日本語研究および日本語に関する研究文献・言語資料を中心に、日本語教育、言語学など、関連分野の文献・資料を収集・所蔵している。

2014 年度は、1 階書庫に集密書架及び大型本用書架の増設を行い、書庫の狭隘対策を行った。また、所内利用者に対し国立国会図書館デジタル化資料送信サービスの利用を開始した。

- ・開室日時：月曜日～金曜日 9 時 30 分～17 時
(土曜日・日曜日・祝休日・年末年始・毎月最終金曜日は休室)
- ・主なコレクションには、東条操文庫（方言）、大田栄太郎文庫（方言）、保科孝一文庫（言語問題）、見坊豪紀文庫（辞書）、カナモジカイ文庫（文字・表記）、藤村靖文庫（音声科学）、林大文庫（国語学）、興水実文庫（国語教育）、中村通夫文庫（国語学）などがある。
- ・「国立国語研究所 蔵書目録データベース」をウェブ検索できる。
- ・図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）により、所属機関の図書館を通して複写を申し込み、郵送で受け取ることができる。

所蔵資料数（2015 年 4 月 1 日現在）

	図書	雑誌
日本語	119,241 冊	5,293 種
外国語	30,295 冊	526 種
計	149,536 冊	5,819 種

※視聴覚資料など 7,723 点を含む

III

国際的研究協力と社会貢献

1

国際的研究協力

国語研全体の研究テーマである「世界諸言語から見た日本語の総合的研究」をグローバルな観点から推進するため、国際的な研究連携体制の多様化を図っている。

オックスフォード大学との提携

日本語のコーパス（言語の実態を把握するための電子化された大規模言語資料）の整備・構築を進めている国語研では、現代語だけではなく、歴史的な日本語のコーパスの構築も進めている。現在、イギリス・オックスフォード大学の日本語・日本語学研究センターでも古代語コーパス構築のプロジェクトが進行中であり、両研究所は互いに知見を提供し合い、この困難な事業をより効率的に進めるために学術的な協力関係を結んでいる。これにより、汎用性の高いコーパスを世界レベルで提供できることが期待されている。

台湾・中央研究院語言學研究所との研究連携

台湾の中央研究院と、共同研究や、研究資料の交流についての研究協力に関する覚書を交換している。主に中央研究院語言學研究所とのシンポジウムの共同開催や、研究者間の盛んな交流等を通じて発展した研究活動を行い、特に東アジア地域における言語研究のさらなる促進を目的としている。

北京日本学研究中心との提携

北京日本学研究中心と、研究者の相互交流や、国際的な共同研究の推進に関する学術交流合意書を締結している。本合意書に基づき、日本語学習者の縦断コーパスの構築や、そのデータに基づく実証的研究に取り組んでいる。

国際シンポジウム・国際会議の開催

世界における日本語・日本語教育研究の発展のため、NINJAL 国際シンポジウムを毎年数回開催すると同時に、海外に拠点を持つ国際学会を国語研に招致している。

日本語研究英文ハンドブック刊行計画

言語学関係の出版社として傑出した出版活動で世界をリードする De Gruyter Mouton（ドゥ・グロイター・ムートン社 ベルリン／ボストン）からの申し出により、国語研の優れた研究成果を英文で出版する包括的な協定を2012年7月に締結した。この協定に基づき、2014年から、日本語および日本語言語学に関する包括的な日本語研究英文ハンドブック、Handbooks of Japanese Language and Linguistics シリーズ（全12巻予定）を順次刊行している。このシリーズは、それぞれの領域におけるこれまでの重要な研究成果を俯瞰し、現在における最先端の研究状況をまとめるとともに、今後の研究方向にも示唆を与えるもので、国語研関係者（専任教員および客員教員、諸大学の共同研究員）だけでなく、各領域における国内外の第一線の研究者が執筆を担当し、国語研が中心となって編集を行う大規模な国際的プロジェクトである。これにより大学共同利用機関としての国語研の知名度を世界的に高めるだけでなく、日本語研究の成果ならびに動向を世界に広く問うことによって言語学の発展に資するとともに、日本語研究自体の進展にも寄与することとなる。

編集主幹

柴谷方良（ライス大学 教授）Masayoshi Shibatani (Rice University)

影山太郎（国立国語研究所 所長）Taro Kageyama (Director-General, NINJAL)

シリーズの構成

全巻英文，各巻 600 ～ 700 ページ

1. *Handbook of Japanese Historical Linguistics*

Edited by Bjarke Frellesvig (University of Oxford/NINJAL), Satoshi Kinsui (Osaka University/NINJAL) and John Whitman (NINJAL)

2. *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*

Edited by Haruo Kubozono (NINJAL)

3. *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation*

Edited by Taro Kageyama (NINJAL) and Hideki Kishimoto (Kobe University)

4. *Handbook of Japanese Syntax*

Edited by Masayoshi Shibatani (Rice University/NINJAL), Shigeru Miyagawa (MIT/NINJAL) and Hisashi Noda (NINJAL)

5. *Handbook of Japanese Semantics and Pragmatics*

Edited by Wesley Jacobsen (Harvard University) and Yukinori Takubo (Kyoto University/NINJAL)

6. *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*

Edited by Prashant Pardeshi (NINJAL) and Taro Kageyama (NINJAL)

7. *Handbook of Japanese Dialects*

Edited by Nobuko Kibe (NINJAL) and Tetsuo Nitta (Kanazawa University)

8. *Handbook of the Ryukyuan Languages*

Edited by Patrick Heinrich (Dokkyo University), Shinsho Miyara (formerly, University of the Ryukyus) and Michinori Shimoji (Kyushu University/NINJAL)

9. *Handbook of Japanese Sociolinguistics*

Edited by Fumio Inoue (Meikai University/NINJAL), Mayumi Usami (Tokyo University of Foreign Studies) and Yoshiyuki Asahi (NINJAL)

10. *Handbook of Japanese Psycholinguistics*

Edited by Mineharu Nakayama (Ohio State University/NINJAL)

11. *Handbook of Japanese Applied Linguistics*

Edited by Masahiko Minami (San Francisco State University/NINJAL)

12. *Handbook of the Ainu Language*

Edited by Anna Bugaeva (NINJAL)

海外の研究者の招聘

海外の研究者を専任や客員教員（2014 年度新規 1 名）として招へいすると同時に，研究プロジェクトに共同研究員として多数の参画を得ている。また，海外の研究者や大学院生が国語研に滞在して研究を行う，外来研究員（2014 年度新規 3 名）や特別共同利用研究員（2014 年度新規 3 名）として受け入れている。

各国のオーラルヒストリー資料の書き起こしおよびデータのデジタル化

日本語を第二言語として習得した人々のことばを収集し、日本語変種の本格的な記述作業を行うことにより第二言語の状況と変容の事象を取り上げて研究対象とするため、ハワイ大学マノア校オーラルヒストリーセンター、ハワイ日本文化センター、UCLA Charles E. Young Research Library、ブラジルサンパウロ人文学研究所、米国サクラメント市歴史センター、カナダバンクーバー日系プレイス等が所蔵するオーラルヒストリー資料の書き起こし及びデータのデジタル化に関して覚書締結の準備を進めている。

2 社会貢献

消滅危機方言の調査・保存・分析

2009年にユネスコが発表した世界各地の消滅危機言語（話者が非常に少なくなってきた言語）には、日本国内の8つの言語（方言）が含まれている。国語研ではこれらの諸方言を集中的に記録し、言語学的に分析するプロジェクトを進めている。これによって、世界の危機言語研究に貢献すると同時に、方言を使用している地域社会とその文化の活性化に寄与することを目的としている。

日本語コーパスの拡充

ある言語の全貌を正確に把握するためには、その言語を大量に収集し、分析する必要がある。書き言葉や話し言葉の資料を、大量かつ体系的に収集し、それを詳細に検索できるようにしたものを、「コーパス」といい、国語研では日本語コーパスの整備を進めており、英語等の主要なコーパスと肩を並べる1億語規模の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を2011年に全面的に公開した。これにより、用法や表記の揺れの実態が端的に把握できる等の利便性を、研究者のみならず、日本語（国語）教師、日本語学習者、マスコミなど多方面に提供している。さらに、100億語規模の超大規模現代日本語コーパスの設計・構築も進行中である。

多文化共生社会における日本語教育研究

近年、在日外国人や留学生の増加にともなって日本語学習に対するニーズが拡大・多様化している。様々な言語的・文化的背景を持つ人びとが生活する現代社会においては、それにふさわしい日本語教育や学習の在り方に関する探究がますます大切になっている。国語研は、第二言語（外国語）としての日本語のコミュニケーション能力の教育・習得に関する実証的研究によって、国内外における日本語教育・学習の内容と方法の改善や、異文化摩擦などの社会的問題の解決に資する成果を提供している。

地方自治体との連携

- 地方自治体の協力を得て、研究成果を分かり易く説明するNINJALセミナーを各地で開催した。（内容はp.94に掲載）
- 立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書による活動
 - ・2014. 7.19 子ども向け一般公開イベント「ニホンゴ探検」において、歴史民俗資料館職員による所蔵品の展示及び説明を行った。
 - ・2014.11.16 立川市女性総合センター・アイムにおいて、理論・構造研究系助教 三井はるみによる講演会「立川の方言」を開催した。

訪問者の受入等

NINJAL 職業発見プログラム

- 2014. 7. 3 仙台第一高等学校
- 2014. 8. 4 兵庫高等学校
- 2014. 9. 5 佃中学校（出前授業）
- 2014. 9.25 群馬工業高等専門学校
- 2014. 9.26 矢板東高等学校附属中学校
- 2014.10.21 横浜翠嵐高等学校
- 2014.10.29 横浜清陵総合高等学校

見学・研修・視察等

- 2014. 5.29 文部科学省研究振興局学術機関課長
- 2014. 6.10 文部科学省関係機関職員研修生実地研修
- 2014. 7.24 人間文化研究機構新規採用職員研修
- 2014.10. 9 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会
- 2014.12. 2 タイ王立学士院

学会等の後援

- ・第5回立川文学賞 2014.7-2015.6
主催者：立川文学賞実行委員会
- ・平成26年度日本語教育能力検定試験 2014.10.26
主催者：公益財団法人日本語教育支援協会
- ・第13回全養協公開講座 2014.11.29
主催者：一般社団法人全国日本語教師養成協議会
開催地：学校法人大原学園東京水道橋校
- ・日本語ボランティアシンポジウム 2014 日本語ボランティアシンポジウム 2014「日本語教室ってだれのため？何のため？」 2014.12.6
主催者：公益財団法人名古屋国際センター，東海日本語ネットワーク
開催地：名古屋国際センター
- ・第6回産業日本語研究会・シンポジウム 2015.2.24
主催者：高度言語情報融合フォーラム（ALAGIN），言語処理学会，一般財団法人日本特許情報機構
開催地：東京大学情報学環・福武ホール

一般向けイベント

NINJAL フォーラム

国語研が主体となって実施する研究や、他機関との連携研究による優れた成果を学術界だけでなく、広く一般の方々に知っていただくとともに、社会との連携を積極的に推進して社会貢献に資するという観点からフォーラムを開催している。

○第8回「世界の漢字教育 一日本語漢字をまなぶー」

2014年9月21日（一橋大学一橋講堂 学術総合センター）

基調講演

「日本語教育における漢字学習の支援方法 一漢字の面白さと難しさを考えるー」

加納千恵子（筑波大学）

報告

1. 「台湾の日本語教育における漢字学習について」

林 立萍（台湾大学）

2. 「フィリピンにおける漢字教育の現状 ―フィリピン人日本語学習者と教師の漢字学習ビリーフと ストラテジー使用について―」

フランチェスカ・ヴェントゥーラ（国際交流基金マニラ日本文化センター）

3. 「世界の文字体系から見た漢字とインドにおける漢字教育・学習の取り組み」

ブラシャント・パルデシ（国立国語研究所）

4. 「キルギスの漢字教材『漢字物語』」

ガリーナ・ヴォロビヨワ（元キルギス国立総合大学）

5. 「漢字を習うか漢語を習うか ―語彙に基づいた漢字教育」

アルド・トリーニ（ヴェネツィア大学）

コメント

濱川祐紀代（国際交流基金日本語国際センター）

パネルディスカッション

加納千恵子，林 立萍，フランチェスカ・ヴェントゥーラ，ブラシャント・パルデシ，ガリーナ・ヴォ
ロビヨワ，アルド・トリーニ，濱川祐紀代

司会：高田智和（国立国語研究所）

NINJAL セミナー

各共同研究プロジェクトにおいて、その研究内容を様々な形で一般の方々に発表し、地域社会と触
れ合う場として NINJAL セミナーを次のように実施した。

○「出雲方言のつどい ―出雲ことば再発見―」

2014 年 8 月 20 日（出雲市役所）

○「漢文を日本語で読む」

2014 年 9 月 20 日（国際交流基金日本語国際センター）

○「日本の危機言語・方言サミット IN 八丈島」

2014 年 12 月 12 日（東京都八丈町 多目的ホールおじゃれ）

「ことば」展示

国語研が行う「日本語・言葉の研究」について楽しみながら触れることができる一般公開イベント
を開催した。（「立川体験スタンプラリー」対象イベント）

2014 年 10 月 18 日（国立国語研究所）

プログラム

- ・パネル展示：研究所の活動内容の紹介
- ・展示・映像上映：日本語について国語研が追いつけてきた研究成果がわかる企画展

児童・生徒向けイベント

職業発見プログラム

中学生や高校生向けに、言語学や日本語あるいは日本語教育を研究することを通じて、学問のたの
しさと素晴らしさを知ってもらうためのプログラム。（受入校は、p.93 に掲載）

ジュニアプログラム（小学生向け）

小学生が「ことばっておもしろい」と感じてくれるようなワークショップや出前授業を実施する。

○「めざせ！辞書引きの達人」

2014年7月8日（立川市立第四小学校）

対象：小学3年生

講師：柏野和佳子（言語資源研究系准教授）

○「めざせ！辞書引きの達人」

2014年10月16日（立川市立西砂小学校）

対象：小学4年生

講師：柏野和佳子（言語資源研究系准教授）

ニホンゴ探検 2014 ー1 日研究員になろうー

児童・生徒・一般を対象に研究所を公開し、「日本語」「ことば」の魅力と不思議に触れられるプログラムが人気のイベント。

2014年7月19日（国立国語研究所）

プログラム

- ・ことばのミニ講義

- 「日本語の音を見る」ティモシー・バンス（理論・構造研究系教授）

- 「ことばの正しさ」ってなんだろう？」宇佐美洋（日本語教育研究・情報センター准教授）

- ・ことばの実験

- ・辞書引きコーナー

- ・にほんごスタンプラリークイズ

- ・れきみんワークショップ

- ・ことばシアター

3 大学院教育と若手研究者育成

（1）連携大学院：一橋大学大学院言語社会研究科

2005年度から、一橋大学との連携大学院プログラムを実施している。この連携大学院（日本語教育学位取得プログラム）は、日本語教育学、日本語学、日本文化に関する専門的な知識を備えた研究者や日本語教育者を育成することを目指している。その中で、国立国語研究所は日本語学の分野を担当している。

（2）特別共同利用研究員制度

国語研では、国内外の大学の要請に応じて、日本語研究・日本語教育研究などの分野を専攻する大学院生を特別共同利用研究員として受け入れている。国語研の設備、文献等の利用や、国語研の研究者から研究指導を受けることができる制度である。（2014年度新規5名受入）

(3) NINJAL チュートリアル

日本語学・言語学・日本語教育研究の諸分野における最新の研究成果や研究方法を、第一線の教授陣によって、大学院生を中心とした若手研究者等に教授する講習会で、若手研究者の育成・サポートを目的としている。大学共同利用機関である国語研の特色を活かしたテーマを積極的に取り上げ、年数回、全国各地で実施している。2014 年度は第 15 回～第 17 回を実施した。

受講対象：原則として、大学院生レベル

- ・大学院生（修士課程または博士課程に在籍する者）
- ・修士課程または博士課程を修了後、原則として 6 年未満の者
- ・当該諸分野を専門とした職務に従事している者
- ・大学院進学を目指す学部学生等

○第 15 回 2014 年 9 月 20 日（仙台市内）

「日本語非母語話者の言語理解・言語表現の分析」

講師：野田尚史（日本語教育研究・情報センター教授）

○第 16 回 2015 年 3 月 21 ～ 22 日（京都大学）

「言語類型論的に見たアイヌ語の文法」

講師：アンナ・ブガエワ（言語対照研究系特任准教授）

○第 17 回 2015 年 3 月 28 日（福岡市内）

「日本語非母語話者の言語理解・言語表現の分析」

講師：野田尚史（日本語教育研究・情報センター教授）

講習会

○『ChaKi.NET』講習会（関西地区）

2014 年 7 月 31 日（アプローズタワー 13 階貸会議室）

(4) 優れたポストドクターの登用

若手のポストドクターが各種共同研究プロジェクトの運営を補助するとともにプロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させ、若手研究者のキャリアパスになる制度としてプロジェクト研究員（プロジェクト PD フェロー）を設け、公募により積極的に採用している。（2014 年度在籍者 7 名、内新規採用 2 名）

IV

教員の研究活動と成果

影山 太郎（かげやま たろう）国立国語研究所 所長

1949 生

【学位】 Ph.D.（言語学）（南カリフォルニア大学，1977）

【学歴】 大阪外国語大学英語学科卒業（1971），大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了（1973），南カリフォルニア大学大学院言語学科博士課程修了（1977）

【職歴】 神戸学院大学教養部助手（1973-1974），大阪大学言語文化部講師（1978-1980），同助教授（1980-1987），関西学院大学文学部教授（1987-2009），パリ第7大学（招聘教授，2008），関西学院大学名誉教授（2009），大学共同利用機関法人人間文化研究機構教授・日本語研究機関設置準備室長（2009），国立国語研究所 所長（2009.10）

【専門領域】 言語学，形態論，語彙意味論，統語論

【所属学会】 日本言語学会，日本語学会，日本語文法学会，関西言語学会，アメリカ言語学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 顧問（元会長）・評議員，日本語学会 評議員，関西言語学会 運営委員，特定非営利活動法人言語資源協会（GSK）理事，日本国際教育支援協会 理事，文化審議会 国語分科会 委員

【受賞歴】

1994 第22回金田一京助博士記念賞（金田一京助博士記念会，著書『文法と語形成』）

1980 市河賞（財団法人語学教育研究所，著書『日英比較 語彙の構造』）

1973 東京言語研究所言語学懸賞論文賞（東京言語研究所，論文「場所理論的見地から」『言語の科学5』）

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性」：リーダー

研究目的：

語彙と語形成の仕組みを，辞書における静的な項目列举としてではなく，意味構造・統語構造と直接関わり合うダイナミックなプロセスとして捉え，日本語レキシコンの特質を形態論・意味論・統語論の観点から総合的に解明することを目的とする，そのため，理論的分析だけでなく，外国語との比較，心理実験，歴史的変化，方言，コーパスなどによる実証性を重視した多角的なアプローチをとる。ヨーロッパ言語と比して日本語の特徴が顕著に現れる現象として，具体的には，（1）動詞の自他と項交替，（2）動詞＋動詞型の複合動詞，（3）事象表現と属性表現，（4）レキシコンと意味・統語，という4つの事項を解明するため，それぞれでチームを編成して取り組む。

研究成果：

本プロジェクトでは，シンポジウムやデータベース作成などの活動は2013（平成25）年度で終え，2014（平成26）年度は主として下記英文論文集の出版準備を行った。

- ①「動詞の自他と項交替」のチームを中心に開催した NINJAL 国際シンポジウム（2012 年 8 月，マックスプランク進化人類学研究所との研究協力）における招待講演をベースにした英文論文集（論文 15 篇）を企画し，ピアレビューと編集作業を終えて最終的な英文校閲を進め，2015 年前半に入稿する目処をつけた。現代標準日本語のほか，歴史，方言，琉球諸語，第1・第2習得，言語類型論を含む多角的な観点から動詞の自他交替を解明する。確定した内容は次の通り。

Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen (eds.) *Transitivity and Valency Alternations: Studies on*

Japanese and Beyond (De Gruyter Mouton)

INTRODUCTION (Taro Kageyama and Wesley M. Jacobsen)

PART I: STANDARD JAPANESE

1. Wesley M. Jacobsen / The semantic basis of Japanese transitive-intransitive derivational patterns
2. Yo Matsumoto / Phonological and semantic subregularities in noncausative-causative verb pairs in Japanese
3. Taro Kageyama / Agents in anticausative and decausative compound verbs
4. Hideki Kishimoto / Valency and case alternations in Japanese
5. Natsuko Tsujimura / The role of lexical semantics in the reorganization of the resultative construction

PART II: DIALECTS AND RHYUKYUAN

6. Kan Sasaki / Anticausativization in the northern dialects of Japanese
7. Michinori Shimoji / Aspect and non-canonical object marking in the Irabu dialect of Ryukyuan

PART III: HISTORY

8. Heiko Narrog / Japanese transitivity pairs through time – a historical and typological perspective
9. Bjarke Frellesvig and John Whitman / The historical source of the bigrade transitivity alternations in Japanese

PART IV: ACQUISITION

10. Keiko Murasugi / Children's 'erroneous' intransitives, transitives, and causatives: Their implications for syntactic theory
11. Ayumi Matsuo, Sotaro Kita, Gary C. Wood, and Letitia Naigles / Children's use of morphosyntax and number of arguments to infer the meaning of novel transitive and intransitive verbs
12. Zoe Pei-sui Luk and Yasuhiro Shirai / The effect of a 'conceptualizable' agent on the use of transitive and intransitive constructions in L2 Japanese

PART V: BEYOND JAPANESE

13. Andrej L. Malchukov / "Ambivalent voice": Markedness effects in valency change
14. Søren Wichmann / Quantitative tests of implicational verb hierarchies
15. Masayoshi Shibatani / The role of morphology in valency alternation phenomena

APPENDIX A: List of core transitivity pairs in Japanese (by Yo Matsumoto, a revision of Jacobsen (1992))

APPENDIX B: List of additional transitivity pairs in Japanese (by Yo Matsumoto, a revision of Jacobsen (1992))

②「レキシコンと意味・統語」チームを主要な執筆者として、Mouton 社英文ハンドブックの原稿改訂、編集、及び英文校閲を進め、2015 年前半に入稿の目処を付けた。確定した内容は次の通り。

Taro Kageyama and Hideki Kishimoto (eds.) *Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (De Gruyter Mouton)

INTRODUCTION (Taro Kageyama and Hideki Kishimoto)

PART I: LEXICON AND VOCABULARY ITEMS

1. Taro Kageyama and Michiaki Saito / Vocabulary strata and word formation processes
2. Hideki Kishimoto and Satoshi Uehara / Lexical categories
3. Hideki Kobayashi, Kiyo Yamashita and Taro Kageyama / Sino-Japanese words
4. Kimi Akita and Natsuko Tsujimura / Mimetics
5. Mark Irwin / The morphology of English loanwords

PART II: MORPHOLOGY AND WORD FORMATION

6. Takayasu Namiki and Taro Kageyama / Word structure and headedness
7. Taro Kageyama / Noun-compounding and noun-incorporation
8. Taro Kageyama / Verb-compounding and verb-incorporation
9. Yoko Yumoto / Conversion and deverbal compound nouns
10. Yoko Sugioka and Takane Ito / Derivational affixation in the lexicon and syntax
11. Kentaro Nakatani / Complex predicates with -te gerundive verbs
12. Tadao Miyamoto and Hideki Kishimoto / Light verb constructions with verbal nouns
13. Koichi Takezawa / Inflection
14. Taro Kageyama / Lexical integrity and the morphology-syntax interface

PART III: WORD CLASSES AND SYNTACTIC BEHAVIOR

15. Wesley Jacobsen / Lexical meaning and temporal aspect
16. Hideki Kishimoto / Stative and existential/possessive verbs
17. Naoyuki Ono / Agent nominals
18. Yuji Nishiyama / Complement-taking nouns
19. Hideki Kishimoto / Idioms

③ 2013 年 12 月に言語対照研究系と共同で開催した NINJAL 国際シンポジウム *Mysteries of Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (日本語およびアジア諸言語における複合動詞・複雑動詞の謎) をベースに、対象言語の範囲を広げてアジア全体における動詞複合体を論じた論文集 *Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (ed. by Taro Kageyama, Peter Hook, and Prashant Pardeshi) の出版計画書を Oxford University Press に提出し、ピアレビューを経て出版が正式に承認された。PART I (Languages in East Asia), PART II (Languages in South Asia), PART III (Languages in Central Asia), PART IV (Cross-linguistic perspective) の 4 部、合計 19 章で構成される。

④ Max Planck 進化人類学研究所との共同研究による動詞結合価交替のオンラインデータベース (Valency Patterns Leipzig Online Database, ValPal) が 2014 年 12 月に完成し正式公開となった (<http://valpal.info>)。本共同研究からは岸本と影山が日本語標準語のデータを提供した (なお、北海道方言のデータは佐々木冠が提供した)。

⑤ 2013 年度に公開したオンライン辞書「複合動詞レキシコン (国際版)」(Compound Verb Lexicon) の更新を行った。また、紹介記事が *The Japan Times* (2014 年 11 月 26 日, 紙版およびオンライン版) に掲載された。

⑥ 共同研究プロジェクトのウェブサイトで公開している「動詞 + 動詞型複合動詞の研究文献一覧」に新しい文献を補充・更新した。

⑦ 共同研究プロジェクトの研究発表会を東京大学で開催した。(2015 年 2 月 21 日)

【研究業績】

《著書・編書》

Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama (Series editors)

HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS Series. De Gruyter Mouton.
(*Handbook of the Ryukyuan Languages*, 2015.1; *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*,
2015.2)

《論文・ブックチャプター》

Taro Kageyama

“Word formation in Japanese”, *Oxford Bibliographies in Linguistics*. Oxford: Oxford University Press, 2014.6. <http://www.oxfordbibliographies.com>

影山太郎

「日本語複合動詞の言語類型論的意義」『国語研プロジェクトレビュー』5 (1), pp.8-18. 2014.6.

影山太郎

「受身」, 「埋め込み」, 「概念意味論」, 「語彙概念構造」, 「語構成」, 「叙実性」, 「存在文」, 「難易文」, 「複合動詞」, 仁田義雄 他 (編) 『日本語文法事典』, 大修館書店, 2014.7.

Masayoshi Shibatani and Taro Kageyama

“Introduction to the Handbooks of Japanese Language and Linguistics”, *Handbook of the Ryukyuan Languages* (2015.1) and *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (2015.2), pp. vii-xxxiii. Berlin: De Gruyter Mouton.

《辞書・辞典類》

仁田義雄, 尾上圭介, 影山太郎, 鈴木 泰, 村木新次郎, 杉本武 (編)

『日本語文法事典』, 大修館書店, 2014.7.

《その他の出版物・記事》

影山太郎

〈著書紹介〉『複合動詞研究の最先端 一謎の解明に向けて一』, 『国語研プロジェクトレビュー』5 (1), pp.47-48. 2014.6.

【講演・口頭発表】

影山太郎

「複合動詞における非対称性と日本語の膠着性」, 中日理論言語学研究会第40回記念大会 国際フォーラム 2015 (同志社大学) [招待講演], 2015.1.11.

【その他の学術的・社会的活動】

Taro Kageyama

Oxford Research Encyclopedia of Linguistics. Advisory Board & Senior Editor. Oxford University Press. 2014-.

窪 蘭 晴 夫 (くぼの はるお) 理論・構造研究系 教授, 研究系長

1957 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (エジンバラ大学, 1988)

【学歴】 大阪外国語大学外国語学部卒業 (1979), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期修了 (1981), 名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期中退 (1982), 英国・エジンバラ大学大学院博士課程修了 (1986)

【職歴】 南山大学外国語学部 助手 (1982), 同 講師 (1984), 同 助教授 (1990), 大阪外国語大学外国語学部 助教授 (1992), カリフォルニア大学サンタクルズ校 客員研究員 (フルブライト若手研究員) (1994-1995), マックスプランク心理言語学研究所 客員研究員 (1995), 神戸大学文学部 助教授 (1996), 同 教授 (2002), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授, 研究系長 (2010)

【専門領域】 言語学, 日本語学, 音声学, 音韻論, 危機方言

【所属学会】 日本言語学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会, 日本語学会, 関西言語学会, 日本音響学会, Association for Laboratory Phonology, International Phonetic Association

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 常任委員・評議員, 日本音声学会 理事・企画委員長・評議員, 日本学術会議 連携会員, 理化学研究所脳科学研究センター 客員研究員, 台湾東呉大学 客員教授, 市河三喜賞 審査委員・幹事, 東京言語研究所 運営委員, The Association for Laboratory Phonology, Executive Committee member, *Natural Language and Linguistic Theory* 編集委員, Oxford Studies in Phonology and Phonetics Series (OUP), Advisory editor.

【受賞歴】

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 国立国語研究所第1回所長賞

1997 金田一京助博士記念賞 (金田一賞)

1995 市河三喜賞

1988 名古屋大学英文学会 IVY Award

1985 イギリス政府 Overseas Research Student Award

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性」: リーダー

研究目的:

本研究は促音とアクセントの2つの音韻現象を他の言語との比較を基調に分析し, 世界の言語の中における現代日本語の特性を明らかにしようとするものである。いずれのテーマについても広領域の研究者に共同研究者として参画してもらうことにより, 通言語的かつ学際的な研究を推進する。本研究は理論・構造研究系が推進する「日本語レキシコンの総合的研究」の一翼を担う一方で, 時空間変異研究系が主導する「消滅危機方言プロジェクト」の調査を音韻論的に分析し, また言語対照研究系のプロジェクト研究を音声面から補完する役割を果たす。促音の「っ」は日本語に特徴的な音声要素であるが, 本研究は促音が頻出する外来語に着目して分析することにより, 日本語話者が促音を産出・知覚するメカニズムを, 音韻理論と音声実験を融合した実験音韻論の観点から解明する。本研究では促音を研究している広領域 (音声学, 音韻論, 国語史, 言語獲得, 日本語教育) の専門家を集め共同研究を推進する。

アクセントについては日本語を特徴づけているアクセント体系の多様性を通言語的視点から考察することにより, (i) 日本語諸方言のアクセント研究が一般言語学におけるアクセント研究, 類型論研

究にどのような知見を与えるか、(ii) 逆に一般言語学のアクセント研究が日本語のアクセント分析にどのような洞察を与えるかを明らかにする。

研究成果：

1. 今年度は第2期中期計画の研究成果取りまとめの1年目と位置付け、もっぱら研究成果の刊行事業を進めた。この結果、これまでの2つの成果（2012年の *Lingua* 特集号、2013年の *Journal of East Asian Linguistics* 特集号）に加え、次の成果を得た。
 - ・ *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*（全19章、既に編集作業が終了し、2015年2月に Mouton 社より刊行）
 - ・ *Tonal Change and Neutralization*（全13編、2014年6月に Mouton 社に企画が採択され、既に外部査読が終了。引き続き編集作業を進め、2015年度中には刊行される予定）
 - ・ *Aspects of Geminate Consonants*（全14編、2014年秋に Oxford University Press に企画書を提出、2015年初めに採択される。2015年度末～16年度前半に刊行される見通し）
 - ・ 4年に一度開催される国際会議 ICPHS 2015（2015年8月、イギリス）に促音関係のワークショップ企画（Geminate Consonants across the World; GemCon 2015）を提案し、11月に採択された。既に専用HPを開設し発表募集案内等を公開した。
2. 実験音韻論の国際会議（LabPhon 14）を他のプロジェクトの協力を得て7/25-7/27の3日間誘致・開催し、またその前後にサテライト講演会・ワークショップ（7/24、7/28）を開催した。本会議には世界20カ国から合計264名（延べ792名）の参加を得た。研究発表総数147件（国内発表者11件、海外136件）であった。
3. 年度初めに今年度の重点テーマを「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」と定め、この重点テーマについて日本語学会第149回大会ワークショップ等でプロジェクトの成果として多数の研究発表を行った。
4. 計3回（4日間）の研究成果発表会を神戸、東京、松山の各地で開催した。すべてを公開とした結果、4日間で合計220名（うち共同研究員以外138名、62.7%）の参加を得た。また発表も公募した結果、合計13件の研究発表のうち2件が共同研究員以外（若手研究者）の発表であった。若手発表者へは旅費の支援も行った。
5. 日本語アクセントの研究を行っている若手研究者（大学院生）に対して調査旅費支援の募集（公募）を行い、延べ3名の大学院生に対して調査旅費と成果発表旅費の支援を行った。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-3.「鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査」：リーダー

前年度に続き、アクセント調査班と文法調査班に分かれて活動を行った。アクセント班は2014年9月に上甕島桑之浦集落で合同調査を行い、他の集落や鹿児島方言との異同を考察した。また、「甕島方言アクセントデータベース」の編集を進め、12名のインフォーマントの承諾書を得て2015年3月にウェブ上で仮公開した。文法班は、記述文法書の作成を進め、2015年3月に『甕島里方言記述文法書』を刊行した。

【研究業績】

《著書・編書》

Haruo Kubozono (ed.)

Handbook of Japanese Phonetics and Phonology, De Gruyter Mouton, 2015.2.

窪蘭晴夫（監修）、森 勇太、平塚雄亮、黒木邦彦（編）

『甕島里方言記述文法書』、国立国語研究所、2015.3.

《論文・ブックチャプター》

窪蘭晴夫

「自然条件とことばの変化 ―甕島方言を例に」, 『人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」最終年度成果報告書」, pp.103-115. 2015.2.

Haruo Kubozono

“Introduction to Japanese phonetics and phonology”, *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, pp.1-40. De Gruyter Mouton, 2015.2.

Haruo Kubozono

“Diphthongs and vowel coalescence”, *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, pp.215-249. De Gruyter Mouton, 2015.2.

Haruo Kubozono

“Loanword phonology”, *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, pp.313-361. De Gruyter Mouton, 2015.2.

《データベース類》

・甕島方言アクセントデータベース仮公開 <https://dora.kiku33.org/test/wavlist/>

《辞書・辞典類》

窪蘭晴夫

「アクセント」, 「音韻」, 「音韻論」, 「形態音素」, 「プロソディー」, 「プロミネンス」, 『日本語文法事典』, 大修館書店, 2014.6.

【講演・口頭発表】

Haruo Kubozono

“Japanese pitch accent in a typological perspective”, TAL 2014 (The 4th International Symposium on Tonal Aspects of Languages) [招待講演], Radboud University Nijmegen, 2014.5.13-16.

Haruo Kubozono

“Interactions between lexical and post-lexical tones in Japanese”, International Workshop on Word Stress and Accent [招待講演], Leiden University, 2014.8.15-18.

窪蘭晴夫

「音韻論における ‘drift」, 日本エドワードサピア協会講演（慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス）[招待講演], 2014.10.25.

窪蘭晴夫

「鹿児島方言における文のプロソディーから見た語のアクセント」, 日本言語学会 149 回大会ワークショップ（愛媛大学）, 2014.11.16.

窪蘭晴夫

「英語の謎, 日本語の不思議」, 早稲田大学英語英文学会講演 [招待講演], 2014.12.6

【研究調査】

- ・ 2014.7 鹿児島市薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のアクセント調査
- ・ 2014.9 甕島桑之浦集落（鹿児島県）甕島方言のアクセント調査
- ・ 2015.2 鹿児島市, 薩摩川内市（鹿児島県）鹿児島方言のイントネーション調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 7th Meeting of Formal Approaches to Japanese Linguistics (FAJL 7)（国際基督教大学と共同企画・運営） 2014.6.25-27.

- ・ Pre-conference colloquium（企画・運営）2014.7.24.
- ・ 14th International Conference on Laboratory Phonology (LabPhon 14)（共同企画・運営）2014.7.25-27.
- ・ 日本言語学会 149 回大会ワークショップ「文のプロソディーと語のプロソディー」（愛媛大学）（企画・運営）2014.11.16.
- ・ レキシコンフェスタ 3（国立国語研究所）（企画・運営）2015.2.1.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 講演「言葉を学ぶということ」，済美高校（愛媛県）[招待講演]，2014.11.13

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師（集中講義）
南山大学
台湾・東呉大学
- ・ 特別共同利用研究員の受入
オランダ・ユトレヒト大学

Timothy J. Vance (ティモシー・J・バンス)

理論・構造研究系 教授, 研究情報資料センター長

1951 生

【学位】 Ph.D. (言語学) (シカゴ大学, 1979)

【学歴】 ワシントン大学 (セントルイス) 卒業 (1973), シカゴ大学大学院言語学科修士課程修了 (1976), シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了 (1979)

【職歴】 ハワイ大学マノア本校 准教授 (1988), コネチカット・カレッジ 准教授 (1993), 同 教授 (1994), アリゾナ大学 教授 (2000), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授 (2010), 研究情報資料センター長 (2013.10)

【専門領域】 言語学, 音声学, 音韻論, 表記法

【所属学会】 日本語学会, 日本言語学会, 言語科学会, 日本音声学会, 日本音韻論学会

【学会等の役員・委員】 日本言語学会 編集委員, 日本音韻論学会 理事

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本語レキシコン ―連濁事典の編纂」: リーダー

研究目的:

本プロジェクトの最終目的は, 連濁に関連するあらゆる現象を可能な限り明らかにする事典を編纂することである。取り上げる課題は, (1) 連濁の由来と史的变化, (2) ライマンの法則, (3) 右枝条件, (4) 連濁と形態・意味構造, (5) 連濁と語彙層, (6) 他の音韻交替と連濁の相互作用, (7) アクセントと連濁の相互作用, (8) 連濁と表記法, (9) 連濁に関する心理言語学研究, (10) 方言の連濁, (11) 連濁と日本語学習, (12) 連濁研究史, 等々である。事典には, 包括的な参考文献一覧も含める。

研究成果:

リーダーやプロジェクト共同研究員が執筆した, 連濁に関する査読付き論文 14 本が 2014 年度に出版された。

リーダーやプロジェクト共同研究員が, 連濁に関する口頭発表 7 件およびポスター発表 1 件を 2014 年度に行なった。

6 月に国立国語研究所で, 11 月に山形市内でプロジェクトメンバーの打ち合わせ会を開催した。「事典」の英語版の代わりに作成することになった英文論文集の各論文の内容を議論した上で, 全体的に修正した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

ティモシー・J・バンス

「連濁とオノマトペの豊語」, 『国語研プロジェクトレビュー』5 (1), pp.32-38. 2014.6.

Timothy J. Vance

“If rendaku isn’t a rule, what in the world is it?”, *Usage-Based Approaches to Japanese Grammar: Towards the Understanding of Human Language*, pp.137-152, John Benjamins, 2014.6.

Timothy J. Vance

“What students of Japanese can learn from Akkadian cuneiform”, *Japanese Language and Literature* 48, pp.341-379. 2014.10.

Timothy J. Vance

“Rendaku”, *Handbook of Japanese Phonetics and Phonology*, pp.397–441, De Gruyter Mouton, 2015.2.

Timothy J. Vance, Mizuki Miyashita, and Mark Irwin

“Rendaku in Japanese dialects that retain prenasalization”, *Japanese/Korean Linguistics 21*, pp.33–42, CSLI, 2015.3.

Mark Irwin and Timothy J. Vance

“Rendaku across Japanese dialects”, *Phonological Studies* 18, pp.19–26. 2015.3.

【講演・口頭発表】

Timothy J. Vance

“The actuation of the shift from word-medial [ŋ] to [g] in Tokyo Japanese”, *New Ways of Analysing Variation Asia-Pacific 3*, Wellington, New Zealand, 2014.5.

Mark Irwin and Timothy J. Vance

“Rendaku across Japanese dialects”, 日本音韻論学会春期研究発表会（東京），2014.6.

Katsuo Tamaoka, Kyōko Hayakawa, and Timothy J. Vance

“Lexical-specific or rule-based rendaku by native Chinese and Korean speakers learning Japanese”, 日本言語学会第 148 回大会（東京），2014.6.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・ Association for Laboratory Phonology 第 14 回大会（企画・運営）2014.7.

横山 詔一（よこやま しょういち）理論・構造研究系 教授

1959 生

【学位】博士（心理学）（筑波大学，1991）

【学歴】横浜国立大学教育学部卒業（1981），筑波大学大学院博士課程心理学研究科修士号取得（1983），筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学（1985）

【職歴】上越教育大学学校教育学部 助手（1985），国立国語研究所情報資料研究部・電子計算機システム開発研究室 研究員（1991），同 情報資料研究部 主任研究官（1995），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門 領域長（2001），同 研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 教授（2009），研究情報資料センター長（2009.10-2013.9）

【専門領域】認知科学，心理統計，日本語学

【所属学会】日本心理学会，社会言語科学会，計量国語学会，日本語学会，日本教育工学会，行動計量学会

【学会等の役員・委員】大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所 運営委員，社会言語科学会 理事，計量国語学会 理事，社会言語科学会広報委員会 委員長，日本心理学会教科書作成委員会 副委員長，日本心理学会認定心理士認定基準作成 委員，筑波大学留学生センター 日本語・日本事情遠隔教育拠点事業 運営委員

【受賞歴】

2010 社会言語科学会 第9回徳川宗賢賞（優秀賞）

2010 国立国語研究所 第1回所長賞

1997 日本教育工学会 第11回日本教育工学会論文賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用」：リーダー

研究目的：

日本語の文字表記について，文字環境（文字レキシコンを含む）のモデル化に役立つ基礎研究をおこなう。文字環境のモデル化には，（1）新聞・雑誌・書籍，市販辞書，文字コード規格，各種文字表などによって物的文字環境の実態を明らかにすること，（2）文字表記を扱う人間の認知機構を精査すること，の双方向のアプローチが必須である。そこでは，文字政策，歴史的背景，出現頻度，接触意識，なじみ，好み，文字使用など，さまざまな要因を考慮しなければならない。たとえば，人間は日常生活において「出現頻度」の高い文字に高い確率で接触する。ある文字に対する「接触頻度」の高低によって，その文字に対する「接触意識」が生じ，それが「なじみ」，ひいては「好み」を形成し，社会的な「出現頻度」に影響を与えられと考えられる。さらに，それらの要素以外に，未知の字を既知の字体との類似性判断によって渡りをつける一種の推論作用のほか，文字の規範意識によっても文字生活が影響される可能性がある。このような文字表記の使用実態と使用意識に対する基礎研究は，日本人どうしの文字コミュニケーションに関する研究のほか，日本語学習者の漢字習得研究にも新たな理論的基盤を提供するものと期待される。

また，言語行動・意識のデータを解析するための理論等について，統計数理研究所との連携研究をおこなう。海外や理系分野の研究動向にも目を配り，言語変化研究のほか統計科学などにも貢献できる方法論を開拓する。その際に文字環境のモデル化研究で得られた知見を援用する。

研究成果：

〈共同研究の国際的な推進〉

1. 新聞のほかインターネットで使われている漢字出現頻度を調査し、『語彙マップで覚える漢字

と語彙 初級 1400』(J リサーチ出版),『日本語学習のためのよく使う順 漢字 2200』(三省堂),『日語学習常用漢字 2100』(四川大学)の3冊を国内および海外で出版した(徳弘, 2014, 2015)。

2. 仮名の字体および文字遣いに関する研究成果が査読付きの学会誌『日本語の研究』に掲載された(銭谷, 2014)。
3. 国際文字コード標準化活動(コンピュータの文字に関するもの)を推進した。今年度は変体仮名文字コードの国際標準化について, 情報処理推進機構国際標準推進センターおよび東京大学史料編纂所と連携・協力しながら研究を推進した。
4. 上記の国際文字コード標準化活動の成果をふまえて, 文献資料の共同利用を促進させるため, 原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発を進めた。その結果, 米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」が人間文化機構本部の研究資源共有化統合検索システム(nihuINT)に参加することになった。2015年3月末に公開。
5. JIS 漢字規格, 各種文字表, 古典籍写刊本などを中心に, 史の変遷を視野に入れて, 物的文字環境に関する資料の電子化をおこなうとともに, その成果に関する論文を『国立国語研究所論考』や『国立歴史民俗博物館研究報告』で公刊した(高田・小助川, 2014; 高田, 2015)。
6. 海外で開催された国際研究集会で文字コードに関する招待講演を2件おこなった(高田, 2014)。
7. 既存文字コード(JIS コードや Unicode など)で表現できない変体仮名の表記符号について調査・検討し, 第30回表記研究会で発表した(小助川・高田ほか, 2014)。
8. 教材岐阜県南西部をフィールドとして, 看板などを対象に文字景観調査を実施し, 日本語学会で発表した(田島ほか, 2014)。

〈共同研究の学際的な推進〉

1. 統計数理研究所との連携により, 言語行動・意識のデータを解析する研究を推進した。欧米の計量経済学などの分野で発展してきたパネルデータ(同一人物を経年的に追跡したデータ)の解析に関する理論的研究をふまえて, 同一の成人話者38名の言語変化を41年間追跡したデータを分散分析した。統計数理研究所の常勤教員2名を著者に含む共著論文が査読付き学会誌『計量国語学』に掲載された(横山ほか, 2014)。
2. 海外の大学で開催された国際研究集会に招待され, 文字意識と文字生活に関する基調講演をおこなった(横山, 2014)。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

横山詔一

「文字環境と単純接触効果」,『国語研プロジェクトレビュー』5, 国立国語研究所, pp.19-31. 2014.6.

横山詔一, 中村 隆, 阿部貴人, 前田忠彦, 米田正人

「成人の同一話者を41年間追跡した共通語化研究」,『計量国語学』, 計量国語学会, pp.241-250. 2014.12.

横山詔一

「誤字ではない誤字の心理学」,『HUMAN』, 人間文化研究機構(監修), pp.87-90. 平凡社, 2014.12.

《その他の出版物・記事》

横山詔一

書評「新刊寸感」,『日本語学』2014.6.

横山詔一

書評「新刊寸感」,『日本語学』2014.12.

【講演・口頭発表】

横山詔一, 高田智和, 阿部貴人

「漢字に対する日本人の意識と行動 ―計量的方法による検討―」, 韓国日本言語文化学会 2014 年度春季国際学術大会 (崇実大学校 (韓国)), 2014.5.10.

横山詔一

「電子メディアの漢字と東アジアの文字生活」, 第 4 回日台アジア未来フォーラム (国立台湾大学 (台湾)) 基調講演 [招待講演], 2014.6.13.

【研究調査】

・ 2014.6 台湾台北市, 文字環境調査 (国立台湾大学の招待)

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・ 高田智和・横山詔一, 第 8 回 NINJAL フォーラム「世界の漢字教育 ―日本語漢字をまなぶ―」(企画・運営) 2014.9.

・ 高田智和・横山詔一, NINJAL セミナー「漢文を日本語で読む」(企画・運営) 2014.9.

小磯 花絵（こいそ はなえ）理論・構造研究系 准教授

【学位】博士（理学）（奈良先端科学技術大学院大学，1998）

【学歴】千葉大学大学院文学研究科行動科学専攻修士課程修了（文学）（1996），奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了（理学）（1998）

【職歴】ATR 知能映像通信研究所研修研究員（1996），国立国語研究所言語行動研究部 研究員（1998），同 主任研究員（1998），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系准教授（2009）

【専門領域】コーパス言語学，談話分析，認知科学

【所属学会】日本認知科学会，社会言語科学会，言語処理学会，人工知能学会，音声学会

【学会等の役員・委員】社会言語科学会 事務局長・理事

【受賞歴】

2002 情報処理学会山下記念研究賞

1996 人工知能学会大会論文賞

1996 人工知能学会研究奨励賞

【2014 年度の研究成果の概要】

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備」：リーダー

研究目的：

将来的に国語研究所が主体となって大規模日本語会話コーパスを構築することを視野に，その基盤整備として，以下の三つを策定する：①均衡性を考慮した会話コーパスの設計，②種々の日常会話を収録するための方法論，③日常会話を適切・効率的に転記するための方法論。

日常会話は社会生活の基盤であり，日常生活を円滑にするためのコミュニケーションのあり様を総合的に解明することは急務である。こうした研究を支えるものとして，実際の日常会話場面を対象とした大規模な会話コーパスの構築が求められている。言語生活の本質を解明するには，日常の言語生活を反映したコーパス設計が不可欠である（①）。また，屋外での会話や携帯電話を介した会話など，日常の会話を収録するための技術的・倫理的な問題を整理・解決し，日常会話を収録するための方法論を具体的に策定する必要もある（②）。更には大量に収録した会話を適切かつ効率的に転記するための方策を確定する必要もある（③）。本課題では，コーパス構築に欠かすことのできない上記3点を具体的に検討・策定することで，将来的な大規模日本語会話コーパス構築のための道筋をつける。

研究成果：

- ①我々が日常的に交わす会話の実態をとらえてコーパス設計に活かすために，首都圏在住の成人日本語母語話者 243 人を対象に，3 日間の起床から就寝までに行った全ての会話について，いつ，どこで，誰と，何をしながら，どのような形式の会話を，どのくらいの長さ行ったかを調査した。その結果にもとづき，コーパス設計の方針を検討した。
- ②多様な日常会話の音声と映像を収録するための機器および収録方法について具体的に検討した。また福井健策弁護士を講師とするセミナー「資料の研究・公開と個人情報の利活用ルール ―日常会話の映像・音声収録を中心に―」を開催し，日常会話を収録・公開する際の倫理的問題などについて，プライバシー権や肖像権，個人情報保護法などの観点から具体的に検討した。
- ③広く流通している会話の転記方式として，会話分析方式，日本語話し言葉コーパス方式，Du Bois らによって開発された転記方式などを取り上げ基準を整理した上で，日常会話コーパス構築に向けて転記基準を策定し，マニュアル β 版としてまとめた。

【研究業績】

《著書・編書》

小磯花絵（編），小磯花絵，前川喜久雄，五十嵐陽介，丸山岳彦，伝 康晴，籠宮隆之，西川賢哉，菊地浩平（著）

『話し言葉コーパス 設計と構築』，総 186 頁，朝倉書店，2015.2.

《論文・ブックチャプター》

小磯花絵

「日本語自発音声における複合境界音調と統語構造との関係」，『音声研究』18（1），pp.57-69. 音声学会，2014.4.

伝 康晴，小磯花絵

「既存のツールと結合した話し言葉コーパス利用環境」，『自然言語処理』21（2），pp.99-123. 言語処理学会，2014.4.

小磯花絵，渡部涼子

「リズムから見た「語呂」」，『日本語学』33（6），pp.28-37. 明治書院，2014.5.

小磯花絵

「会話におけるイントネーション —独話との比較から見えてくるもの—」，『日本語学』33（7），pp.28-38. 明治書院，2014.6.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den

"Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Language Resources and Evaluation*, 48（2），pp.345-371. Springer, 2014.6.

小磯花絵

「『日本語話し言葉コーパス』に見るフィラーの特徴」，『日本語学』33（15），pp.88-93. 明治書院，2014.12.

《国際会議録》

Hanae Koiso, Yasuharu Den, Ken'ya Nishikawa, and Kikuo Maekawa

"Design and development of an RDB version of the Corpus of Spontaneous Japanese", *Proceedings of the Language Resources and Evaluation 2014*, pp.1471-1476. (Reykjavik), 2014.5.

Yuichi Ishimoto, Tomoyuki Tsuchiya, Hanae Koiso, and Yasuharu Den

"Towards automatic transformation between different transcription conventions: Prediction of intonation markers from linguistic and acoustic features", *Proceedings of the Language Resources and Evaluation 2014*, pp.311-315. (Reykjavik), 2014.5.

Yuichi Ishimoto and Hanae Koiso

"Utterance-final F0 changes in Japanese monologs and dialogs", *Proceedings of Oriental COCOSDA 2014*, pp.255-260. (Phuket), 2014.9.

【講演・口頭発表】

石本祐一，小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを基にした自発発話における独話・対話の F0 変化の分析」，日本音響学会 2014 年秋季研究発表会（北海学園大学），2014.9.4.

小磯花絵

「音声言語資源開発の今後」（パネル討論），言語資源シンポジウム「音声言語資源の明日を考える」（一橋講堂），2014.9.8.

土屋智行, 伝 康晴, 小磯花絵

「韻律情報にもとづいた機能表現の抽出」, 第6回コーパス日本語学ワークショップ (国立国語研究所), 2014.9.10.

小磯花絵

「会話コーパスの構築と日本語研究」, コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから― (国立国語研究所), 2014.12.6.

小磯花絵

「日常会話コーパスの構築に向けて」, レキシコン・フェスタ3 (国立国語研究所), 2015.2.1.

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する調査 ―中間報告―」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ (国立国語研究所), 2015.3.10.

小磯花絵, 伝 康晴, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫

「一日の会話行動に関する調査とその準備的分析 ―均衡会話コーパス設計に向けて―」, 言語処理学会第21回年次大会 (京都大学), 2015.3.17.

小磯花絵

「均衡性を考慮した大規模日常会話コーパスの構築に向けて」, シンポジウム「ことば・認知・インタラクション3」 (国立情報学研究所), 2015.3.20.

【研究調査】

・ 2014.11.1-2015.2.28 会話行動調査, 郵送によるアンケート調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・ 知的財産セミナー「資料の研究・公開と個人情報の利活用ルール ―日常会話の映像・音声収録を中心に―」 国立情報学研究所 (企画・運営) 2014.12.18.

高田 智和（たかだ ともかず）理論・構造研究系 准教授

1975 生

【学位】博士（文学）（北海道大学，2004）

【学歴】北海道大学文学部卒業（1999），北海道大学大学院文学研究科国文学専攻修士課程修了（2001），北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2005），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語生活グループ 研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，国語学，文献学，文字・表記，漢字情報処理

【所属学会】日本語学会，訓点語学会，計量国語学会，情報処理学会，日本言語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会電子情報委員会（2014 年 5 月から広報委員会）委員長，計量国語学会 理事，情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会 運営委員，情報処理学会情報規格調査会 SC2 専門委員会 委員，文字情報基盤ワーキンググループ 委員

【受賞歴】

2013 北海道大学文学部同窓会楡文賞

2010 情報処理学会情報規格調査会標準化貢献賞

2010 国立国語研究所第 1 回所長賞

2007 日本規格協会標準化貢献賞

【2014 年度の研究成果の概要】

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「所蔵資料の活用による共同利用基盤の構築」：リーダー

研究目的：

資産は資産であることを主張しなければ資産たり得ない。国立国語研究所の研究図書室及び研究資料室には，言語研究のための研究資産が保存・蓄積されている。本提案課題は，所蔵資料を共同利用基盤とし，所蔵資料の利活用による共同研究への展開を図ることを目的とした準備研究を行うものである。

所蔵資料を共同利用基盤とするためには，個別資料の学術的価値を各領域の研究者によって吟味することが必要不可欠である。しかし，現在の成員だけで所蔵資料すべてを検討することはできないため，日本語史・日本語研究史などの研究者の参画を得て，資料検討のための組織基盤を構築する。

また，近時のデジタルアーカイブズは研究環境の向上に大きく貢献しているが，日本語研究者を主たるユーザとしたデータ公開は存外に少ない。現在研究情報資料センターを中心に実施している所蔵資料（和本類）の電子化事業について，着手資料の優先順位を策定するとともに，人文情報学研究者との協働により，電子画像と電子化テキスト併用のデジタルアーカイブズのプロトタイプを制作・公開し，日本語研究（特に表記・語彙の史的研究）のデジタル環境の向上に寄与することを目指す。

研究成果：

- (1) 『易林本節用集（平井別版）』（慶長 2 年以降刊，全 2 巻，近世古辞書）の見出し語データを作成した。
- (2) 『蜷縮涼鼓集』（元禄 8 年刊，全 2 巻，四つ仮名資料）及び『和字正濫鈔』（元文 4 年刊，全 5 巻，仮名遣書）巻 1・巻 2 の全文テキストを作成した。
- (3) 研究図書室蔵書（和本類）を資料論的見地から実査し，2015 年度にデジタル撮影を行う書目リストを検討した。
- (4) 研究資料室収蔵資料のうち「林大氏寄贈資料」について精査を行い，「橋本進吉博士講義資料」や「JIS

漢字選定資料」を検討し、研究発表の準備を行った。

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築事業機構内連携研究「表記情報と書誌形態情報を加えた日本語歴史コーパスの精緻化」：代表者

研究目的：

文献学と言語計量の手法により、言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点等表記記号など）と書物や版面の形状（装丁、料紙、版型、頁遷移、行遷移など）との相関関係を明らかにする。また、既存の日本語歴史コーパスに表記情報・書誌形態情報を加え、言語から見た書物、書物から見た言語を分析するための共同利用基盤を作成・提供することで、異分野融合による新領域「総合書物学」の形成に寄与する。

研究成果：

- (1) 日本語歴史コーパス精緻化のための基礎研究（言語単位の検討、表記・書記単位の検討、書誌学的検討）を開始した。
- (2) 人情本コーパス作成のため、国立国語研究所所蔵の『小五金五郎仮名文章娘節用』（曲山人作・画、全9冊、天保2～5年刊行）『比翼連理花酒志満台』（松亭金水作・歌川国直画、全12冊、天保7～9年刊）『おくみ惣次郎春色江戸紫』（山々亭有人作、全9冊、元治元～明治刊）の翻字を行い、簡易タグつき全文テキストを作成した。

人間文化研究機構連携研究「近世日本語方言辞書の高度利用」：代表者

研究目的：

本提案課題は、日本初の全国方言集である『物類称呼』（越谷吾山著、安永4〔1775〕年刊）をデータベース化し、『日本言語地図』画像（http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/laj_map/）との連結を行うものである。

『物類称呼』は、項目数約550語、方言形約4,000語を収録した江戸時代唯一の全国方言集である。一方、『日本言語地図』は、国立国語研究所が実施した全国方言調査（1957-65年、2,400地点）に基づく300枚の言語地図である。この2資料を連結させることで、地域言語（方言）の語彙の変遷、伝播、消長など、言語変化の様相を俯瞰的にとらえることが可能となる。

また、「物類称呼データベース」の研究資源共有化統合検索システムへの参加を目指す。

研究成果：

- (1) 『物類称呼』各項目と『日本言語地図』各項目との照合

方言研究者との協働により、「物類称呼データベース」と『日本言語地図』画像を連結するために、『物類称呼』の見出し語（約550語）と『日本言語地図』の共通語形（300語）との照合を行い、語形対応表を作成した。語形対応表の作成にあたっては、語形が完全に一致するものだけでなく、関連する語形にも範囲を広げて検討を行った。

- (2) 「物類称呼データベース（試作版）」の作成

国立国語研究所研究図書室が所蔵する『物類称呼』（安永4年刊）を底本として、振り仮名や傍記、丁数などを簡易タグで表現した全文翻字データを作成した。これをもとに、全文検索システムを登載した物類称呼データベース（試作版）を作成した。今後、GUIの整備を進め、2015年度中に試験公開を行う。

人間文化研究の連携共同推進事業（資源共有化推進事業）「固有表現知識ベースデータ（人名データ）の作成」：代表者

研究目的：

『古事類苑』や芳賀矢一『日本人名辞典』から日本史人名を収録した知識ベースを構築し、人間文

化研究機構研究資源共有化システムの高度化を行う。

研究成果：

- (1) 芳賀矢一『日本人名辞典』の全文テキスト化を実施し、全 55,000 項目の 3 分の 1 を入力した。
これにより、2012 年度からの 3 ヶ年にわたる『日本人名辞典』の全文テキスト化作業が完了した。
- (2) 人名一覧表示システム用データ（約 1,700 項目）の整備を実施した。（人名一覧表示システム
http://mgr.nihu.jp/nihuKB/meta_pub/G0000093person）

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

高田智和, 小助川貞次

「古典籍原本画像と翻字テキストの対照ビューアの作成と教育利用事例」, 『国立国語研究所論集』
8, pp.129-140. 2014.11.

高田智和

「ヲコト点の座標表現」, 『国立歴史民俗博物館研究報告』192, pp.171-181. 2014.12.

《データベース類》

「日本語史研究資料（国立国語研究所蔵）」に下記 7 点を追加公開

- ・『しちすつ仮名文字使蜆縮涼鼓集』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=kensyukuryoko> 2014.7.

- ・『牛店雑談安愚楽鍋』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=aguranabe> 2014.7.

- ・『国民之友』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=kokuminnotomo> 2014.7.

- ・『易林本節用集』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=ekirinbon> 2015.1.

- ・『和字正濫鈔』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=wajisyoransyo> 2015.1.

- ・『諸国方言物類称呼』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=buturuisyoko> 2015.1.

- ・『玉菊全伝花街鑑』

<http://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjaldb/bunken.php?title=satokagami> 2015.1.

《その他の出版物・記事》

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』33 (11), pp.94-95. 2014.9.

高田智和

「新刊・寸感」, 『日本語学』34 (3), pp.84-85. 2015.3.

【講演・口頭発表】

高田智和

「日本の常用漢字の歴史と展望」, 韓国日本言語文化学会 2014 年度春季国際学術大会（韓国・崇実大学校）, 2014.5.

堤 智昭, 高田智和

「古典籍学習支援のための原本画像と翻字テキストの公開ツール」, 韓国日本言語文化学会 2014 年度春季国際学術大会（韓国・崇実大学校）, 2014.5.

横山詔一，高田智和，阿部貴人

「漢字に対する日本人の意識と行動 ―計量的方法による検討―」，韓国日本言語文化学会 2014 年度春季国際学術大会（韓国・崇実大学校），2014.5.

日本語学会電子情報委員会（高田智和・田島孝治・岡島昭浩・川口敦子・仁科明）

「日本語学会電子化の 15 年」，日本語学会 2014 年度春季大会（早稲田大学），2014.5.

高田智和

「漢字字体の知識と選好 ―台湾日本語学習者の場合―」，第 4 屆臺日亞州未來論壇「東亞文化傳播與交流 ―文學，思想，語言―」，国立台湾大学，2014.6.

清野陽一，山田太造，高田智和，古瀬 蔵

「人文科学データベースからの人名一覧表示システムの構築」，第 103 回人文科学とコンピュータ研究会（兵庫県立歴史博物館），2014.8.

高田智和

「米国議会図書館本源氏物語の翻字と画像公開」，公開シンポジウム「漢デジ 2014：デジタル翻刻の未来」（北海道大学），2014.8.

高田智和

「漢字字体規範史データベース」，東アジア漢字データベース・シンポジウム（角川文化振興財団）（ホテルメトロポリタンエドモンド），2014.8.

小助川貞次，斎藤達哉，銭谷真人，高田智和，當山日出夫，矢田 勉

「Unicode への変体仮名セットの提言」，第 30 回表記研究会研究発表会（関西大学），2014.9.

高田智和

「古典籍の翻刻と文字コード」，東アジア史料研究編纂機関協議会国際学術会議（韓国・国史編纂委員会），2014.10.

高田智和，早田美智子，老子裕輝

「日本語研究・日本語教育文献データベースと外部機関レポジトリとの連携」，日本語学会 2014 年度秋季大会（北海道大学），2014.10.

近藤明日子，小木曾智信，高田智和，田中牧郎

「『国民之友コーパス』の開発」，日本語学会 2014 年度秋季大会（北海道大学），2014.10.

Tomokazu Takada

“Language Issues in Japanese academia”，World Script Symposia 2014, Sejong Center (Seoul), 2014.10.

寺島宏貴，星野雅英，高田智和

「ことばの研究資料アーカイブ ―国立国語研究所所蔵資料の利活用に向けて―」，人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2014 オープン化するヒューマニティーズ ―その可能性と課題を考える―」（一橋講堂），2014.12.

【研究調査】

- ・ 2014.6.9-10 大英図書館 敦煌文献調査
- ・ 2014.9.8-12 ハーバード大学燕京図書館・米国議会図書館 日本写本調査
- ・ 2014.11.4 大津市歴史博物館 仏典調査
- ・ 2014.12.1-5 漢喃研究所・社会科学通信図書館・ベトナム国立図書館 ベトナム語漢文加點資料調査
- ・ 2015.2.19 富山市立図書館 山田孝雄文庫調査
- ・ 2015.3.5-6 秋田県立図書館 五山版調査

・ 2015.3.18 実践女子大学図書館 黒川文庫調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ NINJAL セミナー「漢文を日本語で読む」（企画・運営）2014.9.20.
- ・ 第8回 NINJAL フォーラム「世界の漢字教育 ―日本語漢字をまなぶ―」（企画・運営）2014.9.21.
- ・ 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2014 オープン化するヒューマニティーズ ―その可能性と課題を考える―」（プログラム委員会委員）2014.12.13-14.

三井 はるみ（みついはるみ）理論・構造研究系 助教

【学位】修士（文学）（東北大学，1986）

【学歴】東北大学大学院文学研究科博士課程後期3年の課程単位修得満期退学（1989）

【職歴】昭和女子大学 講師（1989），国立国語研究所 主任研究官（1997），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所理論・構造研究系 助教（2009）

【専門領域】日本語学，社会言語学，方言文法

【所属学会】日本語学会，日本方言研究会，社会言語科学会，日本音声学会，日本語文法学会

【学会等の役員・委員】日本方言研究会世話人，日本音声学会評議員

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

研究成果：

担当調査地点8地点を含むデータベースが公開された。

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：共同研究員

研究成果：

方言コーパス構築のための基礎作業（担当：東京都）を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

三井はるみ

「九州西南部方言における順接仮定条件表現体系の多様性 ―熊本市方言と鹿児島県充員町方言―」，中山緑郎（編）『日本語史の研究と教育』，pp.322(123)–306(139)，明治書院，2015.3.

《辞書・辞典類》

三井はるみ

「気づかれにくい方言」，「ゆれ」，佐藤武義，前田富祺（編集代表）『日本語大事典（上）』『日本語大事典（下）』，2,456p. 朝倉書店，2014.11.

《その他の出版物・記事》

三井はるみ

「あいさつは決まり文句？」，『小学国語通信 ことばだより』2014 年秋，教育出版，2014.9.

【講演・口頭発表】

三井はるみ

「立川の方言の現在」，立川市歴史民俗資料館・国立国語研究所講演会「立川の方言」（立川市女性総合センター・アイム），2014.11.

【研究調査】

- ・2014.5.19 千葉県香取郡神崎町 方言分布調査
- ・2014.5.27 千葉県長生郡長生村 方言分布調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研究所「ニホンゴ探検」で，スタンプラリークイズ出題・説明。2014.7.

木部 暢子（きべ のぶこ）時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長

1955 生

【学位】博士（文学）（九州大学，1998）

【学歴】九州大学文学部文学科卒業（1978），九州大学大学院文学研究科修士課程修了（1980）

【職歴】純真女子短期大学 助手（1980），純真女子短期大学 講師（1981），福岡女学院短期大学 講師（1985），鹿児島大学法文学部 助教授（1988），同 教授（1999），同 副学部長（2004），同 学部長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授，研究系長，副所長（2010）

【専門領域】日本語学，方言学，音声学，音韻論

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，西日本国語国文学会

【学会等の役員・委員】日本学術会議会員，日本語学会 理事，日本音声学会 理事

【受賞歴】

1990 新村出財団 研究助成

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：リーダー

研究目的：

グローバル化が進む中，世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009 年 2 月のユネスコの発表によると，日本語方言の中では，沖縄県のほぼ全域の方言，鹿児島県の奄美方言，東京都の八丈方言が危険な状態にあるとされている。これらの危機方言は，他の方言ではすでに失われてしまった古代日本語の特徴や，他の方言とは異なる言語システムを有している場合が多く，一地域の方言研究だけでなく，歴史言語学，一般言語学の面でも高い価値を持っている。また，これらの方言では，小さな集落ごとに方言が違っている場合が多く，バリエーションがどのように形成されたか，という点でも注目される。

本プロジェクトでは，フィールドワークに実績を持つ全国の研究者を組織して，これら危機方言の調査を行い，その特徴を明らかにすると同時に，言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また，方言を映像や音声で記録・保存し，それらを一般公開することにより，危機方言の記録・保存・普及を行う。

研究成果：

- ・調査：島根県出雲方言調査（2014.8.17-21），宮崎県椎葉村方言調査（2014.9.1-6，2015.3.9-13）を実施した。
- ・研究発表会：「形容詞の記述と問題点」（2014.9.13-14，国語研講堂，科研 A「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語」との共催），「コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから―」（2014.12.6-7，国語研講堂，「多文化共生社会における日本語教育研究」プロジェクト，科研 B「方言コーパスの構築」との共催）を開催した。
- ・社会貢献：「出雲方言公開講座／国立国語研究所セミナー 出雲方言のつどい」（2014.8.20，出雲市くびきホール，出雲市との共催，来場者約 200 人），「日本の危機言語・方言サミット IN 八丈島」（2014.12.12-14，八丈町おじゃれホール，八丈町・文化庁との共催，参加者数延べ 423 人）。
- ・音声データの整備・公開：「沖縄県本部方言の自然談話」，「鹿児島県喜界島方言の基礎語彙」音声データの公開（<http://kikigengo.sakurane.jp/>），「方言コーパス（試作版）」（青森県弘前市，東京都台東区，石川県能登羽咋，大阪市，広島市，福岡県北九州市の 6 地点のデータによる方言コーパス）を作成。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-1.「昔がたりにみる自然観・自然思想の解明」：代表者

研究目的：

各地に残る昔がたりには、人と自然の関わり方を題材にした話が多くある。また、各地の方言が消滅の危機にある現在、方言の語り自体が資料的に大きな価値を持っている。本研究は、日本各地の昔がたりを記録、保存すると同時にそれらの分析を通して、各地の自然観・自然思想について研究することを目的とする。なお、本研究でいう昔がたりは、定型的な昔がたりのほか、昔の生活や経験を方言で語ったものを含んでいる。

研究成果：

- ・公開シンポジウム「津軽の人と自然」（2014.7.28、青森県観光物産館アスパム）にて「『ねぶた』と『ねぶた』—東北方言の特徴—」を発表。
- ・『人間文化研究機構 連携研究 アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明 最終年度成果報告書』（2015.2）

人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」総括班：代表者

研究目的：

東日本大震災から2年が経ち、地域は徐々に復興しつつある。そのような中、復興の精神的な支えとして、地域の歴史、文化、社会習慣、人と人とのつながりといった人間文化の役割が日に日に重要度を増している。人間文化研究機構の各機関では、震災以降、さまざまな復興支援活動を行ってきたが、地域の復興支援をより充実させるためには、各機関やグループが個々に活動を行うのではなく、これらを総合し、人間文化という大きな視点から支援活動を行う必要がある。このような背景を踏まえ、本プロジェクトは、震災以降、それぞれの機関やグループが行ってきた復興支援活動の成果に基づき、それぞれのグループの連携・協力を図ることにより、人間文化という大きな視点から地域の復興を支援すること、また、今後、起きると予想される大規模災害に対し、人間文化研究の立場からどう向き合うかについて検討することを目的とする。

研究成果：

- ・木部暢子編『災害に学ぶ 文化資源の保全と再生』pp.328（東京：勉誠出版、2015.3）
- ・木部暢子編『人間文化研究機構 連携研究「大規模災害と人間文化研究」公開シンポジウム報告書』pp.112（国立国語研究所、2014.11）

人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」A2「方言と災害」：代表者

研究目的：

本研究は、災害時における方言の役割や多言語社会に対応した言語支援のあり方について検討することにより、言語（方言）による地域社会支援の方法について、具体的なモデルを提示することを目的とする。そのために、災害緊急時に必要となる言語資料の整備、および地域社会に暮らす人々（移住者を含む）の連携の基盤となる、方言のデータの整備を行う。

研究成果：

- ・身体語彙に関する方言の全国資料の作成。
- ・中国語版、韓国語版、英語版の医療機関受診の手引きを作成。
- ・青森県八戸市、岩手県宮古市、福島県伊達市、福島県郡山市の「震災を語る方言談話資料」の作成。

文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）」：代表者

研究目的：

我が国における言語・方言のうち、消滅の危機にあるものについて、ユネスコが2009年に発行した“Atlas of the World's Languages in Danger”の内容及び、文化庁委託事業「危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）報告書」（2014.3・琉球大学）を踏まえ、消滅の危機にある言語・方言のうち、当該言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究を行う。

研究成果：

- ・「文化庁委託事業 危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究 報告書」（国立国語研究所，2015.3）

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

木部暢子

「鹿児島方言の「イッ」と「イタッ」ーテキストを使った方言研究の実践ー」，西日本国語国文学会『西日本国語国文学』1，pp.1-14. 2014.7.

木部暢子

「奄美喜界島方言の親族語彙 ーお父さん・お母さん・お爺さん・お婆さんー」，『国語研プロジェクトレビュー』5（2），pp.57-67. 2014.10.

木部暢子

「鹿児島方言辞典 ー遊戯の部ー」，『国語国文薩摩路』59，pp.1-7. 2015.3.

木部暢子

「『香』のことば」，昭和堂『五感／五環 文化が生まれるとき』，pp.144-149. 再録，2015.3.

《国際会議録》

Nobuko Kibe and Kaori Ototake

“Regional differences in the usage of ‘Yes’ and ‘No’ in response to negative interrogatives in Japanese”，*Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, pp.222-227, Thailand, pp.24-25. 2014.5.

《データベース類》

- ・「沖縄県本部町瀬底方言の自然談話」，一般公開，2014.12.
<http://kikigengo.sakura.ne.jp/motobu/motobu.html>
- ・「鹿児島県喜界島方言の基礎語彙」，一般公開，2015.1.
<http://kikigengo.sakura.ne.jp/kikai/kikai.html>
- ・「方言コーパス（試作版）」，非公開

《その他の出版物・記事》

木部暢子

「鹿児島県沖永良部方言」，文化庁委託事業報告書『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）』，2015.3.

木部暢子，乙武香里

「鹿児島県与論方言」，文化庁委託事業報告書『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究（八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言）』，2015.3.

【講演・口頭発表】

木部暢子

「琉球語の親族名称・呼称」，国立遺伝学研究所・研究集会「DNA から見た日本列島人の地域的

多様性を生み出した要因をさぐる」(国立遺伝学研究所), 2014.12.21.

木部暢子

「方言コーパスの構築と利用」, 第 39 回九州方言研究会 (熊本大学), 2015.1.11.

【研究調査】

- ・ 2014.7 青森県青森市・弘前市 民俗文化調査
- ・ 2014.8 島根県出雲市 基礎語彙・文法・アクセント調査
- ・ 2014.9 宮崎県椎葉村 方言辞典作成のための調査
- ・ 2015.2 鹿児島県与論町 文法調査, 方言の継承に関する調査
- ・ 2015.2 鹿児島県和泊町 方言の継承に関する調査
- ・ 2015.3 宮崎県椎葉村 方言辞典作成のための調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 出雲市「方言公開講座 / 国立国語研究所セミナー 出雲方言のつどい」(企画・運営) 2014.8.
- ・ 東京都八丈町「日本の危機言語・方言サミット IN 八丈島」(企画・運営) 2014.12.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 木部暢子「『香』のことば」, 『人と自然』 7, pp.20-23. 昭和堂, 2014.11.
- ・ 木部暢子「島言葉は島文化を知る入り口」, ritokei (離島経済新聞社) No11, pp.6-7. 2014.11.
- ・ 木部暢子「言語・方言が消えていく」, 『學士會会報』 909, pp.43-46. 2014.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 日本学術振興会特別研究員の受入 (2 名) 津田智史, 青井隼人
- ・ フィールド調査指導 島根県出雲方言調査 (2014.8) 大学院生 7 人
- ・ フィールド調査指導 宮崎県椎葉村方言調査 (2014.9) 大学生 7 人

相澤 正夫 (あいざわ まさお) 時空間変異研究系 教授

1953 生

【学位】修士(言語学)(東京大学, 1980)

【学歴】東京大学文学部第3類(語学文学)言語学専修課程卒業(1977), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程修士課程修了(1980), 東京大学大学院人文科学研究科言語学専門課程第1種博士課程単位取得退学(1984)

【職歴】国立国語研究所日本語教育センター第一研究室 研究員(1984), 同 主任研究官(1990), 同 室長(1991), 国立国語研究所言語体系研究部 部長(1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 部門長(2001), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授(2009), 副所長(2009.10-2013.9)

【専門領域】社会言語学, 音声学, 音韻論, 語彙論, 意味論

【所属学会】日本語学会, 日本言語学会, 社会言語科学会, 日本音声学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員, 日本音声学会 評議員, 『NHK 日本語発音アクセント辞典』改訂専門委員

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」: リーダー

研究目的:

20 世紀前半から 21 世紀初頭(昭和戦前期から現在まで)の「現代日本語」, 特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して, そこに見られる変異の実態, 変化の方向性, すなわち「動態」を, 従来試みられることのなかった「多角的なアプローチ」によって解明する。あわせて, 現代日本語の的確な動態把握に基づき, 言語問題の解決に資する応用研究を開拓する。

研究成果:

次の(1)に示すとおり, 研究期間終了(2015 年度)までの2年間における成果物の刊行計画を固めるとともに, (2)に示すように, そのための準備活動を着実にを行った。

- (1) 大正・昭和戦前期の「SP 盤貴重音源資料」とその「文字化資料」を活用するサブ・プロジェクトの成果物として, 論文集と資料集を出版社から公刊することとした。論文集は笠間書院, 資料集は日外アソシエーツとの間で 2015 年度内に公刊することで, 基本的な合意が得られた。
- (2) 多様な研究背景をもつサブ・プロジェクトのメンバーにより, 大正・昭和戦前期の演説・講演等に見られる言語特徴の多角的な分析を進め, 年度内に3回開催した研究発表会では6件の成果発表があった。前年度に発表のあった4件, 次年度に予定する2件と合わせて, 論文集にはこれらの発表を基にした12編の論文を収載する予定である。

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「均衡性を考慮した大規模日本語会話コーパス構築に向けた基盤整備」: 共同研究員

研究成果:

「一日の会話行動調査」の調査票設計と実施の一部, 及び調査報告の共同発表・共同執筆を分担した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

南部智史, 朝日祥之, 相澤正夫

「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について —札幌と富良野の言語調査データを利用して—」, 『国立国語研究所論集』7, pp.167-185. 2014.5.

《辞書・辞典類》

相澤正夫

「行政機関の日本語」, 「国際化と日本語」, 『日本語大事典』, 朝倉書店, 2014.11.

《その他の出版物・記事》

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』 33 (6), pp.74-75. 2014.5. (書評・紹介 3 冊: 見坊豪紀他編『三省堂国語辞典 第七版』(2014.1, 三省堂), 田澤耕著『〈辞書屋〉列伝』(2014.1, 中公新書), 井上孝夫著『その日本語, ヨロシイですか?』(2014.1, 新潮社))

相澤正夫

「言語動態を多角的にとらえる —コーパス調査と全国調査の複合活用—」, 『国語研プロジェクトレビュー』 5 (2), pp.78-88. 2014.10.

相澤正夫

「新刊・寸感」, 『日本語学』 33 (13), pp.90-91. 2014.11. (書評・紹介 3 冊: 小林隆, 澤村美幸著『ものの言いかた西東』(2014.8, 岩波新書), 金水 敏, 田中ゆかり, 岡室美奈子編『ドラマと方言の新しい関係 —『カーネーション』から『八重の桜』, そして『あまちゃん』へ—』(2014.8, 笠間書院), 塩田雄大著『現代日本語史における放送用語の形成の研究』(2014.9, 三省堂))

相澤正夫

「わかりにくい外来語をわかりやすくするための工夫」, 高木まさき, 森山卓郎監修, 青山由紀, 深沢恵子編集『光村の国語 くらべて, かさねて, 読む力 五・六年生』, pp.52-55. 2015.2.

【講演・口頭発表】

Satoshi Nambu, Yoshiyuki Asahi, and Masao Aizawa

“Change of allophones of /g/ in Japanese: A quantitative analysis based on large-scale surveys”, NWAV Asia-Pacific 3, Victoria University of Wellington, New Zealand, 2014.5.

相澤正夫

「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明 —研究成果の概要—」, 国立国語研究所研究成果発表会 2015 (口頭発表) (学術総合センター), 2015.1.

小磯花絵, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫, 伝 康晴

「均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する調査 —中間報告—」, 第 7 回コーパス日本語学ワークショップ (国立国語研究所), 2015.3.

小磯花絵, 伝 康晴, 土屋智行, 渡部涼子, 横森大輔, 相澤正夫

「一日の会話行動に関する調査とその準備的分析 —均衡会話コーパス設計に向けて—」, 言語処理学会第 21 回年次大会 (NLP2015) (京都大学吉田キャンパス), 2015.3.

【研究調査】

・ 2014.11-2015.2 均衡会話コーパス設計のための一日の会話行動に関する調査 (首都圏)

【その他の学術的・社会的活動】

・ 『NHK 日本語発音アクセント辞典』の改訂専門委員として, 随時, 意見聴取に応じた。

大西 拓一郎（おおにし たくいちろう）時空間変異研究系 教授

1963 生

【学位】修士（文学）（東北大学，1987）

【学歴】東北大学文学部卒業（1985），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1987），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻単位取得退学（1989）

【職歴】東北大学文学部 助手（1991），国立国語研究所言語変化研究部第一研究室 研究員（1990），同 主任研究官（1996），同 室長（1999），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本言語学会，日本音声学会，日本方言研究会，日本文芸研究会

【学会等の役員・委員】日本語学会 評議員

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：リーダー

研究目的：

本研究は，日本語の方言分布がどのようにしてできたのかを明らかにすることを目的に，全国の方言研究者が共同でデータを収集・共有しながら進めるものである。日本の方言学においては，言語の地域差を詳細に調査し地図に描く言語地理学的手法に基づく研究を 50 年以上前から本格的に開始した。国立国語研究所が『日本言語地図』『方言文法全国地図』という全国地図を刊行する一方，大学の研究室を中心に地域を対象とした詳細な地図が数多く作成されてきた。そこで把握される方言の分布を説明する基本原理は，中心から分布が広がると考える「方言圏論」である。問題はその原理の検証が十分に行われてこなかった点にある。幸いにして日本には長期にわたる方言分布研究の蓄積があり，現在の分布を明らかにすることで時間を隔てた分布の変化が解明できると考えられる。具体データをもとに方言とその分布の変化の解明に挑戦する，世界にも例のないダイナミックな研究を目指す。

研究成果：

全国 554 地点の調査結果をデータベース化した。また，プロジェクトのリーダーとして，方言形成について次のような基本理論を考えた。方言（言語）は意思疎通のための道具であるゆえ，社会で共有されるシステムとしての性格を強く有する。したがって，言語変化はシステムとしての合理性，伝達道具としての有効性を高めるために起こり，分布の変化・形成にもそれが反映される。この理論をもとに（1）言語変化はいわゆる「中心地」に限らずどこでも発生する，（2）発生した変化は「放射状」に広がる必然性はなく，共同体領域内を埋めるように広がって分布を形成する，（3a）拡散は永続せず分布形成後に停止する，（3b）伝達道具であるゆえ不変化が基本である，（4a）文法事項は語彙事項より変化の拡散範囲が広い，（4b）文法事項は語彙事項より変化普及に時間を要する，という仮説を立てた。この仮説に対し，本プロジェクトで得られた方言分布データを利用して，実時間経年比較による検証を行った。以上の理論・仮説・検証を日本語学会 2014 年度秋季大会（北海道大学：札幌市）に応募・採択されたワークショップ「方言分布の経年比較 ―実時間比較を通して方言の形成を探る―」において発表した。検証の結果，（1）（2）（3a）（4a）を実証するに至り，（3b）（4b）はさらに分析とデータを要するという結論を得た。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」言語分析による自然観・自然思想の研究 公募班「河川流域の自然・人間社会と方言の分布」：代表者

研究目的：

川は海と山をつなぎ、水の流れとそれに沿った道は村と町をつなぎ、人をつなぐ。そしてまた川は岸の向こうとこちらを切り分け、人とその文化を分断する。そのような河川流域を対象に自然や社会と言語の時間ならびに空間的相関を明らかにすることを目的とする。

研究成果：

庄川流域の調査結果ならびに天竜川流域の調査結果のデータベース化を進めた。先行研究の中で解明されてきた方言分布との比較を行い、変動を把握し、GISを活用しながら言語外諸条件との照合を行った。また、複数回の研究会を行い、研究成果論集の原稿とりまとめの準備を行った。そのほか、台湾で開催された言語地理学研究のワークショップに参加し、台湾・中国における言語地理学の状況を確認するとともに研究情報の交換を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

大西拓一郎

「言語地理学と方言圏論，方言区画論」，小林 隆（編）『柳田方言学の現代的意義』，pp.24-29. ひつじ書房，2014.7.

大西拓一郎

「方言分布の変化をとらえた！」，『国立国語研究所プロジェクトレビュー』5（2），pp.66-77, 2014.10.

Onishi Takuichiro

“Arbitrariness and motivation in geolinguistics: Verification of the “simultaneous change hypothesis” (tagenteki-hassei-kasetsu)”, *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, pp.41-52. 2014.10.

《データベース類》

・全国方言分布調査データベース

【講演・口頭発表】

Onishi Takuichiro

“Timespan comparison of dialectal distributions”, 15th International Conference on methodology in dialectology (Methods in Dialectology VV), University of Groningen, 2014.8.12.

大西拓一郎

「言語変化と分布変化の理論と検証」，日本語学会 2014 年度秋季大会（北海道大学），2014.10.18.

【大学院教育・若手研究者育成】

・東京外国語大学 AA 研 LingDy2 テクニカルワークショップ「ゼロからはじめる言語地図」講師，2014.7.5.

朝日 祥之（あさひ よしゆき）時空間変異研究系 准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（大阪大学，2004）

【学歴】関西外国語大学外国語学部英米語学科卒業（1997），エセックス大学大学院言語・言語学研究科社会言語学専攻修士課程修了（1998），大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程後期課程修了（2004）

【職歴】独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第二領域 研究員（2004），同研究開発部門言語生活グループ研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】社会言語学，言語学，日本語学

【所属学会】International Congress for Dialectologists and Geolinguists, Methods, Foundation for Endangered Languages, 関西言語学会，日本言語政策学会，日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会

【学会等の役員・委員】変異理論研究会 世話人，METHODS international steering committee member, NWAV-AP steering committee member, Asia-Pacific Language Variation, editorial board member

【受賞歴】

2013 国立国語研究所第6回所長賞

2010 第9回徳川宗賢優秀賞（社会言語科学会）

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2014 年度の研究成果の概要】

人間文化研究機構日本関連在外資料調査研究「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」音声資料チーム「ハワイと北米に渡った日系移民音声資料を用いた社会言語学的研究」：代表者

研究目的：

本研究は，オーラルヒストリー研究をはじめとする音声資料の言語資源化，およびその資源を活用した言語学的分析を行うものである。ハワイ・北米への日系移民を中心的に取り上げ，そこで用いられている日本語・英語の言語学的特徴の分析を行う。

研究成果：

2014 年度に実施した資料調査で得た資料を活用した研究論文集を東京堂出版より刊行した。その他には，サクラメント歴史センター，ハワイ日本文化センター所蔵資料のデジタル化作業を進めた。

フィージビリティスタディ型共同研究プロジェクト「日本関連在外音声資料の学際共同利用に向けた言語研究資源化」：リーダー

研究目的：

本研究では，在外日本語音声資料をデータベース化し，言語学，歴史学，文化人類学，民俗学，音楽学などの研究者に提供することにある。

研究成果：

国立国会図書館憲政資料室所蔵の移民関連資料のうち，録音資料（カセットテープ107本）の複製許可を，政治史料課占領期資料係との打ち合わせの結果，得ることができ，当該資料デジタル化作業を終了させることができた。全米日系人博物館所蔵の二つのコレクションについて，使用の許諾を得

ることができた。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

研究成果：

北海道富良野市における言語使用・言語意識調査を実施した。調査結果について Sociolinguistics Symposium20（フィンランド・ユヴァスキュラ）で研究発表を行った。

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

研究成果：

2013 年度までに担当した調査結果を踏まえ、分析の準備にあたった。

【研究業績】

《著書・編書》

朝日祥之，原山浩介（編）

『アメリカ・ハワイ日系社会の歴史と言語文化』，東京堂出版，2015.3.

《論文・ブックチャプター》

朝日祥之

「趣旨説明 海を渡った日本語を見つめる」，『人間文化』20，pp.4-8. 人間文化研究機構，2014.5.

南部智史，朝日祥之，相澤正夫

「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について —札幌と富良野の言語調査データを利用して—」，『国立国語研究所論集』7，pp.167-185. 国立国語研究所，2014.5.

朝日祥之

「社会言語・言語生活」，『日本語の研究』10（3），pp.85-92. 日本語学会，2014.7.

朝日祥之

「ニヅフ人日本語話者に見られる言語的特徴 —『ギリヤークの昔話』を用いて—」，『生活語の世界（北海道方言研究会 40 周年記念論文集）』，pp.136-143. 北海道方言研究会，2014.10.

《その他の出版物・記事》

朝日祥之

「新刊・寸感」，『日本語学』33（8），pp.88-89. 明治書院，2014.7.

朝日祥之

「新刊・寸感」，『日本語学』34（1），pp.84-85. 明治書院，2015.1.

【講演・口頭発表】

Yoshiyuki Asahi

“Legacies of Gifu and Tosa dialects in a small town of Tokoro in Hokkaido”，NWAV-AP3, 2014.5.1.

Satoshi Nambu, Yoshiyuki Asahi, and Masao Aizawa

“On the change of allophones of /g/ in Japanese: A quantitative analysis based on large-scale surveys”，NWAV-AP3, 2014.5.3.

Yoshiyuki Asahi

“Effect of Hiroshima dialect on World Japanese: A case of complementizer deletion”，Sociolinguistics Symposium 20, 2014.6.17.

Yoshiyuki Asahi

“Linguistic features in the: “Buried Issei Japanese Voice” in the Americas”，Methods XV,

2014.8.15.

朝日祥之, 尾崎喜光

「北海道における方言使用の現状と実時間変化 その3」, 第209回北海道方言研究会例会, 2014.9.7.

朝日祥之

「北海道北見市常呂町における方言接触と変容 岐阜地区居住者を例に」, 第209回北海道方言研究会例会, 2014.9.7.

Yoshiyuki Asahi

“Sociolinguistics of Karafuto and Sakhalin Japanese”, NINJAL International Symposium: Crosslinguistics and Linguistic Crossing in Northeast Asia, 2014.11.28.

Mie Hiramoto and Yoshiyuki Asahi

“Use of foreign-origin personal pronouns: Observations in overseas varieties of Japanese”, 2015 Winter SPCL (Society for Pidgin and Creole Languages), 2015.1.10.

【研究調査】

- ・ 2014.10 北海道富良野市
- ・ 2015.1 米国・ハワイ州ホノルル市
- ・ 2015.3 米国・カリフォルニア州サクラメント市

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 出前授業「方言の不思議な世界」, 東京都中央区佃中学校, 2014.9.5.

井上 文子 (いのう え ふみこ) 時空間変異研究系 准教授

【学位】修士（文学）（大阪大学，1992）

【学歴】高知女子大学文学部国文学科卒業（1984），大阪大学大学院文学研究科博士前期課程日本学専攻修了（1992），大阪大学大学院文学研究科博士後期課程日本学専攻中退（1994）

【職歴】大阪大学文学部 助手（1994），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1995），同 主任研究官（1997），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門資料整備グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】方言学，社会言語学

【所属学会】日本方言研究会，日本語学会，社会言語科学会，日本語文法学会

【受賞歴】

1993 第11回新村出記念財団 研究助成

【2014年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：共同研究員
研究成果：

中央資料庫に所蔵されている方言談話資料を公開するためのデータ整備、『全国方言談話データベース ふるさとことば集成』を用いた「方言コーパス」試作版のデータ整備。

【研究業績】

《データベース類》

・「方言ロールプレイ会話」，更新，2014.10. <http://hougen-db.sakuraweb.com/>

《辞書・辞典類》

井上文子

「全国方言資料」，「日本のふるさとことば集成」，「方言談話資料」，佐藤武義，前田富祺（編集代表）『日本語大事典（上）』『日本語大事典（下）』，2456p. 朝倉書店，2014.11.

《その他の出版物・記事》

井上文子

「京ことばにみる敬語あれこれ」，『月刊京都』2015年2月号，pp.32-35. 白川書院，2015.1.

【講演・口頭発表】

井上文子，松田美香，酒井雅史，白坂千里

「ロールプレイ会話による方言談話対照研究の試み 一地域差・世代差・性差・メディア差に注目して一」，社会言語科学会第34回大会ワークショップ（立命館アジア太平洋大学），2014.9.13.

井上文子

「方言談話資料の場合 一方言コーパスを事例に一」，JLVC 2015（国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会），2015.3.7.

【研究調査】

- ・2014.5.19 千葉県香取郡神崎町 方言分布調査
- ・2014.5.27 千葉県長生郡長生村 方言分布調査
- ・2015.3.21 愛知県知多郡南知多町 方言談話収録調査
- ・2015.3.22 愛知県愛西市 方言談話収録調査

【その他の学術的・社会的活動】

- ・日本語教師養成講座講師

熊谷 康雄（くまがい やすお）時空間変異研究系 准教授

1955 生

【学位】修士（文学）（埼玉大学，1984）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科社会システムコース卒業（1976），埼玉大学大学院文化科学研究科修士課程言語文化論専攻修了（1984）

【職歴】国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1988），国立国語研究所情報資料研究部第二研究室 研究員（1989），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1993），国立国語研究所 室長（1998），国立国語研究所情報資料部門 部門長（2001），大学共同利用機関法人国立国語研究所時空間変異研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本語学会，日本語学会，計量国語学会，社会言語科学会，日本行動計量学会，言語処理学会，情報処理学会，電子情報通信学会，American Dialect Society，International Society for Dialectology and Geolinguistics

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」：共同研究員
研究成果：

『日本言語地図』データベース（LAJDB）の整備と分析を進めた。データ整備に関しては，データの点検，更新作業を進め，データの信頼度を更に高めるため，凡例語形に関するクロスチェック（これまでの点検に加え，独立して入力した語形リストとの突き合わせ）の作業を追加し，さらに，経緯度情報や凡例上の（色別で表現されている）語形の分類情報の付加など，データ構造を更新したデータを追加するなど，作業を進めた。また，LAJDB のホームページの構成を更新するとともに，既公開 28 項目に対し，新旧測地系の経緯度座標を付加した LAJDB コードデータを作成公開し，また，LAJDB によって LAJ の基本的統計を集計した集計結果の一部を公開した。さらに，LAJDB を利用した地図化の方法のひとつとして，web 地図の利用法を探索し，試作版（53 図「いる」）を作成，公開した。LAJDB の分析に関しては，方言分布データとその分析に関する検討，考察を進め，LAJDB の構築とその探索的な計量的分析について，成果の一部を方言学方法論の国際会議（Methods XV）で発表した。また，方言分布に関する基礎的な考察の一部を論文にまとめた。共同研究発表会のひとつとして，『『日本言語地図』データベースの特徴と利用をめぐって：データ，道具，問題，方法』と題して，『日本言語地図』データベースワークショップ』（2015.3 於東北大学）を開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

熊谷康雄

「方言圏論の発想とシミュレーションという方法」，小林 隆（編）『柳田方言学の現代的意義：あいさつ表現と方言形成論』，pp.163-187. ひつじ書房，2014.7.

《データベース類》

・『日本言語地図』データベース（LAJDB）データと HP（<http://www.lajdb.org>）の更新（新旧測地系経緯度座標付 LAJDB コードデータ，LAJDB-web 地図試作版等を新規公開）

《辞書・辞典類》

熊谷康雄

「データベース」，佐藤武義他（編）『日本語大事典（下）』，p.1417. 朝倉書店，2014.11.

【講演・口頭発表】

Yasuo Kumagai

“Developing Linguistic Atlas of Japan Database and advancing analysis of geographical distributions of dialects”, Methods in Dialectology XV, University of Groningen (Netherlands), 2014.8.

新野 直哉 (にいの なおや) 時空間変異研究系 准教授

1961 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2010）

【学歴】東北大学文学部文学科卒業（1984），東北大学大学院文学研究科博士課程前期 2 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻修了（1986），東北大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年の課程国文学国語学日本思想史学専攻中退（1988）

【職歴】宮崎大学教育学部 助手（1988），同 講師（1989），同 助教授（1992），国立国語研究所情報資料研究部 主任研究官（1996），独立行政法人国立国語研究所情報資料部門第一領域 主任研究員（2001），同情報資料部門文献情報グループ 主任研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学

【所属学会】日本近代語研究会，表現学会，日本語学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 編集委員，日本近代語研究会 運営委員

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第 2 回所長賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

研究成果：

- ・新野直哉「昭和戦前期の新資料「語学者ばかりの座談会」（1936）について」、『言語文化研究』14，pp.1-15. 静岡県立大学短期大学部言語文化学会，2015.3.

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

新野直哉

「昭和戦前期の新資料「語学者ばかりの座談会」（1936）について」、『言語文化研究』14，pp.1-15. 静岡県立大学短期大学部言語文化学会，2015.3.

《データベース類》

- ・「副詞“全然”研究のための主要文献目録」増補 2015.3.

<http://www.ninjal.ac.jp/research/project/c/newlycoinedw/files/MainBibliographyForResearch-zenzen-Adverb.pdf>

《辞書・辞典類》

新野直哉

「遊び言葉」，「あだ名」，「アフォリズム」，「隠語」，「うそ」，「日本語学論説資料」，「国語年鑑」，「語呂」，「ディベート」，「謎」，「早口ことば」，佐藤武義，前田富祺 他（編）『日本語大事典』，朝倉書店，2014.11.

《その他の出版物・記事》

新野直哉

「学界時評 国語」『アナホリッシュ国文学』6，2014.4.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・JLVC2015（Japanese Language Variation and Change conference2015）（企画・運営）2015.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」で,「にほんご☆スタンプラリークイズ」を展示。2014.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学院非常勤講師
目白大学大学院言語文化研究科

竹田 晃子（たけだ こうこ）時空間変異研究系 特任助教

1968 生

【学位】博士（文学）（東北大学，2012）

【学歴】群馬県立女子大学文学部国文学科卒業（1992），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程前期 2 年の課程修了（1996），東北大学大学院文学研究科日本語学専攻博士課程後期 3 年の課程単位取得退学（2001）

【職歴】日本学術振興会 特別研究員（PD）（2001-2004），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループ 非常勤研究員（2007），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所時空間変異研究系 非常勤研究員（2009），同 特任助教（2012-2015）

【専門領域】日本語学，方言学，社会方言学

【所属学会】日本語学会，日本文芸研究会，日本語文法学会，社会言語科学会

【学会等の役員・委員】日本語学会 庶務委員（編集委員長補佐），社会言語科学会 事務局委員

【2014 年度の研究成果の概要】

人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」A2「方言をととした災害時の地域社会支援と方言の保護・活用に関する研究」：共同研究員

人間文化研究機構連携研究「大規模災害と人間文化研究」総括班：共同研究員

医療現場向け方言資料，外国語による医療機関受診マニュアル，外国語による災害対策マニュアルの作成・調査・配布。

基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」：共同研究員

方言調査の実施・報告。

人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」G1-1.「昔がたりにみる自然観・自然思想の解明」：共同研究員

岩手県における昔話の収集と分析。

人間文化研究機構連携研究「日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散」：共同研究員

日本列島およびアジア・太平洋地域における農耕と言語の伝播の相関関係の検討。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

竹田晃子

「東北地方の昔話にみる方言感動詞の用法」，『連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」成果報告書』，pp.51-62. 人間文化研究機構，2015.2.

竹田晃子ほか著

「復興と語り継ぎが生む減災文化」，群馬県立女子大学（編）『群馬学の確立にむけて；群馬学連続シンポジウム 6』，上毛新聞社，2015.3.

《データベース類》

・医療現場向け方言資料，外国語による医療機関受診マニュアル，外国語による災害対策マニュアルの公開

【講演・口頭発表】

竹田晃子

「東日本方言における述部のケの種類」, 日本語文法学会第 15 回大会 (大阪大学) [招待発表], 2014.

【研究調査】

- ・ 2014.9 岩手県立図書館文献調査
- ・ 2014.10 釜石市 方言調査
- ・ 2014.12 釜石市 文献調査
- ・ 2015.2 岩手県立図書館文献調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 日本語学会編集委員会会議の実施等 (年 4 回)

前川 喜久雄（まえかわ きくお）

言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長，副所長

1956 年生

【学位】博士（学術）（東京工業大学，2011）

【学歴】上智大学外国語学部フランス語学科卒業（1980），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了（1982），上智大学大学院外国語学研究科言語学専攻博士後期課程中退（1984）

【職歴】鳥取大学教育学部 助手（1984），同 講師（1987），国立国語研究所言語行動研究部第二研究室 研究員（1989），同 主任研究官（1992），同 室長（1994），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第二領域 領域長（2001），同 言語資源グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 教授，研究系長，コーパス開発センター長（2009），副所長（2013.10），一橋大学 連携教授（2005-2014）

【専門領域】音声学，言語資源学

【所属学会】ISCA，IPA，日本言語学会，日本音響学会，日本語学会，日本音声学会

【受賞歴】

2012 日本音声学会優秀論文集「PNLP の音声的形状と言語的機能」，『音声研究』15（1）

2012 国立国語研究所第4回所長賞

2011 日本音声学会優秀論文賞「日本語有声破裂音における閉鎖調音の弱化」，『音声研究』14（2）

2010 国立国語研究所第1回所長賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：リーダー

研究目的：

コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション（検索用情報付与）についての基礎研究を行うことが本プロジェクトの目的である。

研究成果：

本年度も共同研究員ごとに，文節係り受け構造，時間表現，動詞項構造，短単位の内部構造，述語境界など各種アノテーション作業を継続実施した。そのために一部の共同研究員には委託研究を実施した。前年度から準備を進めていた言語処理学会学会誌『自然言語処理』の特集号「コーパスアノテーション —新しい可能性と共有化にむけての試み—」も刊行した（21 巻2号，2014 年4月）。この特集号に掲載された9編の査読論文中5編が本プロジェクトによる成果であった。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：リーダー

研究目的：

我が国の言語関連学界コーパスを利用した研究を定着させることが本プロジェクトの目的である。そのために一般からも応募可能な「コーパス日本語学ワークショップ」を年に2回開催している。

研究成果：

まず「コーパス日本語学ワークショップ」については，本年度開催の第6回では30件，第7回では36件の発表があり，約半数が一般からの応募であった。本ワークショップでは毎回最後のセッションを指定討論（文法，語彙，音声などの領域ごとに指定討論者が当該ワークショップで発表された研究を講評する機会）と全体討論の機会を設け，参加者がコーパスを利用した言語研究の問題点を共有できるよう配慮している。

ワークショップとは別に，語彙・文法・表記の研究に関する研究グループと，音声・対話に関する

研究グループによる共同研究も実施しており、一部の共同研究員には委託研究を依頼した。音声・対話研究グループによる研究については、前年度から準備を進めていた日本音声学会の学会誌『音声研究』の特集「大規模コーパスを利用したデータ駆動型音声研究」も刊行した（18巻1号, 2014年4月）。この特集号に掲載された5編の査読論文はすべて本プロジェクトによる成果であったが、特集号の刊行までに査読が終了しなかった論文が複数あり、18巻2号に2編、18巻3号にも2編が掲載された。このうち2編がプロジェクトによる成果、他の2編は一般からの応募であった。

朝倉書店から刊行を続けている「講座日本語コーパス」については、2014年12月に第2巻『書き言葉コーパス』と第6巻『コーパスと日本語学』、2015年2月に第3巻『話し言葉コーパス』を刊行した。

【研究業績】

《著書・編書》

森 大毅, 前川喜久雄, 粕谷英樹 (共著)

『音声は何を伝えているか：感情・パラ言語情報・個人性の音声科学（音響サイエンスシリーズ12）』, コロナ社, 2014.12.

前川喜久雄 (監修), 田野村忠温 (編)

『コーパスと日本語学（講座日本語コーパス第6巻）』, 朝倉書店, 2014.12.

前川喜久雄 (監修), 山崎 誠 (編)

『書き言葉コーパス：設計と構築（講座日本語コーパス第2巻）』（第1章分担執筆）, 朝倉書店, 2014.12.

前川喜久雄 (監修), 小磯花絵 (編)

『話し言葉コーパス：設計と構築（講座日本語コーパス第3巻）』（第1章分担執筆）, 朝倉書店, 2015.2.

《論文・ブックチャプター》

前川喜久雄

「『日本語話し言葉コーパス』の X-JToBI アノテーションから抽出される韻律上の発話スタイル」, 『音声研究』 18(1), pp.70-82. (REFEREED), 2014.04.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den

"Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Language Resources and Evaluation* 48(2), pp.345-371. (DOI 10.1007/s10579-013-9261-0), 2014.6.

藤本雅子, 前川喜久雄

「促音に隣接する母音の時間長の特徴について：CSJ の分析」, 『音声研究』 18 (2), pp.10-22. 2014.8.

Masayuki Asahara, Sachi Kato, Hikari Konishi, Mizuho Imada, and Kikuo Maekawa

"BCCWJ-Timebank: Temporal and event information annotation on Japanese text", *Computational Linguistics and Chinese Language Processing*, 19(3), pp.1-24. 2014.9.

Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Mizuho Imada, Sachiko Kato, and Hikari Konishi

"Archiving and analyzing techniques of the ultra-large-scale web-based corpus project of NINJAL, Japan", *Alexandria*, 25(1/2), pp.129-148. 2014.11.

【講演・口頭発表】

Kikuo Maekawa

"Domain of final lowering in spontaneous Japanese", *Journal of Acoustical Society of America* 135(4), p.2194. (Poster presented at the 167th ASA Meeting, Providence), 2014.5.

全 美炷, 前川喜久雄

「韓国語における閉音節の母音短縮化」, 第 28 回日本音声学会全国大会予稿集, pp.41-46. 2014.9.

前川喜久雄

「国立国語研究所における言語資源開発（これまでとこれから）」, 言語処理学会 20 周年記念シンポジウム [招待講演], 2014.10.4.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ Adventures in Speech Science, July 22-23, 2014, Sanjo Conference Hall, The University of Tokyo (<http://plaza.umin.ac.jp/~spsci/>), General chair.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 上智大学非常勤講師
- ・ 国立情報学研究所音声コーパス推進委員会委員
- ・ GSK 運営委員
- ・ *Interspeech2014* Reviewing committee member
- ・ *Phonetica* Editorial board member
- ・ *Speech Communication* Editorial board member

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 連携大学院
一橋大学大学院言語社会研究科連携教授

浅原 正幸 (あさはら まさゆき)

コーパス開発センター 特任准教授 (～ 2014.9.30), 言語資源研究系 准教授 (2014.10.1 ～)

1975 生

【学位】 博士 (工学) (奈良先端科学技術大学院大学, 2003)

【学歴】 京都大学総合人間学部基礎科学科卒業 (1998), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士前期課程修了 (2001), 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科博士後期課程短期修了 (2003)

【職歴】 奈良先端科学技術大学院大学情報科学研究科 助手・助教 (2004), 大学共同利用機関法人国立国語研究所コーパス開発センター 特任准教授 (2012), 同 言語資源研究系 准教授 (2014.10-)

【専門領域】 自然言語処理

【所属学会】 情報処理学会, 言語処理学会

【受賞歴】

2014 吉川克正, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会論文誌『自然言語処理』2014 年論文賞, 「Markov Logic による日本語述語項構造解析」

2011 Yanyan Luo, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

Best paper award of the 7th International Conference on Natural Language Processing and Knowledge Engineering, “Dual Decomposition for Predicate-Argument Structure Analysis”

2010 Katsumasa Yoshikawa, Tsutomu Hirao, Sebastian Riedel, Masayuki Asahara, and Yuji Matsumoto

The Best Paper Award of the SMBM2010 (the Fourth International Symposium on Semantic Mining in Biomedicine), “Coreference Based Event-Argument Relation Extraction on Biomedical Text”

2008 岩立将和, 浅原正幸, 松本裕治

言語処理学会第 14 回年次大会 優秀発表賞, 「トーナメントモデルを用いた日本語係り受け解析」

2003 浅原正幸

平成 15 年度情報処理学会 山下記念研究賞, 「日本語固有表現抽出における冗長的な形態素解析の利用」

【2014 年度の研究成果の概要】

プロジェクト「超大規模コーパス」: 実務担当

研究成果:

プロジェクト「超大規模コーパス」においては, 2012-2013 年度に計画した収集・組織化・利活用・保存の 4 つの部分タスクの概要について 2014 年 5 月に国際会議 International Internet Preservation Consortium の General Assembly Open Day で発表した。収集においては, 計画に基づいて 2014 年 4 月～2015 年 3 月の間に 3 か月ごとに 4 回のペースで 1 億 URL のバルク収集を実施した。組織化においては, Web 上に多い定形表現やコピーサイトの問題を, 文の異なりを得ることにより緩和する方法を提案した。現在のところ 3 か月ごとに約 10 億文の収集を行っている。収集と組織化についての進捗についての論文が国際論文誌 *Alexandria* に採録された。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: 共同研究員

研究成果:

共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」においては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間表現・事象表現・時間的順序関係のアノテーションを進め、1本の論文が *International Journal of Computational Linguistics and Chinese Language Processing* に採録された。

科学研究費補助金基盤研究 (B)「言語コーパスに対する読文時間付与とその利用」：研究代表者

研究目的：

日本語母語話者の言語受容過程を解明するために、被験者実験により均衡コーパスに対して読み時間を付与する。

研究成果：

「言語コーパスに対する読文時間付与とその利用」においては、90人規模で被験者実験を行い読み時間付与データの構築を進めた。またデータの可視化について検討を行い、コーパスコンコーダンサ ChaKi.NET に対する読み時間の可視化機能を追加した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

浅原正幸, 今田水穂, 保田 祥, 小西 光, 前川喜久雄

「Web を母集団とした超大規模コーパスの開発～収集と組織化～」, 『国立国語研究所論集』7号, pp.1-26. 2014.5.

Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Mizuho Imada, Sachi Kato, and Hikari Konishi

“Archiving and analysing techniques of the Ultra-large-scale Web-based Corpus Project of NINJAL, Japan”, *Alexandria*, Vol.25, No.1-2, pp.129-148. 2014.8.

Masayuki Asahara, Sachi Kato, Hikari Konishi, Mizuho Imada, and Kikuo Maekawa

“BCCWJ-TimeBank: Temporal and event information annotation on Japanese Text”, *International Journal of Computational Linguistics and Chinese Language Processing*, 19(3), pp.1-24. 2014.9.

《データベース類》

・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』DVD 1.1 版

【講演・口頭発表】

Masayuki Asahara, Kikuo Maekawa, Mizuho Imada, Sachi Yasuda, and Hikari Konishi

“Web-based Ultra-Large-Scale Corpus Project in NINJAL, Japan”, Annual conference of the International Internet Preservation Consortium, General Assembly, Open day conference, Building Modern Research Corpora: the Evolution of Web Archiving and Analytics (フランス国立図書館), 2014.5.

浅原正幸, 今田水穂, 保田 祥, 小西 光, 前川喜久雄

「言語研究のための Web コーパスの収集と組織化」, 第 159 回 DBS・第 115 回 IFAT 合同研究発表会 (九州大学), 2014.8.

浅原正幸, 加藤 祥, 立花幸子, 柏野和佳子

「文体指標と語彙の対応分析」, 第 6 回コーパス日本語学ワークショップ, pp.39-48. (国立国語研究所), 2014.9.

浅原正幸, 加藤 祥, 今田水穂

「単一文書自動要約のための言語資源構築に向けて」, 第 220 回 SIGNL 研究会 (九州大学), 2015.1.

浅原正幸, 加藤 祥, 立花幸子, 柏野和佳子

「文体指標と語彙系列の対応分析」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ, pp.7-16. (国立国語研究所), 2015.3.

浅原正幸, 加藤 祥

「文書間距離尺度の特性」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ, pp.45-54. (国立国語研究所), 2015.3.

浅原正幸, 森田敏生

「コーパスコンコーダンス『ChaKi.NET』のプロジェクト機能」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ, pp.103-112. (国立国語研究所), 2015.3.

浅原正幸, 杉 真緒, 柳野祥子

「BCCWJ-SUMM:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を元文書とした要約文書コーパス」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ, pp.285-292. (国立国語研究所), 2015.3.

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間淵洋子, 浅原正幸, 加藤 祥, 立花幸子, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正」, 言語処理学会第21回年次大会論文集, pp.2-3. (京都大学), 2015.3.

吉川克正, 浅原正幸

「言語横断手法による日本語時間的順序関係推定」, 言語処理学会第21回年次大会論文集, A2-4 (京都大学), 2015.3.

金山 博, 宮尾祐介, 田中貴秋, 森 信介, 浅原正幸, 植松すみれ

「日本語 Universal Dependencies の試案」, 言語処理学会第21回年次大会論文集, E3-4 (京都大学), 2015.3.

小木曾 智信 (おぎそ としのぶ) 言語資源研究系 准教授

1971 生

【学位】博士（工学）（奈良先端科学技術大学院大学，2014）

【学歴】東京大学文学部第3類（語学文学）卒業（1995），東京大学大学院人文社会系研究科修士課程
日本文化研究専攻修了（1997），同 博士課程単位取得退学（2001），奈良先端科学技術大学院大学情
報科学研究科博士後期課程修了（2014）

【職歴】明海大学外国語学部 講師（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 研究員（2006），
大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】日本語学，自然言語処理

【所属学会】日本語学会，言語処理学会，情報処理学会，日本語文法学会，近代語学会，東京大学国
語国文学会

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第2回所長賞

2011 情報処理学会山下記念研究賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」：共同研究者

プロジェクトリーダーの田中牧郎客員教授とともに『日本語歴史コーパス』の設計・構築の全体を
統括した。コーパス検索ツール「中納言」に『日本語歴史コーパス』『室町時代編 I 狂言』の短単位デー
タを格納し一般公開を行った。また，上記コーパスをはじめとする歴史的日本語資料の形態素解析等
の技術，資料の構造化に関する研究を行った。明治書院刊行の『日本語学』2014 年 11 月臨時増刊号
(vol.33-14)「日本語史研究と歴史コーパス」では，本プロジェクト成果をまとめた論文を執筆した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究者

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界を中心とするアップデート（Ver.1.1）とマニュアル
の執筆を行った。「コーパス日本語学ワークショップ」に参加して研究発表を行ったほか，コーパス
検索アプリケーション「中納言」のアップデートを行い，「中納言」講習会において講師として講演
を行った。また，朝倉書店より刊行した「講座日本語コーパス」第2巻『書き言葉コーパス 設計と構築』
の執筆を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

山崎 誠（編），前川喜久雄，丸山岳彦，柏野和佳子，山口昌也，小椋秀樹，小木曾智信，田中牧郎，
（著）

『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』，朝倉書店，2014.12.

《論文・ブックチャプター》

小木曾智信，中村壮範

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報アノテーション支援システムの設計・実装・運
用」，『自然言語処理』21（2），pp.301-332. 言語処理学会，2014.4.

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura,
Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den

“Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”, *Language Resources and Evaluation*,
48(2), pp.345-371. Springer, 2014.6.

小木曾智信

「Excel による『日本古典対照分類語彙表』データの活用」, 宮島達夫, 鈴木 泰, 石井久雄, 安部清哉 (編)『日本古典対照分類語彙表』別冊, pp.17-31. 笠間書院, 2014.7.

小木曾智信

「歴史コーパスにおける形態素解析と辞書整備」, 『日本語学』33 (14), pp.83-95. 明治書院, 2014.11.

小木曾智信

「日本語コーパスの今 (特集 デジタル時代の日本語)」, 『情報の科学と技術』64 (11), pp.463-468. 情報科学技術協会, 2014.11.

小木曾智信

「第6章 形態論情報付きデータ (TSV)」, 『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第1.1版』, pp.100-109. 国立国語研究所, 2015.3.

小木曾智信

「第9章 形態論情報付き統合形式 XML (M-XML)」, 『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』利用の手引 第1.1版』, pp.160-165. 国立国語研究所, 2015.3.

《データベース類》

- ・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』Ver.1.1 DVD
- ・『日本語歴史コーパス』「室町時代編 I 狂言」 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/
- ・『国民之友コーパス』Ver.1.1 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/kokumin/
- ・『明六雑誌コーパス』Ver.1.1 http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/meiroke/
- ・『近代文語 UniDic』Ver.1.5 (形態素解析用辞書)
- ・『中古和文 UniDic』Ver.1.5 (形態素解析用辞書)
- ・『近世口語 UniDic』Ver.1.0 (形態素解析用辞書)

《辞書・辞典類》

小木曾智信

「山田文法」, 「『存在詞に関する研究』(春日和男)」, 「『日本口語法講義』(山田孝雄)」, 「『俳諧文法概論』(山田孝雄)」, 「『日本文法学概論』(山田孝雄)」, 「『日本文法論』(山田孝雄)」, 佐藤武義, 前田富祺 他 (編)『日本語大事典』, 朝倉書店, 2014.11.

《その他の出版物・記事》

小木曾智信

「『巻頭言』古典のコーパス化とその可能性」, 『人文情報学月報』(35), (メールマガジン), 人文情報学研究所, 2014.6.

小木曾智信

「コーパス活用の勘所 第6回【中古語の文法】助動詞と上接動詞のコロケーション」, 『日本語学』33 (11), pp.82-87. 明治書院, 2014.9.

笠間書院 (編), 小木曾智信 (監修)

「Excel による『日本古典対照分類語彙表』データの活用」, 『万葉集巻別対照分類語彙表』付録, 笠間書院, CD-ROM, 2015.1.

【講演・口頭発表】

小木曾智信

「『日本語歴史コーパス 平安時代編』とその活用」, 東洋大学文学部特別講義, 2014.5.12.

河瀬彰宏, 小木曾智信

「雑誌『太陽』における言論の中心的概念とその関係性：近代書き言葉の計量分析」, 情報知識学会誌 (和歌山大学), 2014.5.25.

小木曾智信

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』入門」, 東洋大学文学部特別講義, 2014.6.19.

河瀬彰宏, 市村太郎, 小木曾智信

“Problems in encoding documents of the Early Modern Japanese”, Digital Humanities 2014 (ローザンヌ大学), 2014.7.9.

小木曾智信, 岡部嘉幸

“Design and compilation of the Sharebon Corpus”, 14th International Conference of European Association for Japanese Studies (ヨーロッパ日本学会) (リュブリャナ大学), 2014.8.29.

河瀬彰宏, 小木曾智信

“Textual encoding for Government-Designated Textbooks (*Kokutei tokuhon*)”, Japanese Association for Digital Humanities Conference 2014 (筑波大学), 2014.9.20.

近藤明日子, 小木曾智信, 高田智和, 田中牧郎

「『国民之友コーパス』の開発」, 日本語学会 2014 年度秋季大会 (北海道大学), 2014.10.19.

小木曾智信

「歴史コーパスの構築と日本語研究」, 国立国語研究所合同研究発表会「コーパスに見る日本語のバリエーション — 方言コーパス・会話コーパス・歴史コーパス・学習者コーパスから —」(国立国語研究所), 2014.12.6.

小西 光, 中村壮範, 田中弥生, 間瀬洋子, 浅原正幸, 加藤 祥, 立花幸子, 今田水穂, 山口昌也, 前川喜久雄, 小木曾智信, 山崎 誠, 丸山岳彦

「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の文境界修正」, 言語処理学会第 21 回年次大会 (京都大学), 2015.3.17.

小木曾智信

“Mini demonstration of Japanese corpora”, Council on East Asian Libraries Annual Meeting (The Association for Asian Studies) (シカゴ), 2015.3.24.

小木曾智信

“Digital humanities in Japanese studies: Japanese corpora by NINJAL”, Council on East Asian Libraries Annual Meeting (The Association for Asian Studies) (シカゴ) [招待講演], 2015.3.26.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・タイ王立研究所による見学会における研究発表 “UniDic: a machine readable dictionary for morphological analysis of Japanese text”, 小木曾智信, 国立国語研究所, 2014.12.2.
- ・平成 26 年度人間文化研究機構新規採用職員研修における講演「共同研究資源としてのコーパスの構築と公開 — 「日本語歴史コーパス」を中心に —」, 小木曾智信, 国立国語研究所, 2014.7.24.
- ・情報処理学会じんもんこん 2014 査読委員

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・非常勤講師

大阪大学大学院文学研究科 (集中講義)

上智大学

成蹊大学

大阪大学 (集中講義)

- ・ 特別共同利用研究員の受け入れ

オックスフォード大学大学院生・久屋愛実（研究テーマ：「コーパスに基づく外来語の社会言語学的研究」）

- ・ 講習会講師

日本語歴史コーパス「中納言」講習会 講師，国立国語研究所，2014.9.9.

現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」講習会 講師，国立国語研究所，2014.9.10.

柏野 和佳子 (かしの わかこ) 言語資源研究系 准教授

【学位】文学学士

【学歴】東京女子大学文理学部日本文学科卒業 (1991)

【職歴】富士通株式会社システムエンジニア (1991-1998), 情報処理振興事業協会 (IPA) 技術センター研究員 (1991-1997), 国立国語研究所言語体系研究部第二研究室 研究員 (1998), 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員 (2001), 同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員 (2009), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授 (2009)

【専門領域】日本語学

【所属学会】計量国語学会, 言語処理学会, 情報処理学会, 人工知能学会, 日本語学会

【学会等の役員・委員】情報処理学会情報規格調査会学会試行標準 WG3 小委員会 主査, 情報規格調査会学会試行標準専門委員会 委員

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」: 共同研究員

コーパスの利用価値を高めるためのアノテーション (検索用情報付与) の一つとして, 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) に収録されている図書館サブコーパス (10,551 サンプル) の全サンプルに対して付与した文体情報を公開用データとして整え, 公開した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」: 共同研究員

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) に関する『講座 日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』の分担執筆をした。また, 現代語の中に生きる古風な語の使用実態について BCCWJ を用いて調査分析し, その成果をまとめ, 論文に発表した (柏野・奥村 2014)。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

加藤 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「語りかける書きことばの表現」, 『国立国語研究所論集』8, pp.85-108. 2014.11.

柏野和佳子, 奥村 学

「『コーパスベース国語辞典』構築のための「古風な語」の分析と記」, 『自然言語処理』21 (6), pp.1133-1161. 2014.12.

山崎 誠, 前川喜久雄, 丸山岳彦, 柏野和佳子, 山口昌也, 小椋秀樹, 小木曾智信, 田中牧郎

「第2章 サンプリング」, 『講座 日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』, 朝倉書店, 2014.12.

《データベース類》

・サンプルに対する文体指標 (sty) BCCWJ_LB_Stylistics-1.0.zip

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/anno/

【講演・口頭発表】

山崎 誠, 柏野和佳子, 内山清子, 砂岡和子, 田島毓堂, 山元啓史, 韓 有錫, 薛 根洙

「『分類語彙表増補改訂版』へのアノテーション ―基本義の決定―」, 『計量国語学会第 58 回大会』, 2014.9.

藤田 篤, 柏野和佳子, 大塚裕子, 富永敦子, 椿本弥生

「文章作成・推敲教育に向けた詳細なアウトラインの仕様設計と修辞構造情報付与の試み」, 『言

語処理学会第 21 回年次大会発表論文集』, pp.241-244. 2015.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」で辞書引きコーナーを担当。2014.7.
- ・小学校への出前授業。2014.7, 2014.10.
- ・「本と遊ぼうこどもワールド 2014 第 36 回優良児童図書展示会」にて講演。2014.8.

丸山 岳彦（まるやま たけひこ）言語資源研究系 准教授

1972 生

【学位】博士（学術）（国際基督教大学，2013）

【学歴】神奈川大学外国語学部英語英文学科卒業（1995），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科日本語日本文化専攻修士課程修了（1997），神戸市外国語大学大学院外国語学研究科文化交流専攻博士課程単位取得退学（2000）

【職歴】株式会社 ATR 音声言語通信研究所 客員研究員（2000），国際電気通信基礎技術研究所 ATR 音声言語コミュニケーション研究所 研究員（2001），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2004），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】言語学，日本語学，コーパス日本語学

【所属学会】日本語文法学会，言語処理学会

【学会等の役員・委員】日本語文法学会 学会誌委員，言語処理学会 評議員

【受賞歴】

2006 言語処理学会第 12 回年次大会 優秀発表賞「代表性を有する現代日本語書き言葉コーパスの設計」（共著）

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパスアノテーションの基礎研究」：共同研究員

研究成果：

「オックスフォード上代日本語コーパス」に対する節境界のアノテーションを実施した。その研究成果を，オックスフォード大学での研究会 The East Asian Linguistics Seminar において発表した。また、『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語話し言葉コーパス』に対する節境界ラベルのアノテーションを分析した結果を，『話し言葉と書き言葉の接点』（共著，ひつじ書房）として出版した。

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

研究成果：

日本語コーパスの設計や構築の過程，検索・集計方法などについて，ヨーロッパ 5 カ国で計 7 回の講演・ワークショップを開催した。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」：共同研究員

研究成果：

昭和戦前期の「SP 盤貴重音源資料」の文字化資料を活用した研究の成果を，第 14 回ヨーロッパ日本研究協会（EAJS）国際会議（スロベニア，リュブリャナ大学）にて発表した。

【研究業績】

《著書・編書》

山崎 誠（編），山崎 誠，前川喜久雄，丸山岳彦，柏野和佳子，山口昌也，小椋秀樹，小木曾智信，田中牧郎（著）

『講座 日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』，朝倉書店，2014.12.

小磯花絵（編），小磯花絵，前川喜久雄，五十嵐陽介，丸山岳彦，伝 康晴，籠宮隆之，西川賢哉，菊地浩平（著）

『講座 日本語コーパス 3 話し言葉コーパス 設計と構築』，朝倉書店，2015.2.

《論文・ブックチャプター》

丸山岳彦

「『日本語話し言葉コーパス』に基づく挿入構造の機能的分析」, 『日本語文法』 14 (1), pp.88-104. 日本語文法学会, 2014.4.

丸山岳彦

「コーパス活用の勘所 第3回【現代語】文法 (1)『現代日本語書き言葉均衡コーパス』による現代日本語文法の研究」, 『日本語学』 2014 年 6 月号, pp.91-95. 明治書院, 2014.6.

丸山岳彦

「現代日本語の多重的な節連鎖構造について —CSJ と BCCWJ を用いた分析」, 石黒 圭, 橋本行洋 (編)『話し言葉と書き言葉の接点』, pp.93-114. ひつじ書房, 2014.9.

加藤 祥, 柏野和佳子, 立花幸子, 丸山岳彦

「語りかける書きことばの表現」, 『国立国語研究所論集』 8, pp.85-108. 国立国語研究所, 2014.11.

丸山岳彦

「昭和の日常のことば」, 『日本語学』 2014 年 12 月号, pp.4-15. 明治書院, 2014.12.

《その他の出版物・記事》

丸山岳彦

「著書紹介『日本語複文構文の研究』」, 『国語研プロジェクトレビュー』 5 (1), pp.49-51. 国立国語研究所, 2014.6.

【講演・口頭発表】

Takehiko Maruyama

“A corpus-based study of colloquial Japanese: Retrospect and prospect”, The 14th International Conference of EAJS (スロベニア リュブリャナ大学), 2014.8.29.

丸山岳彦

「日本語コーパスの開発史と現状」, 英国日本語教育学会 (BATJ) セミナー (リージェンツ大学 ロンドン) [招待講演], 2014.10.18.

Takehiko Maruyama

“Corpus linguistics and Japanese language”, チェコ共和国 マサリク大学哲学部日本研究学科, [招待講演], 2014.11.18.

丸山岳彦

「コーパス言語学と日本語」, チェコ共和国 パラツキー大学哲学部アジア学科 (日本学) [招待講演], 2014.11.19

Takehiko Maruyama

“Annotating clause boundary labels to Japanese corpora”, The East Asian Linguistics Seminar, Oriental Institute, University of Oxford, 2015.2.17.

丸山岳彦

「日本語コーパスの開発史と現状」, フランス日本語教師会 (AEJF) 勉強会 [招待講演], 2015.2.21.

丸山岳彦

「日本語コーパスの検索と集計」, 英国日本語教育学会 (BATJ) ワークショップ (ロンドン大学 SOAS) [招待講演], 2015.3.14.

Takehiko Maruyama

“Current issues on Japanese corpus linguistics”, スロベニア リュブリャナ大学文学部アジア・
アフリカ学科 日本研究講座 [招待講演], 2015.3.19.

丸山岳彦

「コーパス言語学と日本語」, ノルウェー ベルゲン大学外国語学部 日本語講座 [招待講演],
2015.3.27.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 日本語文法学会 学会誌委員
- ・ 言語処理学会 評議員

山口 昌也 (やまぐち まさや) 言語資源研究系 准教授

1968 生

【学位】博士（工学）（東京農工大学，1994）

【学歴】東京農工大学工学部数理情報工学科卒業（1992），東京農工大学大学院工学研究科博士前期課程電子情報工学専攻修了（1994），東京農工大学大学院工学研究科博士後期課程電子情報工学専攻修了（1998）

【職歴】東京農工大学工学部 助手（1998），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門第一領域 研究員（2001），同研究開発部門言語資源グループ 研究員（2006），同研究開発部門言語資源グループ 主任研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 助教（2009），同 准教授（2011）

【専門領域】情報学，知能情報学，科学教育・教育工学，言語学，日本語学

【所属学会】日本教育工学会，電子情報通信学会，日本語学会，言語処理学会，情報処理学会

【受賞歴】

2007 財団法人博報児童教育振興会第1回博報「ことばと教育」研究助成「優秀賞」

【研究業績】

《国際会議録》

Masaya Yamaguchi

“Building a database of Japanese adjective examples from special purpose web corpora”,
Proceedings of LREC2014 (Iceland), 2014.5.

《データベース類》

- ・全文検索システム『ひまわり』用に『国会会議録』パッケージを公開 2014.4.1.
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc>（全文検索システム『ひまわり』のページ内に掲載，1947年～2012年の衆議院・参議院の本会議・予算会議，4.5億字を収録）
- ・全文検索システム『ひまわり』用に『青空文庫』パッケージを更新 2014.4.8.
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc>（全文検索システム『ひまわり』のページ内に掲載，11741作品を収録）
- ・全文検索システム『ひまわり』用の米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文を公開 2014.8.22.
http://textdb01.ninjal.ac.jp/LCgenji/himawari_package.html
- ・全文検索システム『ひまわり』用に『青空文庫』パッケージを更新 2014.10.14.
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc>（全文検索システム『ひまわり』のページ内に掲載，12034作品を収録）
- ・全文検索システム『ひまわり』ver.1.5 公開 2014.12.20.
<http://www2.ninjal.ac.jp/lrc>

《その他の出版物・記事》

山口昌也

「自分用のコーパスを作る —全文検索システム『ひまわり』のインポート機能を用いて—」，『日本語学』34（1），pp.72-77. 2015.1.

【講演・口頭発表】

山口昌也

「全文検索システム『ひまわり』を用いた既存言語資料の活用方法の検討」，第6回日本語コーパスワークショップ予稿集，pp.151-156. 2014.9.

山口昌也，北村雅則

「協同学習を取り入れた作文添削課題における誤り分析」, 日本教育工学会第 30 回全国大会予稿集, 2014.9.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・国語研「ニホンゴ探検」で, スタンプラリークイズを展示。2014.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・大学非常勤講師
- ・第 7 回コーパス日本語学ワークショップの併設チュートリアル講師, 2015.3.

山崎 誠 (やまざき まこと) 言語資源研究系 准教授

1957 生

【学位】博士（学術）（東京学芸大学，2015）

【学歴】埼玉大学教養学部教養学科卒業（1980），筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科言語学専攻第5学年中退（1984），東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科修了（2015）

【職歴】国立国語研究所言語計量研究部 研究員（1984），同言語体系研究部第一研究室 研究員（1988），同 主任研究官（1993），同 第一研究室 室長（1995），独立行政法人国立国語研究所研究開発部門 第一領域 主任研究員（2001），同研究開発部門第一領域長（2003），同研究開発部門 グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語資源研究系 准教授（2009）

【専門領域】言語学，日本語学，計量日本語学，計量語彙論，コーパス，シソーラス

【所属学会】日本語学会，計量国語学会，言語処理学会，語彙研究会，日本語教育学会，社会言語科学会，情報知識学会，日本語文法学会，日本行動計量学会，情報処理学会，表現学会

【学会等の役員・委員】計量国語学会 理事，言語処理学会 理事・編集委員

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コーパス日本語学の創成」：共同研究員

第6回，及び第7回コーパス日本語学ワークショップにおいて，「テキストにおける多義語の意味の集中度」「医療経過記録における名詞連続の計量的特徴」（共同発表）のタイトルでポスター発表を行った。国際計量言語学会において，"The influence of the word unit and the sentence length on the ratio of the parts of speech" のタイトルで口頭発表を行った。

【研究業績】

《博士学位論文》

山崎 誠

「テキストにおける語彙的結束性の計量的研究」，博士（学術），東京学芸大学，2015.3.

《著書・編書》

山崎 誠（編）

『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス ―設計と構築―』，朝倉書店，2014.12.

《論文・ブックチャプター》

Kikuo Maekawa, Makoto Yamazaki, Toshinobu Ogiso, Takehiko Maruyama, Hideki Ogura, Wakako Kashino, Hanae Koiso, Masaya Yamaguchi, Makiro Tanaka, and Yasuharu Den

"Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese", *Language Resources and Evaluation*, 48(2), pp.345-371. 2014.6.

山崎 誠

「品詞・語種の割合とテキストのジャンルとの相関（コーパス活用の勘所 第4回【現代語】文章・文体（1）」，『日本語学』33（8），pp.86-91. 明治書院，2014.7.

山崎 誠

「テキストにおける多義語の語義の分布 ―『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用して―」，『計量国語学』20（7），pp.251-262. 計量国語学会，2014.12.

《辞書・辞典類》

山崎 誠

「漢字調査」，「計量語彙論」，「語彙項目」，「語彙調査」，「語彙統計学」，「語数」，「古典対照語彙表」，

「雑誌九十種の語彙調査」, 「シソーラス」, 「分類語彙表」, 『日本語大事典』, 朝倉書店, 2014.10.

【講演・口頭発表】

Makoto Yamazaki

“The influence of the word unit and the sentence length on the ratio of the parts of speech in Japanese”, International Quantitative Linguistics Conference (QUALICO2014), Palacký University, Olomouc, Czech Republic, 2014.5.30.

山崎 誠

「テキストにおける多義語の意味の集中度」, 第6回コーパス日本語学ワークショップ (国立国語研究所), 2014.9.10.

山崎 誠, 柏野和佳子, 内山清子, 砂岡和子, 田島毓堂, 山元啓史, 韓 有錫, 薛 根洙

「『分類語彙表増補改訂版』へのアノテーション ―基本義の決定―」, 計量国語学会第58回大会 (東洋大学白山キャンパス), 2014.9.20.

山崎 誠, 相良かおる

「医療経過記録における漢字連続複合語の計量的分析」, 人文科学とコンピュータシンポジウム (国立情報学研究所), 2014.12.14.

山崎 誠

「医療経過記録における名詞連続の計量的特徴」, 第7回コーパス日本語学ワークショップ (国立国語研究所), 2015.3.11.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・第6回コーパス日本語学ワークショップ (企画・運営) 2014.9.9-10.

・第7回コーパス日本語学ワークショップ (企画・運営) 2015.3.10-11.

【大学院教育・若手研究者育成】

・連携大学院

一橋大学言語社会研究科連携教授

Prashant Vijay Pardeshi (プラシャント ウィジャイ パルデシ)

言語対照研究系 教授, 研究系長

【学位】 博士 (学術) (神戸大学, 2000)

【学歴】 ジャワハルラル・ネル大学文学日本語専攻修士課程修了 (1993), 神戸大学大学院文化科学研究科修了 (2000)

【職歴】 神戸大学文学部 講師 (2005), 同 人文学研究科 講師 (2007), 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授 (2009), 同 教授 (2011), 同 研究系長 (2014)

【専門領域】 言語学, 言語類型論, 対照言語学

【所属学会】 日本語文法学会, 日本言語学会, 関西言語学会, 国際類型論学会 (ALT)

【受賞歴】

2010 国立国語研究所第1回所長賞

2007 第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』優秀賞: パルデシ・プラシャント, 桐生和幸, 石田英明, 小磯千尋 (編) 2007. 『日本語 —マラーティー語基本動詞用法事典』 (428 ページ)。財団法人博報児童教育振興会 2005 年度第1回『博報「ことばと文化・教育」研究助成』の研究助成支援による「日・マラーティー語の対照研究・日本語教育用基本動詞用法事典の作成」プロジェクト報告書。

2000 The Chatterjee-Ramanujan Prize for outstanding student contribution to “*The Yearbook of South Asian Languages and Linguistics 2000*”, Sage Publications. New Delhi, Thousand Oaks, & London. Paper title: “The Passive and Related Constructions in Marathi.”

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」: リーダー

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

Peter Hook and Prashant Pardeshi

“Prenominal noun-modifying constructions in Marathi, the noun phrase accessibility hierarchy, and picture nouns” *Lingua Posnaniensis*, 55(2), pp.77–89. ISSN (Online) 2083-6090, DOI: 10.2478/linpo-2013-0015, 2014.6. (<http://www.degruyter.com/view/j/linpo.2013.55.issue-2/linpo-2013-0015/linpo-2013-0015.xml?format=INT>)

プラシャント・パルデシ

「認知言語学とコーパス研究を応用したネット版日本語基本動詞ハンドブックの開発について」, 『日本認知言語学会論文集』, pp.611–619. 2014.7.

Yuko Yoshinari, Prashant Pardeshi, and Sung-Yeo Chung.

“Usage of transitive verbs in the depiction of accidental events in Japanese and Korean: A psycho-linguistic study”, In Seungho Nam, Heejeong Ko, and Jongho Jun (eds.), *Japanese/Korean Linguistics 21*, Stanford: CSLI, pp.229–243. 2014.12.

Prashant Pardeshi and Peter Hook

“Blowing hot, hotter, and hotter yet: Temperature vocabulary in Marathi”, In Maria Koptjevskaja-Tamm (ed.) *Linguistics of Temperature* [TSL 107], Amsterdam: John Benjamins, pp.463–481. 2015.2.

《国際会議録》

Prashant Pardeshi

“A Geo-typological database of transitivity pairs: Visualizing linguistic unity and diversity in space and testing typological generalizations”, In *Papers from the 2nd International Conference on Asian Geolinguistics* (PICAG-2), pp.156–165. Department of Linguistics and Department of Geography, Faculty of Arts, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2014.5.

《データベース類》

- ・「使役交替言語地図」(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) 1.00 版 公開 (48 言語)
<http://warp.ninjal.ac.jp/> 2014.6.6.
- ・NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) ver.1.30 に公開類義語などを比較するための 2 語比較機能を追加
<http://nlb.ninjal.ac.jp/> 2014.8.25.

《辞書・辞典類》

- ・「基本動詞ハンドブック」(<http://verbhandbook.ninjal.ac.jp/>) インターフェース更新 (17 の見出しに例文音声を追加, 音声付きの活用表追加), 2014.12.11.; 17 見出し追加 (合計 34 見出し), 2015.1.29.; 19 見出し追加 (合計 53 見出し), 2015.3.31.

《その他の出版物・記事》

プラシャント・パルデシ

「日本語から見たマラーティー語 — 温度表現の対照研究」, 『日本語学』 2015 年 7 月号, pp62–68. 2015.7.

【講演・口頭発表】

Prashant Pardeshi

“A Geo-typological database of transitivity pairs: Visualizing linguistic unity and diversity in space and testing typological generalizations”, Presented at the Second International Conference on Asian Geolinguistics, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2014.5.24–25.

プラシャント・パルデシ

「有対自他動詞の地理類型論的なデータベース：類型論的なパターン可視化および仮説の検証」, 『日本言語学会第 148 回大会予稿集』, pp.408–413. 2014.6.7–8.

プラシャント・パルデシ

「自他動詞対の派生方向に関する定説の定性的・定量的検証」, 第 111 回 NINJAL サロン (国立国語研究所), 2014.8.17.

Prashant Pardeshi, Yousuke Momiyama, Yuriko Sunakawa, and Shingo Imai

「日本語基本動詞用法ハンドブック作成の取り組み：現状および今後の展望」, パネルセッション「コーパス的アプローチと伝統的辞書学の狭間にある学習者用・一般用の日本語辞書作り」, The 14th International Conference of European Association of Japanese Studies (EASJ), University of Ljubljana, Slovenia, 2014.8.27–30.

赤瀬川史朗, プラシャント・パルデシ, 今井新悟

「NINJAL-LWP の類義語比較機能」, 『第 6 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 (国立国語研究所), pp.41–50. 2014.9.9.

【研究調査】

- ・2015.9.11–14 NINJAL Parsed Corpus of Modern Japanese (NPCMJ)：アノテーション方法に関するチュートリアル@神戸大学

- ・ Questionnaire based survey on entailment cancellation in Marathi (in collaboration with Prof. Sonal Kulkarni, Deccan College Post-graduate and Research Institute, Pune, India).

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 日本言語学会第 148 回大会ワークショップ「他動性の本質の解明 ―日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの」(企画) 2014.6.7-8.
- ・ 関西言語学会第 40 回大会ワークショップ「文の統語・意味解析情報をタグ付けした日本語構造体コーパスの開発」(企画) 2014.6.13.
- ・ The 14th International Conference of European Association of Japanese Studies (EAJS), パネルセッション「コーパス的アプローチと伝統的辞書学の狭間にある学習者用・一般用の日本語辞書作り (Learners' and general purpose dictionary making between corpus based approaches and traditional lexicography)」(企画・司会) 2014.8.27-30.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ External reviewer, *Folia Linguistica* (Mouton)
- ・ External reviewer, *Journal of Japanese Linguistics* (Volume 30)
- ・ プラシヤント・パルデシ「日本語と外国語との対照研究の醍醐味：温度表現の対照を通じて」平成 26 年度文部科学省関係機関職員研修生実地研修（見聞型研修）生向けのプレゼンテーション 2014.6.10.
- ・ プラシヤント・パルデシ「世界の文字体系から見た漢字とインドにおける漢字教育・学習の取り組み」第 8 回 NINJAL フォーラム「世界の漢字教育 ―日本語漢字を学ぶ―」(学術総合センター) 2014.9.21

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ プロジェクト PD フェロー採用 (1 名) 今村泰也
- ・ 非常勤講師
亜細亜大学国際文化研究科
東京外国語大学

John Bradford Whitman (ジョン ブラッドフォード ホイットマン)

言語対照研究系 教授

1954 生

【学位】博士（言語学）（ハーバード大学，1985）

【学歴】Harvard University, Linguistics & Philosophy 卒業（1976），筑波大学文芸言語研究科修士課程修了（1980），Harvard University, Linguistics 博士課程修了（1985）

【職歴】ハーバード大学 助教授（1986），コーネル大学 助教授（1987），同 教授（2003），同 Chair（教授）（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 教授（2011），研究系長（2012.4-2014.3）

【専門領域】言語学，歴史比較言語学，言語類型論，東洋言語学

【所属学会】日本言語学会，訓点語学会，アメリカ言語学会，国際韓国語学会

【学会等の役員・委員】*Cahiers de Linguistique - Asie Orientale*（パリ）編集委員，『言語研究』（韓国）編集委員，*Korean Linguistics*（オランダ Brill 社）副編集長

【受賞歴】

2011 国立国語研究所第3回所長賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」：リーダー

研究目的：

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」は，日本列島とその周辺の言語を主な対象とし，その統語形態論的・音韻的特徴とその変遷を，言語類型論・統語理論・比較歴史言語学の観点から解明することによって，東北アジアが一つの「言語地域」として成り立つかどうかを検証することを目的としてきた。プロジェクトは3つの班に分けられている。「形態統語論班」は「名詞化と名詞修飾」に焦点を当て，日本語にも見られる名詞修飾形（連体形）の多様な機能を周辺の言語と比較しながら，その機能と形と歴史的变化を究明する。「音韻再建班」は，日本語とその周辺の諸言語の歴史的音韻再建を試み，東北アジア記述言語学における通時言語学研究を推進する。2013 年からは，アンナ・ブガエワ准教授をリーダーとする「アイヌ語班」を加え，日本列島において唯一日琉語族と共存するアイヌ語の言語類型論的研究を行っている。3つの班とは別に，人間文化研究機構の連携研究として，『日本列島・アジア・太平洋地域における農耕と言語の拡散 —「農耕／言語同時伝播仮説」をめぐって—』と題する共同研究を組織し，国立国語研究所・総合地球環境学研究所を中心に，国内外の言語学者・考古学者・植物遺伝子学者を集め，いわゆる「農耕／言語同時伝播仮説」（Bellwood & Renfrew 2002）の是非を日本列島・アジア・太平洋において検証する企画を行ってきた。さらに，プロジェクトの海外研究事業として，米国コーネル大学と 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL8)（第8回アルタイ形式言語学学会）と Workshop on Suspended Affixation を共催し，ヘルシンキ大学地域言語研究センター（HALS, Helsinki Area and Language Studies, フィンランド）とはサハリン（ロシア）での言語調査と2回の国際学会を共催してきた。現在のところ，プロジェクトの研究成果刊行物としては下記の3点があげられる。

研究成果：

1. Young-Key Kim-Renaud and John Whitman (eds.) *Korean Linguistics* 15:2 Special Issue on Korean Historical Linguistics, 2014.
2. Esra Predolac and Andrew Joseph (eds.) *Proceedings of the 8th Workshop on Altaic Formal Linguistics* (WAFL8), MIT Working Papers in Linguistics 70, 2015.

3. ブガエワ・アンナ, 長崎 郁 (編) 『アイヌ語研究の諸問題』, 北海道出版企画センター, 2015.
4. ブガエワ・アンナ 『トピック別 アイヌ語会話辞典』 <http://ainutopic.ninjal.ac.jp/>

【研究業績】

《著書・編書》

John Whitman and Franck Cinato (eds.)

Lecture vernaculaire des textes classique Chinois/Reading classical texts in the vernacular, Dossiers HEL 7, Paris: Laboratoire Histoire des Théories Linguistiques (Université Paris Diderot), 2014.11.

《論文・ブックチャプター》

Jiwon Yun, Zhong Chen, Tim Hunter, John Whitman, and John Hale

“Uncertainty in processing relative clauses across East Asian languages”, *Journal of East Asian Linguistics* 24.2, pp.113–148. 2015.5. (online 2014.12)

John Whitman and Yuko Yanagida

“A Korean grammatical borrowing in Early Middle Japanese kunten texts and its relation to the syntactic alignment of earlier Korean and Japanese”, in Seungho Nam, Heejeong Ko, and Jongho Jun (eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 21. Stanford: CSLI, 2015.1.

ジョン・ホイットマン

「ラテン語教典の読法と仏典の訓読」, 新川登亀男 (編) 『仏教文明の転回と表現』, 東京: 勉成社, 2015.3.

ジョン・ホイットマン

「いわゆるアジア式関係節について」, 福田 智, 西田光一, 田村敏広 (編) 『言語研究の視座』, pp.188–203. 東京: 開拓社, 2015.3.

【講演・口頭発表】

John Whitman

“Typological characteristics of the languages of the Northeast Asian linguistic area”, ロシア・ユジノサハリンスク郷土史博物館, 2014.8.5.

ジョン・ホイットマン

「[「訓読」「訓点」は漢字文化圏だけのものか —中世欧州ラテン語の注釈資料とジ言語での「読み」」, 日本語学会 2014 年秋大会ワークショップ「自言語による漢文文献の訓読」, 2014.10.18.

【研究調査】

- ・ 2014.8.4–10 ロシア・サハリンにて, ニヴク語, ウイルタ語の現地調査

Anna Bugaeva (アンナ ブガエワ) 言語対照研究系 特任准教授

1973 生

【学位】博士（文学）（北海道大学，2004）

【学歴】サンクト・ペテルブルグ大学東洋学部日本語科卒業（1996），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了（2000），北海道大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程修了（2004）

【職歴】オーストラリア ラ・トロブ大学言語類型論センター 客員研究員（2007），早稲田大学高等研究所 助教（2008），同 准教授（2011），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 特任准教授（2012）

【専門領域】言語学，アイヌ語学，言語類型論

【所属学会】the Societas Linguistica Europaea (SLE), the Association for Linguistic Typology (ALT), 日本言語類型論学会，言語類型論学会，日本言語学会，日本ロシア文学会

【受賞歴】

2013 大学共同利用機関法人人間文化研究機構人間文化研究奨励賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究」（リーダー：John Whitman 教授）における「アイヌ語班」：リーダー

研究目的：

このプロジェクトは，日本語との接触によるアイヌ語の文法的変容に注目しつつ，日本における唯一の非日本諸語であるアイヌ語についての我々の知識を維持・拡充することに焦点を当てるものである。

アイヌ語班は，アイヌ語諸方言の記述，アイヌ語資料の整理・分析・保存，そして言語類型論の観点から見たアイヌ語研究を進めることを目指している。アイヌ語の言語学的研究が開始されてから1世紀以上が過ぎたが，言語学的研究の全体的な蓄積は未だ不十分であり，精密な記述，通時的側面の解明，言語類型論の観点からの位置づけなど，さらなる研究の深化が期待される。

研究成果：

アイヌ語班は，アイヌ語研究を牽引してきた国内の研究者9名（共同研究員）と大学院生を含む若手研究者11名（研究協力者）をメンバーに迎え，今年度2回の研究発表会，1回の国際シンポジウム（於ヘルシンキ大学）における研究発表と議論をととして研究の向上をはかってきた。

1) 7つの論文を論文集（アンナ・ブガエワ，長崎郁（編）『アイヌ語研究の諸問題』）に収められた。

すべてこれらの研究発表会・国際シンポジウムでの研究発表に基づくものである。本論文集は，テーマを狭く限定することなく，音韻論，形態論，統語論，アイヌ語史，口承文芸における言語という執筆者個々人が現在取り組んでいる問題を取り上げている。

2) アイヌ語班の数メンバーによって，1月26日に『トピック別 アイヌ語会話辞典』（日本語版），3月20日に A Conversational Topical Dictionary of Ainu（英語版）が公開された。これは，2010年に公開されたブガエワ他『音声付きアイヌ語辞典 一新編 金澤版アイヌ語会話辞典』のコンテンツにトピック検索機能（日本語・英語）と見出し語（アイヌ語・日本語・英語）検索機能を追加し，さらに未公開のビデオ資料（約130見出し）と動植物や道具の写真（72見出し，86枚）を加えたものである。見出し語の総数は3510項目である。

3) 論集 *Handbook of the Ainu Language* (HJLL シリーズ) の出版について，De Gruyter Mouton 社と契約を結んだ。出版予定：2017年8月。

4) アイヌ語班の数メンバーで『アイヌ語口承文芸コーパス』の作成を進めている。公開予定：2016

年3月, 国語研 HP.

【研究業績】

《著書・編書》

アンナ・ブガエワ, 長崎 郁 (編)

『アイヌ語研究の諸問題』, 札幌: 北海道出版企画センター, 2015.3.

《論文・ブックチャプター》

Anna Bugaeva

“Relative clauses and noun complements in Ainu”, アンナ・ブガエワ, 長崎 郁 (編) 『アイヌ語研究の諸問題』, 札幌: 北海道出版企画センター, pp.73-107. 2015.3.

Anna Bugaeva

“An equivalent of the standard of comparison relativization in Ainu”, 『北方人文研究』8, 北海道大学, pp.43-62. 2015.3.

《データベース類》

アンナ・ブガエワ

「アイヌ語使役交替動詞対データ」, プラシヤント・パルデシ (編) 『使役交替言語地図』, 国立国語研究所 <http://watp.ninjal.ac.jp> 2014.6.

アンナ・ブガエワ, 遠藤志保, 赤瀬川史朗

『トピック別 アイヌ語会話辞典』(日本語版), 国立国語研究所 <http://ainutopic.ninjal.ac.jp/> 2015.1.26.

Anna Bugaeva, Shiho Endō, and Shiro Akasegawa

A topical dictionary of conversational Ainu (English HP), 国立国語研究所 <http://ainutopic.ninjal.ac.jp/en/> 2015.3.20.

【講演・口頭発表】

アンナ・ブガエワ

「複雑術語の形成プロセスとしての節の融合 —アイヌ語と日本語の場合—」(口頭発表), 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト アイヌ語班 H26 第一研究会 (北海道大学), 2014.5.31.

Anna Bugaeva

“Движение за возрождение айнского языка [Ainu language revitalization movements]”, Seminar on Language Endangerment, Kykhkykh-Center for preservation and development of traditional cultures of the minority peoples of the North, Nekrasovka Village, Sakhalin, Russia, 2014.8.13.

Anna Bugaeva

“Clause fusion as a process of forming complex predicates in Ainu and Japanese”, Conference on Syntax of the World's Languages VI, University of Pavia, Italy, 2014.9.8.

Anna Bugaeva

“The development of nominalization strategies in Ainu”, International Symposium: Crosslinguistics and linguistic crossings in Northeast Asia, Helsinki University, Finland, 2014.11.29.

アンナ・ブガエワ

「ハンドブックのグロスについて」, 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェ

クト アイヌ語班 H26 第二研究会（国立国語研究所），2015.1.10.

アンナ・ブガエワ

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究 ―トピック別アイヌ語オンライン辞典の公開へ向けて―」，国立国語研究所研究成果発表会 2015（学術総合センター），2015.1.31.

【研究調査】

- ・ 2014.8 ニヅフ語サハリン方言の調査（サハリン Nogliki 村，Nekrasovka 村）
- ・ 2014.9 日本語宮崎方言の調査（椎葉村）

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト アイヌ語班 H26 第一研究会（北海道大学）（北海道大学アイヌ・先住民研究センターとの共催） 2014.5.31.
- ・ International Symposium: Crosslinguistics and linguistic crossings in Northeast Asia, Helsinki University, Finland（ヘルシンキ大学との共催） 2014.11.29-30.
- ・ 日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究プロジェクト アイヌ語班 H26 第二研究会（国立国語研究所）（主催） 2015.1.10.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「アイヌの言葉と文化の成り立ち ―日本人のルーツを尋ねる―」，立川市民口座主催：たちかわ市民交流大学市民推進委員会（女性総合センター），2014.9.27.
- ・ 学術誌の査読者： *Diachronica: Language Change and Dynamics*；『北方人文研究』

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部「言語学特殊講義・アイヌ語」
一橋大学大学院言語社会研究科「日本語学講義 I」言語類型論. アイヌ語と日本語を中心に」
- ・ NINJAL チュートリアル講師
国立国語研究所第 16 回 NINJAL チュートリアル「言語類型論的に見たアイヌ語の文法」（京都大学）

石本 祐一（いしもと ゆういち）研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士（情報科学）（北陸先端科学技術大学院大学，2004）

【学歴】宇都宮大学工学部卒業（1997），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士前期課程修了（2000），北陸先端科学技術大学院大学情報科学研究科情報処理学専攻博士後期課程修了（2004）

【職歴】東京工科大学メディア学部 助手（2007），同 助教（2009），独立行政法人国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2010），情報システム研究機構国立情報学研究所 特任研究員（2010），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員（2013），同 研究情報資料センター 特任助教（2013）

【専門領域】音響音声学，音声工学

【所属学会】日本音響学会，電子情報通信学会

【2014 年度の研究成果の概要】

独創・発展型共同研究プロジェクト「多様な様式を網羅した会話コーパスの共有化」：研究協力者
研究成果：

大規模な会話コーパスでは音声収録・転記という初期段階に大きな負担がかかるため整備が不十分になりやすく，大規模データに基づく会話研究の遅れの要因となっている。既存の複数の会話コーパスを共有化できればこの問題を解決できるが，共有する上での問題のひとつとして転記方式の不統一や基本アノテーションの欠如が挙げられる。そこで，会話コーパスの共有化に必要な転記方式の相互変換を実現することを目的とし，その糸口として日本語話し言葉コーパスに付与されている言語・音響情報から会話分析研究で用いられている音調マーカの導出を試み，その精度について検証を行った。その成果については，The Ninth International Conference on Language Resources and Evaluation (LREC2014) で発表した。

【研究業績】

《国際会議録》

Yuichi Ishimoto, Tomoyuki Tsuchiya, Hanae Koiso, and Yasuharu Den

“Towards automatic transformation between different transcription conventions: Prediction of intonation markers from linguistic and acoustic features”, *Proceedings of LREC2014*, pp.311-315. (Reykjavik, Iceland), 2014.5.

Shuichi Itahashi, Tomoko Ohsuga, Yuichi Ishimoto, Hiroaki Kojima, Kiyotaka Uchimoto, and Shunsuke Kozawa

“Revised catalogue specifications of speech corpora with user-friendly visualization and search system”, *Proceedings of Oriental COCOSA 2014*, pp.60-64. (Phuket, Thailand), 2014.9.

Yuichi Ishimoto and Hanae Koiso

“Utterance-final F0 changes in Japanese monologs and dialogs”, *Proceedings of Oriental COCOSA 2014*, pp.255-260. (Phuket, Thailand), 2014.9.

【講演・口頭発表】

石本祐一，小磯花絵

「日本語話し言葉コーパスを基にした自発発話における独話・対話の F0 変化の分析」，日本音響学会 2014 年秋季研究発表会講演論文集，pp.357-360.（北海学園大学），2014.9.

大須賀智子，石本祐一，板橋秀一

「日本音響学会新聞記事読み上げ音声コーパスの改訂について」, 日本音響学会 2014 年秋季研究発表会講演論文集, pp.419-420. (北海学園大学), 2014.9.

石本祐一, 榎本美香

「発話末認知における統語と韻律の相乗・相殺効果の検討」, 日本音響学会 2015 年春季研究発表会講演論文集, pp.357-358. (中央大学), 2015.3.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・兵庫県立兵庫高校東京みらいフロンティアツアーで講演 2014.8.
- ・NINJAL 職業発見プログラム（群馬工業高等専門学校受入）で講演 2014.9.

籠宮 隆之（かごみや たかゆき）研究情報資料センター 特任助教

【学位】博士（学術）（神戸大学，2008）

【学歴】東京都立大学人文学部史学科卒業（1995），東京都立大学大学院人文科学研究科国文学専攻修士課程修了（1999），神戸大学大学院総合人間科学研究科コミュニケーション科学専攻博士課程修了（2008）

【職歴】国立国語研究所 非常勤職員（1999-2005），独立行政法人産業技術総合研究所 特別研究員（2008），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所研究情報資料センター 特任助教（2013）

【専門領域】音声科学

【所属学会】日本音声学会，日本音響学会，社会言語科学会，International Speech Communication Association

【学会等の役員・委員】日本音声学会 評議員，日本音声学会 広報委員，日本音声学会 庶務委員，日本音声学会 音声学普及委員，社会言語科学会 企画委員

【2014 年度の研究成果の概要】

人間文化研究の連携共同推進事業（資源共有化推進事業）『『幼児・児童の連想語彙表』の電子情報化と公開に向けた整備』：代表者

研究目的：

知識ベースシステムを効率的に運用するためには，シソーラス（類義語辞書）の利用が不可欠である。国立国語研究所では，これまでに言語学的知見に基づいたシソーラスを数多く構築してきた。しかし，これらのデータの多くは出版物や電子書籍の形式で配布されており，インターネット上で自由に利用できるような形式では公開されてこなかった。そこで，本課題では 1981 年に刊行された『幼児・児童の連想語彙表』に掲載された連想語彙表をオープンな形式で公開するためのデータ整備を行った。

本語彙表は，3 歳児～小学 4 年生および成人を対象に，「動物」「楽器」などの語彙（概念語）を呈示し，その概念語に含まれるものの名称を思い付く限り挙げてもらったデータを集計したものである。したがって，本語彙表は心理学的手続きに基づいて作成されたシソーラスと捉えることができる。また，本語彙表には年齢層ごとに反応語の想起頻度が示されており，反応語の各概念語内での重要度も示されている。これは，高度な知識ベースシステムを運用する上で，重要な役割を果たすと考えられる。

さらに，本語彙表は，知識ベースの構築だけに留まらず，心理言語学や脳科学などの，人間の意味理解を研究する分野での基礎的データとしても活用できる。したがって，本語彙表をインターネット上で公開することは，大きなインパクトを持つものと期待できる。

本課題では，インターネット経由で検索できるシステムを構築するために，印刷物で作成された本語彙表を電子化することを目標とした。

研究成果：

『『幼児・児童の連想語彙表』に掲載された連想語彙表を電子テキストに入力した。ある単語を呈示され，その呈示された単語から連想する語を回答する「意味連想語」項目 22,168 語，および「あ」「よ」などの仮名一文字を呈示し，その文字を先頭に持つ単語を回答する「頭音連想語」項目 12,695 語を電子化した。

今後は，本課題で作成したデータの形式を整えたうえで，データベースシステムを構築する，もしくは CSV 形式等で配布するなど，自由に利用できる環境を整備する予定である。

人間文化研究機構連携研究「近世日本語方言辞書の高度利用」：共同研究者

研究成果：

近世に日本全国の方言を記述した辞書である『物類称呼』は、方言研究の第一級の資料である。しかし、各語彙や表現の地域的な分布については大まかな記述、もしくは極めて限定的な地域の記述に限られており、分布の様子が詳らかにはなっていない。一方、国語研が過去に作成した方言資料のうち、『日本言語地図』および『方言文法全国地図』は20世紀の全国の方言の分布を詳細に記述したものであり、やはり方言研究の第一級の資料である。そこで『物類称呼』に掲載された語彙が20世紀にはどのように分布していたのかを概観するために、『物類称呼』の見出しと『日本言語地図』および『方言文法全国地図』の項目とを連結させたデータベースを構築した。

【研究業績】

《著書・編書》

小磯花絵（編）、小磯花絵、前川喜久雄、五十嵐陽介、丸山岳彦、伝 康晴、籠宮隆之、西川賢哉、菊地浩平（著）

『講座 日本語コーパス 3 話し言葉コーパス 設計と構築』、朝倉書店、2015.2.

《論文・ブックチャプター》

籠宮隆之

「硬い声と柔らかい声 ―音声から来る硬軟の印象―」、『日本語学』34（1）、pp.58-69. 明治書院、2015.1.

《国際会議録》

Takayuki Kagomiya and Seiji Nakagawa

“Evaluation of bone-conducted ultrasonic hearing-aid regarding transmission of speaker gender and age information”, *Proceedings of Speech Prosody 2014*, pp.467-471. (Dublin, Ireland), 2014.5.

Takayuki Kagomiya and Seiji Nakagawa

“Development of Japanese paralinguistic information transmission tests for assessment of hearing-assistance devices utilizing multi-speaker and emotional speech corpora”, *Proceedings of Oriental COCODA 2014*, pp.166-170. (Phuket, Thailand), 2014.9.

【講演・口頭発表】

籠宮隆之、中川誠司

「骨導超音波補聴器の振幅変調方式の違いによるパラ言語情報伝達性能の変化」、『日本音響学会 2014 年秋季研究発表会講演論文集』、pp.505-506. 日本音響学会 2014 年秋季研究発表会（北海道札幌市）、2014.9.

高田智和、早田美智子、老子裕輝、籠宮隆之

「日本語研究・日本語教育文献データベースと外部機関レポジトリとの連携」、『日本語学会 2014 年度秋季大会予稿集』、pp.237-240. 日本語学会 2014 年秋季大会（北海道札幌市）、2014.10.

籠宮隆之

「自発音声コーパスを用いた母音の調音位置と発話速度との関係の分析」、『日本音響学会 2015 年春季研究発表会講演論文集』、pp.311-312. 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会（東京都文京区）、2015.3.

籠宮隆之、中川誠司

「骨導超音波補聴器の振幅変調方式の違いによる話者情報伝達性能の変化」、『日本音響学会 2015 年春季研究発表会講演論文集』、pp.499-500. 日本音響学会 2015 年秋季研究発表会（東京都文京区）、2015.3.

【研究調査】

- ・ 科研費『聴覚補助器による非言語・パラ言語情報伝達性能を評価するための尺度の構築』（代表者：籠宮隆之）の助成により，補聴器や人工内耳などを装着した際に，話者情報や感情情報などがどの程度正確に伝達できるかを評価するための研究を推進した。
- ・ 科研費『聴覚音声支援のための聴知覚特性の解明と信号処理開発』（代表者：入野俊夫，和歌山大学）の助成により，人工内耳の性能の変化によって音声情報伝達特性がどのように変化するのかをシミュレーション実験により調査した。
- ・ 科研費『骨導超音波と視覚情報を利用した最重度難聴児のための発話訓練装置の開発』（代表者：中川誠司，独立行政法人産業技術総合研究所）の助成により，発話時の調音運動を呈示することにより，より効果的な発話運動を訓練できる装置を開発した。

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 国語研「ニホンゴ探検」で，「ことばの実験」を展示，講演 2014.7.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
東京学芸大学大学院教育学研究科
名古屋外国語大学大学院国際コミュニケーション研究科

迫田 久美子（さこだ くみこ）日本語教育研究・情報センター 教授，センター長

【学位】博士（教育学）（広島大学，1996）

【学歴】広島女学院大学文学部英米文学科卒業（1973），広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻修士課程修了（1992），広島大学大学院教育学研究科日本語教育学専攻博士後期課程修了（1996）

【職歴】広島大学教育学部 講師（1996），同 助教授（1998），広島大学大学院教育学研究科 助教授（2001），同 教授（2003），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 教授，センター長（2012）

【専門領域】日本語教育学，第二言語習得研究，誤用分析，日本語教授法

【所属学会】日本語教育学会，日本言語学会，第二言語習得研究会，AATJ（American Association of Teachers of Japanese）

【学会等の役員・委員】日本語教育学会国際連携委員会 委員長，文化審議会国語分科会 委員，文化審議会国語分科会日本語教育小委員会 委員，国際交流基金「国際交流基金の運営に関する諮問委員会」委員，2014 年度国際交流基金賞選考委員会 委員，2014 年第 55 回外国人による日本語弁論大会 審査委員長

【受賞歴】

2003 日本語教育学会奨励賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：リーダー

研究目的：

本プロジェクトでは，第二言語習得研究，対照言語学，社会言語学，心理言語学，コーパス言語学等の幅広い学問領域の連携により，多文化共生社会における第二言語としての日本語の教育・学習をめぐるさまざまな問題について，実証的な研究を行うことを目的とする。

具体的には，「非母語話者の日本語の第二言語習得研究」および「定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究」の 2 つの研究を柱として進めている。

「非母語話者の日本語の第二言語習得研究」については，日本語非母語話者の日本語習得を自然環境か教室環境か，日本国内か海外か，などの環境要因および彼らの母語の違いが習得にどのように影響を与えるのかについて，学習者の会話コーパス・作文コーパスに基づいて明らかにすることを目的とする。また，「定住外国人の言語使用と言語環境に関する研究」では，多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者や研究が進んでいない少数派の外国人の言語習得，複数の言語使用の実態をよりの確に捉え，どのような日本語を必要とするのかを明らかにし，言語使用と言語生活の関係を明らかにすることを目的としている。

研究成果：

- (1) ベトナム，スペイン，フランス，ハンガリー，韓国，中国，韓国，台湾の 8 地域 6 言語の調査を実施し，現在までに，約 970 名分のデータを収集した（「I-JAS: 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」）。既に公開している中国語・韓国語母語の日本語縦断発話コーパス（C-JAS）と共に HP で本プロジェクトの概要を掲載した（<https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/laj/>）。
- (2) コーパス構築のための文字化に関する研究会（2014 年 4 月～6 月）を 3 回開催し，さらに学習者コーパスを活用した言語研究会（2014 年 4 月～2015 年 1 月）を 10 回開催し，毎回 15～20 名の参加者によりコーパスに基づく事例研究の発表や英語教育領域の専門家による特別講義を行った。
- (3) 2014 年 7 月，オーストラリア（シドニー）で開催された 2014 年度日本語教育国際研究大会（ICJLE2014）において，ベトナムで収集したデータを中心に分析した研究「日本語の語彙習得に

における音節と語の転換現象」を共同研究者（カオ・レ・ユン・チー氏：ホーチミン市師範大学）と共に発表した。

- (4) 2014 年 9 月, 国立国語研究所・国立情報学研究所主催の「音声言語資源の明日を考える」というテーマで行われたシンポジウムで, 学習者コーパスデータ収集に関する調査実施の課題について発表した。
- (5) 2014 年 12 月, 時空間言語変異研究系と共に, NINJAL 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから―」を主催し, 学習者コーパスと日本語教育研究について発表した。参加者は延べ約 100 名であった。
- (6) 2015 年 1 月, 日本語教育研究・情報センター主催の共同研究プロジェクト合同発表会を「多文化共生社会における日本語教育 ―言語習得・コミュニケーション・社会参加―」というテーマで実施した。研究員と共に学習者コーパス構築に関する内容について 2 件, データ分析による習得の内容 2 件のポスター発表を行った。参加者は 83 名であった。
- (7) 『学習者コーパスと日本語教育研究 (仮題)』(くろしお出版 2015 年秋 出版予定 編集: 迫田久美子, 野田尚史) および Acquiring Japanese as a Second Language: Corpus based investigation into the nature of Japanese interlanguage (Routledge 2018 年夏 出版予定 編集: Kumiko Sakoda, Yasuhiro Shirai, Prashant Pardeshi) の企画準備を進めた。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

迫田久美子

「日本語学習者のコミュニケーション ―誤用の原因と運用のストラテジー―」, 『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』第 9 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会 (編), pp.21-32. ココ出版, 2014.11.

【講演・口頭発表】

迫田久美子

「楽しい日本語授業を目指して ―世界の日本語教育事情―」, ホーチミン市師範大学日本語学科講演 (ホーチミン市師範大学) [招待講演], 2014.4.

迫田久美子

「学習者コーパスに見る日本語の習得 ―スピーキングとライティングのデータから―」, 韓国日本言語文化学会 (韓国 崇実大学) [招待講演], 2014.5.

迫田久美子

「「わかる」から「できる」へ繋ぐ日本語指導とは? ―第二言語習得研究からシャドーイングの実践研究へ―」, スペイン日本語教師会 (Rafael Hotel Orense) [招待講演], 2014.6.

カオ・レ・ユン・チー, レ・ティ・ホン・ガー, 迫田久美子

「日本語の語彙習得における音節と語の転換現象 ―ベトナム人日本語学習者の会話データに基づいて―」(口頭発表), 日本語教育国際研究大会 ICJLE2014 (シドニー), 2014.7.

迫田久美子

「音声言語資源開発の今後」, 言語資源シンポジウム: パネルディスカッション, 国立国語研究所・国立情報学研究所 (一橋講堂) [招待あり], 2014.9.

迫田久美子

「「わかる」から「できる」へ繋ぐ日本語指導 ―第二言語習得研究からみたシャドーイングの実践研究―」, マレーシア日本語教師会 (マラヤ大学) [招待講演], 2014.10.

迫田久美子

「学習者言語の研究 ―日本語教師は誤用から何を学ぶのか―」, 台湾大学日語教育学科講演会 (台湾大学) [招待講演], 2014.10.

迫田久美子

「コミュニケーションのための日本語教育研究 ―データからわかる学習者の運用ストラテジー―」, 台湾日語教育学会 (台湾東呉大学) [招待講演], 2014.11.

迫田久美子

「学習者コーパスと日本語教育 ―誤用から何を学ぶか―」, 中国・北京日本学研究センター特別講演 (北京日本学研究センター) [招待講演], 2014.11.

迫田久美子

「学習者研究の過去・現在・未来 ―日本語教師が学ぶべきこと―」, 南山大学外国人留学生別科40周年連続記念講演 (南山大学) [招待講演], 2015.1.

迫田久美子

「第二言語習得研究の成果を高等教育の日本語授業に活かす」, ドイツ日本語教師会 (ハイデルベルグ大学) [招待講演], 2015.2.

迫田久美子

「日本語学習者のコミュニケーション ―誤用の原因と運用のストラテジー―」, イタリア日本語教師会 (ローマ大学) [招待講演], 2015.3.

【研究調査】

(調査総責任者 迫田久美子)

- ・ 2014.4.2-6 ベトナム・ホーチミン (ホーチミン市師範大学)
(調査担当者: 迫田久美子, 金田智子 海外研究協力者: カオ・レ・ユン・チー氏)
- ・ 2014.4.3-11 フランス・グルノーブル (グルノーブル第三大学)
(調査担当者: 田中真理, 小林典子 海外研究協力者: 東 伴子氏)
- ・ 2014.5.12-16 韓国・ソウル (高麗大学)
(調査担当者: 迫田久美子, 細井陽子 海外研究協力者: チョウ英南氏)
- ・ 2014.6.16-20 スペイン・マドリッド (コンプルテンセ大学)
(調査担当者: 迫田久美子, 嶋田和子 海外研究協力者: 鈴木 裕氏)
- ・ 2014.6.23-27 ハンガリー・ブタペスト (カーロリ・ゲーシュパル大学)
(調査担当者: 砂川有里子, 細井陽子 海外研究協力者: 若井誠二氏)
- ・ 2014.11.8-12 中国・長沙 (湖南大学)
(調査担当者: 迫田久美子, 細井陽子 海外研究協力者: 張 佩霞氏)
- ・ 2014.10.29-11.3 韓国・ソウル (東国大学)
(調査担当者: 須賀和香子, 細井陽子 海外研究協力者: 李 京哲氏)
- ・ 2015.3.13-17 台湾・台中 (台中科技大学)
(調査担当者: 今井新悟, 金田智子 海外研究協力者: 邱 學瑾氏)

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ NINJAL 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーション ―会話・方言・学習者・歴史コーパスから―」(企画・運営, 時空間変異研究系と共同) 2014.12.6-7.
- ・ 日本語教育研究・情報センター共同研究プロジェクト合同発表会「多文化共生社会における日本語教育 ―言語習得・コミュニケーション・社会参加―」(企画・運営) 2015.1.11.

【その他の学術的・社会的活動】

迫田久美子

（ボランティア日本語教師を対象として）「地域の日本語教室を充実させる工夫 ―指導における教師の視点と学習者の視点―」，ひろしま平和文化センター，広島国際会議場，2014.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

広島大学大学院集中講義「日本語教育方法学特講Ⅰ」

・外来研究員受入

博報財団国際日本研究フェローシップ 尹 鎬淑（サイバー韓国外国語大学教授）

野田 尚史 (のだ ひさし) 日本語教育研究・情報センター 教授

1956 生

【学位】博士（言語学）（筑波大学，1999）

【学歴】大阪外国語大学外国語学部イスパニア語学科卒業（1979），大阪外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了（1981），大阪大学文学研究科日本学専攻博士後期課程中退（1981）

【職歴】大阪外国語大学国語学部 助手（1981），筑波大学文芸・言語学系 講師（1985），大阪府立大学総合科学部 講師（1991），同 助教授（1993），同 教授（1999），大阪府立大学人間社会学部 教授（2005），大学共同利用機関法人人間文化研究機構日本語教育研究・情報センター 教授（2012）

【専門領域】日本語学，日本語教育学

【所属学会】日本語学会，日本語教育学会，日本言語学会，日本語文法学会，社会言語科学会，言語処理学会，計量国語学会，日本語用論学会，関西言語学会，ヨーロッパ日本語教師会，American Association of Teachers of Japanese

【学会等の役員・委員】日本語学会 理事・評議員，日本語教育学会 学会連携委員長，日本言語学会 評議員，日本語文法学会 評議員，日本語用論学会 外部査読委員，言語系学会連合 運営委員

【受賞歴】

2006 第4回日本語教育学会奨励賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」：リーダー

研究目的：

研究の目的は，次の3つであった。

- (1) コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要なことを明らかにする。
- (2) 日本語教育研究の中でも特に研究が不足している日本語学習者の読解過程・聴解過程を明らかにする。
- (3) 世界の言語研究に貢献できる日本語研究を行う。

研究成果：

- (1) コミュニケーションを重視した日本語教育を行うために必要な研究の成果としては，曹大峰（主編）『日语教育基础理论与实践系列丛书 日语语言学与日语教育〔日本語教育研究概論叢書 日本語学と日本語教育〕』の分担執筆を行い，野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』の中国語訳を出版した。また，日本語学習者の日本語について，友定賢治（編）『感動詞の言語学』に「日本語非母語話者の感動詞の不自然な運用」という論文を発表した。さらに，「やさしい日本語」に関して，『日本語教育』に「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」という論文を発表し，日本語教育学会大会で「「外国の人にもわかりやすい」文書への書き換え—日本語教師とテクニカルライターの違い—」という口頭発表を行った。
- (2) 日本語学習者の読解過程についての研究の成果としては，『専門日本語教育研究』に「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」という論文を発表し，『ヨーロッパ日本語教育』に「ヨーロッパの上級日本語学習者によるウェブサイトのクチコミの解釈—文化の相違による解釈の違い—」という論文を発表した。日本語学習者の聴解過程についての研究の成果としては，オーストラリアで開かれた日本語教育国際研究大会で「日本語学習者の飲食店での聞きとり困難点—文化背景を盛り込んだ聴解教材作成のために—」という口頭発表を行った。
- (3) 世界の言語研究に貢献できる日本語研究の成果としては，『日本語の配慮表現の多様性—歴史的

変化と地理的・社会的変異一』という共編著を出版した。また、日本語文法学会大会で「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系 ―言語による使用実態の違いを説明できる体系化―」という口頭発表を行った。

【研究業績】

《著書・編書》

曹 大峰（主編）、野田尚史ほか9名（著）

『日语教育基础理论与实践系列丛书 日语语言学与日语教育 [日本語教育研究概論叢書 日本語学と日本語教育]』, 高等教育出版社（中国）, 2014.5.

野田尚史, 高山善行, 小林 隆（編）

『日本語の配慮表現の多様性 ―歴史的変化と地理的・社会的変異―』, くろしお出版, 2014.6.

野田尚史（編）、張 麟声 他（訳）

『交际型日语教学语法研究 [コミュニケーションのための日本語教育文法]』, 外語教学与研究出版社（中国）, 2014.9.

《論文・ブックチャプター》

野田尚史

「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ ―母語話者が日本語を使うときの問題として―」, 『日本語教育』158, pp.4-18. 日本語教育学会, 2014.8.

野田尚史

「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」, 『専門日本語教育研究』16, pp.9-14. 専門日本語教育学会, 2014.12.

野田尚史

「日本語非母語話者の感動詞の不自然な運用」, 友定賢治（編）『感動詞の言語学』, pp.149-165. ひつじ書房, 2015.2.

野田尚史, 穴井幸子, 桑原陽子, 白石 実, 中島晶子, 村田裕美子

「ヨーロッパの上級日本語学習者によるウェブサイトのクチコミの解釈 ―文化の相違による解釈の違い―」, 『ヨーロッパ日本語教育』19, pp.245-250. ヨーロッパ日本語教師会（ドイツ）, 2015.3.

《辞書・辞典類》

野田尚史

「活用1」, 「主語3」, 「主題2」, 「ハ2」, 「話し言葉と書き言葉」, 「有題文と無題文」, 日本語文法学会（編）『日本語文法事典』, 大修館書店, 2014.7.

野田尚史

「語順」, 「倒置」, 佐藤武義, 前田富祺（編集代表）『日本語大事典』, 朝倉書店, 2014.11.

《その他の出版物・記事》

野田尚史

「著書紹介 野田尚史, 高山善行, 小林 隆 編『日本語の配慮表現の多様性 ―歴史的変化と地理的・社会的変異―』」, 『国語研プロジェクトレビュー』5 (2), pp.96-97. 国立国語研究所, 2014.10.

野田尚史

「新刊クローズアップ 村岡貴子著『専門日本語ライティング教育 ―論文スキーマ形成に注目して―』」, 『日本語学』34 (3), p.49. 明治書院, 2015.3.

【講演・口頭発表】

野田尚史，島津浩美，阪上彩子

「日本語学習者の飲食店での聞きとり困難点 ―文化背景を盛り込んだ聴解教材作成のために―」，
2014 年日本語教育国際研究大会 (SYDNEY-ICJLE2014) (シドニー工科大学 (オーストラリア))，
2014.7.

中北美千子，野田尚史

「「外国の人にもわかりやすい」文書への書き換え ―日本語教師とテクニカルライターの違い―」，
日本語教育学会 2014 年度秋季大会 (富山国際会議場)，2014.10.

野田尚史

「翻訳品質向上のために考えるべき日本語の特徴」，パネルディスカッション「翻訳品質向上のための「なぜなぜ分析」」，テクニカルコミュニケーションシンポジウム 2014 (京都リサーチパーク)，
2014.10.

野田尚史

「日本語とスペイン語のとりたて表現の意味体系 ―言語による使用実態の違いを説明できる体系化―」，日本語文法学会第 15 回大会 (大阪大学)，2014.11.

野田尚史

「「外国の人にもわかりやすい」日本語 ―テクニカルライターと日本語教師による文書書き換え調査から―」，テクニカルライターの会 平成 26 年度第 5 回定例会 (関西情報センター) [招待講演]，2014.12.

【その他の学術的・社会的活動】

野田尚史

「文法よりコミュニケーション！ ―日本語を使いたい外国人市民をサポートするために―」，識字ボランティア研修「夜間ブラッシュアップ 1」川崎市教育委員会主催 (川崎市幸市民館) [招待講演]，2014.6.

野田尚史

「コミュニケーション重視の教授法」，朝日カルチャーセンター 朝日 JTB・交流文化塾 新宿教室 日本語教育公開講座 [招待講演]，2014.9.

野田尚史

「コミュニケーションのために文法を見直そう」，日本語ボランティア・ブラッシュアップ講座 (横浜市国際交流協会鶴見国際交流ラウンジ主催) (鶴見国際交流ラウンジ) [招待講演]，2014.11.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

大阪府立大学人間社会学研究科

・NINJAL チュートリアル講師

「日本語非母語話者の言語理解・言語表現の分析」，第 15 回 NINJAL チュートリアル，PARM-CITY131 (仙台)，2014.9.

「日本語非母語話者の言語理解・言語表現の分析」，第 17 回 NINJAL チュートリアル，リファレンス大博多貸会議室 (福岡)，2015.3.

宇佐美 洋（うさみ よう）日本語教育研究・情報センター 准教授

【学位】博士（日本語学・日本語教育学）（名古屋外国語大学，2012）

【学歴】東京大学大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学（1997）

【職歴】新潟大学留学生センター 講師（1997），国立国語研究所日本語教育センター第三研究室 研究員（1999），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同 主任研究員（2004），同 日本語教育基盤研究センター評価基準グループ グループ長（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所言語対照研究系 准教授（2009），同 日本語教育研究・情報センター准教授（2010）

【専門領域】評価論，言語能力論，日本語教育

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，待遇コミュニケーション学会，PAC 分析学会

【学会等の役員・委員】日本語教育学会 理事，同 教師研修委員，同 調査研究推進委員，同 国際連携委員，社会言語科学会発表賞 選考委員

【受賞歴】

2011 日本語教育学会第9回日本語教育学会奨励賞

2011 日本語教育学会第6回日本語教育学会林大記念論文賞

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「コミュニケーションのための言語と教育の研究」：共同研究員（「社会における相互行動としての「評価」研究」を担当）

研究成果：

本年度も，社会における相互行為の中で行われている評価の多様性を，量的・質的手法によって明らかにする試みとともに，評価における価値観の変容に関する調査，また自らの価値観の内省を促す研修（ワークショップ）手法の開発・実施・改良を行った。こうした新しい理念に基づく評価研究は所外研究者からの関心を広く集めるに到っており，2014 年 8 月には一般財団法人日本語教育振興協会からの依頼により「日本語学校教育研究大会」において，および同月，日本語教育学会からの依頼により「日本語教育夏季集中研修」において招待ワークショップを実施した。

また 2014 年度は，これまで本共同研究プロジェクトで行ってきた諸研究を書籍としてまとめるべく，年度内 3 回の研究発表会および書籍刊行のための企画会議を実施した（書籍は 2015 年 12 月刊行予定）。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

宇佐美洋

「「外国人にわかりやすい文書」を書くための配慮 — 「やさしい日本語」の作成ルール」の効果とその活用—」，『カナダ日本語教育振興会 2014 年次大会プロシーディングズ』，pp.174-183. 2014.10.

宇佐美洋

「分断から統合へ 一人間同士の協働を目指す「専門日本語教育」」，『専門日本語教育研究』16, pp.3-8. 2014.12.

宇佐美洋

「母語話者・非母語話者間の対話における他者への配慮とその評価」，『第 21 回プリンストン日本語教育フォーラム プロシーディングズ』，pp.163-172. 2014.12.

《その他の出版物・記事》

宇佐美洋

「〈著書紹介〉『非母語話者の日本語』は、どのように評価されているか ―評価プロセスの多様性をとらえることの意義』, 『国語研プロジェクトレビュー』5 (2), pp.92-93. 2014.10.

【講演・口頭発表】

宇佐美洋

「公的機関における日本語とはどうあるべきか ―不特定多数に対する対応と, 「個」への対応と―」, 公開シンポジウム「「やさしい日本語」研究の現状とその展開」, 2014.5.24.

宇佐美洋

「日本語の能力は1本の物差しで測れるか? ―価値観が多様化する中で, 「評価」について考える―」, 平成26年度日本語学校教育研究大会 (一般財団法人日本語教育振興協会) [招待講演], 2014.8.5.

宇佐美洋

「「評価」について考える」, 日本語教育学会2014年度日本語教育研修 (夏季集中研修)「教える・学ぶ・考える」[招待講演], 2014.8.9-10.

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

・調査研究推進委員会日本語教育研究推進セミナー「競争的研究資金申請書の対策講座」, 公益社団法人日本語教育学会 (富山国際会議場) (企画・運営) 2014.10.

【その他の学術的・社会的活動】

・「ことばのミニ講義“ことばの正しさ”ってなんだろう?」ニホンゴ探険2014 ―1日研究員になろう! (国立国語研究所), 2014.7.19.

【大学院教育・若手研究者育成】

・大学院非常勤講師

東京大学大学院 (客員准教授)

・論文指導

政策研究大学院大学 国際交流基金日本語国際センター 日本言語文化研究プログラム (博士課程 主査)

野山 広 (のやま ひろし) 日本語教育研究・情報センター准教授

1961 生

【学位】修士（文学）（早稲田大学, 1988）, 修士（日本語応用言語学）（モナシュ大学, 1995）, 修士（教育学）（早稲田大学, 1996）

【学歴】早稲田大学卒業（1985）, 早稲田大学大学院文学研究科教育学専攻修士課程修了（1988）, 豪州モナシュ大学大学院日本研究科日本語応用言語学専攻修了（1995）, 早稲田大学大学院教育学研究科国語教育専攻修士課程修了（1996）, 早稲田大学大学院文学研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程単位取得退学（2001）

【職歴】文化庁文化部国語課専門職員（日本語教育調査官）（1997）, 独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第二領域 主任研究員（2004）, 同 領域長（2005）, 同 整備普及グループ長（2006）, 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 上級研究員（2009）, 同 准教授（2010）

【専門領域】応用言語学, 日本語教育学, 社会言語学, 多文化・異文化間教育, 言語政策・計画研究

【所属学会】日本語教育学会, 社会言語科学会, 異文化間教育学会, 移民政策学会, ヨーロッパ日本語教師会

【学会等の役員・委員】日本語教育学会 理事（大会委員会副委員長, 学会連携副委員長）, 移民政策学会 理事（企画委員）, 異文化間教育学会常任 理事（研究委員会副委員長）, 日本語プロフィシェンシー研究会 副会長（地域の日本語教育研究担当）, 港区国際化推進プラン検討委員会 委員長

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」: 共同研究員

研究目的:

本プロジェクトでは、主として旧国語研の日本語教育基盤情報センターで実施した縦断調査（約2年半）及び独創・発展型共同研究プロジェクト「定住外国人の日本語習得と言語生活の実態に関する学際的研究（リーダー）」（約3年）で得られた（合計5年間の）日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備、分析を言語習得研究や言語生活研究の観点・手法を用いて行いつつ、データベースを整備、蓄積している。そのことで、多言語・多文化化が進む現代の地域社会における定住者の日本語習得、言語生活の実態をよりの確に捉えることが主な目的である。また、日本語学習を必要とする定住者が抱えている諸課題にできるだけ応えようとするためには、どのようなアプローチをすればいいのか、その研究方法の基盤を築くことも目的の一つである。

研究成果:

- (1) 日本語学習者会話データの分析やフォローアップインタビュー結果については、その成果の一部を日本語教育国際研究大会での口頭発表, AAS (AAS-IN-ASIA CONFERENCE) でのパネル発表, 国語研究所日本語教育研究・情報センターのシンポジウムでのポスター発表（個人・共同）として発表した。
- (2) その他、縦断調査の結果や、学習者の言語生活に関する調査からみえてきた成果については、「地域日本語教育とプロフィシェンシー」及び「地域に定住する外国人に対する OPI の枠組みを活用した縦断調査の結果からみえてきたこと — 多人数による話し合い場面構築の可能性を探りながら —」という論文で報告した。また、一般社団法人アクラス日本語教育研究所 5 月研修での招待講演, 第 24 回 CATJ 大会（米国イースタンミシガン大学）での招待講演やパネル発表, 韓国・国立国語院で開催された国際シンポでの招待講演 “Literacy necessary for the construction of the multicultural society: From a perspective of intercultural literacy and social participation”, 中国・

北京日本学研究センター特別講演，国際交流基金インドニューデリー日本文化センター招待講演などの中で発表した。

- (3) 日本語学習者会話データの分析や新たなデータの収集・整備に関しては，5 年間(2007 ～ 12 年度分)の縦断データ（文字化データ）の公開を行った。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

野山 広

「地域日本語教育とプロフィシェンシー」，『日本語プロフィシェンシー研究』2，pp.6-10. 日本語プロフィシェンシー研究会，凡人社，2014.4.

野山 広，森本郁代

「地域に定住する外国人に対する OPI の枠組みを活用した縦断調査の結果からみえてきたこと—多人数による話し合い場面構築の可能性を探りながら—」『日本語プロフィシェンシー研究』2，pp.11-29. 日本語プロフィシェンシー研究会，凡人社，2014.4.

野山 広，齋藤ひろみ，佐藤郡衛，浜田麻里，見世千賀子，南浦涼介

「実践をまなざし，現場を動かす異文化間教育学とは？—テーマ設定の趣旨と成果・課題—」，『異文化間教育』41，pp.1-15. 異文化間教育学会，2015.3.

《国際会議録》

Hiroshi Noyama

"Literacy necessary for the construction of the multicultural society: From a perspective of intercultural literacy and social participation", *NIKL (The National Institute of The Korean Language) 2014 International Academic Conference: The Methods and Applications of Research on Literacy, Proceeding of Presentation*, pp.152-163, 韓国・国立国語院，2014.11.

《データベース類》

- ・「日本語学習者会話データベース縦断調査編」(2007 ～ 12 年度分) (2014 年 4 月，3 年分の追加改定公開) https://dbms.ninjal.ac.jp/judan_db/

《その他の出版物・記事》

野山 広，南浦涼介，見世千賀子，佐藤郡衛，浜田麻里，齋藤ひろみ

「異文化間教育 文献目録 41」，『異文化間教育』41，pp.153-164. 異文化間教育学会，2015.3.

【講演・口頭発表】

野山 広，松田陽子，土井佳彦，嘉数勝美

「外国人との共生について改めて考える—言語政策という観点から」，移民政策学会ミニシンポジウム（企画・運営，ファシリテーター），移民政策学会（筑波大学），2014.5.

野山 広，川上郁雄，石井恵理子，池上摩希子，齋藤ひろみ

「「特別の教育課程」化は子どもたちのことばの教育に何をもたらすのか—年少者日本語教育のこれまでの成果と教育実践から考える—」，2014 年度日本語教育学会春季大会パネルセッション【予稿集】，pp.35-46. 創価大学，2014.5.

野山 広

「日本の多言語・多文化化の現状と地域における日本語教育の展開—複言語・複文化主義的な学習支援の現場から見えてくること」，*24th Annual Conference of the Central Association of Teachers of Japanese (CATJ24) Proceedings, October 5-6, 2013*, Eastern Michigan University, (<http://commons.emich.edu/catj/1/>)，2014.5.

野山 広

「日本におけるバイリンガル教育の現状と今後の展望」, 第24回CATJ パネル: バイリンガルに子どもを育てる —アメリカと日本の知見から (Raising children as bilinguals - Perspectives from U.S. and Japan- Hitomi Oketani, Ted Delphia, Yukiko Tanaka, and Hiroshi Noyama), *24th Annual Conference of the Central Association of Teachers of Japanese (CATJ24) Proceedings, October 5-6, 2013*, Eastern Michigan University, (<http://commons.emich.edu/catj/1/>), 2014.5.

野山 広

「コミュニティとつながるために必要な日本語会話能力について考える」, 日本語教育国際研究大会 (シドニー工科大学 (オーストラリア)), 2014.7.

野山 広

「日本における外国人女性の言語問題 —「対話力」の向上や「社会参加」の拡充という観点から— (Language and foreign wives in Japan: From a perspective of communicative competence and social participation)」, AAS (AAS-IN-ASIA CONFERENCE) パネル発表 (13) East Asian Women and the National Borders: Heritage and Transformation in Border-crossing Migration, 2014.7.

由井紀久子, 鎌田 修, 野山 広, 西川寛之

「新日本語会話能力試験の開発 —大規模能力試験が測っている能力の比較」(ポスター発表), 第18回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (スロベニア・リュブリアナ大学), ヨーロッパ日本語教師会 (AJE), 2014.8.

野山 広

「日本語学習者の縦断調査結果のデータベース構築について: コミュニティとつながるために必要な日本語会話能力と社会参加 —「対話」の重要性—」, 北京日本学研究中心特別講演, 2014.11.

Hiroshi Noyama

“How foreigners can live in Japan: From the perspectives of Japan's language policy and social participation”, 国際交流基金インドニューデリー日本文化センター [招待講演], 2014.12.

野山 広

「日本語教育・日本研究に関する論文作成のポイント —研究計画の着想から調査の実施, 論文投稿まで—」, インド・デリー大学日本研究科 (アジア研究科) 設立50周年記念招待講演, 2014.12.

今村圭介, 野山 広

「散在地域における OPI の枠組みを活用した縦断調査からみえてきたこと —日本語学習者の「スタイル」に焦点を当てながら—」, 国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム (国立国語研究所), 2015.1.

西尾廣美, 野山 広

「幼稚園における「やさしい日本語」の学部授業導入に向けて —学生が指摘した幼稚園の配布文書の難しさは, NNS 保護者の指摘と一致したか—」, 国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム (国立国語研究所), 2015.1.

野山 広

「集住地域における OPI の枠組みを活用した縦断調査からみえてきたこと —日本語学習者の「バイリンガリズム」に焦点を当てながら—」, 国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム (国立国語研究所), 2015.1.

【研究調査】

- ・ 2014.5 群馬県大泉町において、OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した、日本語学習者の会話力、言語生活等に関する縦断調査のフォローアップ調査
- ・ 2014.9 秋田県能代市において、OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した、日本語学習者の会話力、言語生活等に関する縦断調査
- ・ 2015.3 秋田県能代市において、OPI（Oral Proficiency Interview）の枠組みを活用した、日本語学習者の会話力、言語生活等に関する縦断調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 異文化間教育学会年次大会・特定課題研究「実践をまなざし、現場を動かす異文化間教育学とは？」（企画・運営）2014.6.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 足立区、西東京市、浜松市、札幌市等の地域研修等で、研修担当講師（講演）を担当。
- ・ 「外国人児童生徒に対する日本語教育」, 2013 年度東京都教育委員会夏季教員研修担当講師（東京都教職員研修センター）2014.8.

【大学院教育・若手研究者育成】

- ・ 大学院非常勤講師
政策研究大学院大学
東海大学大学院
- ・ 論文指導
放送大学大学院（客員教授）（主指導）

福永 由佳（ふくなが ゆか）日本語教育研究・情報センター 研究員

【学位】修士（日本語教育）（ウィスコンシン大学，1993）

【学歴】金沢女子大学文学部英米文学科卒業（1991），ウィスコンシン大学東アジア語学文学学科修士課程修了（1993）

【職歴】国立国語研究所日本語教育指導普及部日本語教育教材開発室 研究員（1998），独立行政法人国立国語研究所日本語教育部門第一領域 研究員（2001），同日本語教育基盤情報センター学習項目グループ 研究員（2006），大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター 研究員（2009）

【専門領域】日本語教育学，社会言語学，識字，個人・社会の多言語性

【所属学会】日本語教育学会，社会言語科学会，日本言語政策学会

【2014 年度の研究成果の概要】

基幹型共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」：共同研究員

研究成果：

社会言語学，第二言語習得，バイリンガリズムを中心とした関連する言語（教育）の先行研究を精査しデータベース作成を継続した。また，既存調査データの再分析を行い，在日外国人の言語使用の特徴について統計的な分析を継続した。また，多言語使用者として在日パキスタン人コミュニティにおいてこれまで収集した各種データを分析し，その成果を口頭発表等として公表した。さらに，調査地域への社会貢献として，一般向けのシンポジウム「越境する子どもたちの経験と教育支援のありかた 一富山に住む外国人の子どもたち―」（「移民コミュニティの言語生活研究会」第5回，2015年3月）を開催した。

【研究業績】

《論文・ブックチャプター》

福永由佳

「在日外国人の多言語使用に対する Ethnolinguistic Vitality Theory の適応可能性 ―在日パキスタン人の事例―」，『国立国語研究所論集』8，pp.33-50. 2014.

福永由佳

「言語のなかの歴史と社会 ―在日パキスタン移民の多言語使用を事例に―」，『接触場面における蓄積と評価 ―接触場面の言語管理研究』12，pp.71-85. 2014.

《その他の出版物・記事》

福永由佳

「どうする？教育支援 ―外国人と地域共生へ―」，北陸中日新聞，2015.3.20.

福永由佳

「外国人教育 質の向上を ―射水で支援者ら意見交換―」，北陸中日新聞，2015.3.23.

【講演・口頭発表】

福永由佳

「言語のなかの歴史と社会 ―在日パキスタン移民の多言語使用を事例に―」，言語管理研究会第24回研究会（神田外語大学）[招待講演]，2014.7.

福永由佳

「家庭内言語からみた在日外国人の日本語使用 ―『生活のための日本語』全国調査から―」，日本語教育国際研究大会（シドニー工科大学（オーストラリア）），2014.7.

福永由佳, 中河和子

「日本人住民・パキスタン人住民の『多文化共生』を目指した連携の成立過程 ―当事者意識の変容に着目して―」, 2014 年度日本語教育学会秋季大会 (富山国際会議場), 2014.10.

福永由佳

「移民としての在日外国人の言語レパトリー」, 『国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム予稿集』, pp.82-85. 国立国語研究所, 2015.1.

福永由佳

「グローバル化における言語生活研究 ―移動性と言語レパトリーを中心に」, 国立国語研究所研究成果発表会 2015 (一橋大学一橋講堂), 2015.1.

福永由佳

「在日パキスタン人コミュニティにおける言語生活 ―富山県射水市の事例を中心に」, 多言語化現象研究会第 56 回研究会 (国立民族学博物館), 2015.3.

【研究調査】

- ・ 2014.12.20 堀岡岡児童館 (富山県射水市): 外国人児童生徒のための学習教室 (Toyama International Educational Society) の見学およびインタビュー調査

【学会・国際会議・セミナー等の企画運営】

- ・ 国立国語研究所日本語教育研究・情報センターシンポジウム (企画・運営) 2015.1.11.

【その他の学術的・社会的活動】

- ・ 「第 5 回移民コミュニティの言語生活研究会」の開催



資 料

1

運営会議

運営会議規程

- ・委員は20名以内、内過半数は所外の学識経験者。
- ・所内委員は、副所長、研究系長、センター長、他所長の氏名する教授又は客員教授 若干名。
- ・会議は所長の求めに応じ、議長がこれを招集する。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・会議の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・専門的事項について審議を行うための専門委員会（所長候補者選考委員会、人事委員会、名誉教授候補者選考委員会）を置くことができる。
- ・議長は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

2014 年度の開催状況

○第1回 2014年7月5日 13:30～15:00（フクラシア東京ステーション）

審議事項

1. 前回議事概要（案）について
2. 人事関連事項について
 - ・2-1. 言語資源研究系准教授の選考について
 - ・2-2. 日本語教育研究・情報センター教授の公募について
 - ・2-3. 理論・構造研究系特任助教の公募について
 - ・2-4. 客員教員の選考について
 - ・2-5. 所長候補者選考委員会の設置について
3. 研究所の名称及びミッションの再定義について
4. 第3期中期目標期間に実施する大型の共同研究プロジェクトについて

報告事項

1. 第3期中期目標期間に向けてのフィージビリティスタディ型共同研究について
2. 平成25事業年度に係る業務の実績に関する報告書について
3. 平成25年度業務の実績に関する外部評価報告書について
4. 平成27年度概算要求（案）について
5. その他
 - ・国立国語研究所の活動状況について

○第2回 2014年7月10日（メール会議）

審議事項

1. 前回議事概要（案）について
2. 国立国語研究所人事委員会の設置について

○第3回 2014年10月25日 10:00～13:00, 16:00～16:45（フクラシア東京ステーション）

※13:45～15:45 第3期共同研究プロジェクト検討のための有識者懇談会

審議事項

1. 前回議事概要（案）について
 2. 人事関連事項について
 - ・ 2－1. 所長候補者の選考について
 - ・ 2－2. 研究教育職員候補者選考にかかる申合せについて
 - ・ 2－3. 理論・構造研究系特任助教の選考について
 - ・ 2－4. 日本語教育研究・情報センター教授の選考について
 - ・ 2－5. 理論・構造研究系特任助教（歴史的典籍関係）の公募について
 3. 第3期中期目標期間に実施する大型の共同研究プロジェクトについて
- 報告事項

1. その他
 - ・ 国立国語研究所の活動状況について

○第4回 2015年2月20日 14:30～16:30（ステーションコンファレンス東京）

審議事項

1. 前回議事概要（案）について
2. 人事関連事項について
 - ・ 2－1. 理論・構造研究系特任助教の選考について
 - ・ 2－2. 時空間変異研究系教授・准教授の公募について
 - ・ 2－3. 言語対照研究系教授・准教授の公募について
 - ・ 2－4. 日本語教育研究・情報センター教授・准教授の公募について
 - ・ 2－5. 研究教育職員の内部昇任について
 - ・ 2－6. 所長候補者選考の手続きに関する申合せについて
3. 第3期中期目標・中期計画について
4. 研究所のミッション・設置目的について

報告事項

1. 平成26事業年度に係る業務の実績に関する報告書（案）について
2. 平成27年度計画（案）について
3. 平成27年度予算について
4. 平成27年度客員教員について
5. 研究教育職員の割愛について
6. その他
 - ・ 国立国語研究所の活動状況について

運営会議の下に置かれる専門委員会

(1) 所長候補者選考委員会

所長候補者選考委員会規程

- ・ 委員会の任務は、被推薦者名簿の作成、適任者名簿の作成、その他所長選考に必要な予備的事項に関するを行う。
- ・ 委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する研究所内の者及び研究所外の者若干名で組織する（研究所内の委員を過半数とする）。

- ・委員の任期は1年とし再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- ・委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

所長候補者選考委員会審議状況

2014年7月5日 所長候補者選考委員会設置

2014年7月22日 所長候補者選考委員会（第1回）開催

2014年8月21日 所長候補者選考委員会（第2回）開催（メール審議）

2014年9月2日 適任者名簿を提出

2014年10月25日 運営会議にて現国立国語研究所長 影山太郎氏を所長候補者に決定

2014年10月27日 人間文化研究機構長に推薦

(2) 人事委員会

人事委員会規程

- ・委員会は研究所の研究教育職員の採用及び昇任人事に係る候補者の選考に関する事項の審議を行う。
- ・委員会は運営会議委員のうち運営会議議長が指名する、研究所外の者若及び研究所内の者若干名で組織する。
- ・委員の任期は1年とし、再任を妨げない。欠員の後任者の任期は前任者の残任期間とする。
- ・委員会は委員の過半数の出席で議事を開催する。
- ・委員会の議事は出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
- ・委員長は必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

人事委員会審議状況

2014年4月2日（第1回：メール会議）、2014年6月9日（第2回）

言語資源研究系准教授として浅原正幸氏を運営会議に推薦

（2014年7月5日開催の運営会議で採用決定）

2014年7月22日（第3回：メール会議）、2014年10月14日（第4回）

理論・構造研究系特任助教として船越健志氏を運営会議に推薦

（2014年10月25日開催の運営会議で採用決定）

2014年11月11日（第6回）、2015年2月16日（第7回）

理論・構造研究系特任助教として藤本灯氏を運営会議に推薦

（2015年2月20日開催の運営会議で採用決定）

(3) 名誉教授候補者選考委員会（2013年度開催なし）

名誉教授称号授与規程

- ・研究所の教授として10年以上勤務し、学術研究上特に功績があった者。
- ・研究所の教授としての勤務年数が前号の規定に満たないが、学術研究上特に顕著な功績があった者。
- ・研究所の所長又は副所長として、研究所の運営に関し功績が特に顕著であった者。
- ・名誉教授の選考は、研究所の運営会議において行う。

国立国語研究所では、効率的かつ効果的な自己点検・評価を実施し、その評価結果を適切に業務運営に反映させるため、自己点検・評価委員会を設置している。この自己点検・評価を第三者評価に適切に関連づけるため、外部評価委員会を設置している。外部評価委員会では、2014年度の「研究系・センターの実績」、「組織・運営」、「管理業務」について研究所がまとめた自己点検・評価に対し、外部評価委員がその専門的立場から検証を行った。

自己点検・評価委員会

この委員会では、自己点検・評価の基本的な考え方の作成、自己点検・評価の実施、評価結果の公表及び活用に関すること、外部評価委員会の評価結果に関することを担当する。2014年度は12回開催した。

外部評価委員会

外部評価委員会規程

- ・ 委員会は、自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること、研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること、共同研究プロジェクト等の評価に関すること、その他評価に関することについて審議する。
- ・ 委員会は10名以内の委員をもって組織する。委員は研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。
- ・ 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は前任者の任期とする。
- ・ 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- ・ 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。
- ・ 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

平成26年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成26年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行う。研究所が作成した、平成26年度の計画及びその実施状況が記入された「26年度業務の実績報告書」（「研究系・センターの実績」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証。

平成26年度業務の実績にかかる外部評価委員会開催状況

○平成26年度外部評価委員会（第2回）

2015年1月31日 16:45～17:30（学術総合センター）

議事

1. 前回議事概要（案）確認

2. 平成 26 年度業務の実績に関する評価について
 - ・ 共同研究プロジェクト
 - ・ 研究系・センターの実績
3. その他（報告）
 - ・ 平成 25 年度業務の実績に関する外部評価委員会からの指摘事項への対応について
 - ・ 人間文化研究機構の平成 25 年度に係る業務の実績に関する評価結果について

○平成 27 年度外部評価委員会（第 1 回）

2015 年 5 月 25 日 10:00～13:00（トラストシティカンファレンス・丸の内）
議事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 26 年度研究系・センターの研究活動に関する評価結果の確認について
3. 平成 26 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果の確認について
4. その他

共同研究プロジェクトの評価

- ・ 基幹型共同研究プロジェクト

各プロジェクトリーダーが作成した「自己点検報告書」に基づいて、外部評価委員会委員による
書面審査を行った。

3 広報

○国語研 Web サイト <http://www.ninjal.ac.jp/>

各種催し物、データベース等、国語研の最新情報からこれまでに蓄積された研究成果まで、幅広い
コンテンツを紹介

○国立国語研究所要覧 2014/2015

国語研の特色や研究系・センターの活動、共同研究プロジェクト等の紹介冊子

○国立国語研究所リーフレット 2014/2015

○NINJAL 英文リーフレット

○国語研からの御案内（メールマガジン）

シンポジウム、コロキウム等のイベント、データベース紹介、職員公募など国語研からお知らせ
したい事項について登録者に発信している。月 2 回発行。

4 所長賞

功績顕著な職員に対し、所長からその功績をたたえ表彰を行い、研究所の活性化に資することを目
的とするもので、学術上の功績および研究支援業務等で優れた功績があったと認められる者を対象と
し、原則として年 2 回行う。

○第 9 回所長賞：2014 年度前期（2014 年 4 月 1 日～2014 年 9 月 30 日）

- ・野田尚史（日本語教育研究・情報センター教授）

〈著書〉

『日本語の配慮表現の多様性』野田尚史・高山善行・小林 隆（共編）を2014年6月15日にくろしお出版より刊行。「配慮表現」を多角的に研究し、配慮表現の多様性を追求した成果となった。

- ・河瀬彰宏（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）

〈Bursary Award（若手研究奨励賞）〉

Digital Humanities 2014における口頭発表のうち特に優れていると認められる発表に対して授与されるBursary Award（若手研究奨励賞）を“Problems in Encoding Documents of Early Modern Japanese”により受賞した。（2014年7月11日）

- ・加藤 祥（コーパス開発センタープロジェクトPDフェロー）

〈論文〉

言語処理学会誌『自然言語処理』に、論文「『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に対する時間情報表現・事象表現間の時間的順序関係アノテーション」（保田 祥 筆頭著者、小西 光、浅原正幸、今田水穂、前川喜久雄と共著）が掲載された。20（5）pp.657-681. 2013.12.

- ・市村太郎（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）

〈論文〉

『日本語の研究』に、論文「副詞「ほんに」をめぐる一「ほん」とその周辺一」が掲載された。10（2）pp.1-15. 2014.4.

- ・池上 尚（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）

〈論文〉

『日本語の研究』に、「水クサイの意味変化—水っほいととの共存過程から考える—」が掲載された。10（2）pp.33-48. 2014.4.

○第10回所長賞：2014年度後期（2014年10月1日～2015年3月31日）

〈特別所長賞〉

- ・窪蘭晴夫（理論・構造研究系教授）

業績：*Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (De Gruyter Mouton) の編集・出版

理由：世界的に定評のある学術出版社による著書・編書の国際出版

〈所長賞〉

- ・Timothy Vance（理論・構造研究系教授）

- ・儀利古幹雄（大阪大学大学院言語文化研究科 助教，元・理論・構造研究系 プロジェクトPDフェロー）

- ・長屋尚典（東京外国語大学講師，元・言語対照研究系プロジェクトPDフェロー）

- ・竹村亜紀子（フランス国立東洋言語文化研究所 講師，元・理論・構造研究系プロジェクトPDフェロー）

業績：英文論文集の編集 *Japanese/Korean Linguistics*, Vol22, CSLI 出版

理由：その他，所長が判断する学術的又は社会的な業績

〈若手研究者奨励賞〉

- ・銭谷真人（理論・構造研究系プロジェクト非常勤研究員）

業績：『『横浜毎日新聞』における仮名字体および仮名文字遣い —明治期の新聞における字体の統一について—』、『日本語の研究』，日本語学会，pp.48-66，2014年10月の出版

理由：日本を代表するピアレビュー誌に掲載された学術論文

- ・小西 光（コーパス開発センタープロジェクト非常勤研究員）
- ・今田水穂（文部科学省初等中等教育局教科書調査官，元・コーパス開発センタープロジェクト PD フェロー）
- ・加藤 祥（コーパス開発センタープロジェクト PD フェロー）

業績：“Archiving and Analysing Techniques of the Ultra-large-scale Web-based Corpus Project of NINJAL, Japan” M Asahara, K Maekawa, M Imada, S Kato, H Konishi (2014) *Alexandria* 25(1), pp.129-148

“BCCWJ-TimeBank: Temporal and Event Information Annotation on Japanese Text”, M.Asahara, S.Kato, H.Konishi, M.Imada, K.Maekawa (2014) *International Journal of Computational Linguistics and chinese Language Processing* 19(3), pp.1-24

理由：評価の高い国際的ジャーナルに掲載された論文

- ・志波彩子（名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授，元・時空間変異研究系プロジェクト非常勤研究員）

業績：『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』（和泉書院，2015 年）の出版

理由：博士論文（ないしその改訂版）等，単著の出版

5 研究教育職員の異動（2014 年度中の異動者）

2014.9.30	特任准教授	浅原正幸	退職
2014.10.1	准教授	浅原正幸	採用
2015.3.31	准教授	宇佐美洋	辞職
2015.3.31	特任助教	竹田晃子	任期満了



外部評価報告書

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

平成 26 年度業務の実績に関する外部評価報告書

国立国語研究所 外部評価委員会

平成 27 年 6 月 15 日

はじめに

言語は、社会におけるコミュニケーションの道具としての機能と、思考・論理・認知・創造性など人間の知的活動の基盤としての機能を併せ持っています。現在私たちが使っているような高度な体系としての言語はヒト（ホモサピエンス）のみに固有の特性であると考えられていることから、言語の本質を解明することは、人間そのものの本質を明らかにすることにつながります。そのような観点から、国立国語研究所は、言語の研究を通して人間文化に関する理解と洞察を深めるとともに、研究成果や関連する研究文献情報を広く発信・提供することで研究者コミュニティ、大学および一般社会に多様な寄与することを目的としています。昭和 23（1948）年に創設されてから平成 21（2009）年 9 月までは、もっぱら、日本国民が用いる「国語」としての観点から日本語の研究を進め、語彙の計量的研究や方言調査、外来語や医療用語の言い換え、話し言葉コーパスなどの成果により社会に貢献しました。平成 21（2009）年 10 月 1 日に大学共同利用機関法人人間文化研究機構に移行してからは、国際連携と社会貢献の 2 つを旗印として、ウチから見た「国語」としての従来の観点に、世界に現存する約 6,000 言語のひとつとしてソトから見た「日本語」の観点を加え、日本語および外国人に対する日本語教育に関する大規模な共同研究を全国的・国際的に展開しています。

このたび平成 26（2014）年度の業務全般について、外部評価委員会による評価を実施しました。8 名の外部有識者・専門家で構成される外部評価委員会には、基幹的な共同研究を行っている理論・構造研究系、時空間変異研究系、言語資源研究系、言語対照研究系、日本語教育研究・情報センター、コーパス開発センターの 6 つの研究組織における研究活動を学術的観点から評価いただくとともに、国際化、情報発信、社会貢献、組織運営、管理業務など研究所の活動全般についても、所内の自己点検・評価に基づいて外部評価をしていただくよう依頼しました。その結果が本報告書にまとめられました。いずれの項目も、高い評価をいただいた部分と、改善を要すると指摘された部分があります。平成 26 年度は「ミッションの再定義」を行い、現在は第 3 期中期目標・中期計画期間に向けてミッションの確認と中期計画の確定の最終段階にあります。本研究所の教職員は、この報告書で示された評価結果を真摯に受け止め PDCA サイクルに活かすとともに、一層手綱を引き締めて第 2 期中期目標・中期計画期間の成果を充実させるよう精励する所存です。外部評価委員の皆様の多大な御尽力に対して、心から御礼を申し上げます。

平成 27 年 6 月
国立国語研究所長
影山 太郎

目 次

1. 評価結果報告書	1
1. 平成 26 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果.....	2
2. 平成 26 年度「組織・運営」及び「管理業務」に関する評価結果	35
2. 資料	49
1. 国立国語研究所外部評価委員名簿	50
2. 国立国語研究所平成 26 年度業務の実績に関する評価の実施について	51
3. 基幹型共同研究プロジェクト一覧	52
4. 国立国語研究所外部評価委員会規程	53
5. 国立国語研究所平成 26 年度外部評価委員会（第 2 回）	55
国立国語研究所平成 27 年度外部評価委員会（第 1 回）	56

1. 評価結果報告書

平成 26 年度の国立国語研究所の外部評価を次のように実施しました。

平成 27 年 1 月 31 日 国立国語研究所平成 26 年度外部評価委員会（第 2 回）

平成 27 年 5 月 25 日 国立国語研究所平成 27 年度外部評価委員会（第 1 回）

その結果を以下の通り報告します。

外部評価委員会

委員長 樺山 紘一

平成 26 年度「研究系・センターの研究活動」に関する評価結果

平成 26 年度国立国語研究所の研究活動について 8 名の外部評価委員が審査した評価結果を以下に述べる。本研究所の研究活動は 4 研究系・2 センター、すなわち理論・構造研究系、時空間変異研究系、言語資源研究系、言語対照研究系および日本語教育研究・情報センター、コーパス開発センターで行われ、それぞれ「日本語レキシコンの総合的研究」「日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化」「現代語および歴史コーパスの構築と応用」「世界の諸言語から見た日本語の言語類型論的特質の解明」「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」などの総合的研究テーマのもとに、基幹型共同研究プロジェクトを実施している。各研究系・センターによる自己点検評価報告書および外部公開資料に基づいて、(1) 共同研究の推進、(2) 研究実施体制、(3) 共同利用の推進、(4) 国際化、(5) 研究成果の発信と社会貢献、(6) 若手研究者育成の 6 項目についての評価を基に総合的に評価した。

その結果総合的な観点から、理論・構造研究系、コーパス開発センターについては、「計画を上回って実施した」と判断し、時空間変異研究系、言語資源研究系、言語対照研究系、日本語教育研究・情報センターについては、「計画どおりに実施した」との評価とした。第 2 期中期目標・中期計画の最終年度を次年度に控えていることを念頭において、(1) から (6) までの各項目評価の概要を以下に述べる。

(1) 共同研究の推進については 4 研究系、2 センターのすべてのプロジェクトが平成 26 年度の計画を十分達成していると評価する。各研究系長・センター長のリーダーシップにより、研究所内での連携および他の国内外の研究機関との共同研究を実施し、中でも「理論・構造研究系」は、国内外の高度な研究機関との共同研究により、特に海外に対して日本語研究の意義を示したことが評価される。

(2) 研究実施体制については、専任の教員 27 名で研究を推進している。さらに客員教員、他機関の共同研究者、ポスドク、多数の非常勤研究員を擁している。専任の教員については、男性教員 20 : 女性教員 7 という男女比となり、国内研究機関の中では平均的であるが、今後の教員人事ではさらなる女性登用にも配慮されたい。また学位については現在約 8 割が取得している。在職中に取得した教員も多く、これは本人の努力に加えて組織の支援体制の貢献が大であると思われる。また、各系でそれぞれ国内外の卓越した研究機関と共同研究体制を構築するとともに、精選された共同研究者を擁して、活発な研究活動を行っている点も評価に値する。

(3) 共同利用の推進については、言語資源研究系とコーパス開発センターが中心になって開発した現代日本語書き言葉均衡コーパスに続き、通時コーパスの開発が進み、話し言葉コーパスを含めた複数のコーパスが国内外で認知され、研究利用が拡大してきていることは評価に値する。さらに言語資源研究系のみならず、理論・構造研究系、言語対照研究系、時空間変異研究系、日本語教育研究・情報センターにおいてもコーパスを含む研究成果のデータがいっそう整備され、社会に広く利用されることが期待される。

(4) 国際化については、海外の組織との研究交流が活発に行われ、日本語研究を国際的な場で展開していく基礎を固めつつあると認められる。特に理論・構造研究系、言語対照研究系、日本語教育研究・情報センターによる国際会議には海外からの多数の参加者があり、研究交流を深めた。また、言語資源研究系を中心に、通時コーパス構築において、この分野において先行している海外の大学と共同研究体制で研究を進めていることも評価できる。これらの結果として多数の研究論文が欧米の出版社から刊行されており、研究の国際化の推進が認められる。

(5) 研究成果の発信と社会貢献については、昨年に引き続いて様々な分野の日本語研究の存在を英語に

よって海外に紹介したことが高く評価できる。言語資源研究系において現代日本語に続く通時コーパスの開発が進み、学術資料・情報のインターネットを通しての提供、商業誌における特集号の編集・執筆により、一般社会への啓蒙的発信の効果があつたと認められる。また日本語教育研究・情報センターによる国内に在住する非母語話者に対する言語適応調査に基づく提言は今日の日本社会に対する重要な貢献といえる。さらに各研究系による学童・生徒・学生に向けての言葉に関する授業や啓蒙的な催しは日本語に対する関心を喚起するとともに、ひいては将来の研究者育成に向けての教育活動として有益な社会的貢献であると認められる。

(6) 若手研究者育成については、大学院との連携などによる指導体制への努力を評価するとともに、現時点で可能なポストクの受け入れにおいて研究環境の整備と積極的な指導が認められる。また、研究系間の合同研究会開催が活発に行われた中で、特に「コーパス日本語学ワークショップ」の継続的な開催は、若手の研究者の育成の場になっている。その結果として、ポストク研究員が研究所内外の研究賞を複数受賞しており、優れた指導の成果として高く評価できる。

以上の各項目の評価から次のように総括する。

国立国語研究所は、第2期中期計画最終年度を次年度に控え、目標達成に向かって、着実に進んでいると評価する。研究組織および研究体制では、上記4研究系・2センター間での連携・融合が進展し、組織全体のバランスが調整され、いっそう有効に機能しつつある。これは組織内外との相互の共同研究活動が所長始め、各研究系長・センター長のリーダーシップにより積極的に行われ、刺激を与え合っていることによるところが大きい。例えば、時空間変異、言語対照、言語資源と日本語教育研究の交流は国語研における今後の研究の新しい方向性を提示した。これにより、次期中期計画における新しい組織形成の可能性が検討されることも期待できる。

国際化については、共同研究および国際会議における研究交流、海外での論文発表があるのみならず、専任教員およびポストクに多くの外国人研究者を採用しており、過去の日本語研究では得られなかった視点からの研究成果を挙げている。これらの国際化への努力と、英語による日本語研究シリーズ著作の刊行や、中国をはじめとする海外日本語教育機関との連携の推進等とがあいまって、世界に開かれた日本語研究の基礎を固めつつあるといえる。国語研は第二次世界大戦後まもなく設立され、戦後の国語政策のための資料提供、非母語話者のための日本語教育研究、消滅危機方言の記録・収集・分析という我が国にとって重要な研究調査を行ってきた経緯がある。今後の新旧世代交代を見据えて、従来の国語研が蓄積した貴重な研究成果を引き継ぎつつ、新分野の開拓を託することができる優秀な若手研究者の養成が重要な鍵となるであろう。そのためにも、若手研究者が研究時間と予算を担保される環境の整備および研究倫理を含む研究者育成の組織作りが課題となる。最終年度では、実り豊かな成果に加え、次期中期計画における目覚ましい飛躍に向かっての組織整備と研究内容の企画が望まれる。

担当：仁科 喜久子

各研究系・センターの評価

理論・構造研究系

研究系長：窪 蘭 晴夫

テーマ：日本語レキシコンの総合的研究

平成 26 年度の計画

「日本語レキシコンの総合的研究」を総合研究テーマとして、世界的に見て日本語に特徴的と思われる音声・音韻現象並びに語彙の形態的・意味的・文法的特性の整理・分析を行い、現代日本語のレキシコン（語彙）の諸相について理論・実証の両面から共同研究を推進する。

また、プロジェクト間の連携を図るために研究系合同の研究発表会を開催するとともに、他研究系との連携で国際会議を誘致・開催する。

平成 26 年度研究活動の実施状況

（１）共同研究の推進

次の４つの基幹型研究プロジェクトを軸として、第2期中期計画の研究成果の取りまとめのために下記①～⑥の共同研究を推進した。

- ・「日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性（略称：日本語レキシコン）」（リーダー：影山 太郎）
- ・「日本語レキシコンの音韻特性（略称：語彙の音韻特性）」（リーダー：窪 蘭 晴夫）
- ・「文字環境のモデル化と社会言語科学への応用（略称：文字と社会言語学）」（リーダー：横山 詔一）
- ・「日本語レキシコン—連濁事典の編纂（略称：連濁事典）」（リーダー：ティモシー・バンス）

①共同研究発表会の開催：４つの基幹型共同研究で計６回の研究発表会（合計 25 件の発表、延べ 280 名の参加者）を開催し、あわせて若手研究者に研究発表の場と発表旅費を提供した。

②理論・構造研究系合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会（レキシコン・フェスタ 3）を開催した（平成 27 年 2 月 1 日、於国語研）。今年度は客員教授の宮川繁氏 [MIT, 東京大学]による基調講演および５件の口頭発表、18 件のポスター発表により、研究系の研究成果を研究者コミュニティに向けて発信し、あわせてプロジェクト間の連携を図った。共同研究員以外の参加者も多く、合計 71 名の参加が得られた。

③研究成果の取りまとめ：共同研究の成果としてプロジェクトごとに英文刊行物の編集作業を進めた（他の研究系・プロジェクトとの共同事業も一部含まれる）。

- ・ *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (Mouton 社)
- ・ *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (Mouton 社)
- ・ *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Mouton 社)
- ・ *Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (Oxford University Press)（以上、「日本語レキシコン」）
- ・ *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (Mouton 社, 2015.2)

- ・ *Tonal Change and Neutralization* (Mouton 社)
- ・ *Aspects of Geminate Consonants* (Oxford University Press) (以上「語彙の音韻特性」)
- ・ *Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds* (Mouton 社) (「連濁事典」)。

④国際シンポジウムの開催：本研究系が中心となって次の2つの国際会議を NINJAL 国際シンポジウムとして誘致・開催した。

- ・ FAJL 7 (7th Meeting of Formal Approaches to Japanese Linguistics)：言語対照研究系と連携し国際基督教大学との共催により，FAJL 7 (2014.6.25-27, 於国語研&国際基督教大学)を開催し，3日間で延べ 229 名の参加者を得た。

- ・ LabPhon 14：「語彙の音韻特性」と「連濁事典」の2プロジェクトが他のプロジェクトの協力を得て実験音韻論の国際会議 LabPhon 14 (14th International Conference on Laboratory Phonology)を平成 26 年 7 月 25 日～27 日の3日間開催し，またその前後にサテライト講演会・ワークショップ (7 月 24 日，28 日)を開催・誘致した。本会議では世界 20 カ国から合計 264 名 (3日間で延べ 792 名)の参加を得て，研究発表総数 147 件 (国内研究者 11 件，海外 136 件)の報告があった (この会議の成果は国際誌 *Laboratory Phonology* の特集号として編集中である)。

⑤ビューアの拡張開発と研究資源共有化：文献資料の共同利用を促進させるため，原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発を進めた。その結果，米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文が人間文化機構本部の研究資源共有化統合検索システム (nihuINT) に参加することになり，年度内 (平成 27 年 3 月末)に公開した (「文字と社会言語学」)。

⑥研究者の受け入れ：5名の客員教授 (国内2名，海外3名)に加え，外来研究員5名 (国内1名，海外4名)と特別共同利用研究員1名 (海外)を受け入れ，共同研究を行った。

(2) 研究実施体制

①研究組織：専任教員6名 (教授3名，准教授2名，助教1名)，PD フェロー2名を中心に，客員教員5名 (うち新任1名)，非常勤研究員4名 (うち新任3名)，外来研究員5名 (全員新任)，特別共同利用研究員1名 (新任)，プロジェクト共同研究員 (合計 132 名)の陣容で研究を推進した。

②採用人事：機構長裁量経費等の予算による特任助教の採用人事を進め，平成 27 年 4 月から2名 (理論言語学1名，日本語史1名)の着任が内定した。

③外部組織との連携：共同研究発表会やデータベース作成，国際文字コード標準化活動等の事業を国内学会 (日本言語学会，日本音声学会)や国内外の研究機関 (Max Planck 進化人類学研究所，情報処理推進機構国際標準推進センター，東京大学史料編纂所)と合同して行い，研究所外の研究組織・学会とのさらなる連携を図った。また，プロジェクトごとに科研費や人間文化研究機構連携研究の予算と組み合わせて事業を実施し，経費の有効利用を図った。

(3) 共同利用の推進

①共同研究発表会および出版物等の公開：共同研究発表会を公開し，プロジェクトメンバー (共同研究員) 以外の研究者にも参加および発表の機会を提供した。また複数のデータベースと論文集を公開・公刊した (下記 (5) ③④)。

②研究文献リストの更新：プロジェクトごとに作成・公開している研究文献リスト (複合動詞，アクセ

ント、促音他)を増補更新した(「日本語レキシコン」「語彙の音韻特性」)。

- ③文献資料の共同利用：原本画像と翻字本文を対照表示させるビューアの拡張開発を推進し、米国議会図書館本『源氏物語』写本のほか研究所貴重書(文字資料)の公開に利用した(「文字と社会言語学」)。

(4) 国際化

- ①国際シンポジウムの開催：NINJAL国際シンポジウムとして、本研究系が中心となって上述のFAJL 7 (7th Meeting of Formal Approaches to Japanese Linguistics, 2014.6.25-27, 国際基督教大学との共催、於国語研&国際基督教大学)とLabPhon 14 (14th International Conference on Laboratory Phonology, 2014.7.25-27, 於国語研)を開催し、いずれも世界各国から多数の参加を得た(前述(1)④)。

- ②研究成果の国際発信：

- ・ *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (Mouton社, 全19章, 800余頁)(「語彙の音韻特性」)
- ・ *Proceedings of the 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference* (CSLI)(「連濁事典」)

- ③英語による論文集の編集作業(前述(1)③)

- ④海外学会・研究機関等における招待講演等：

- ・ The 4th International Symposium on Tonal Aspects of Languages (オランダ, 窪蘭)
- ・ International Workshop on Word Stress and Accent(オランダ, 窪蘭)
- ・ World Script Symposia 2014 (韓国, 高田)
- ・ 東アジア史料研究編纂機関協議会国際学術会議(韓国, 高田)
- ・ 日台アジア未来フォーラム(台湾, 横山)。

- ⑤海外研究者の受け入れ：3名の客員教授(いずれも米国, うち1名は新任)に加え、外来研究員4名(アメリカ2名, 韓国1名, カナダ1名)と特別共同利用研究員1名(オランダ)を新たに受け入れ、共同研究(研究指導)を行った。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ①研究成果合同発表会：前年度に引き続き公開の研究成果合同発表会を開催し、71名の参加者を得た(平成27年2月1日, 於国語研)。今年度は統語論研究の第一人者である宮川繁氏[MIT, 東京大学]を基調講演者として迎え、「レキシコン・フェスタ3」と題して開催した(前述(1)②)。

- ②研究会・シンポジウム等の情報発信：共同研究発表会・シンポジウム開催に際しては、研究所ホームページや各プロジェクトホームページ、メールマガジンでの広報に加え、開催通知案内を諸学会・研究会のメーリングリストに流して、開催情報を広く研究者コミュニティに伝えた。

- ③データベースの公開等：Rendaku Databaseを公開し(「連濁事典」), Valency Patterns Leipzig Online Databaseに日本語のデータを提供した(「日本語レキシコン」)。また、「上代語連濁データベース」(「連濁事典」), 甕島方言アクセントデータベース(「語彙の音韻特性」)を仮(内部)公開した。

- ④論文集の刊行：

- ・ Haruo Kubozono (ed.) *The Handbook of Japanese Phonetics and Phonology* (Mouton 社, 2015.2, 「語彙の音韻特性」)
- ・ *Proceedings of the 22nd Japanese/Korean Linguistics Conference* (CSLI, 2015.3, 「連濁事典」)

⑤**論文集の編集**：プロジェクトごとに次の刊行物（論文集）について編集作業を進めた（他の研究系・プロジェクトとの共同事業も一部含まれる）。

- ・ *The Handbook of Japanese Lexicon and Word Formation* (Mouton 社)
- ・ *Transitivity and Valency Alternations: Studies on Japanese and Beyond* (Mouton 社)
- ・ *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics* (Mouton 社)
- ・ *Verb-Verb Complexes in Asian Languages* (Oxford University Press) (以上、「日本語レキシコン」)
- ・ *Tonal Change and Neutralization* (Mouton 社)
- ・ *Aspects of Geminate Consonants* (Oxford University Press) (以上、「語彙の音韻特性」)
- ・『連濁研究ハンドブック』(出版社未定)
- ・ *Perspectives on Rendaku: Sequential Voicing in Japanese Compounds* (Mouton 社) (以上、「連濁事典」)。

⑥**一般向けの成果発信**：

- ・ NINJAL フォーラム「世界の漢字教育」
- ・ NINJAL セミナー「漢文を日本語で読む」(以上「文字と社会言語学」)
- ・ 済美高校講演会「言葉を学ぶということ」(窪菌)
- ・ 立川市講演会「立川の方言」(三井)

(6) 若手研究者育成

①**PD フェロー**：2名のPDフェローを雇用し（うち1名は新規），研究費の援助やサロン等での発表指導，国際シンポジウムの開催指導，科研費申請時の指導等を通じてその育成に努めた（「語彙の音韻特性」「連濁事典」）。2名のうち1名は，平成27年4月から私立大学の専任教員としての採用が内定した。

②**発表の機会提供**：各プロジェクトが主催した研究発表会および研究系合同発表会において，多数の若手研究者（大学院生および非常勤）に発表の機会を提供し，また旅費の支援を行った。

③**旅費支援**：日本語アクセントの研究を行っている各地の若手研究者（大学院生，延べ4名）に対して調査旅費，成果発表旅費の支援を行った（「語彙の音韻特性」）。

④**参加支援**：国際シンポジウム LabPhon 14において国内外からの若手発表者32名に旅費支援を行った。また日本全国の大学院生にアルバイト募集の呼びかけを行い，合計15名の大学院生に参加のための支援を行った。

⑤**特別共同利用研究員**：オランダ・ユトレヒト大学の大学院生を1名，特別共同利用研究員として受け入れ，研究指導を行った。

自己点検評価	計画を上回って実施した。
--------	--------------

平成 26 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

「日本語レキシコンの総合的研究」という総合研究テーマのもとで、4つの基幹型研究プロジェクトがたてられ、これらが有機的に組織されている。プロジェクト相互の連携および他の研究系との連携も図りながら、各プロジェクトの特徴を生かした研究が進められ、日本語の音韻特性、文法的・意味的・形態的特性、文字環境のモデル化、連濁事典の編纂など、日本語レキシコンの諸相について多面的な成果があげられている。また、外部予算の獲得により経費の有効利用が図られている点も評価できる。平成 27 年 4 月に特任助教 2 名が着任予定とのことで、あらたな研究実施体制の下での成果が期待できる。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

4つの基幹型研究プロジェクトを軸とした共同研究として、①各プロジェクトによる研究成果発表会を開催し、②研究系の合同による研究発表会を行ったほか、③国際シンポジウムを開催することにより、共同研究が計画にもとづき順調に行なわれている。これらの研究集会にそれぞれ国内外から多数の参加があったことは、本研究系の研究テーマに対する研究者コミュニティの関心および研究水準の高さを示すものとして、高く評価できる。国内外の優れた研究者を受け入れて共同研究を行なったことがこれらの成果につながったものと思われる。

また、共同研究発表会やデータベース作成等の事業を国内学会（日本言語学会、日本音声学会）や国内外の研究機関（Max Planck 進化人類学研究所、東京大学史料編纂所、等）と合同して行うことにより、外部組織との連携も積極的に図られている。それぞれの研究プロジェクトにおいてデータベースの作成と仮公開等がなされ、たとえば複合動詞レキシコンのオンラインデータベースに対して世界各地からアクセスがあったことは、研究内容の興味深さと水準の高さをうかがわせる。さらに、プロジェクトごとに作成されている研究文献リスト（複合動詞、アクセント、促音、等）の更新と公開を行っていることも共同利用の広がりにも貢献している。

以上のような研究活動は、国語研に求められる共同研究・共同利用の推進へのとりくみとして理想的なあり方のひとつであり、非常に高く評価される。

（２）研究成果の発信と社会貢献

研究プロジェクトの成果を専門書や論文集などとして刊行することにより、研究成果を広く発信している。英文による図書、論文集が海外の著名な言語学専門出版社（Mouton 社等）から刊行されていることは、研究水準の高さを示すものであるとともに、研究成果の国際的な発信という点で評価される。合同発表会やシンポジウムの開催について多様な媒体での広報が工夫されていることは、多くの参加者の参加を促したと思われる。

これらの他、海外の学会や研究機関等における招待講演等実績を上げている点も重要な成果である。さらに加えれば、英文日本語研究ハンドブックシリーズの意義などを広く理解してもらう工夫をするなど、一般向けへの成果発信にも力を入れることが望ましい。

（３）若手研究者の育成

研究発表会および研究系合同発表会において、多数の大学院生および若手研究者に発表の機会を提供し、また調査旅費や成果発表旅費、さらにシンポジウム参加旅費の支援も行うなど、多面的にきめ細かい指導をすることで若手研究者の育成を図っている点が評価される。海外（オランダ）の大学院生を特別研究員として受け入れたことは、他の若手研究者にとってよい刺激になったことと思われる。

時空間変異研究系

研究系長：木部 暢子

テーマ：日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化

平成 26 年度の計画

「日本語の地理的・社会的変異及び歴史的变化」を総合研究テーマとして、消滅危機方言の調査研究、方言分布の解明、現代日本語の動態研究、大規模経年調査のデータ分析、日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究を実施する。消滅危機方言では、琉球・八丈に加え、新たに本土の消滅危機方言の調査研究を行う。

また、プロジェクト間の連携を図るために、合同研究発表会を開催する。

平成 26 年度研究活動の実施状況

（１）共同研究の推進

今年度の実施プロジェクトは以下の５つで、いずれも基幹型共同研究プロジェクトである。

「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究（略称：危機方言）」（代表者：木部暢子）

「方言の形成過程解明のための全国方言調査（略称：方言分布）」（代表者：大西拓一郎）

「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明（略称：現代日本語の動態）」（代表者：相澤正夫）

「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究（略称：大規模経年調査）」（代表者：井上史雄）

「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究（略称：日本語疑問文）」（代表者：金水敏）

以上のプロジェクトにより、以下の共同研究を推進した。

- ①フィールド調査の実施：「危機方言」では、本土方言に調査対象を広げ、島根県出雲方言の合同調査、宮崎県椎葉村方言の合同調査を実施した。「方言分布」では、今年度までに 549 地点の調査を終えた。
- ②データベースの整備と公開：各プロジェクトとも、データの整備、公開を行った。「危機言語」では奄美・沖縄方言の音声データの整備と公開、「方言分布」では『方言文法全国地図』のデータ及び地図画像の改善、「現代日本語の動態」では『大正・昭和前期演説集～SP 盤レコード音源より～（仮題）』の出版企画、「大規模経年調査」では大規模経年調査に関する 11 のデータの公開、「日本語疑問文」では「中近世・近代日本語疑問文のデータベース」の整備を実施した（詳細については「（５）研究成果の発信と社会貢献」を参照）。
- ③共同研究発表会の開催：各プロジェクトで共同研究発表会を開催した。開催回数は、「危機方言」３回、「方言分布」３回、「現代日本語の動態」１回、「大規模経年調査」２回、「日本語疑問文」３回である。
- ④時空間変異研究系の合同研究発表会 JLVC 2015 の開催：平成 27 年 3 月 7 日（土）に国語研講堂において JLVC 2015 を開催した。（詳細については「（３）共同利用の推進」を参照）

（２）研究実施体制

- ①系の研究組織：専任教員は、教授 3 名、准教授 4 名、特任助教 1 名、プロジェクト非常勤研究員は、9 名。プロジェクト非常勤研究員の所属プロジェクトは次のとおりである。「危機方言」２名、「現代日本語の動態」１名、「大規模経年調査」４名、「日本語疑問文」２名（１名は平成 27 年 1 月新規採用）

②共同研究員の増員：各プロジェクトの共同研究員は、「危機方言」33名、「方言分布」48名、「現代日本語の動態」17名、「大規模経年調査」24名、「日本語疑問文」13名である。研究成果のとりまとめ・公刊に向け、「危機方言」では2名、「方言分布」では1名の共同研究員を増員した。

（３）共同利用の推進

①フィールド調査の実施：

- ・「危機方言」では、今年度から危機方言の調査対象地域を本土に広げ、島根県出雲方言の合同調査（平成26年8月）、宮崎県椎葉村方言の合同調査（平成26年9月、平成27年3月）を実施した。また、鹿児島県与論島（平成27年2月）、沖永良部島（平成27年3月）において、方言の継承活動に関する実態調査を行った。
- ・「方言分布」では、549地点の調査を終え、調査結果のデータベースを完成させた。

②共同研究発表会の開催：各プロジェクトでは以下のとおり研究発表会を開催した。

- ・「危機方言」：平成26年9月13・14日「形容詞の記述と問題点」（科研費A「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」と共催）（於国語研講堂）。平成26年12月6・7日 合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーションー会話・方言・学習者・歴史コーパスからー」（国語研共同研究プロジェクト「多文化共生社会における日本語教育研究」，科研費A「海外連携による日本語学習者コーパスの構築ー研究と構築の有機的な繋がりに基づいてー」，科研費B「方言話し言葉コーパスの構築とコーパスを使った方言分析に関する研究」と共催。また、国語研のコーパス関係プロジェクトと連携）（於国語研講堂）。平成27年3月『日本言語地図』データベースに関する研究会（ワークショップ）（於東北大学）。
- ・「方言分布」：平成26年7月6日 公開研究発表会（於国語研多目的室）。平成26年11月29・30日「言語地理学フォーラム」：（於富山大学人文学部）。平成27年3月8日「言語地理学フォーラム」（於国語研多目的室）。
- ・「現代日本語の動態」：平成27年1月24日 研究発表会（於国語研多目的室）。
- ・「大規模経年調査」：平成26年12月20日 研究発表会（於岡崎市図書館交流プラザ りぶら）。平成27年3月8日研究発表会（於国語研セミナー室）
- ・「日本語疑問文」：平成26年6月21・22日 研究発表会（於国語研多目的室）。平成26年12月6・7日 研究発表会（於大阪大学文法経研究講義棟 文11教室）。平成27年3月15日 研究発表会（於国語研多目的室）

③時空間変異研究系の合同発表会 JLVC 2015 の開催：平成27年3月7日（土）に国語研講堂において JLVC 2015 を開催した。テーマは「日本語データの整備と活用」で、各プロジェクトの発表5件に加え、2名の指定討論者（荻野綱男氏（日本大学）、石田基広氏（徳島大学））を迎えてディスカッションを行った。また、公募によるポスター発表5件を行った。

（４）国際化

①海外の研究者との連携：フランス、ニュージーランドの研究者が「危機方言」の調査や「危機言語・方言サミット」に参加した。「日本語疑問文」では、Oxford大学、ハワイ大学の研究者と共同研究の打合せを進めつつある。

②海外への研究成果の発信：以下の国際学会、国際会議で発表を行った。

- ・ The 2nd International Conference on Asian Geolinguistics, Chulalongkorn University, Bangkok. Thailand, 2014.5. (大西)
- ・ Methods XV, University of Groningen, Netherlands (Netherlands), August 2014. (大西, 熊谷)
- ・ NWAV Asia-Pacific 3, Victoria University of Wellington, New Zealand, May 2014. (南部・朝日)
- ・ Sociolinguistics Symposium 20, Jyväskylä, Finland, 2014.6. (朝日)
- ・ The 4th International Symposium on Tonal Aspects of Languages, Radboud University Nijmegen, Netherlands, 2014.5.13-16. 招待 (窪蘭)
- ・ 第5回中国言語経済学会, 揚州大学, 平成26年11月 (井上史雄)。
- ・ 韓国日本語学会 第30回 秋季大会, カトリック大学聖心キャンパス (韓国), 平成26年9月 (井上史雄)。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

①データベースの整備と公開：各プロジェクトでは、以下にあげるデータの整備、公開を行った。

- ・「沖縄県本部町瀬底方言の自然談話」(方言音声, 方言テキスト, 共通語訳), 「鹿児島県喜界島方言の基礎語彙」(方言音声, IPA表記, 仮名表記) (<http://kikigengo.sakura.ne.jp/>)。
- ・「鹿児島県与論島方言・沖永良部島方言の基礎語彙」(IPA表記, 仮名表記) (平成27年3月公開)。
- ・「方言コーパス」の試作版 (6地点の談話データによるコーパス) (未公開)。
- ・『日本言語地図』データベース (<http://www.lajdb.org>)。
- ・『方言文法全国地図』のデータ及び地図画像の改善 (http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html)。
- ・金澤裕之・相澤正夫編『大正・昭和前期演説集～SP盤レコード音源より～(仮題)』(日外アソシエーツ)の出版準備。
- ・大規模経年調査に関する11のデータを公開 (<http://keinen.info/download.html>)。
- ・竹村明日香「中近世・近代日本語疑問文のデータベース」の公開準備 (平成27年度公開予定)。

②図書・論文等：各プロジェクトとも積極的に成果を発表した。主なものを以下にあげる。

<図書>

- ・金水敏・田中ゆかり・岡室美奈子編『ドラマと方言の新しい関係－『カーネーション』から『八重の桜』, そして『あまちゃん』へ－』, 103p, 東京：笠間書院, 2014.
- ・青木博史・小柳智一・高山善行編『日本語文法史研究2』, 288p, 東京：ひつじ書房, 2014.

<論文>

- ・朝日祥之・尾崎喜光「北海道における方言使用の現状と実時間変化(その3)－音韻・アクセント項目からみる－」, 『北海道方言研究会会報』91, pp.55-68, 査読なし, 2014.12.
- ・南部智史・朝日祥之・相澤正夫「ガ行鼻音の衰退過程とその要因について－札幌と富良野の言語調査データを利用して－」『国立国語研究所論集』7, pp.167-185, 査読あり, 2014.5.
- ・大西拓一郎「言語地理学と方言圏論, 方言区画論」『柳田方言学の現代的意義』, pp.145-161, 東京：ひつじ書房, 査読なし, 2014.
- ・木部暢子「鹿児島方言の「イッ」と「イタッ」－テキストを使った方言研究の実践－」西日本国語国

文学会『西日本国語国文学』第1号, pp.1-14, 査読あり, 2014.

- ・ Nobuko Kibe and Kaori Otake, "Regional Differences in the Usage of 'Yes' and 'No' in Response to Negative Interrogatives in Japanese", *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*, pp.222-227, 査読なし, 2014.5.
- ・ 金水敏「講演要旨 日本語疑問文の問題点」『歴史言語学』第3号, pp. 97-104, 日本歴史言語学会, 査読なし, 2014.
- ・ 熊谷康雄, 「方言周圏論の発想とシミュレーションという方法, 小林隆編『柳田方言学の現代的意義: あいさつ表現と方言形成論』 pp.163-187, 東京: ひつじ書房, 査読なし, 2014.

③報告書:

- ・ 『危機言語・方言サミット in 八丈島』 2015.3
- ・ 『危機的な状況にある言語・方言の保存・継承に係る取組等の実態に関する調査研究(八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』 2015.3
- ・ 「宮崎県椎葉村方言語彙集」 2015.3

④プレスリリース: 「大規模経年調査」の鶴岡調査につき, 平成27年3月に文部科学省においてプレスリリースを行い, 広く国民一般に研究成果を発信した。

⑤一般向け講演会等の開催:

- ・ 平成26年8月20日「出雲方言公開講座/NINJAL セミナー 出雲方言のつどい」於出雲市くにびきホール。来場者数約200人。
- ・ 平成26年12月12日～14「危機方言サミット in 八丈島」於八丈町おじゃれホール。八丈町教育委員会, 文化庁と共催。参加者数延べ423人。

(6) 若手研究者育成

- ①若手研究者のフィールドワーク参加: 島根県出雲方言調査(平成26年8月17日～21日)に大学院生7人・日本学術振興会特別研究員3人が参加, 宮崎県椎葉村方言(平成26年9月1日～6日)に大学生7人, 日本学術振興会特別研究員1人が参加した。
- ②言語地図作成講習会の開催: 「ゼロからはじめる言語地図」を東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 LingDy2 テクニカルワークショップ(平成26年7月5日)と富山大学で開催した。参加者はそれぞれ, 30人, 29人。
- ③若手研究者の発表の場の提供: 系の合同研究発表会 JLVC2015 で若手研究者が公募によるポスター発表を行った。発表件数は5件である。
- ④日本学術振興会特別研究員の受け入れ: 日本学術振興会特別研究員3名を受け入れた。

自己点検評価	計画を上回って実施した。
--------	--------------

平成26年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した。

プロジェクトごとに目標の達成度に若干の高低があるが, 系全体としてはおおむね計画どおりに実施されている。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

プロジェクト間の連携を図るために JLVC2015 を開催したことは評価できるが、より一層の連携を図られたい。たとえば各プロジェクトが実施するデータの整備と公開など、現状ではプロジェクトごとに個別に行われているが、１回の合同研究発表会を開催するだけでなく、整備のしかたや公開の方法などをめぐってより詳細に議論する機会を設けるなど、協働できる余地があるように思われる。

（２）共同利用の推進

「危機方言」の各種科研プロジェクトとの共同研究は重要であり、評価できる。

（３）国際化

「方言分布」および「大規模経年調査」の国際的発信は評価できる。「危機方言」の調査研究はグローバルな課題であり、海外の研究機関等との積極的な連携が望まれる。また、本研究系が取り組んでいる課題はいずれも日本の研究が世界をリードするものであり、系全体が一丸となって、より一層の国際化を推進することを期待したい。

（４）研究成果の発信と社会貢献

「危機言語」と「大規模経年調査」のデータ公開、「危機方言」の啓蒙的発信や「危機方言サミット」の地元との共催は評価できる。後者は、一般の人々、特に地元の人々や研究協力者への研究の還元という観点からも意義が認められる。なお、研究発表等の場で、視覚、聴覚障害者への配慮と対策が必要と認識されたことは社会貢献のためにも重要であり、国語研全体の問題として検討されたい。

「方言コーパス」や「中近世・近代日本語疑問文のデータベース」、「大規模経年調査」の学問的価値を生かすためのモデルなどを広く社会に発信して、本研究系の調査、研究成果の活用をさらに促したいところである。

（５）若手研究者育成

フィールドワーク、講習会、ポスター発表、日本学術振興会特別研究員の受け入れなど、さまざまな側面で育成の努力がなされている点は、評価できる。しかし、基幹型共同研究プロジェクトの数からすると、もう少し多くの若手研究者に参加のチャンスが与えられてよいように思われる。また、数を増やすだけでなく、系全体として、プロジェクト横断的に、ことばの時空間両変異を視野に入れて研究を展開できる若手を育成するなど、若手育成のシステムを組織的に構築することも効果的であろう。

言語資源研究系

研究系長：前川 喜久雄

テーマ：現代語および歴史コーパスの構築と応用

平成 26 年度の計画

「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を総合研究テーマとして、「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの設計」の 3 件の共同研究を実施する。あわせて一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを開催するとともに共同研究の成果として、講座「日本語コーパス」の出版を継続する。

また、コーパス開発センターと連携して超大規模コーパスの構築を進める。

平成 26 年度研究活動の実施状況

（１）共同研究の推進

- ①「現代語および歴史コーパスの構築と応用」を系全体の総合研究テーマとして、「コーパス日本語学の創成（略称：創成）」（代表者：前川喜久雄）、「コーパスアノテーションの基礎研究（略称：アノテーション）」（代表者：前川喜久雄）、「通時コーパスの設計（略称：通時）」（代表者：田中牧郎）の 3 共同研究プロジェクトを実施している。
- ②コーパスの構築に関しては、研究系全員がコーパス開発センターに併任して、コーパス開発業務にも携わっている（詳しくはセンターの実績参照）。
- ③「創成」の活動の一環として、一般からも応募可能なコーパス日本語学の公開ワークショップを年 2 回開催している。今年度は第 6 回を平成 26 年 9 月に、平成 27 年 3 月に第 7 回を開催した。
- ④共同研究の成果の一部として、講座『日本語コーパス』（全 8 巻、朝倉書店）の出版を進めている。平成 26 年 12 月に第 2 巻『書き言葉コーパス』と第 6 巻『コーパスと日本語学』、平成 27 年 2 月に第 3 巻『話し言葉コーパス』を刊行した。

（２）研究実施体制

- ①公募により平成 26 年 10 月に准教授 1 名が着任した。
- ②所外の共同研究者数は「創成」が 36 名、「アノテーション」が 16 名、「通時」が 27 名である。「アノテーション」には主に自然言語処理領域の、「通時」には主に日本語史領域の、そして「創成」には日本語学全領域の研究者が参加している。
- ③基本的には 3 プロジェクトとも独立に年数回の研究会（公開または非公開）を開催しているが、年 2 回のコーパス日本語学ワークショップを研究発表の場として共有することで、3 プロジェクトのメンバー交流を実現している。
- ④「通時」では㈱小学館をはじめとする出版社と古典資料の著作権処理等について協力関係を構築している。
- ⑤音声関係では、国立情報学研究所と共同で音声言語資源に関するシンポジウムを開催するなど機関の枠をこえた言語資源開発の協力体制を模索した（下記(3)①参照）。
- ⑥大学共同利用機関への移管後 5 年間に言語資源研究系に属する研究者 4 名が博士号を取得したが、今

年度中にさらに1名が取得した。残る学位未取得者は1名であるが、来年度中に取得の予定である。

(3) 共同利用の推進

- ①「創成」では、コーパス日本語学ワークショップを開催することで、コーパス日本語学に関する成果発表と意見交換の場を一般に広く提供している。今年度は通算で66件の発表があり、ほぼ半分が一般（共同研究メンバー以外）からの応募であった。参加者数も異なりで180名（延べで250名）ほどを維持しているの、実質上の学会機能を提供できている。予稿集はPDF化してコーパス開発センターのホームページからダウンロードできる。
- ②新しい試みとして、国立情報学研究所の音声資源コンソーシアム(NII-SRC)と共同で第4回言語資源シンポジウム「音声言語資源の明日を考える」を企画し、第6回コーパス日本語学ワークショップのサテライトとして開催した。
- ③「アノテーション」で作成した各種アノテーションデータ（係り受け、述語項構造、動詞項構造、日本語フレームネット、拡張固有表現、時間表現、レル・ラレルの意味、述語境界、文体情報など）は、プロジェクト終了までにマニュアルとともに一般に公開する予定である。文節を単位とした係り受け、短単位を単位とした係り受け、レル・ラレルの意味アノテーション、文体情報については今年度末までに暫定公開版を公開する。
- ④「通時」で構築した『国民之友コーパス』を公開した。
- ⑤「通時」で構築した狂言データ（短単位）を『日本語歴史コーパス』に追加した。

(4) 国際化

- ①昨年度に『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の解析を研究テーマとするポスドクを2名海外から受け入れたが（スロベニアおよびイタリア。いずれも日本学術振興会による派遣）、今年度中に両名とも日本国内の大学（大阪大学および立命館大学）に常勤の職を得た。
- ②オックスフォード大学の大学院生2名を特別共同利用研究員として受け入れた。
- ③准教授1名を1年間オックスフォード大学に派遣した。
- ④台湾中央研究院と日本語および中国語の filled pause に関する共同研究を実施し、その成果を12月に中央研究院主催の研究会で発表した。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ①『講座日本語コーパス』シリーズの刊行を継続しており、今年度末までに8巻中4巻の刊行を終えた。
- ②言語処理学会の学会誌『自然言語処理』の特集号「コーパスアノテーション—新しい可能性と共有化にむけての試み—」(21巻1号)を企画編集し、刊行を終えた。査読論文9編から構成され、そのうち5編が共同研究メンバーによる論文である。
- ③日本音声学会の学会誌『音声研究』の特集「大規模コーパスを用いたデータ駆動型音声研究」(18巻1号)を企画編集し、刊行を終えた。査読論文6編すべてが共同研究メンバーによる論文であった。また18巻2号にも共同研究メンバーによる査読論文1編と研究ノート1編が掲載された。更に一般からの投稿論文で、18巻3号への掲載が決定している論文が1編あり、査読中の論文が2編ある。
- ④商業誌『日本語学』(明治書院)特集号「日本語史研究と歴史コーパス」(33巻14号)を企画編集し、

刊行を終えた。15編の論文中、9編が共同研究メンバーによる執筆である。

- ⑤「通時」関係の論文集刊行のために年度内に入稿した（近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』ひつじ書房、平成27年刊行予定）
- ⑥コーパス開発センターと連携して、『中納言』やChaKi.NET（茶器）の講習会を実施した。
- ⑦今年度の発表論文数は、「創成」が36編（国際誌査読有1編、国内査読有14編、国際会議予稿集9編、査読無12編）、「アノテーション」が19編（国際誌査読有2編、国内査読有8編、国際会議予稿集5編、査読無4編）、「通時」が36編（国内査読有2編、査読無34編）であった。3プロジェクトのいずれにおいても、論文発表数は増加している。また「アノテーション」では査読論文の件数が顕著に上昇した。

（6）若手研究者育成

- ①コーパス日本語学ワークショップは若手の発表の場としても機能している。毎回全体の1/3～1/2が大学院生や非常勤職にある若手研究者による発表である。
- ②海外からポスドクを2名受け入れている（上記（4）①・②参照）。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

平成26年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した。

《評価項目》

（1）共同研究の推進

「創成」、「アノテーション」、「通時」の3つの共同研究プロジェクトがバランスよく展開されており、高いレベルにおいて計画（目標）を着実に実施しているものと判断できる。

これらの3つのプロジェクトのうち2つのプロジェクトのリーダーを同じ研究者がつとめていること、研究系全員がコーパス開発センターに併任してコーパス開発業務に携わっていること、さらに「創成」が年2回開催するコーパス日本語学ワークショップを3プロジェクト間の研究発表の場として共有し、密接に交流していることなどによって、研究系全体の連携が十分になされている。「通時」におけるプロジェクトリーダーの引継も滞りなく行われた。

（2）共同利用の推進

「コーパス日本語学ワークショップ」は、一般からの成果発表や参加も多く集めており、学会に相当する機能を提供するという目的を十分に達成している。このほか、「アノテーション」で公開が準備されている各種アノテーションの追加はコーパスの利用価値を高めることにつながる。「通時」における『国民之友コーパス』の公開と狂言データの追加も、『近代語コーパス』および『日本語歴史コーパス』をより充実させるものであり、高く評価できる。

（３）研究成果の発信と社会貢献

『講座日本語コーパス』シリーズは年度内に３巻が刊行され、総論的な巻が出そろったことになる。論文発表も増加しており、「査読有」論文が多数ある。また、複数の学会誌での特集号の編集、次年度刊行予定の論文集の編集など、出版物の刊行も盛んである。『日本語学』誌の臨時増刊号によって通時コーパスの全体像と進行状況、研究事例を広く社会に知らせたことは、利用層の拡大にもつながる。同誌での連載記事も研究者の裾野を広げ、レベルを向上させる効果をもつ。

なお、歴史コーパスが充実することは新規利用者の増大につながることであり、各種アノテーションの追加は検索手段を複雑化させることになる。このようなコーパスの量的、質的な充実に伴って、マニュアルの整備やチュートリアル実施の必要性は一層高まることになる。このようなことも考慮に入れつつ、HPでの情報発信、研究成果を社会に発信するための取り組みを、系全体としてより一層推進するよう要望したい。

（４）若手研究者育成

「コーパス日本語学ワークショップ」は、研究所外の大学院生や非常勤職従事者の発表の場ともなっており、若手研究者の育成に貢献していることの意義も大きい。

言語対照研究系

研究系長：プラシャント・パルデシ

テーマ：世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明

平成 26 年度の計画

「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」を総合研究テーマとして、言語類型論的観点から見た述語構造、言語地域として捉えた東北アジア諸言語の比較研究を実施する。

また、プロジェクト間の連携を図るため合同の研究発表会を開催するとともに、他研究系との連携により国際会議を誘致・開催する。

平成 26 年度研究活動の実施状況

（１）共同研究の推進

①言語対照研究系では「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」を総合研究テーマとして、言語類型論的観点から見た述語構造、言語地域として捉えた東北アジア諸言語の比較研究を柱とする以下の２件の基幹型共同研究プロジェクトを実施している。

「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性（略称：述語構造）」（代表者：プラシャント・パルデシ）

「日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史的研究（略称：東北アジア言語地域）」（代表者：ホイットマン・ジョン）

②論文集の編集（以下、詳細は（５）研究成果の発信と社会貢献を参照）

- ・「述語構造」プロジェクト：国内出版，海外出版
- ・「東北アジア言語地域」プロジェクト：国内出版，海外出版

③電子版の成果の構築および一般公開

- ・「述語構造」プロジェクト：『使役交替言語地図』、『基本動詞ハンドブック』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB)に新機能を追加
- ・「東北アジア言語地域」プロジェクト：『トピック別 アイヌ語会話辞典』を公開

④研究成果発表会

- ・「述語構造」プロジェクト：ハンドブック作成班 1 回開催（言語対照系合同研究発表会）
- ・「東北アジア言語地域」プロジェクト：音韻再建班 1 回，アイヌ語班 2 回開催

⑤国際シンポジウムの実施

- ・「東北アジア言語地域」プロジェクト：ヘルシンキ大学と共催でシンポジウムを開催
- ・言語対照研究系：NINJAL 国際シンポジウムを開催

⑥フィールド調査の実施

- ・「述語構造」プロジェクト：アンケート調査を実施（於インド・プネー市，2014.10）
- ・「東北アジア言語地域」プロジェクト：ニヴフ語の現地調査を実施（於ロシア・サハリン島，2014.8）

（２）研究実施体制

①共同研究員の強化

「述語構造」プロジェクト：ハンドブック作成班で大堀チームを発足

②非常勤研究員の採用

PD フェローを2名、プロジェクト非常勤研究員2名を雇用。

(3) 共同利用の推進

- ①研究成果発表会、系の合同研究発表会を公開し、プロジェクトメンバー（共同研究員）以外の研究者、特に大学院生にも参加および発表の機会を提供した。
- ②出版物の編集・刊行の準備を行った。
- ③地理類型論的なデータベース『使役交替言語地図』（The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) を公開、更新（新規言語データの追加）。
- ④『現代日本語書き言葉均衡コーパス』用オンライン検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) ver.1.30：類義語比較機能を追加・公開。
- ⑤『基本動詞ハンドブック』の編纂・ウェブ公開（34 見出し）を一般公開した。
- ⑥発表会・シンポジウム開催に際して、研究所ホームページやメールマガジンでの広報に加え、開催案内を諸学会・研究会のメーリングリストに流して、研究者コミュニティに周知した。

(4) 国際化

- ①国際シンポジウムの開催：NINJAL 国際シンポジウム「Typology and Cognition in Motion Event Descriptions」を開催し、国内外の研究者が成果を発表した（詳細は（5）を参照）。
- ②海外研究者の受け入れ：客員教授として、Peter Hook 教授（米ミシガン大学名誉教授）を迎えた。
- ③海外研究機関との連携：ヘルシンキ大学と共同で国際シンポジウムを開催した。
- ④海外の研究者との共同活動：「述語構造」には4名、「東北アジア言語地域」には9名の外国人研究者が共同研究員として参加している。
- ⑤研究成果の国際発信：両プロジェクトのリーダーは、海外の研究者と共同で研究発表・論文刊行等を行った（詳細は（5）を参照）。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

①論文集の編集、論文の刊行

「述語構造」プロジェクト

- ・プラシャント・パルデシ、ナロック・ハイコ、桐生和幸（編）『有対動詞の通言語的研究—日本語と諸言語の対照から見えてくるもの』東京：くろしお出版、平成27年5月刊行予定。
- ・Pardeshi, Prashant and Taro Kageyama (eds). *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, Berlin: Mouton と契約済み、現在第1稿を査読中。
- ・Kageyama, Taro, Peter Hook and Prashant Pardeshi (eds.) *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*. Oxford: Oxford University Press と契約手続きを進めた（理論構造研究系との共同作業）。
- ・2nd International Conference on Asian Geolinguistics (PICAG-2) 於バンコクで『使役交替言語地図』について発表。
- ・マラーティー語における他動詞が含意する結果の回避に関する発表（インドで開催された国際学会）

にて、平成 26 年 12 月)。

- ・NLB 新規機能追加についてコーパス日本語学ワークショップ, 於国語研 (平成 26 年 9 月 9 日) で発表し、論文を予稿集に投稿。
- ・平成 26 年度 日本語学習辞書科研 国際研究集会「日本語学習辞書開発の支援を考える」於筑波大学, 平成 26 年 12 月 7 日にてハンドブックプロジェクトの成果を発表。

「東北アジア言語地域」プロジェクト

- ・ブガエワ・アンナ・長崎郁編『アイヌ語研究の諸問題』, 北海道出版企画センター, 2015.3.
- ・音韻再建班のメンバー 4 名の研究論文を収めた論文集『琉球諸語と古代日本語』の編集 (平子達也, 田窪行則, ジョン・ホイットマン編により, ひつじ書房から出版予定)。
- ・Whitman, John. Old Korean. In Brown, Lucien and Jae Hoon Yeon (eds.) *The Handbook of Korean Linguistics*. London: Wiley-Blackwell, 2015. (印刷中)
- ・Whitman, John, and Yanagida, Yuko. A Korean grammatical borrowing in Early Middle Japanese kunten texts and its relation to the syntactic alignment of earlier Korean and Japanese. In Nam, Seungho, Ko, Heejeong, and Jun, Jongho (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 21.pp.121-135, Stanford: CSLI. 2014.
- ・Frellesvig, Bjarke, John Whitman. The Historical Source of the Bigrade Transitivity Alternations in Japanese. In Taro, Kageyama and Wesley, Jacobson (eds.) *Valency Alternations in Japanese*, Mouton de Gruyter. 2015. (印刷中)
- ・Yun, Jiwon, Chen, Zhong, Hunter, Tim, Whitman, John, and Hale, John. Uncertainty in processing relative clauses across East Asian languages. *Journal of East Asian Linguistics*. 2015. (予定) (オンライン版は Springerlink.com ですすでに刊行済)
- ・Bugaeva, Anna. Valency classes in Ainu. In Comrie, Bernard & Malchukov, Andrej (eds.) *Valency classes cross-linguistically*, Berlin, New York: Mouton de Gruyter. 2015.2.
- ・Bugaeva, Anna. An equivalent of the standard of comparison relativization in Ainu. 『北方人文研究』第 8 号, 査読あり, 2015.3.
- ・Bugaeva, Anna. Relative clauses and noun complements in Ainu. ブガエワ・アンナ・長崎郁編『アイヌ語研究の諸問題』, 北海道出版企画センター, 2015.3.

②電子版の成果の構築および一般公開

「述語構造」プロジェクト

- ・世界諸言語における形態的に関連のある有対動詞を収集した地理類型論的なデータベース『使役交替言語地図』(The World Atlas of Transitivity Pairs (WATP)) を公開 (54 言語のデータを収容)。
- ・『基本動詞ハンドブック』の編纂・ウェブ公開: 第 1 弾として移動動詞・授受動詞など 17 見出しを公開 (平成 26 年 4 月)。続いて, 平成 26 年 12 月 11 日にインターフェース更新 (すべての見出しの例文に音声を追加, 音声付きの活用表追加。例文数: 1348 文)。第 2 弾として, 平成 27 年 1 月 29 日にさらに 17 見出しを公開 (すべての見出しの例文に音声を追加, 音声付きの活用表追加。例文数: 977 文)。
- ・新規検索機能の開発・公開: 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』用オンライン検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ (NLB) ver.1.30 を公開した。類義語などを比較するための 2 語比較機能

を追加（平成 26 年 8 月）。

「東北アジア言語地域」プロジェクト

- ・アイヌ語の音声資料データ 『トピック別アイヌ語会話辞典』を構築・公開。

③研究成果発表会

「述語構造」プロジェクト

- ・日本言語学会第 148 回大会にて「他動性の本質の解明—日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの」と題したワークショップを企画・実施。
- ・共同研究発表会：平成 26 年 12 月 13 日に開催（言語対照研究系の合同研究発表会）。

「東北アジア言語地域」プロジェクト

- ・音韻再建班：2 回開催：平成 26 年 6 月 27 日於国語研，平成 26 年 7 月 31 日～8 月 1 日，於国語研。
- ・アイヌ語班：2 回開催：平成 26 年 5 月 31 日於北海道大学 アイヌ・先住民研究センター，平成 27 年 1 月 10 日～11 日，於国語研。

④国際シンポジウムの実施

「述語構造」プロジェクト

- ・スロベニアで行われたヨーロッパ日本語教育大会(European Association for Japanese Studies)で「コーパス的アプローチと伝統的辞書学の狭間にある学習者用・一般用の日本語辞書作り」と題したパネルセッションを企画・実施（平成 26 年 8 月）。

「東北アジア言語地域」プロジェクト

- ・ヘルシンキ大学と共催 “Crosslinguistics and linguistic crossings in Northeast Asia”（「環北太平洋地域における対照言語学的・言語横断的研究」）を開催。

「言語対照系」

- ・NINJAL 国際シンポジウム「Typology and Cognition in Motion Event Descriptions」を開催（平成 27 年 1 月 24 日～25 日，参加人数合計：52 人 [内，外国人：16 人，大学院生：14 人]，招待発表 3 件，公募発表 20 件，ポスター発表 3 件）。

⑤フィールド調査の実施

「述語構造」プロジェクト

- ・マラーティー語における他動詞が含意する結果の回避に関する調査（於インド・プネー市，2014.10～11，対象者：35 名，動詞数：51）を実施。

「東北アジア言語地域」プロジェクト

- ・ニヴフ語の現地調査（於ロシア・サハリン島，2014.8）

（6）若手研究者育成

PD フェロー 2 名，プロジェクト非常勤研究員 2 名を雇用し，国際シンポジウム，学会，プロジェクト研究会，系の合同研究発表会，NINJAL サロンなどで発表させ，研究系や研究所の研究活動に参加させた。

自己点検評価	計画を上回って実施した。
--------	--------------

平成 26 年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

「世界の言語から見た日本語の類型論的特質の解明」という総合研究テーマのもとで、述語構造および東北アジア言語地域に関する２つの基幹型研究プロジェクトを軸として言語類型論と対照言語学の共同研究を進めている。具体的な研究活動として、①各研究プロジェクトによる研究成果発表会、および②国際シンポジウムを開催している。これらの研究成果に基づいて③データベースの作成と公開、および④図書、論文集の編集、刊行準備作業を行っている。

この総合研究テーマに沿った研究という観点からは、述語構造プロジェクトは共同研究ならではの成果が上げられているが、東北アジア言語地域プロジェクトはそういった成果がみえにくい。研究の実施状況は、一部進捗上の遅れあるいは当初計画以上の進展が見られるものの、全体としてはほぼ計画どおり行なわれていると評価する。

（２）研究実施体制

常勤および非常勤の教員に PD フェローを加えて研究実施体制を組織している。『基本動詞ハンドブック』の開発チームには日本語教育の専門家も加わり、学習者に配慮した記述内容の質向上に貢献している。

（３）共同利用の推進

それぞれの研究プロジェクトにおいて『使役交替言語地図』、『基本動詞ハンドブック』などのデータベースの作成・更新と公開を行うことにより、国内外の共同利用の促進を図っている。『トピック別アイヌ語会話辞典』は、『アイヌ語会話辞典』（1898）を底本として再構成し、音声データを付加、見出し語（アイヌ語・日本語・英語）検索上の利便性を高めるなどして公開した点で高い意義を持つ。

（４）国際化

海外研究者の受け入れ、共同研究、研究成果の国際発信が順調に進められている。国内外の研究者による「移動表現」に関する国際シンポジウムを開催し、国際的な共同研究を展開している。また、研究成果を国際的に発信するために、英文による図書、論文集の刊行準備を進めている。使役交替言語地図データベースの更新と公開を海外研究機関と緊密な連携のもとに行うことで、データの国際的な利用性を高めている。

（５）研究成果の発信と社会貢献

述語構造プロジェクトによる論文集の内容は、本研究系の総合研究テーマの成果にふさわしい内容になっており、またこの分野の研究の進展に大きな寄与をなすものと期待される。アイヌ語班の成果は社会貢献としても重要である。編集作業の一部に遅れが見られるものの、研究プロジェクトの成果

を専門書や論文集として刊行する準備が進められている。

また、専門的な研究を進めると同時に、基本動詞に関する研究の応用として、『基本動詞ハンドブック』の開発、公開を進めることにより、国内外の日本語教育の高度化と学習の利便に貢献していることが高く評価される。ただし、本ハンドブックを理解するためにはかなりの日本語能力が必要であるため利用者範囲が限定される。また、本研究系の本領である「言語対照」的観点からの分析を加えるなどの工夫が望まれる。

（6）若手研究者育成

研究発表会および研究系合同発表会において、大学院生および若手研究者に発表の機会を提供している。使役交替の分析とデータベースの開発において、研究発表、調査や分析、データベースの開発等、実質的な研究を通じての若手研究者の育成を図るように工夫されている点が高く評価される。

日本語教育研究・情報センター

センター長：迫田 久美子

テーマ：日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価

平成 26 年度の計画

「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」を総合研究テーマとして、日本語学習者の言語使用・言語習得などを扱う「多文化共生社会における日本語教育研究」と、理解・産出のプロセス及び評価方法を扱う「コミュニケーションのための言語と教育の研究」の2件の共同研究を実施するとともにプロジェクト間の連携を図るための合同研究発表会を開催する。

また、大規模な日本語学習者コーパス開発のための研究を進める。

平成 26 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

日本語教育研究・情報センターでは、総合研究テーマの下に、以下の2つの基幹型共同研究プロジェクトがあり、それぞれに具体的なテーマを持った研究班がある。さらに、大規模な日本語学習者コーパスの開発も行っている。

「多文化共生社会における日本語教育研究（略称：多文化共生）」（代表者 迫田久美子）

- ・学習者コーパスと日本語の習得研究（習得研究）
- ・定住外国人の言語環境と言語使用（定住外国人）

「コミュニケーションのための言語と教育の研究（略称：コミュニケーション）」（代表者 野田尚史）

- ・日本語学習者の読解過程および聴解過程の解明（読解過程）
- ・多文化共生社会における相互行為としての評価研究（評価研究）

以下、それぞれの実績をプロジェクトの班ごとにまとめる。

①-1 「多文化共生」の「習得研究」班

学習者コーパスに基づく習得プロセスの研究について、オーストラリアの国際学会の口頭発表、ベトナム、スペイン、中国、台湾、マレーシア、ドイツ、イタリアの大学や学会の招待講演で成果の一部を発表した。また、学習者コーパスの研究については、平成 26 年 12 月 6～7 日、時空間変異研究系との合同企画により、合同コーパス研究会を開催し、他研究系「言語資源研究系」「理論・構造研究系」の研究者も含めて研究発表を行った。また、くろしお出版から『学習者コーパスと日本語教育研究（仮題）』の出版計画を立て、平成 27 年の刊行を進めている。

①-2 「多文化共生」の「定住外国人」班

フィールドワークを継続的に実施、言語に関する価値観や言語意識に関する質的なデータの拡充も行った。それらのデータに基づき、国際シンポジウム（AAS-in-Asia）や日本語教育国際研究大会（ICJLE2014）、日本語教育学会秋季大会等で成果を発表し、『国立国語研究所論集』第8号や『日本語プロフィシエンシー研究』第2号に論文としてまとめた。

②-1 「コミュニケーション」の「読解過程」班

初級から上級のさまざまなレベルの非母語話者の読解過程および聴解過程の調査を実施し、ヨーロッパ日本研究協会国際会議や日本語教育国際研究大会（ICJLE2014）で成果を発表し、『ヨーロッパ日

本語教育』(ヨーロッパ日本語教師会)や『専門日本語教育研究』(専門日本語教育学会)などに論文を発表した。

②「コミュニケーション」の「評価研究」班

母語話者と非母語話者が対話を行う際の当事者評価、およびその変容について質的に掘り下げる調査を行い、学会等で成果を発表した。さらに、「非母語話者にも分かりやすい表現」を行うために母語話者が行っている配慮や自己評価についての調査を行い、その有効性の検証を行い、国内外の学会で成果発表を行った。

③日本語学習者コーパスの開発

- ・大規模な日本語学習者コーパスの開発(「I-JAS: International Corpus of Japanese As a Second language 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」)については、本年度、ベトナム(ホーチミン市師範大)、スペイン(コンプルテンセ大)、フランス(グルノーブル・スタンダード第三大)、ハンガリー(カーロリ・ガシュパール大)、韓国(高麗大)、中国(湖南大)、韓国(東国大)、台湾(台中科技大学)の8地域6言語の調査を実施し、現在までに、約970名分のデータを収集した。
- ・前述のコーパス構築のための文字化規則設定のための会議を3回、コーパス分析のための勉強会をほぼ毎月開催し、データの分析研究や日本語教育への応用研究に取り組んだ。
- ・「定住外国人」班は、プロジェクトの5年分の日本語学習者の縦断調査の結果をデータベースとして公開した(平成26年4月 詳細は(5)研究成果の発信と社会貢献②を参照)。

(2) 研究実施体制

①客員教員と研究員の増員

- ・センターでは、新たな客員教員2名、プロジェクト非常勤研究員1名の増員により、研究の充実を図った。具体的には、母語話者および非母語話者の談話分析の研究が専門の石黒圭氏(一橋大学)を客員准教授として、非母語話者による作文の評価研究を専門とする田中真理氏(名古屋外国語大学)を客員教授として、細井陽子氏をプロジェクト非常勤研究員として迎えた。
- ・「多文化共生」および「コミュニケーション」のプロジェクトの海外調査は、国内のみならず、アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアの多くの研究者の協力を得て実施している。国内の外国人就労者の調査では、浜松市と広島市のボランティア団体の協力支援を得て実施した。

②他研究系、他機関との連携

- ・昨年度の外部評価のコメントを参考に、他研究系や他機関との連携を図り、成果発表を行った。
具体的には、「習得研究」班で、国立情報学研究所との共催の言語資源シンポジウム(「音声言語資源の明日を考える」平成26年9月)に登壇者として参加した(<http://research.nii.ac.jp/src/symp/>)。
- ・さらに、所内の時空間変異研究系のプロジェクトとの共催でシンポジウム(詳細は(3)共同利用の推進③を参照)を開催し、他の研究系や他分野の研究者との共同企画で成果を発表した。

(3) 共同利用の推進

①合同研究発表会の開催

平成27年1月11日(日)、国立国語研究所において、2つの基幹型研究プロジェクトは、「多文化共生社会における日本語教育—言語習得・コミュニケーション・社会参加—」というテーマで合同研究発表

会を開催した。尾辻恵美氏（シドニー工科大学）を基調講演の講師として迎え、2つのプロジェクトの共同研究者やプロジェクト非常勤研究員も含め、研究成果を20件のポスター発表として提示した。

②研究会開催，論文執筆，書籍刊行による成果発表

- ・「習得研究」班は、共同研究者や若手研究者と共に学習者コーパスの分析のための研究会を11回開催し、コーパス利用の研究を発表。また、英語教育分野の講師を招いて「習得の指標」などの勉強会を実施した。また、国内外で学習者データの分析に基づく研究発表を行った。
- ・「定住外国人」班は、国内外での学会で発表，論文を執筆し，一般市民向けの公開講演会を開催した（詳細は（5）研究成果の発信と社会貢献④を参照）。
- ・「読解過程」班はコミュニケーションにおける読解過程や聴解過程に関する研究，「評価研究」班は相互行為としての評価に関する研究を，それぞれ米国や豪州など海外の学会，また国内での学会で発表，さらに論文の執筆を行い，書籍の刊行に向けて準備を行った。

③コーパス合同シンポジウムの開催

平成26年12月6～7日，時空間変異研究系と共催で「コーパスから見る日本語のバリエーション—会話・方言・学習者・歴史コーパスから—」というテーマで合同シンポジウムを開催した。基調講演には，言語資源研究系の前川喜久雄氏，各専門分野の発表では理論・構造研究系，言語資源研究系の研究者が登壇し，コーパス関連の情報交流も含め，他系との連携に基づくシンポジウムを実施した（<http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/m-2014/20141206-sympo/>）。

（4）国際化

①海外での成果発表

- ・2つのプロジェクトでは，多数の海外研究協力者と共に調査を実施し，そのデータに基づいて共同研究を行い，国際学会（ICJLE2014, AAS-in-Asia, ヨーロッパ日本研究協会国際会議など）で成果を発表した。
- ・「コミュニケーション」の「読解過程」班では，平成17年に出版された書籍の中国語訳が北京の出版社から出版されたり，中国の学術書の分担執筆を行ったりした。
- ・大規模学習者コーパスのデータに基づく研究論文について，迫田久美子，白井恭弘，プラシャント・パルデンの編集者と11人の執筆者により *Acquiring Japanese as a Second Language: Corpus based investigation into the nature of Japanese interlanguage* のタイトルで英国のRoutledge社から平成29年に出版する契約が行われ，英文での成果発表に向けての準備が整えられた。

②外来研究員の受入れ

- ・「多文化共生」では，博報財団の海外日本研究フェローシップで来日した尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学）を外来研究員として受け入れ，e-learningを応用した日本語教育の実践と文法習得に関する合同研究を進めた。

③学術交流協定に基づく共同研究

- ・北京日本学研究中心と国立国語研究所の交流協定に基づき，北京師範大学も加えて，中国人日本語学習者を対象とする縦断研究に向けて，プラン策定のための打合せを行った。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

①HPの開設

- ・「多文化共生」の「習得研究」班では、学習者コーパスのHPを開設し、既に一般公開したC-JAS (Corpus of Japanese as a Second language および現在、調査実施中のI-JAS (International Corpus of Japanese As a Second language) の情報をアップロードした (<http://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/lisaj/>)。
- ・「コミュニケーション」の「読解過程」班では、「日本語非母語話者の読解コーパス」のHPを開設し、コーパスの概要や調査方法、サンプルデータを掲載した (<http://www.ninjal.ac.jp/jsl-communication>) [平成27年3月公開]。
- ・「コミュニケーション」の「評価研究」班では、公開研究会などのイベントや成果をウェブ公開した (<http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/m-2014/20140807-011/>, <http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/m-2014/20141102-021/>)。

②データベースの整備と公開

- ・「多文化共生」の「定住外国人」班では、定住外国人の5年分のデータを平成26年4月に公開した (https://dbms.ninjal.ac.jp/judan_db/)。

③一般向け講演会等

- ・「多文化共生」の「習得研究」「定住外国人」班では、札幌市、浜松市、広島市の日本語ボランティア研修会などへの講演を通して、一般社会への情報発信を行った。また、定住外国人の言語使用に関する研究でも、富山県射水市で一般市民向けの公開講演会を開催した(平成27年3月22日開催)。

④図書・論文等

各プロジェクトとも積極的に成果を発表した。主なものを以下に挙げる。

<図書>

- ・野田尚史(著), 張麟声(他)(訳)『交際型日語教学語法研究 [コミュニケーションのための日本語教育文法]』, 297p. 北京: 外語教学与研究出版社, 2014.
- ・野田尚史, 高山善行, 小林隆(編)『日本語の配慮表現の多様性—歴史的変化と地理的・社会的変異—』, 320p. 東京: くろしお出版, 2014.
- ・山内博之, 「話し言葉コーパスから見た文法シラバス」, 庵功雄・山内博之編『文法シラバスの作成を科学にする(仮)』, くろしお出版, 頁数未定, 査読なし, 2015.6. (予定)

<論文>

- ・宇佐美洋「分断から統合へ—人間同士の協働を目指す「専門日本語教育」—」, 『専門日本語教育研究』第16号, pp.3-8, 特集依頼論文, 2014.
- ・迫田久美子「日本語学習者のコミュニケーション—誤用の原因と運用のストラテジー—」『日本語教育と日本研究における双方向性アプローチの実践と可能性』第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム大会論文集編集会(編), pp.21-32. ココ出版, 査読なし, 2014.
- ・迫田久美子「外国語としての日本語教育の現状と課題—「国語・外国語・母語」の間でゆれる日本語教師と学習者」『複言語・多言語教育研究』No.2, pp.47-59, 日本外国語教育推進機構, 査読なし, 2014
- ・野田尚史「上級日本語学習者が学術論文を読むときの方法と課題」, 『専門日本語教育研究』第16号, pp.9-14, 専門日本語教育学会, 査読あり, 2014.

- ・野田尚史「「やさしい日本語」から「ユニバーサルな日本語コミュニケーション」へ—母語話者が日本語を使うときの問題として—」、『日本語教育』158号、pp.4-18、日本語教育学会、査読あり、2014
- ・野山 広「地域日本語教育とプロフィシェンシー」『日本語プロフィシェンシー研究』第2号特集論文、pp.6-10、査読なし、2014.
- ・福永由佳「在日外国人の多言語使用に対する Ethnolinguistic Vitality Theory の適応可能性—在日パキスタン人の事例—」、『国立国語研究所論集』8号、pp.33-50、査読あり、2014.

（6）若手研究者育成

①研究発表と書籍出版

- ・「多文化共生」班では、非常勤研究員を中心に、学習者コーパスの分析のための勉強会をほぼ毎月開催し、3件の共同研究を行い、2つの公開の合同研究会で成果を発表した。
- ・「コミュニケーション」の「読解過程」班では、PD フェローと共同研究を実施、学会等で成果を発表した。「評価研究」班においては、非常勤研究員も国内外の学会等で研究を発表し、書籍を刊行した（（5）研究成果の発表と社会貢献④を参照）。
- ・さらに、共同研究プロジェクト合同発表会（平成26年1月）では、共同研究のポスター発表20件のうち、所内外の若手研究者（院生や非常勤研究員等）と共同で進めた研究発表は12件であった。

②海外からの研究者受入れ

- ・中国から姚一佳氏（北京日本学研究中心院生）を特別共同利用研究員として受け入れ、データに基づくアスペクト仮説の理論検証に関する研究指導を行った。

自己点検評価	計画を上回って実施した。
--------	--------------

平成26年度の評価

《評価結果》

計画どおりに実施した。

「日本語学習者のコミュニケーション能力の習得と評価」という総合研究テーマについての本年度の研究の進展に関しては、一部には計画を上回って実施した展開が見られるが、センター全体として計画どおりに実施したと評価する。

《評価項目》

（1）共同研究の推進

それぞれのプロジェクト活動が活発に行われ、中でも学習者コーパスのための海外調査、データベースの構築が着々と進められている点が評価できる。

（2）研究実施体制

学習者コーパス構築のためには、多額の予算および優れた人材が必要となるが、その確保と適切な作業労働のあり方に関しては、今後とも適切な管理に留意されたい。

（３）共同利用の推進

２つの基幹プロジェクトの合同研究発表会のテーマ、「多文化共生社会における日本語教育—言語習得・コミュニケーション・社会参加—」によって、本センターの進むべき研究方向が示されているように思えるが、プロジェクト間の相互理解と連携が必ずしも十分とはいえない点が見られる。一方で、国語研内の他の研究系、並びに外部の研究機関とのシンポジウム開催によって、相互の研究内容の接点と協力による相乗効果が認識されたことは評価に値する。日本語教育のための貴重なデータベースが出来つつある今日、国内の日本語教育研究者一般が利用可能なデータとなるように整備すること、とりわけ海外の研究者が利用できる仕組みを作り上げることは重要な課題といえる。

（４）国際化

海外調査を通して海外の研究者との交流を深めたこと、海外での成果発表、出版物の刊行、海外で日本語研究、教育に携わる研究者達を共同研究者として迎え入れていることなどは高く評価できる。また、書籍の中国語訳と北京日本学教育センターとの交流協定に見られる中国の日本語教育研究との連携の今後の深化が期待される。

（５）研究成果の発信と社会貢献

HP の提示、書籍の発行、論文発表など社会への発信は、活発に行われている。「定住外国人」をはじめとして日本語教育研究では、社会貢献の可能性追求と責任遂行が重要だが、その点での具体的成果の発信が望まれる。

「日本語非母語話者の読解コーパス」HP の資料提供はまだ手始めの段階だが、詳細な「調査方法」の呈示は一つの見識を示しているものとして評価できる。

（６）若手研究者育成

コーパス分析研究会や、センターのシンポジウムでのポスター発表などで、若手育成の努力が見られ、評価できる。他方、若手研究員がコーパス開発に携わることで多くを学べるというメリットのある反面、過重な作業に時間が取られて、研究の時間が少なくなるというデメリットが生じないように注意を払う必要がある。

コーパス開発センター

センター長：前川 喜久雄

平成 26 年度の計画

- 1) 『日本語話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の一般公開を継続する。
- 2) 『日本語歴史コーパス 平安時代編』の一般公開を継続し、さらに日本語歴史コーパスの規模の拡張を図る。

平成 26 年度研究活動の実施状況

(1) 共同研究の推進

- ①昨年度に超大規模コーパスのクローリング技術を確定し、現在まで3箇月に1億 URL のペースでクローリングを繰り返している。これによって当初目的であった100億語相当のテキスト収集を数倍の規模で達成した。
- ②超大規模データの文字列検索技術について検討を進めた。昨年度にテストデータによる検索環境を構築したのに続いて、今年度は、形態論情報付データに対する検索環境の構築を進めている。年度末までにプロトタイプを構築した。
- ③クローリングによって得られたテキストのレジスター推定問題を念頭において各種統計手法について検討を進め、予備的分析結果について研究発表を行った。
- ④昨年度に開始した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』文境界認定基準の再検討を継続して新認定基準を策定し、文境界タグの修正作業を実施した。今年度末までに XML 文書、TSV データなどを再生成し、マニュアルを修正して、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』1.1 版の公開を完了した。
- ⑤上記④にあわせて、形態論検索インターフェース『中納言』BCCWJ 版、『少納言』のデータも今年度中に更新した。
- ⑥『中納言』の検索機能改善を図った。新たにログイン用サーバーを設置し、1回のログインで複数のコーパスを利用できる環境を構築し、年度末までに公開する。そのために必要な既存ユーザーの名寄せ作業も今年度中に実施した。
- ⑦『中納言』ユーザーの増加に対応するため、ユーザー数・検索の付加等に応じて、複数のサーバーにジョブを適宜配置するソフトウェア（ロードバランサー）を今年度中に導入した。
- ⑧「通時コーパスの設計」プロジェクトと連携して狂言のデータ（形態論情報は短単位のみ）を作成した。
- ⑨「通時コーパスの設計」プロジェクトと連携して『国民之友コーパス』を構築した。
- ⑩来年度の公開を目指して、『日本語話し言葉コーパス』の形態論情報の整備（『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における新しい短単位規定への対応など）を進めた。

(2) 研究実施体制

言語資源研究系の教授1名、准教授5名（コーパス開発センターの特任准教授は昨年10月に言語資源研究系の専任准教授ポストに着任した）、理論・構造系准教授1名がセンターに併任している他にポストク1名を雇用している。さらに実務担当者として派遣社員1名（DB 開発担当）、プロジェクト研究10

名、技術補佐員7名を雇用して業務にあたっている。雇用経費については、当センターの予算以外に「コーパス日本語学の創成」「コーパスアノテーションの基礎研究」「通時コーパスの開発」等の3基幹型プロジェクトの予算と種々の科学研究費からの支援を受けた。

(3) 共同利用の推進

- ①『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) および『CSJ-RDB 版』の公開を継続した。平成26年1月から12月にかけての新規契約数は66件(通算で707件)であった。CSJは公開後10年を経ているが、現在もコンスタントな需要があり、本コーパスが日本語音声研究のインフラとして定着していることを示している。
- ②『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)の公開を継続した。平成26年1月から12月にかけての新規契約数は、DVD版が52件(通算284件)、『中納言』によるオンライン検索ライセンスの契約(無償)が785件(通算2,578件)であった。BCCWJは公開後3年半を経たが、コンスタントな需要がある。CSJ同様、日本語研究のインフラとして定着していることがわかる。ちなみに、上記期間における『中納言』による検索総数は247,666件(セッション数は19,307件)であった。また同期間における『少納言』による検索総数は795,671件(セッション数は97,057件)であった。『中納言』による検索は増加傾向にあり、『少納言』は昨年度とほぼ同一である。
- ③『日本語歴史コーパス』(CHJ、平成25年12月先行公開開始、『中納言』によるオンライン検索のみ)の公開を継続した。平成26年1月から12月にかけての新規契約数は66件(通算349件)であった。検索総数は21037件(セッション数は2,143件)であった。
- ④『国民之友コーパス』を公開(平成26年10月)して近代語コーパスを充実させた。
- ⑤『日本語歴史コーパス』に狂言のデータを追加(平成27年3月)して充実させた。
- ⑥ CSJ、BCCWJ(DVD版)の売り上げに加えて、BCCWJデータを米国の情報処理企業に包括契約によって提供したことで、1,000万円を超える収入を得た。

(4) 国際化

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』関連ホームページの英訳を進め、年度末までに英文ページを公開した。また、『日本語話し言葉コーパス』関連ページも、来年度の公開を目指して英訳を進めた。

(5) 研究成果の発信と社会貢献

- ①昨年度から「コーパス日本語学の創成」プロジェクトと連携して、『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を利用した研究を網羅した研究文献リストを公開している。これらのリストに平成25年度の文献を追加した。
- ② HPのユニークビジター数は1日あたり80~240名、平均150名程度である。
センターHP : http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/
- ③国内外の代表的な情報処理企業多数にコーパスデータ(BCCWJ)および形態素解析用辞書(UniDic)を提供しており、日本語の情報処理にとって不可欠のインフラを提供している。今年度は米国の大手情報処理企業とデータ包括利用契約を締結した。

（６）若手研究者育成

- ①超大規模コーパス関係で PD フェロー 1 名を雇用して、コーパスを利用した新しい日本語研究の可能性を開拓させている。昨年度まで雇用していたもう 1 名は文科省に専門調査官の職を得た。
- ②プロジェクト研究員、技術補佐員らも各種コーパスの開発作業を通してコーパスによる日本語研究のノウハウを身につけて、この領域を担う次世代の研究者層を形成しつつある。これまでにコーパス開発センターのプロジェクト研究員ないし PD フェローが執筆した論文に対して所長賞が 4 件授与された。
- ③コーパス検索ツール『中納言』および ChaKi.NET（茶器）の講習会を開催している。『中納言』については『現代日本語書き言葉均衡コーパス』と『日本語歴史コーパス』の講習会を別途開催した。講習会と同時にコーパス利用上のトラブルについての相談にも応じた。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

平成 26 年度の評価

《評価結果》

計画を上回って実施した。

コーパス開発センターの組織は言語資源系研究者の多くが併任として構成員となっている。言語資源研究系においては研究、センターではコーパス開発と棲み分けがあると考えられるが、実際には本センターは開発推進のみならず、研究面でも貢献しており、総じて計画を上回って実施したと認められる。

《評価項目》

（１）共同研究の推進

計画（目標）の 1）に挙げられた、『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の一般公開の継続は着実に実施されている。広い範囲のユーザーに対して日本語研究のインフラを安定して提供している。なお、データの修正については、既存ユーザーへの周知を図る必要があるだろう。

計画（目標）の 2）に挙げられた『日本語歴史コーパス平安時代編』の一般公開の継続と『日本語歴史コーパス』の規模の拡大についても、着実に実施されているものと言える。また、『国民之友コーパス』の構築・公開により、近代語コーパスの充実が進められた。これに加えて、超大規模コーパスの構築に向けて、クロージング技術の確定、文字列検索技術の検討、レジスター推定問題に関わる統計手法の検討など様々な措置が取られ、実験的な先端研究の場としての意義も認められる。

（２）共同利用の推進

『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語歴史コーパス』という 3 種の大規模コーパスの公開以来、それぞれの契約件数、検索件数ともに年を追って増加しており、共同利用が日本語研究のインフラとして定着していることを示している。本センターはこれらの利用に伴う、システムのメンテナンス、講習会など地道に遂行していることが評価できる。

（４）国際化

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『日本語話し言葉コーパス』のホームページの英語化は完成に向けて進みつつある。この試みは非母語話者に対する配慮によってさらなる利用促進が期待される。

（５）研究成果の発信と社会的貢献

『日本語話し言葉コーパス』『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は広い範囲のユーザーに対して日本語研究のインフラを安定して提供している。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における文境界タグに関する再検討と修正の実施、『日本語話し言葉コーパス』における形態論情報の整備、検索ツールの講習会の開催、研究文献リストの公開、中納言サーバーの拡充、関連ホームページの英語化、情報処理企業へのデータ提供などの措置は、これらのコーパスの利用を促進し、利用層を拡大し、また利用価値を一層高めるものとして大きな意味があるものである。

（６）若手研究者育成

コーパス開発作業にあたるプロジェクト研究員や技術補佐員が若手研究者として育ちつつあることは、本センターの存在意義を高めていると言える。このセンターの中から４名が所長賞を受賞したこと、国内の主要大学他に就職が決まったことなどで、優れた人材を育成していることが示された。

平成 26 年度「組織・運営」、「管理業務」に関する評価結果

【組織・運営】

I. 教育研究等の質の向上の状況に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 研究に関する目標を達成するための措置

(1) 共同研究の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

4つの研究系と日本語教育研究・情報センターにおいてそれぞれ総合研究テーマに則り、基幹型プロジェクトを次のとおり実施するとともに、研究成果の発信を行う。

また、外部研究者をプロジェクトリーダーとする独創・発展型と領域指定型の共同研究を実施する。

【実績】

4研究系及び日本語教育研究・情報センターにおいてそれぞれの総合研究テーマによる大規模な「基幹型」共同研究プロジェクト16件（継続）を実施した。加えて、独創性に富む斬新な研究課題を扱う「独創・発展型」1件（継続）、一般公募の外部研究者をリーダーとする「領域指定型」2件（継続）の各種プロジェクトを実施した。その成果は、シンポジウム、国際会議の開催、研究成果発表会、論文集の刊行やデータベース公開により、国内外に積極的に発信した。また、第2期から第3期中期計画への研究活動の連続性を保ちつつ、高い実効性と豊かな研究成果が確実に見込める「フィージビリティスタディ型共同研究」5件及び研究成果助成等の研究促進プログラムを実施した。

※各研究系・センターの計画と実績評価については、「各研究系・センターの評価」で行う。

(2) 研究実施体制に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 国際的研究拠点としての機能を強化するため、海外における国際会議を誘致するとともに、研究成果の国際的な刊行を促進する。
- 2) 基幹型共同研究プロジェクトの学術的成果を広く研究者コミュニティに披露する研究成果発表会を開催する。
- 3) 基幹型共同研究の成果を充実させるとともに、第3期への準備として、最新の学術動向や研究者コミュニティの意見等も踏まえながら新プロジェクトを構想し、準備的な共同研究の検討を開始する。

【実績】

- 1) 国際的に評価の高い海外拠点の学会「Formal Approaches to Japanese Linguistics 7 (FAJL7)」(平成26年6月27日～29日、於国語研、国際基督教大学、参加者延べ229名)および20か国からの参加を得た「The 14th Conference on Laboratory Phonology (LabPhon 14)」(平成26年7月25日～27日、於国語研、参加者延べ792名)を誘致し、国際シンポジウム「移動事象の言語化における類型と認知」(平成27年1月24日～25日、於国立国語研究所、参加者延べ100名)を開催し、共同研究の成果を発表した。

- ・研究成果の国際発信として、De Gruyter Mouton社の日本語・日本語研究ハンドブックシリーズを2巻発刊し、以降の巻の執筆・編集を進めた。また、その他の共同研究プロジェクトや国際シンポジウムの成果の国際出版計画を進めた。
 - ・海外の研究者を共同研究員（40名）、客員教員（8名）と外来研究員（7名）として迎えて共同研究を行った。
- 2) 平成25年度に続き、基幹型共同研究プロジェクトの研究成果を広く研究者コミュニティ及び関係者に披露する研究成果発表会（平成27年1月31日、於学術総合センター、参加者103名）を開催した。
 - 3) 第3期中期目標期間における大型プロジェクト計画（6件）について、外部有識者、運営会議外部委員、外部評価委員からの意見を踏まえながら検討を進めた。また第3期における実行可能性を探るため、フィージビリティスタディ型共同研究5件を実施した。

（3）共同利用の基盤整備等共同利用の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 各種の研究成果・研究資料等の収集・整理を着実に進めるとともに、既存研究資料・成果物の利用促進のため、ウェブサイトの改修を行う。
- 2) 『日本語話し言葉コーパス』、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』等の一般公開を継続する。『日本語歴史コーパス 平安時代編』の一般公開を継続し、さらに日本語歴史コーパスの規模の拡張を図る。
- 3) 平成22～25年度に収録した奄美、沖縄、八丈方言の音声データを公開に向けて整理する。
また、平成25年度に開始した諸方言談話データの整理をさらに進める。
- 4) 様々な外国語を母語とし、日本語を第二言語として学ぶ外国人の大規模な日本語学習者コーパスの構築を目的とするデータ収集のため、海外19地域の研究者とのネットワークを強化する。
- 5) 研究図書室所蔵の貴重資料等を共同利用に供するため、デジタル化と公開を進める。

【実績】

- 1) 既公開の研究資料・成果物の更なる利用促進のため、ウェブサイトの改修を行った。
 - 2) 本年度の契約数は『日本語話し言葉コーパス』63件（含商業利用5件）、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（オンライン版）720件、同（DVD版）41件（含商業利用2件）、『日本語歴史コーパス 平安時代編』（オンライン版のみ提供）が171件である。『日本語歴史コーパス』の拡張も順調に進展している。
- ・平成23年度に公開した世界初の日本語コーパスである『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に続く、ウェブ上のテキストを対象とした100億語を超える超大規模現代日本語コーパスのデータ収集の終了後、このデータに対応可能な形態素解析技術と検索技術の開発を継続した。形態素解析は複数の手法で実施可能であることを確認し、検索は、100億語規模データの文字列検索を1分前後で実施できる環境を構築した。
 - ・『日本語歴史コーパス』は、狂言のデータを追加し、『国民之友コーパス』を公開することで近代語コーパスも充実させた。
 - ・『日本語研究・日本語教育文献データベース』をはじめ、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』検索システム NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）等、既公開のデータベース、ソフトウェアについて更新を行った。新規に、大規模経年調査のデータ分析について11のデータベース、および『トピック

別アイヌ語会話辞典』を公開した。

- 3) 「鹿児島県喜界島方言の基礎語彙」データ（音声付）, 「沖縄県本部瀬底方言の自然談話」データ（音声付）をウェブで公開した。「東京都八丈方言の基礎語彙」データ（音声付）, 「鹿児島県徳之島浅間方言の自然談話」データ（音声付）の整備を進めた。また、本土方言6地点による方言コーパスの試作版を作成した。方言研究について、消滅危機方言では、対象地域を本土に広げ、島根県出雲方言、宮崎県椎葉方言の調査を行った。方言分布解明では、549地点の調査を終え、調査結果のデータベースを作成した。
- 4) 平成26年度の8地域を含め、平成24年度から3年間かけての『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』構築を目的とした、海外19地域でのデータ収集のための調査を終了し、公開に向けて発話データの文字化の準備を開始した。これらの調査により得られたデータに基づき、上海、ベトナムの海外研究協力者との共同研究を行い、その成果を「ICJLE2014（日本語教育国際研究大会）」（平成26年7月10日～12日、於シドニー工科大学）およびプロジェクト合同シンポジウム「コーパスに見る日本語のバリエーションー会話・方言・学習者・歴史コーパスからー」（平成26年12月6日～7日、於国立国語研究所、参加者延べ100名）において発表するなど、海外研究者とのネットワークを強化した。
- 5) 研究図書室所蔵資料5点（悉曇蔵（鎌倉時代写本、音韻資料）易林本節用集（慶長年間印刷本、近世語彙資料）物類称呼（江戸時代印刷本、近世方言資料）和字正濫鈔（江戸時代印刷本、近世仮名遣資料）玉菊全伝花街鑑（江戸時代印刷本、近世口語資料）の画像を新規公開した。さらに来年度以降公開予定分の撮影を終了した。

（４）国際化に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 日本語研究ハンドブックシリーズ（英文、全12巻）の編集を進め、順次刊行する。
- 2) 海外に拠点を持つ国際会議を誘致・開催する。
- 3) 平成22～25年度に作成した危機方言調査報告書の英語版を作成する。
- 4) 平成25年度に締結した台湾中央研究院との協定に基づき、音声科学領域における共同研究の準備に着手する。
- 5) 海外の大学・博物館等と連携し、その収蔵する日本語関連音声資料の書き起こしとデジタル化を実施する。新たな音声資料の発掘調査を実施する。
- 6) コーパス・データベースの多言語対訳化の可能性について検討を開始する。

【実績】

- 1) 言語学分野で傑出した出版活動が続ける国際的学術出版社であるドイツ・De Gruyter Mouton社との包括的出版協定に基づく最初の刊行物として、一言語の記述としては他に類を見ない規模の出版物となる日本語研究に関する包括的英文ハンドブック（全12巻、各巻600頁前後）のうち、2巻（琉球諸語、音声学・音韻論）を刊行した。その他の巻についても順次刊行に向け執筆・内部審査・編集を進めた。
- 2) 国際的に評価の高い海外拠点の学会「Formal Approaches to Japanese Linguistics 7(FAJL 7)」（平成26年6月27日～29日、於国語研、国際基督教大学、参加者延べ229名）および20か国からの参加を得た「The 14th Conference on Laboratory Phonology(LabPhon 14)」（平成26年7月25日～27

日、於国語研、参加者延べ 792 名）の誘致のほか 2 件の国際シンポジウムを開催し、研究成果を発表した。

- ・日本学術振興会「頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム」により、若手の専任教員 1 名をオックスフォード大学に派遣し人材育成を行った。この間、派遣教員は日本語コーパスについてイギリス、フランス、チェコ、スロベニア等各国の大学、学会、研究会等で講演や講習を行った。

また、リトアニア、タイからコーパス構築や方言研究について知見を得たいとの要請を受け、連携についての検討を始めた。

- 3) 『喜界島方言調査報告書』の英語版作成の作業を進めた。
- 4) 台湾中央研究院との連携により「Filled pause の音声学的特徴」をテーマとした共同研究を開始し、台湾（平成 26 年 12 月 12 日）および国内で研究会、講演会を開催した。また、平成 26 年 6 月 16 日に北京日本学術研究センターとの研究連携協定を締結した。
- 5) カリフォルニア大学ロサンゼルス校、ハワイ日本文化センター、サクラメント歴史センターにおいて音声及び録画資料のデジタル化と書き起こしを行った。また、新たな音声資料を、National Japanese - American Historical Society、ハワイ大学西オアフ校において発掘した。
- 6) 多言語対訳化のため、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』サンプルデータの英語、イタリア語、中国語、インドネシア語等への翻訳費用を検討した。

（５）研究成果の発信と社会貢献に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 日本語研究及び日本語教育研究に関する研究情報データベースを定期的に更新する。
- 2) 平成 24 年度の八丈方言調査、平成 25 年度の「八丈町方言講座・NINJAL セミナー」に続き、「危機方言サミット・イン八丈」を八丈町と共同で開催する。
- 3) 日本語教育に関する専門家向けの学術講演会を開催する。
- 4) 外国人の漢字学習に関する一般向けフォーラムを開催する。

【実績】

- 1) 『日本語研究・日本語教育文献データベース』を定期的に更新し、例年より 1 回多い 4 回のデータ追加を行った。また、研究成果を『国語研プロジェクトレビュー』および『国立国語研究所論集』で発信した。
- 2) ユネスコが指定した 8 つの危機言語・方言の記録・継承活動に関する「日本の危機言語・方言サミット IN 八丈島」（平成 26 年 12 月 12 日～14 日、於八丈町、参加者延べ 423 名）を八丈島、文化庁との共催で開催した。話者、研究者、学校教員、一般市民が八丈島に集まり、各地の現状と今後の活動について話し合い、方言復興の機運が高まる催しとなった。
- 3) 専門家向けの日本語教育講演会「語彙読解システムの開発 ―日本語教育における多読―」（平成 27 年 2 月 21 日、於国立国語研究所、参加者 110 人）を開催した。
- 4) 第 8 回 NINJAL フォーラム「世界の漢字教育 ―日本語漢字をまなぶ―」を国際交流基金との共催で開催し、国内外の日本語教師、一般市民など多数の参加を得た。（平成 26 年 9 月 21 日、於一橋大学一橋講堂、参加者 421 名）

自己点検評価

計画を上回って実施した。

《評価結果》

計画を上回って実施した。

当年度内に国語研の主導のもとに開催された3つの国際的研究集会は、いずれもその規模と学術上の水準から見て高く評価される。こうした国際会議の運営の困難さは広く知られるとおりであり、国語研の組織的力量的伸展を示すものとする。

かねてから準備が進行してきた、日本語研究の包括的英文ハンドブックの刊行が開始された。現時点で2割程度が達成されたが、期待に応える水準のものである。早期の完結を強く望みたい。

以上のような国際的事業のほか、共同研究の推進、共同利用研究機関としての基盤整備も高く評価される。

研究の実施体制に関しては、基幹型共同研究プロジェクトの成果発表会、次期中期目標期間の大型プロジェクト計画に関する外部有識者・運営会議外部委員・外部評価委員からの意見聴取が高く評価される。

研究成果の発信とそれによる社会貢献に関する活動のうちで特筆に値するのは、「日本の危機言語・方言サミット I N 八丈島」の開催である。対象の自治体との共催で行われたが、当該方言の話者が多数参加し、研究の意義を広く紹介して、社会的な広がりを促した。これを契機として方言復興の機運が高まれば、国語研の活動への社会的信頼が大幅に醸成されるものと期待される。研究成果発信・社会貢献に関しては、文化庁・国際交流基金などとの共催方式が有効に機能した。

以上のような研究の成果達成は、研究所の第2期から第3期中期計画の展開のためにきわめて有用であり、総合的に見て高水準にあるものと評価する。

2. 教育に関する目標を達成するための措置

(1) 大学院教育への協力に関する目標を達成するための措置

【計画】

一橋大学との連携大学院プログラムに協力するほか、他大学との新たな連携大学院の検討に積極的に取り組む。

【実績】

平成27年度から東京外国語大学大学院に協力する方向で、東京外国語大学の学長・理事と検討を進めた。

(2) 若手研究者育成に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 若手研究者等に最新の知見を教授する NINJAL チュートリアルを各地で開催する。
- 2) 若手研究者を危機方言のフィールド調査に参加させ、調査・分析方法を学ばせる指導プログラムを実施する。
- 3) 若手のポストドクターを公募により PD フェローとして採用し、共同研究プロジェクトに関連する研究を自ら行うことで研究者としての自立性を向上させる指導を行う。

【実績】

- 1) 大学院生を中心とする若手研究者に最前線の研究知見を教授するための、NINJAL チュートリアル

<p>計3回（第15回、第17回「日本語非母語話者の言語理解・言語表現の分析」（平成26年9月20日、於仙台市、参加者26名、平成27年3月28日、於福岡市、参加者25名）、第16回「言語類型論的に見たアイヌ語の文法」（平成27年3月21日～22日、於京都大学、参加者8名）を各地で開催した。</p> <p>2）島根県出雲方言調査に7名の大学院生、3名の日本学術振興会特別研究員が参加した。また、宮崎県椎葉方言調査に7名の学部学生、1名の日本学術振興会特別研究員が参加した。</p> <p>3）若手研究者育成を図るため、学位取得者をプロジェクトPDフェロー（7名）として雇用し、日本学術振興会特別研究員（5名）を受け入れて、共同研究プロジェクトやフィールド調査に参加させて研究手法を教授し、国際シンポジウム開催の実務を担当させるなど研究者として独り立ちできるような教育体制を採った。この結果、大学教員として3名が採用されることが決定した。また、日本学術振興会特別研究員（5名）と国際交流基金のプログラムによる北京日本学研究中心の大学院生（1名）を受け入れて指導した。</p> <p>・特別共同利用研究員として、国内（1名）、海外（オランダ1名、イギリス3名、中国1名）の大学院生を受入れ研究指導を行った。</p>	
自己点検評価	計画どおりに実施した

《評価結果》

計画どおりに実施した。

PDフェローを7名雇用し、また日本学術振興会特別研究員を共同研究のプロジェクトに参加させるなど、一定の成果を上げている。特記されるべきは、PDフェロー7名と日本学術振興会特別研究員5名のうち3名が大学教員に採用されたことで、このような実績の積み重ねが教育機能の強化に直結するという意味において大きな成果である。

国語研という研究機関でしか得られない指導、一大学では体験することが難しい国際シンポジウムの実務経験など、国語研には他にない貴重な教育環境、教育資源がある。それを生かした取り組みを継続して欲しい。

連携大学院構想に関しては、当年度までには結論に至らなかったが、東京外国語大学大学院との協力関係に基づく教育連携が間もなく実現する見込みとのことであり、その実現に大いに期待したい。実績のある一橋大学のほか、他の有力大学についても検討してみたい。

【総合評価】

人間文化研究機構の一員として改組が実現して以来、国語研の研究・教育のあり方が急速に整備されたことは、外部評価委員をはじめとする関係者にとって、無上の喜びである。当然のことながら、克服すべき困難は多端に及んだであろうが、国語研の長い歴史に新しい方向性を附加するものとして広く注目されている。こうした学術機関の存在は現代国家の文化政策として不可欠のものであり、際立った社会的な要請が寄せられていることを認識していただきたい。これに対応して、組織と研究水準の飛躍的な発展を図るべく努力を続けることが必須である。今後もその道筋を強い関心をもって見守りたい。

総じて言えば、日本語に関する国内・外の研究拠点として、その存在感が高まりつつあるのを感じるが、一方、言語という、社会の基本的共有財を研究対象とすることから、研究の発想を研究者の高度な学術的関心の内に閉じ込めることなく、急激に変化する現代の情報社会を啓発し、また、社会の現実的

要求にも応え得る、そのような範囲に拡大することも検討してみたい。

広い視野と大きな将来構想の下、今後も弛まぬ努力を続けて欲しい。

【管理業務】

Ⅱ. 業務運営の改善及び効率化に関する目標を達成するために取るべき措置

1. 組織運営の改善に関する目標を達成するための措置

【計画】

外部有識者の参加を得て、運営会議及び各種委員会を開催するとともに、機関の組織運営に研究者コミュニティ等の意見を積極的に取り入れる。

【実績】

第3期中期計画の策定に向けて、広く積極的に研究者コミュニティの意見を取り入れる体制をとった。「第3期中期目標期間プロジェクト委員会」（新設）において、第3期に研究所の共同研究の根幹となる大型共同研究プロジェクト趣意書を作成し、外部有識者24名から書面による意見聴取を行った。趣意書に対する意見を取り入れ、プロジェクト案を策定した。この案を「第3期共同研究プロジェクト検討のための有識者懇談会」（平成26年10月25日開催、運営会議委員、外部評価委員が出席）において検討し、質疑応答・意見交換を行った後、書面で意見を受けた。これらの意見をプロジェクト案に反映させ、「共同研究・共同利用委員会」（中・長期的な共同研究・共同利用事業に関する重要事項を審議するために新設、外部委員3名を含む）および運営会議の承認を経て、第3期に展開する基幹共同研究プロジェクトを決定した。

【計画】

機構長のリーダーシップのもとで、法人としての一体的な運営を推進するため、機構長裁量経費を確保し、戦略的・重点的に取り組むべき事業等について資源配分を行う。また、国立国語研究所においても、所長のリーダーシップのもと、戦略的・重点的に取り組むべき事業等について資源配分を行う。

【実績】

所長のリーダーシップのもと、研究予算全体の3.7%の15,000千円を所長裁量経費として、第2期から第3期中期計画への研究活動の連続性を保ちつつ、高い実効性と豊かな研究成果が確実に見込める第3期中期計画を構築するためのフィージビリティスタディ型共同研究（第3期に本格的に稼働できるかどうかの実行可能性をみるための予備的共同研究）および、研究成果助成等の研究促進プログラムのため配分した。

【計画】

事務職員・技術職員の採用は、競争試験または選考試験によることとし、競争試験については、国立大学法人等職員統一採用試験により計画的に実施する。

また、機構本部、各機関及び国立大学法人等との積極的な人事交流を行う。人材養成においては、機構職員の養成と資質向上を主眼とし、研修プログラムの充実を図りながら法人主催の研修を計画的に実施する。また、他法人と連携した研修を実施する。

【実績】

採用：平成 27 年度新規 1 名を決定

国立大学法人との人事交流：一橋大学から 1 名を受入，電気通信大学に 1 名出向，1 名を受入。

研修：業務遂行能力向上に資する 25 件の研修に職員を参加させた。

2. 事務等の効率化・合理化に関する目標を達成するための措置**【計画】**

効率的なサービス提供が見込まれる業務について外部委託を行うなど，事務の合理化を図るとともに，共同研究支援体制を整備する。

【実績】

継続してネットワーク管理業務を専門業者に外部委託し，ネットワーク管理の継続性の確保を図った。また，ペーパーレス会議システムの使用を開始した。

自己点検評価

計画を上回って実施した。

《評価結果》

計画を上回って実施した。

平成 28 年度から開始される第 3 期中期計画の策定のために，組織として広く研究者コミュニティとの対話を重視したことが重要である。えてしてこの種の計画策定は，構成員の事情を優先して実施されがちであるが，国語研の今回の措置は，研究機関のあるべき姿を示唆するものと考えられる。策定作業はなお途上にあるが，この努力を続行してほしい。

採用・人事交流・研修，事務等の効率化・合理化に関する努力は着実に行われているが，業務改善に関しては，人間文化研究機構内諸機関との連携・人事交流が有効であると考えられるので，その面で検討する余地が残されていないかを検証し，検討の余地があれば方策を考えて欲しい。

Ⅲ. 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置**1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する目標を達成するための措置****【計画】**

外部研究資金の募集状況等をウェブサイトや電子メールなど複数の方法により周知するとともに，科学研究費助成事業への申請，各種ルール等についての説明会の実施等により競争的研究資金の積極的獲得に努める。

【実績】

- ・外部研究資金の公募情報を所内グループウェアに掲載するとともに，電子メールで周知した。科学研究費助成事業については，若手研究者の育成にも配慮しつつ，申請者が他の研究分野を含む研究者と研究計画・方法について意見交換を行う科研費申請準備会議（10 月 22，23 日）を実施し，外部研究資金の獲得に努めた。科研費は応募件数 20 件につき，採択件数は 14 件であった（採択率 70%）。
- ・従来から『日本語話し言葉コーパス』および『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の有償頒布を行ってきたが，今年度は米国の大手情報処理企業と一括利用契約を締結したことで，総計 1,000 万円を超

える収入を得た。

2. 経費の抑制に関する目標

【計画】

(1) 人件費の抑制：

教育研究の質の維持・向上に配慮しつつ、適切な人員配置等により、人件費の抑制を図る。

【実績】

水曜日の定時退勤日について、毎週メールと所内放送で意識啓発を促し、超過勤務の削減を図った。契約職員の任期満了退職に伴い、後任補充をパート職員とし、経費を削減した。昨年度に引き続き人件費抑制を継続した。

【計画】

(2) 管理的経費の抑制：

中期計画に掲げる管理的経費の抑制を着実に推進するため、一般管理費については、平成21年度決算額を基準として、特殊な要因を除き概ね5%の経費を抑制する。このため、以下に掲げる取組等を進める。

- 1) 支出契約については、費用対効果の見極めや必要に応じた仕様書内容の見直しを行う。
- 2) 教職員に対するコスト意識・省エネ意識の啓発を図り、省エネ機器の導入などによる経費の抑制に努める。
- 3) 施設・設備の運転状況・点検結果などから、老朽化状況を的確に把握し、プリメンテナンスや老朽化した設備の更新など、整備計画を見直し、最適な維持管理を行い修繕経費の抑制に努める。

【実績】

- 1) 年間業務委託契約を複数年契約とし経費削減を図った。
- 2) 昨年度に引き続き電力節減、夏期の軽装励行のポスターを所内各所に掲示し、職員の省エネ意識の向上を図った。また、4階テラスにグリーンカーテンを設置した。
- 3) 建物管理業務を専門業者に外部委託したことにより計画的に設備の維持管理を行い経費の抑制に努めた。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した。

外部資金の獲得、ことに科学研究費については、費目ごとの数値が明らかでないものの、採択率 70% は評価に値する数字であろうと思われる。なおさらに多様な社会的財務支援を求めるべく、可能性を探るべきであろう。

また、経費抑制の努力も認められる。ただし、数値目標がある場合（一般管理費 5%抑制など）には、数値見込みまたは目標達成の可能性として示されることが望ましい。

IV. 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するためにとるべき措置

1. 評価の充実に関する目標を達成するための措置

【計画】

自己点検・評価等を実施し、組織運営の改善に活用する。

【実績】

年度計画の着実な実行を図るため、所内自己点検・評価委員会において、進捗状況を確認した。

自己点検・評価に基づき、平成25年度実績に関する外部評価を実施した。外部評価委員会報告において若手育成により将来を担う研究者を輩出することが課題であるとの指摘を受け、学位取得者をPDフェローとして雇用し、共同研究プロジェクトに参加させて研究手法を教授、シンポジウムの実務を担当させて国際会議の企画・運営方法を指導するなど、研究者として独り立ちできるよう教育内容を充実させた。

平成26年度の共同研究に関しては、自己点検・評価委員会において各プロジェクトリーダーが作成した自己点検報告書をもとに、「領域指定型」、「独創・発展型」の共同研究プロジェクト3件の評価を実施し、各プロジェクトの優れた点や課題について確認を行った。研究所の活動の根幹となる大規模な16件の「基幹型」共同研究プロジェクトについては、外部委員8名で構成される外部評価委員会の評価を受けた。評価結果は平成27年度のプロジェクト運営に活かしていく。

2. 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置

【計画】

国立大学法人評価委員会の評価結果や業務実績報告書など評価に係る情報等を、ウェブサイト等に掲載し、広く社会に公開する。

【実績】

- ・外部評価委員会による評価結果をウェブサイト及び年報に掲載し、公開した。
- ・研究成果を社会に発信、還元するために一般向け、児童向け等、対象別の各種プログラムを実施した。
- ・地方自治体の協力を得て、共同研究プロジェクトの研究内容を市民に分かり易く説明する NINJAL セミナーを開催した。「出雲方言のつどい ―出雲ことば再発見―」（平成 26 年 8 月 20 日、於出雲市役所、参加者 250 名）に続き、ユネスコが指定した8つの危機言語・方言の継承活動家と研究者による「日本の危機言語・方言サミット IN 八丈島」（平成 26 年 12 月 12 日～14 日、於八丈町、参加者延べ 423 名）を八丈町、文化庁との共催で開催した。
- ・優れた研究成果を広く一般に発信する NINJAL フォーラム「世界の漢字教育 ―日本語漢字をまなぶ―」（平成 26 年 9 月 21 日、於一橋講堂、参加者 421 名）を国際交流基金との共催で開催し、時宜を得た内容で国内外の日本語教師及び一般市民の参加を得た。
- ・小学生を対象とした NINJAL ジュニアプログラム「ニホンゴ探検 2014」（平成 26 年 7 月 19 日、於国語研、参加者 274 名）を開催した。児童・保護者に加え、立川市近隣の市民の参加も増加し、日本語とことばの魅力や奥深さを体験できる多数のワークショップが好評を得た。また、辞書引きをテーマに小学校へ出張授業（平成 26 年 7 月 8 日、10 月 16 日）を行った。

- ・立川市歴史民俗資料館との相互協力に関する合意書に基づく共同企画事業として、「ニホンゴ探検 2014」において歴史民俗資料館が所蔵資料の展示・説明を行い、国語研教員による歴史民俗資料館主催の講演会「立川の方言」を実施し、盛況であった。
- ・メールマガジンを月 2 回発行し、国語研が開催するシンポジウム、講演会や講習会、データベース公開等の情報について発信した。
- ・一般向けに平成 25 年度に公開した研究所の活動を紹介した動画に加え、1 億語を収録した世界初の『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』など、研究所で構築・公開している日本語コーパスを例に挙げ、コーパスとは何かを 6 分程度で分かり易く解説した動画「国立国語研究所のコーパス ―ありのままの日本語を知るために―」をウェブサイト及び Youtube で公開した。また、これらの映像を外部利用者がタッチパネル操作により視聴可能な動画再生システムを展示室に導入した。
- ・研究所の活動全般を記した『国立国語研究所年報2013』、共同研究プロジェクトを展望する『国語研プロジェクトレビュー』（年 3 冊）、研究成果の公表及び所内若手研究者育成を目的とする論文集『国立国語研究所論集』（年 2 冊）を刊行した。また、NINJALフォーラム「近代の日本語はこうしてできた」の内容を冊子「NINJALフォーラムシリーズ」として公立図書館に寄贈するとともに、これらの刊行物等については、研究成果の発信の強化に資するため、ウェブサイトでの公開も行った。

自己点検評価

計画どおりに実施した。

《評価結果》

計画どおりに実施した。

取り組みの結果は組織・運営、管理業務に反映されている。大学共同利用機関への移行後、運営・管理業務に関する体質が大いに改まったと感じる。

周知のとおり、日本語のあり方をめぐる諸問題は、専門研究者のみならず、国民・市民もしくは外国人にとっても、近年ではきわめて大きな関心事項となっている。この関心に対応して、有用な情報を積極的に発信することは、国立の組織として必須の業務である。教員・職員の人員、時間等に物理的条件の制約があることは否定しないが、この課題への取り組みのために所内にプロジェクトチームを設置するなど、特段の措置を講じてほしい。特に、一般社会に対してどのような情報をどのように発信するのが効果的かについては、検討の余地があるように感じられる。

V. その他業務運営に関する重要目標を達成するためにとるべき措置を達成するための措置

1. 施設設備の整備・活用等に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 施設整備計画に基づき、研究施設等の適切な維持・管理に努める。
- 2) 日常管理の基となる管理標準を整備し効率的な運用を行うとともに、省エネ機器等の整備を行い省エネを推進する。
- 3) 施設設備の使用状況の点検評価を行い、施設の有効活用に努める。

【実績】

- 1) 定期的に樹木の剪定や除草を行いなど適切な維持・管理に努めた。

- 2) LED 電球へ交換や人感センサーを設置するなど省エネとなるよう努めた。
- 3) グループウェアから施設予約を活用し、共用スペースの有効活用を図った。

2. 安全管理に関する目標を達成するための措置

【計画】

- 1) 「機構における危機管理体制」に基づき、安全で快適な職場環境の維持・確保に努める。
また、本機構及び外部機関の主催する危機管理に関する研修会等へ職員を積極的に参加させる。
- 2) 労働安全衛生法等を踏まえ、安全衛生環境整備及び防災対策等の対応を実施する。
また、職員等の安全確保や防災意識の向上のため、防災訓練等を実施する。
定期健康診断の実施及び外部専門医等の協力を得て、職員の安全と健康の確保に努める。
- 3) 職員に対し、情報セキュリティ対策基準等を周知徹底するとともに、情報セキュリティ教育を実施し、職員の情報セキュリティに対する意識を啓発する。

【実績】

- 1) 建物管理の専門業者に外部委託し安全な職場環境の維持に努めた。
職場の環境衛生全般の管理をする衛生管理者資格取得を職員に促し、1名が新規取得した。
所内でハラスメント研修を開催し、職員の意識啓発を促した。また、他大学主催のハラスメント研修、安全管理協議会に職員を参加させた。
- 2) 防災対策の充実を図るため、防災用品、非常食などの見直し、追加購入を行った。
- 3) 全職員を対象に「所内情報システム説明会」(平成26年10月28日、11月5日)を開催し、パスワード管理についての啓蒙を行った。また、「国立国語研究所情報セキュリティポリシー」の改正に向けて検討を行った。

3. 適正な法人運営に関する目標

【計画】

国立大学法人法その他関係法令及び本機構の諸規程に基づき、適正な業務運営を行うため、法令遵守等に関する研修を実施し意識啓発を行う。

また、研究活動における公的研究費の不正使用防止計画に基づき、教職員に対し説明会を実施するなど寄附金を含む外部資金の取り扱い等における不正行為の防止に努める。

【実績】

- ・所内グループウェア等に経費執行ハンドブックを掲載するとともに、所内会議(科研費申請準備会議(平成26年10月22日～23日)、連絡会(平成26年7月15日))において外部資金の取り扱いについて説明を行った。また、新規採用者については、雇い入れ時に説明を行った。
- ・研究活動に従事する研究所のすべての者が研究現場において遵守すべき事項を定めた「国立国語研究所研究倫理指針」及び所内研究者が行う研究のうち、人を対象とする研究が倫理的及び社会的観点から適正に実施されることを目的とした「国立国語研究所における人を対象とした研究に関する倫理規程」を策定し、職員に周知した。
- ・研究活動に従事するすべての者を対象とする「公的研究費の不正使用防止に関するコンプライアンス研修会」(平成27年3月17日)を実施した。

自己点検評価	計画どおりに実施した。
--------	-------------

《評価結果》

計画を上回って実施した。

施設設備の整備・活用及び安全管理について必要な対応がとられている。

「目標」には具体的記載がないが、「国立国語研究所研究倫理指針」「国立国語研究所における人を対象とした研究に関する倫理規程」の策定・周知は極めて適切な措置である。研究理念の拠り所の一つとして、大切にしたい。

コンプライアンスの問題は、現在にあって社会的関心を集めており、不正・不祥事の防止には多大な注意力を必要とする。引き続き緊張感をもって業務の実施にあたっていただきたい。

【総合評価】

管理業務についても、適宜、適切な対応がとられているように感じる。研究者・職員が協力して真摯に取り組んできた結果であると思う。

ただし、第2期中期計画の最終年次を迎えて、人間文化研究機構の一員としての、財務・情報・点検に関する総括と展望を図ることは必要であろう。既往の点検業務は、この観点からはなお改善の余地があるかに思われる。国語研ここでは最終参加の後発組織であるが、それだけに積極的な発言を企て、その存在感を強めていただきたい。

付言すれば、厳しい競争的環境と、その中における現在のような点検・評価システムにおいては、一般に、目標の達成に重きが置かれる結果として、それに携わる「人」が軽視される傾向を避けることができない。特定の部署や個人に限度を超えた身体的・心理的負荷がかかっているかに絶えず注意し、制度・変化に疲弊することなく優れた結果を出し続けられる環境整備にも心がけて欲しい。ただし、これは過重労働や過労死が社会問題化している現状を鑑みた一般的留意点を述べたものであって、国語研に現時点で善処すべき具体的問題があることを含みとするものではない。

担当：樺山 紘一
林 史典

2. 資 料

国立国語研究所外部評価委員名簿（敬称略）

- ◎ 樺山 紘一 印刷博物館館長，東京大学名誉教授，元国立西洋美術館館長
専門：フランス中世史
- 林 史典 聖徳大学言語文化研究所長，筑波大学名誉教授，元筑波大学副学長
専門：日本語史
- 仁科 喜久子 東京工業大学名誉教授
専門：日本語教育，コーパス言語学
- 門倉 正美 横浜国立大学名誉教授，日本語教育学会副会長
専門：日本語教育
- 後藤 斉 東北大学大学院文学研究科教授
専門：コーパス言語学
- 渋谷 勝己 大阪大学大学院文学研究科教授，日本学術会議連携委員
専門：日本語方言
- 早津 恵美子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院教授
専門：日本語文法，意味論
- 峰岸 真琴 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
専門：東南アジア言語学

任期：平成 26 年 10 月 1 日～平成 28 年 9 月 30 日（2 年）

◎委員長 ○副委員長

国立国語研究所平成 26 年度業務の実績に関する評価の実施について

1. 評価の実施の趣旨

国立国語研究所では、年度当初に文部科学省に提出した「大学共同利用機関法人人間文化研究機構平成 26 年度計画」に記載した計画の実施状況について自己点検評価を行い、その妥当性を検証するため外部評価委員会による評価を実施している。

2. 評価の実施方法

評価は書面審査で行った。研究所が作成した、平成 26 年度の計画及びその実施状況が記入された「26 年度業務の実績報告書」（「研究系・センターの研究活動」、「組織・運営」、「管理業務」）の内容を検証した。

「研究系・センターの研究活動に関する評価」の点検項目及び観点は次の通りである。

	点検項目	観 点
研究	共同研究の推進	・ 当該年度の目標はどの程度達成されたか。
	研究実施体制	・ 共同研究員の適切な配置など、研究組織が工夫されているか。 ・ プロジェクトリーダーのリーダーシップのもとに研究が実施されているか。 ・ 経費が適切かつ有効に活用されているか。
	共同利用の推進	・ 研究データの整理・蓄積・公開が適切に行われているか。 ・ 研究会等が適切に開催されているか。また、共同研究員以外の研究者へ研究参加の機会が開かれているか。
	国際化	・ 海外の研究者や研究機関との連携が行われているか。 ・ 海外への研究成果の公表が行われているか。
	研究成果の発信と社会貢献	・ プロジェクトの HP を開設するなど、研究成果の発信を積極的に行っているか。 ・ 研究成果が学術雑誌、学界等に公開され、研究水準が国内外において評価されているか。 ・ 研究成果を社会貢献に結びつけているか。
教育	大学院教育への協力	
	若手研究者育成	・ 若手研究者のプロジェクトへの参加など、若手研究者の育成に工夫がなされているか。

※「点検項目」は、第Ⅱ期中期目標・中期計画の「研究機構の教育研究等の質の向上に関する目標」に基づく。「観点」は、それを実施するために必要と思われる事項を自己点検・評価委員会が検討し、定めたものである。

基幹型共同研究プロジェクト一覧

研究系 センター	プロジェクト名	プロジェクト略称	リーダー
理論・構造	日本語レキシコンの音韻特性	語彙の音韻特性	窪菌晴夫
	日本語レキシコンの文法的・意味的・形態的特性	日本語レキシコン	影山太郎
	文字環境のモデル化と社会言語科学への応用	文字と社会言語学	横山詔一
	日本語レキシコン―連濁事典の編纂	連濁事典	Timothy J. VANCE
時空間変異	消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究	危機方言	木部暢子
	方言の形成過程解明のための全国方言調査	方言分布	大西拓一郎
	多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明	現代日本語の動態	相澤正夫
	日本語の大規模経年調査に関する総合的研究	大規模経年調査	井上史雄
	日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究	日本語疑問文	金水 敏
言語資源	コーパスアノテーションの基礎研究	アノテーション	前川喜久雄
	通時コーパスの設計	通時コーパス	田中牧郎
	コーパス日本語学の創成	コーパス日本語学	前川喜久雄
言語対照	日本列島と周辺諸言語の類型論的・比較歴史学的研究	東北アジア言語地域	John B. WHITMAN
	述語構造の意味範疇の普遍性と多様性	述語構造	Prashant PARDESHI
日本語教育	多文化共生社会における日本語教育研究	多文化共生	迫田久美子
	コミュニケーションのための言語と教育の研究	コミュニケーション	野田尚史

国立国語研究所外部評価委員会規程

平成 21 年 10 月 1 日
国語研規程第 7 号

(趣旨)

第 1 条 この規程は、国立国語研究所組織規程第 7 条の規定に基づき、国立国語研究所（以下「研究所」という。）外部評価委員会（以下「委員会」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

(任務)

第 2 条 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

- (1) 自己点検・評価の結果に基づく評価に関すること。
- (2) 研究所の中期計画及び年度計画の評価に関すること。
- (3) 共同研究プロジェクト等の評価に関すること。
- (4) その他評価に関すること。

(組織)

第 3 条 委員会は、10 名以内の委員をもって組織する。

2 委員は、研究所の設置目的について理解のある学外の学識経験者等の中から所長が委嘱する。

(任期)

第 4 条 委員の任期は 2 年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員の互選により決定する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故あるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第 6 条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ、議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数で決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第 7 条 委員会は、必要に応じて委員以外の者に出席を求め、意見を聴取することができる。

(外部評価の実施等)

第 8 条 外部評価の実施は、研究所の中期計画及び年度計画の実施に関する評価の時に行うものとする。

2 委員会は、評価の結果を所長に報告するものとする。

(庶務)

第 9 条 委員会の庶務は、管理部総務課において処理する。

(その他)

第 1 0 条 この規程に定めるもののほか、外部評価の実施に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この規程は、平成 2 1 年 1 0 月 1 日から施行する。

国立国語研究所 平成 26 年度外部評価委員会（第 2 回）

日 時：平成 27 年 1 月 31 日（土）16：45～17：30

場 所：学術総合センター2 階会議室 202

議 事：

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 26 年度業務の実績に関する評価について
 - ・共同研究プロジェクト
 - ・研究系・センターの実績
3. その他（報告）
 - ・平成 25 年度業務の実績に関する外部評価委員会からの指摘事項への対応について
 - ・人間文化研究機構の平成 25 年度に係る業務の実績に関する評価結果について

資 料

- 1－1. 国立国語研究所外部評価委員会名簿
- 1－2. 前回議事概要（案）

- 2－1. 外部評価委員会平成 26 年度実績評価スケジュール
- 2－2. 外部評価委員の担当事項
- 2－3. 共同研究プロジェクト評価担当一覧
- 2－4. 共同研究プロジェクト及び研究系・センター評価実施の手引き
- 2－5. 共同研究プロジェクト評価シート【A】
- 2－6. 研究系・センターの実績評価シート【B】

- 3－1. 平成 25 年度業務の実績に関する外部評価委員会からの指摘事項への対応について
- 3－2. 大学共同利用機関法人人間文化研究機構の平成 25 年度に係る業務の実績に関する評価結果（平成 26 年 11 月 5 日 国立大学法人評価委員会）
- 3－3. 国語研の活動状況（平成 26 年 4 月～平成 27 年 1 月）

国立国語研究所 平成 27 年度外部評価委員会（第 1 回）

日 時：平成 27 年 5 月 25 日（月）10:00～13:00

場 所：トラストシティカンファレンス・丸の内 RoomB

議 事

1. 前回議事概要（案）確認
2. 平成 26 年度研究系・センターの研究活動に関する評価結果の確認について
3. 平成 26 年度「組織・運営」, 「管理業務」に関する評価結果の確認について
4. その他

資 料

1. 国立国語研究所外部評価委員名簿
2. 前回議事概要（案）
3. 平成 26 年度基幹型共同研究プロジェクト評価結果一覧
4. 国立国語研究所平成 26 年度業務の実績に関する評価の実施について
5. 平成 26 年度研究系・センターの研究活動に関する評価結果（案）
6. 外部評価委員コメント一覧
7. 平成 26 年度「組織・運営」, 「管理業務」に関する評価結果（案）
8. 第 3 期共同研究プロジェクトについて

国立国語研究所 年報 2014年度

2015年12月20日 発行

編集・発行

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町10-2

TEL：042-540-4300 FAX：042-540-4333

<http://www.ninjal.ac.jp/>

